

始





勝地讚岐と其産業陣營



昭和八年三月

象嶽



産業



利世

昭和八年三月

象象

產業

利世

昭和八年三月

象嶽



勤
一
五
勤

謹
為
書

序

産業は國の力である、國の力を如實に有効に働かせて行くものは經濟である、古往近來尙も經濟を閑却して國の榮えた例はなく、産業を無視して經濟の立行く例しは無い、即ち産業は体である、經濟は用である、体用照應してこゝにはじめて國力榮え國威輝く之を人体に譬へて見れば、産業は血液である、經濟は脈管である、その血能く調その脈能く通ず、そこに体力の強健を認め體質の康全を期し而して智能は愈よ伸びて行く、凡そ何れの國を問はず産業經濟の發達しないものは必ず衰頹する、随つて何れの國も亦齊しく常に之を競ふてこゝに意を盡し、専ら産業の鼓吹に努めてゐる、殊に我國は遠く天孫降臨の昔から 神勅を奉じて瑞穗國を治しめし産業を基本とし農工商を御寶草として五百津大御國を興建し給ふた尊き歴史の回顧を俟たず、現代遑々隆々として彌榮えます國運の瞭かに物語る實証ではあるまいか、我社事業部こゝに感ずる所あり、かねて香川縣産業勇士の奮闘に築き上げたる一般産業界の譽光とその目覺しき勇士の偉勳について查記する事すでに三歳、今これが略々結了に際して、更に切々たるものありその勞を多とすると同時に、平和の戦士が輝やく報勞の成果こそ傍人にも齊しく他山の石たるべ

きを深く想ふ、茲に多方面よりの希求もあり我事業部は奮起一番前記産業に加ふるに景勝を纏めて『勝地讃岐と其産業陣營』に編し、更めて世の利生たらしめんを期しこれに余が序を連ねし次第である、本書素より香川縣を出れずも必ずしも局限を許さず、産業輝光の及ぶところ縣の内外、國の東西延いて海外在住同胞の心裡脚光を照らす雋敏鋭明のブリズムともなればまた大いに幸とする。

昭和八年

香川新報社々長 小田榮次

自叙

本書を編作に當つて編者は其の總ての構成部面に衷心尊敬の念と然も一般的には新しき冀望の沸上を覺へつゝこれを結了した。

想ふに時世は今や非常時を絶叫されて居る、即ち内は政治、經濟、思想の困厄あり、更に對外國際環境は一層の難歩に直面し内外共に實に容易ならざる苦局にありと謂はざるを得ない、殊に今日對内的最大の病根として深憂すべきに思想の動搖がある、この思想國難の由來する所その殆んどを過去の政治家の甘受すべき責にして、彼等が道德的精神的勇氣の明確を保持せず、徒に自己を追ふのみの結果は斯くも混濁化したのである、この著しき實証は大正、昭和の政治疑獄史にあり、然も彼等は横柄にも清濁併せて存むとか豪語し恬然たるに於て更に混亂激情を招き遂には慄然五・一五事件の如き歴史に新しき悲劇だに綴つた、これを觀じて内外非常時たる今日は正に一切の情勢を截然肅正すべき秋でもあるが、こゝに世を指導の政治家を以て任ずるものは特に己を慎み神聖にして常に神に對して大衆の福祉の信頼を捧げると同時に躰ら躬行すべきでなければならぬこの勇奮智量の所有者こそ眞に大衆的信頼の資質を備ふる政治家である、惜らく最近の

我政治家にはこれを見るべく遂に破局的今日を招來した。刻下の異常混然たる心的空氣を如何にして靜常に歸せしむるやは一つに社會の上層指導階級の自覺實踐の如何にあり是を急匡して民心の歸向を信頼に整一する時は内外多事なりと雖も斷じて難事なく打開し得るものである、只爰に恐るべきは思想禍にして世の政治家、經世家は率先その道徳律を振作動員し身を挺する高貴な創建を以つて非常の祖國を防護開弘に當るべきであらう、更に一般細胞も其の公私を通じて凜然蹶起し各々職分に誠を捧げ實績を獲收に努むることにして然もこの行路たる實に易々坦々たるもので、斯くては平和の裡にも進展を齎すや必定である爰にこの條理を強調愈々切實を感せしむる言にも。

さきに國際聯盟に全權として特派された松岡洋右氏の所説がある、氏は昭和八年四月廿七日無事横濱に歸着し其スタートメントの一節に曰く「今回遠くから日本の姿を見るも余は心中深く憂を抱いて故國日本の土を踏まんとしつゝある、今回國際聯盟から脱退するも世界から脱退することではない、故に今後は益々自主的國民外交に精進しなければならぬが外交と云ふも畢竟その國の實体の反映に過ぎず内を充實せずしてその國威を發揚する事を得ず非常時日本とは既に數年來聞かされて居るがこれが朝野に通じ眞に非常時に目醒て居るかどうかそれイタリーを見よ、ドイツ、イギリスを見よ、更に太平洋の

彼方を而して日本は今や内整の急務に直面して居る」云々。

この雄叫こそ這般國際聯盟總會に於て、嚴然祖國日本の國策遂行に四十二對一たる楚歌の重圍にも孤軍奮闘を續けた彼が敢然聯盟脱退を世界に宣言して懐しの故國に一步せんとし全民的歡迎のそれに應へし第一の辭であつた、彼の此憂國慨世の至誠に發せる一語は實に千鈞一髮の實訓にして洵に時代的警世の一語である、然も氏の所説たる素より我意に通じ、編者が昭和六年以來本書編纂の本旨にも當然合致して感慨殊に切なるものがある即ち本書は一讚岐の産業と其の精神及名勝の一斑を編述したに過ぎずとすも、その本流は飽迄普遍的にして全民衆の優生的本理たるべきを確信するものである。

凡そ現時の世界に平和の極致は到底望むべからざる事であらう、只國際間にも個人に於ても可及的平和と幸福獲得に不斷政治的乃至經濟的に闘争を繰り返して居るが、その平和又は幸福の爲めにも絶体必要なる要件は實力の充實である、換言せば充實せる實力は其の國その人のある程度の平和と幸福を保證する事となる、爰に想到して夙にこれが大衆的指針を建設すべく微力にも尠からざる苦心難行を傾倒したのであつたが、幸にその成果として本編をものしたのである。

刻下の陰慘なる社會現象を解消し且新しき生氣と力を注入するは蓋し世の人々が汎産

業主義に則る活動に於て可能である、産業の發達せる所社會の生氣は自ら潑刺たるものあり、疲弊の聲もなければそこに反逆も起らないであらう、只疲弊を啣ち不平を口にする者その人々は産業的建設的努力の足らざるを知るのみにして、産業主義に邁進する人士こそ世に優生への極意を体得し自ら正しく強く明るき人生の歩道と最大の愉悅を感受されるであらう、茲に於て我事業部は時代の任務として本縣産業の全部面に亘つて、現實飛躍せる我等が尊敬の産業戰士が過去及現在に於ける明朗なる実績とその産業的戰勝の誇りを調査し、更に近代的活動を以て異常の注目を惹ける産業組合事業の全貌及び縣下有力商店、と最近の全生産計數、それに天下の勝として雄渾快絶を誇る讚岐主要名勝地を綜合して我讚岐の再認を要請すべくしたが、爰に集約せる本縣産業戰線及其精神は尠くとも世に實踐の標柱にして一面敬すべき立志傳集とも思考さるれば刻下自己確立の要時に際して聊か教化と啓導の資をも自負し敢て江湖の一犢玩味を冀ひ而て相俱に非常時打開の共同の目的遂行に巨歩せん事を慫慂する次第である。

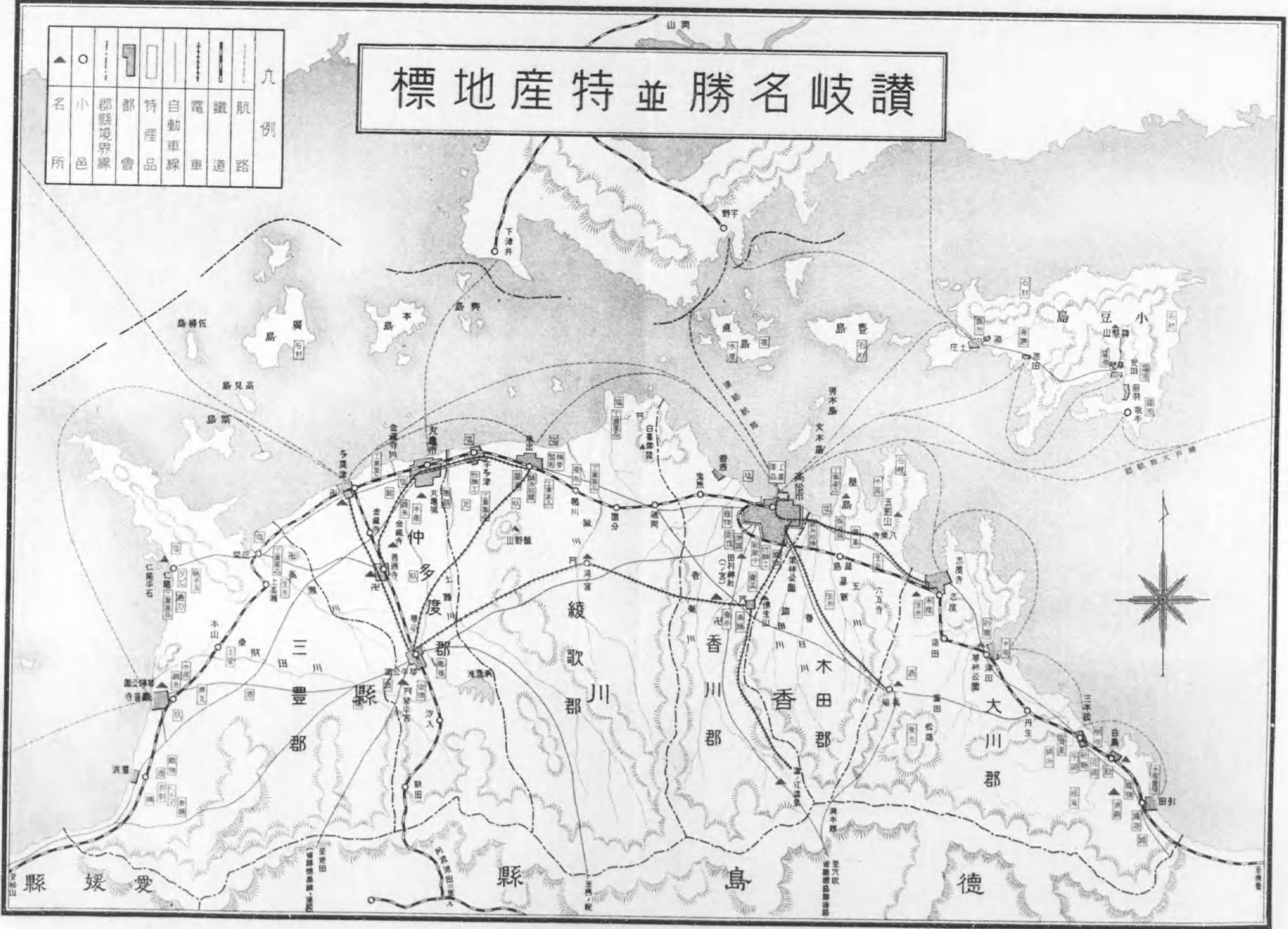
昭和八年度

香川新報社事業部

諏訪隆郎識

讚岐名勝並特產地標

▲	○	┌──┐	┌──┐	┌──┐	┌──┐	┌──┐	┌──┐	九
名	小	郡	郡	特	自	電	鐵	航
所	邑	縣	會	產	動	車	道	路
		界	品	車	線	道	路	例
		線	會	線	線	線	線	



不動貯金銀行高松支店
 岡山合同貯蓄銀行高松支店
 愛國貯金銀行高松支店
 香川第一無盡株式會社
 三越高松支店
 本縣特産保多織と岩部幾太郎氏
 下津燐寸株式會社
 高松合同運送株式會社
 加藤海運株式會社
 株式會社讀岐工藝社
 岡内製藥所と千金丹
 本縣輪界の元老井筒長太郎氏
 證券問屋堀池直義商店
 躍進する鎌田氏の錘印醬油
 矢野ワイエムゴム工業所
 安藤宇太郎氏と養鶏飼料
 證券業の小磯定一氏
 オフセット印刷と光榮社
 身を職工に起した池田芳太郎氏
 獨創の英才石岡宇三郎氏
 誘蛾燈と倉本氏の苦心
 高松製燐所の躍進
 馬場岩太郎氏の漆器具
 乾叩商店高松工場の苦汁工業

四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

本縣養蠶界と片倉製絲の存在
 平井實氏と慰安事業
 讀岐日傘と上春商店
 岡坂政五郎氏と醬油事業
 屋島釜山鐵道株式會社
 木太鹽田株式會社
 屋島鹽田株式會社
 富田製藥株式會社屋島工場
 川島町鈴木醬油醸造場
 山田氏と源氏正宗
 鹽業家大高恒次氏の發奮
 本縣蠶糸業と山田惠一氏
 製絲業植村裕吉氏
 牟禮山田製糸工場
 平井町植松酒造場
 酒業問屋島仁平氏と商業方針
 酒造家玉木傳治郎氏
 長尾の鵜鷄醬油
 青年醸造家小倉九平氏
 玉木酒醸造場と金龍の香
 玉浦製糸工場
 堅實を誇る讀岐酒造株式會社
 津田の銘酒「琴の響」
 栗生充武氏と其の醬油

七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

藤目七郎氏の製糸とバス
 帝國製藥株式會社
 日本製藥株式會社
 大日本帝國青年團藥院
 東洋製藥株式會社
 三本松の四ツ目酒造會社
 白鳥本町の江戸屋醬油
 大路辰造氏と其白鳥工場
 白鳥町竹内義太郎氏と醬油業
 佐野新平氏と其の井筒屋醬油
 醬油地引田の雄山本醸造場
 引田を彩る岡田醬油合資會社
 野瀬氏と新名所安戸池の養魚
 自力更生の先陣大川ロープ組合
 香南の文化と讀岐電氣株式會社
 鹽江鐵道株式會社
 本縣製紙界の新人岡保市氏
 愛染藤太氏と其の事業
 香西酒造株式會社
 岡内酒造場の飛躍
 鬼無植木販賣組合
 樋口千松園の庭木盆栽
 庭木商の荒木和太郎氏
 一ノ宮村谷口製材工場

九七 九八 九九 一〇〇 一〇一 一〇二 一〇三 一〇四 一〇五 一〇六 一〇七 一〇八 一〇九 一一〇 一一一 一一二 一一三 一一四 一一五 一一六 一一七 一一八 一一九 一二〇 一二一 一二二 一二三 一二四 一二五 一二六 一二七 一二八 一二九 一三〇 一三一 一三二 一三三 一三四 一三五 一三六 一三七 一三八 一三九 一四〇 一四一 一四二 一四三 一四四 一四五 一四六 一四七 一四八 一四九 一五〇 一五一 一五二 一五三 一五四 一五五 一五六 一五七 一五八 一五九 一六〇 一六一 一六二 一六三 一六四 一六五 一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇 一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇

庭木専門の牛田好太郎氏
 宮武醸造場の白酒と秣山
 廣瀬醬油醸造場と感謝狀
 素麵と團藝の倉橋秀次氏
 子守から農機王の野田文次郎氏
 近來の快兒松浦伊平氏
 松山銀行と其の存在意義
 大藪鹽田株式會社
 乃生鹽産株式會社
 松山村小原醸造場
 白陵と藤原醸造場
 蒲生醬油醸造場
 産業加茂の雄綾川酒造株式會社
 新銳カネ大醬油と末包淺市氏
 山内村のヤマセ醬油醸造場
 荒井醬油醸造場
 林田村に名實を築いた濱崎嘉平次氏
 總社鹽田と廣瀬氏の功績
 林田鹽田株式會社
 林田醬油株式會社
 大阪藤澤藥舖と其本縣林田工場
 金山鹽田株式會社
 金山新鹽田株式會社
 坂出同盟銀行と洲崎準一氏

一六六 一六七 一六八 一六九 一七〇 一七一 一七二 一七三 一七四 一七五 一七六 一七七 一七八 一七九 一八〇 一八一 一八二 一八三 一八四 一八五 一八六 一八七 一八八 一八九 一九〇 一九一 一九二 一九三 一九四 一九五 一九六 一九七 一九八 一九九 二〇〇

琴平急行電鐵株式會社	一五八	丸龜無盡株式會社	一八一
坂出港頭を壓する日清製粉工場	一五七	曾川酒造と銘酒月星	一八二
坂出鹽田と岩瀨氏の功績	一五八	お福足袋株式會社	一八三
綾醬油株式會社の躍進	一六〇	銘酒主基の香と藤井酒造場	一八四
醬油醸造の水尾本家	一六一	三豐紡績丸龜工場	一八五
惠まるゝ坂出瓦斯株式會社	一六二	株式會社丸菱百貨店	一八六
精麥業津島才助氏	一六三	丸龜團扇と大久保瀧次郎氏	一八七
西川精麥合資會社	一六四	銘酒國華と垂水酒造合資會社	一八八
東洋物産株式會社	一六五	コンヒラ染料と伏見豐次氏	一八九
銘酒笹の友と中川醸造場	一六六	株式會社多度津銀行	一九〇
山地三代吉氏の精麥業	一六七	草薙賢策氏と松尾醬油	一九一
ヤマセ醬油醸造場	一六八	中讀酒造界の重鎮吉田忠氏	一九二
芋飯酒醸と銘酒綾の龜	一六九	銘酒破天荒と山本酒造場	一九三
笑の友と宮武酒造場	一七〇	都村精一氏と其の體育器械	一九四
小島酒造場と歌の種	一七一	銘酒凱陣と丸尾孫一氏	一九五
宇多洋化學工業株式會社	一七二	仁尾鹽田株式會社	一九六
宇多津鹽田株式會社	一七三	南海舍蜜工業株式會社	一九七
宇多津東鹽田株式會社	一七四	西野鹽田株式會社	一九八
丸沖製鹽株式會社	一七五	詔間酒造株式會社	一九九
乃木草履と片桐久助氏の面目	一七六	三豐化學工業株式會社	二〇〇
琴平參宮電鐵株式會社	一七七	松田鹽田株式會社	二〇一
保多織と龜井合資會社	一七八	松崎沖鹽田株式會社	二〇二
絲り松の河口酒造場	一八〇	仁尾の朝日庵刀と大矢根商會	二〇三
尾池松太郎氏と團扇會社	一八〇	仁尾町の老舖加茂や足袋製造所	二〇四

三豐組合製絲と小山組長の發念	二〇五	清水醬油株式會社	二二六
銘酒翁帥と大喜多酒造場	二〇七	小豆島醬油同業組合と其活動	二二八
川人一治郎氏と銘酒川鶴	二〇八	橋本屋醬油醸造場	二二九
宮本秋四郎氏と其醬油業	二〇九	高橋永藏氏と醬油業	二三〇
四國物産株式會社	二一一	安田醬油株式會社	二三一
銘酒金竹と山本醸造場	二一二	高橋荒吉醸造場	二三三
三豐紡績株式會社	二一三	福井貞二氏の活躍	二三四
七寶無盡株式會社	二一五	安田の山玉醬油	二三五
酒界の偉材大野亨平氏	二一六	内海醬油株式會社	二三六
株式會社大久保増吉本店と其酒業	二一七	香川肥料株式會社	二三七
糸瓜産業と合田孫六氏の苦心	二一九	島醬油界の麒麟船山醬油株式會社	二三八
豐濱製麵界と合田照一氏	二二〇	苗羽の巨豪鹽田龜吉氏	二四一
豐濱織物株式會社	二二二	島の若き人材照下源藏氏	二四二
輝く島の石材と同業組合	二二三	醬油キツコ石と石井平吉氏	二四三
小豆島馬越醬油合資會社	二三四	萬金醬油と木下仙次郎氏	二四四
瀨崎東紡と井上文八郎氏	二三六	木下幸次郎氏	二四五
小豆島特産業麵と同業組合	二三七	醬油金雨と藤井庄春醸造場	二四六
聖島北部自治浦島本團と事業	二三八	品質本意の左海醬油醸造場	二四五
入部醬油合資會社	二三九	山エ印醬油と木下ヨセ氏	二四六
聖島に輝く島電燈株式會社	二四〇	阪下助三氏	二四七
清酒花の兄と菅酒醸場	二四三	黒島岩吉氏の醸造業	二四七
島の先賢長西英三郎氏と其餘諸	二四四	上藤由太郎醸造場	二四八
丸島醬油株式會社	二四五	内海汽船株式會社	二四八
水野邦次郎氏	二四五	小豆島自動車株式會社	二四九

遊覽の地讀岐高松

交通文化の恩恵は期せずして高松を本土と四國の連衝地、所謂四國の關門と稱するに至らしめた。

即ち北に宇野を経て本州各地に連絡し、西にして愛媛に通し、東に徳島、南は山陰を経て正に高知をも繋がんとする。

爰に高松をして關門の言葉は適辭である。抑も同市はその昔、おはらの菅原らと呼ばれ狐狸跳梁するに委かせたる荒磯であつたが、天正十六年豊家の臣生駒親正が讀岐一國十七萬石の領主に封ぜられるやこの地を下して黒田如水の繩張りにより新城を築いて高松城と名づけ爾來此地を改めて高松と稱するに至つた。その後松平氏代つて讀岐國守となり明治維新に至るまでこの城に居てその三百年は城下街を形成した斯くして今も尙港頭に玉藻城の名に残る金城湯池の面影は旅人の第一印象ともなる昔懐しい姿である。

星霜移つて今や名實ともに關西屈指の遊覽都市の名を得たが、更にこの地に世人の再認識を求めしは、海上國立公園の標柱にして、その天下に誇る勝景、そして又海洋美の獨特は斷然世界に無類の展望だ。その明媚なる風光雄渾立ちどころに天人を呑む大自然の雄大に觸れる時、國立海上公園の中心地たる眞價は躍如たるものがある。

爰に高松市はその樞要に位し、且栗林公園、屋島、金刀毘羅、其他名勝國讀岐の全統の地として逐年飛躍を遂げて居るが、目下人口八萬數千を擁しその東西南北發達せる交通布陣に頼つて各種産業あり更に。縣下幾百の名勝、古蹟に杖を曳かんか恐らく平日の勞苦倦憊は一舉にして慰せらるゝであらう。

斯て高松の地は實に天恵と人爲による世人に與へられた恰好の安息所であり。又修療の地とはなす所である。



高松港頭に
築立する尺しき存在の
「城址と玉藻廟」



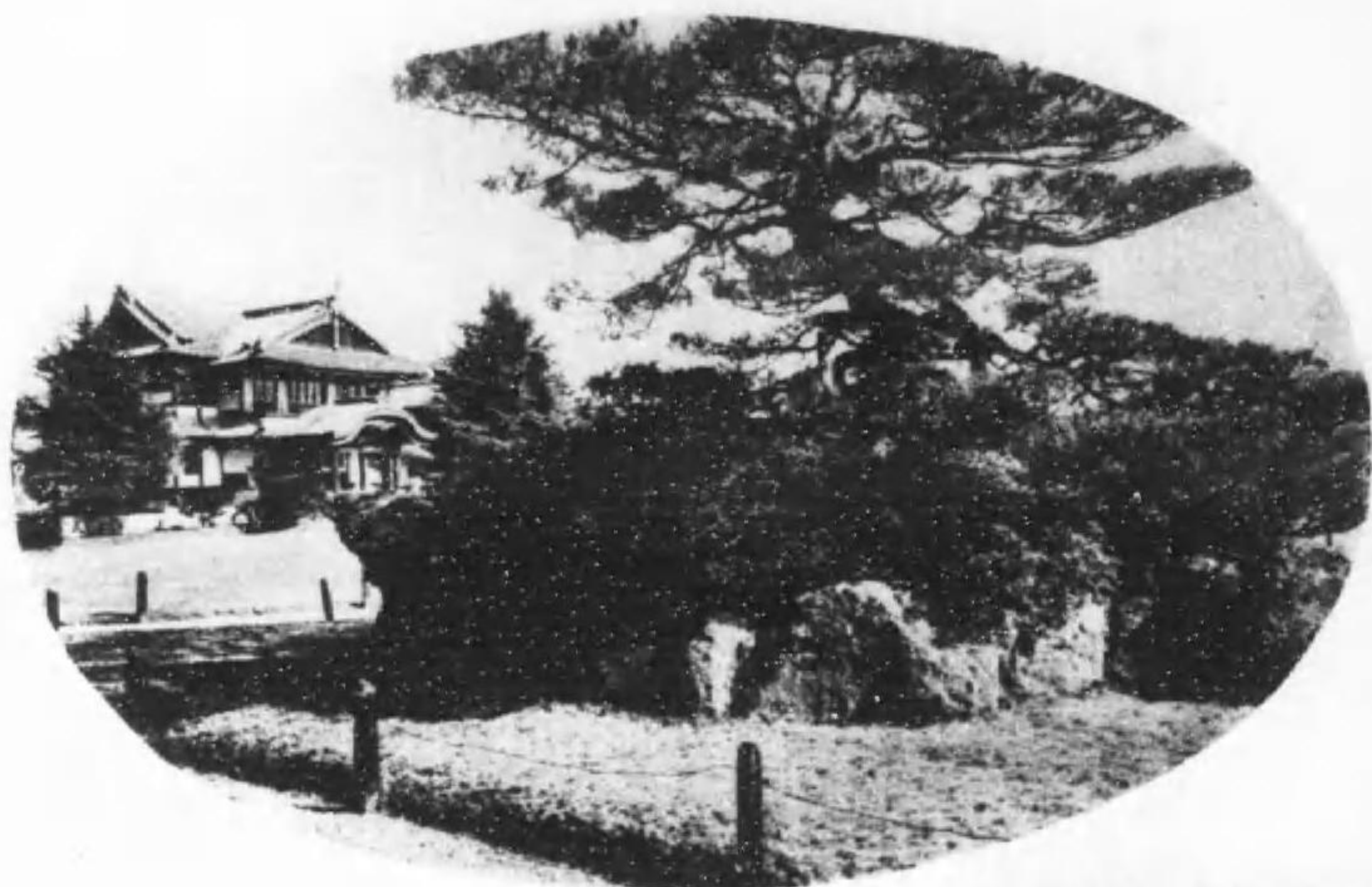
望遠の島屋境明と「容雄の市松高」地勝

栗林公園と其掬月亭

林泉の美の極致を誇る天下の名園栗林公園は高松市の南部紫雲山麓二十三萬九百三十七坪の廣域を擁する明境にして、明治初年まで舊藩主運代の別墅であつたが、明治八年公園となり縣營に屬した。その苑池樹石の雅趣に工物また布置の妙は道に藩威の赫々を偲ぶる。更らに西方の紫雲山は樹木綠蒼としてこの名園に生命的好バツクをなす又旅人の第一印象に上る、同園の北門は豐太閣大阪築城の際福島正則が領國小豆島福田海岸より献上せる花崗岩の殘石である。園内に入れば何處を眺むるも絶佳ならざるはなく、特に代表的景觀としては第一景永代橋より見たる芙蓉池、即ち北門より半丁餘にして至る石橋上から西南に水澄む瓢形の池である、夏近くなれば曉の闇を破つて白蓮、紅蓮水面を埋め咲き、西方淨土の清觀も斯やにと觀る人の心を洗ふ。第二景群鴨亭より眺める群鴨池、永代橋を過ぎて左に迂廻すれば至る「あづまや」である。林影を宿して靜また寂池の面に時折り慌しく波紋を描いて戯れるのは野鴨の群、池名の生れ出づる所である。以上二景は北庭に屬するが、南庭と北庭との境に明治三十一年の建設に於ける商品陳列所はあり、縣内の物産品を一室に集めて旅客の觀賞と購買に便ならしめてゐる。第三景は赤橋より見たる南湖である。商品陳列所を出て百石松の下を過ぎて至る朱塗擬寶珠の橋下には尺餘の緋鯉、真鯉魚紋を亂して狂ひ興趣盡くる所を知らない。第四景は飛猿巖より眺めた南湖の風景、第五景は假月橋から西望せる南湖の景

勝何れも花によく、月に愛でたく、初夏の青嵐、冬の雪景、見れども備かぬ景觀である。第六景は曲水の景假月橋の南の袂を東に寄つた所、涓々と清水湧き出て清新なる活景で「流觴曲水」から命名せるもの。第七景は飛來峰より南園一帶の風景にして、園中眺望の王座を占めるもの、筆舌に盡し難き雅景である。第八景は南湖の水と西湖の水の接する所に懸る八橋の景、業平の自叙傳「伊勢物語」より出づる最もロマンチックな境域。第九景風尾場は蘇鐵の林景。第十景はその南に紫雲山の投影のため常に碧水を湛えた涌翠池。何れも園内の代表的景觀であるが、園内の有名なる丘陵、園林、池沼、鳥嶼、溪流、橋梁、建築物を列擧すると大槪左の如きものがある。飛來峰、芙蓉峰、飛猿巖、冠松園、風尾場、竹林、楓岸、鹿鳴原、會仙岩、石壁、修竹園、橋園、櫻園、梅園、茶園、芙蓉沼、群鴨池、西湖、北湖、涌翠池、寄星泉、睡龍潭、杜鵑島、天女島、楓島、仙巖、瑤島、瀝溪池、玉潤、清水流、青溪、迎春橋、假月橋、梅林橋、津筏梁、商品陳列所、掬月亭、星斗館、時雨亭、日暮亭、會仙亭、大悲閣、この内「掬月亭」はその建築極風最も幽雅にして遊子の旅情を慰さるるに應時を暇し座して諸景を詳觀せんか。即ち吾にかへるの思やある。現在井本氏が經營にかつて長くも、大正天皇太子に在ませし時四日間此處に於て御晝食を召され、今上天皇陛下攝政宮として大演習御統監の際御晝食を召されしを初め奉り當地御來遊貴賓の御休息所に當てらるゝを常とし、最近には賀陽若宮殿下、閑院若宮殿下その他貴顯の御來臨等輝く榮光は栗林公園の名聲に總和して居る。

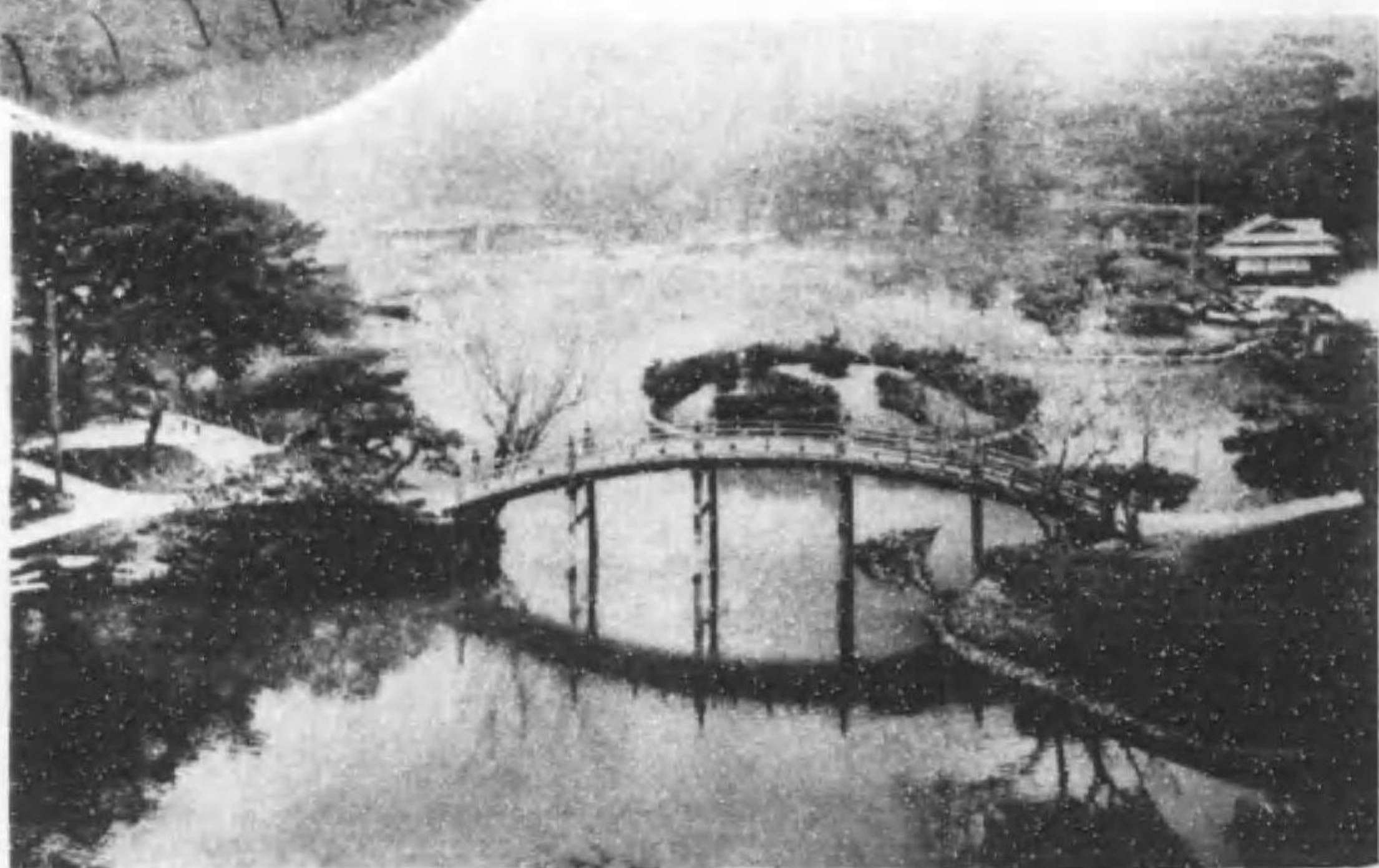
栗林公園「鶴龜の松」と「商品陳列所」



[亭月掬]同



同一蘇鐵



景絶の[近附湖池庭南]園同

景勝絶佳の屋島と屋島寺

瀬戸内海々上國立公園の巨標の下に、その中心的景勝を誇り且八百年の昔源平干戈を交へし史蹟に輝く名山屋島は木田郡の北端屋島町にあり、同町は近時町勢駭々たるものがある。廣袤東西三十一丁、南北一里十四丁、海抜二百九十三米山麓より二十丁にして山頂に至り、島全體が屋根形をなして屋島の名を得たと。而も瀬戸内海の絶景を一眸の下に集め得る天然の展望臺こそ景勝絶佳を誦はる。山頂の屋島寺は南面山千光院と號し、眞言宗に屬し四國八十八ヶ所中第八十四番札所である。本尊は千手觀世音(弘法大師作)脇土として婆蘇大仙及び大辨功德天を安置してある。寺記によると天平勝寶六年過海大師鑑真和尚來朝のとき船中より此の山の靈地なるを見て登山し、五十七日北峰に留錫の後作禮して去り佛舍利三粒及び菩提子の念珠等を寺に送らるとあり。また弘仁元年弘法大師大悲閣を建立して北峰の伽藍を現在の所に移すと共に、養山明神を祀りて鎮護の神とし天曆年中叡山の明達阿闍梨來りて四天王堂を建立し一夏九旬の間五大明王の秘法を勤行すとある。

狀獅子に似たる爲め獅子靈殿と云ふ。その昔弘法大師が屋島寺本堂建立の際より斧を始め未だ成就せざるに日既に西海に没せんとするに遇ひ、この岩頭に立ちて扇を以て暮れ行く夕陽を招き返して工を急ぎ、一日を以て建立したといふ傳説がある、山嶺の垣々砥の如きアスファルト道路を東北に巡れば數町にして東嶺の展望臺に至る。脚下に灣入する壇の浦は那須典市の扇の的、義經の弓流し、佐藤繼信、菊丸の最期等數々の合戦繪巻を繰り擧げて「屋島壇の浦山ほととぎすなへて昔を偲ばせる」更に眼前には五剣山の靈峯に相對し風光と史蹟との渾然は合せて登山の印象最も深き所である。明治三十年村雲尼公御登山の際親しく屋島戰談を聽し召し、談古嶺と御命名になつた。談古嶺から左に見える庵治浦の南端にある一小區域を能登守教經の船陸しと云ふ。當時庵治浦は平家水軍の軍港であつた。元來この浦は屋島陣の東北對岸にある入海で常に波靜かに奥は壇の浦に通じ、北方は内海の要路を扼し、更らに東に出づれば播磨灘に接し水軍の進退に最も便利な船繋ぎ場になり。従つて平家は源氏が大阪灣を船出して海上より大舉この屋島浦に攻め寄せると豫期してゐたもので、この庵治浦に水軍の本隊を置き庵治村東面の釜野附近に見張り船を置いて敵軍攻め來らば本隊に情勢せしめて北方海上に遊へ討んとしたものだ。

同山に登るに南嶺の山麓屋島神社の西より南嶺に至る登山鐵道がある毎日午前六時二十五分始發午後七時五十五分終發とす。



大自然の雅致絶勝を誇る
屋島北嶺「遊鶴亭」より望む
瀬戸の海



〔獅子の靈窟〕



四國第八十四番「屋島寺本堂」



〔雪の庭〕寺島屋



〔源平の戦の血の池〕

景勝絶佳の屋島と屋島寺

瀬戸内海々上国立公園の巨標の下に、その中心的景勝を誇り且八百年の昔源平千戈を交へし史蹟に輝く名山屋島は木田郡の北端屋島町にあり、同町は近時町勢騒々たるものがある。廣袤東西三十一丁、南北一里十四丁、海抜二百九十三米山麓より二十丁にして山頂に至り、島全體が屋根形をなして屋島の名を得たと。而も瀬戸内海の絶景を一眸の下に集め得る天然の展望臺こそ景勝絶勝を謳はる。山頂の屋島寺は南面山千光院と號し、眞言宗に屬し四國八十八ヶ所中第八十四番札所である。本尊は千手觀世音(弘法大師作)脇士として婆蘇大仙及び大辨功德天を安置してある。寺記によると天平勝寶六年過海大師鑑眞和尚來朝のとき船中より此の山の靈地なるを見て登山し、五十七日北峰に留錫の後作禮して去り佛舍利三粒及び菩提子の念珠等を寺に送らるとあり。また弘仁元年弘法大師大悲閣を建立して北峰の伽藍を現在の所に移すと共に、養山明神を祀りて鎮護の神とし天曆年中叡山の明達阿闍梨來りて四天王堂を建立し一夏九旬の間五大明王の秘法を勤行すとある。

狀獅子に似たる爲め獅子靈巖と云ふ。その昔弘法大師が屋島寺本堂建立の際晨より斧を始め未だ成就せざるに日既に西海に没せんとするに遇ひ、この岩頭に立ちて扇を以て暮れ行く夕陽を招き返して工を急ぎ、一日を以て建立したといふ傳説がある、山嶺の垣々砥の如きアスファルト道路を東北に巡れば數町にして東嶺の展望臺に至る。脚下に湧入する壇の浦は那須與市の扇の的、義經の弓流し、佐藤繼信、菊丸の最期等數々の合戦繪巻を繰り擲げて「屋島壇の浦山ほととぎすないて昔を偲ばせる」更に眼前には五剣山の靈峯に相對し風光と史蹟との渾然は合せて登山の印象最も深き所である。明治三十年村雲尼公御登山の際親しく屋島戰談を聽し召し、談古嶺と御命名になつた。談古嶺から左に見える庵治浦の南端にある一小區域を能登守教經の船隠しと云ふ。當時庵治浦は平家水軍の軍港であつた。元來この浦は屋島陣の東北對岸にある入海で常に波靜かに奥は壇の浦に通じ、北方は内海の要路を扼し、更らに東に出づれば播磨灘に接し水軍の進退に最も便利な船繋ぎ場になり。従つて平家は源氏が大阪灣を船出して海上より大舉この屋島浦に攻め寄せると豫期してゐたもので、この庵治浦に水軍の本隊を置き庵治村東面の釜野附近に見張り船を置いて敵軍攻め來らば本隊に信號せしめて北方海上に逃へ討んとしたものだ。

四國第八十四番「屋島寺本堂」



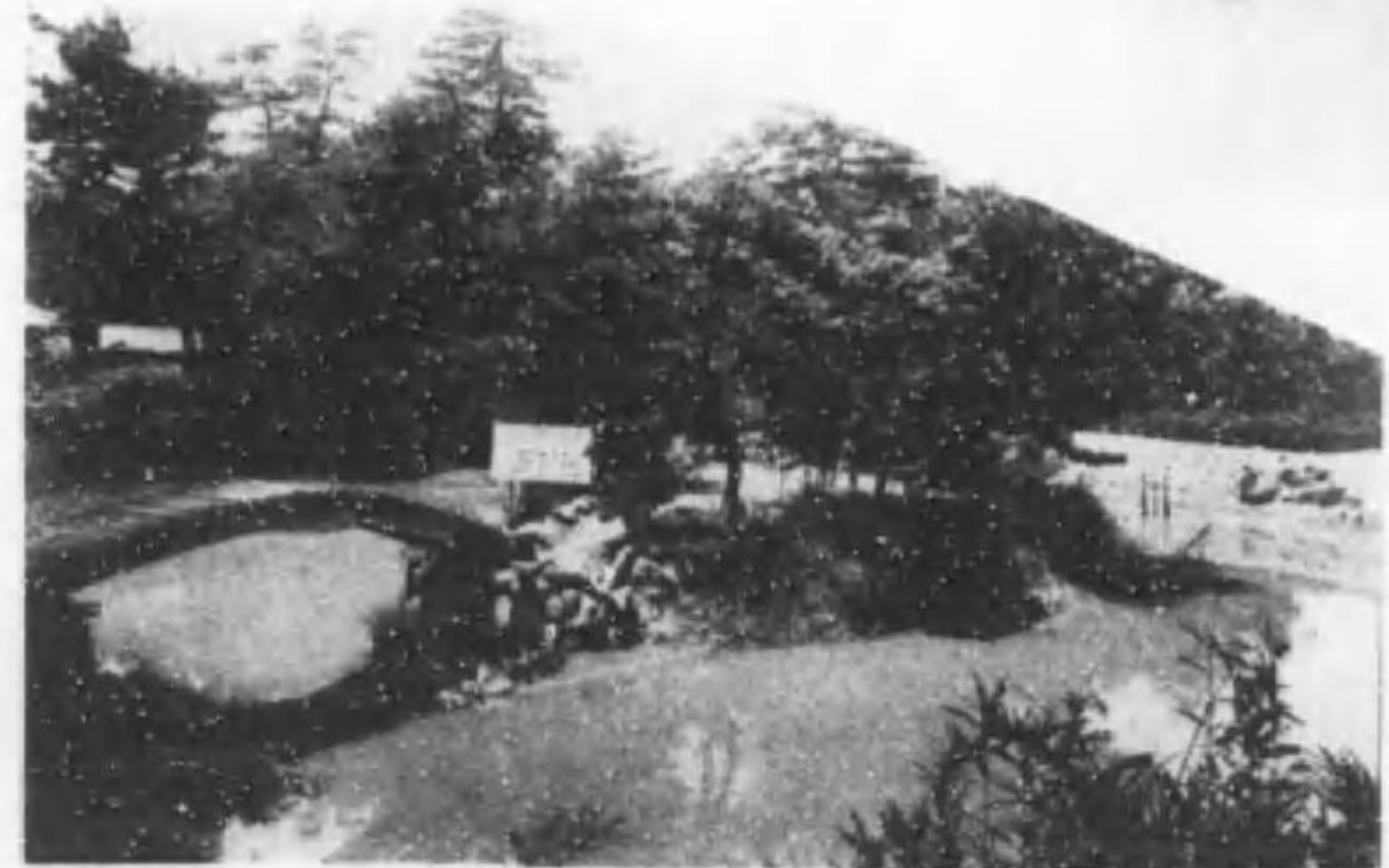
大自然の雅致絶勝を誇る
屋島北嶺「遊鶴亭」より望む
瀬戸の海



〔巖窟の子遊〕



〔庭の雪〕寺島屋



〔池の血〕る影を史悲の戦合平源

奇峯五剣山と八栗寺

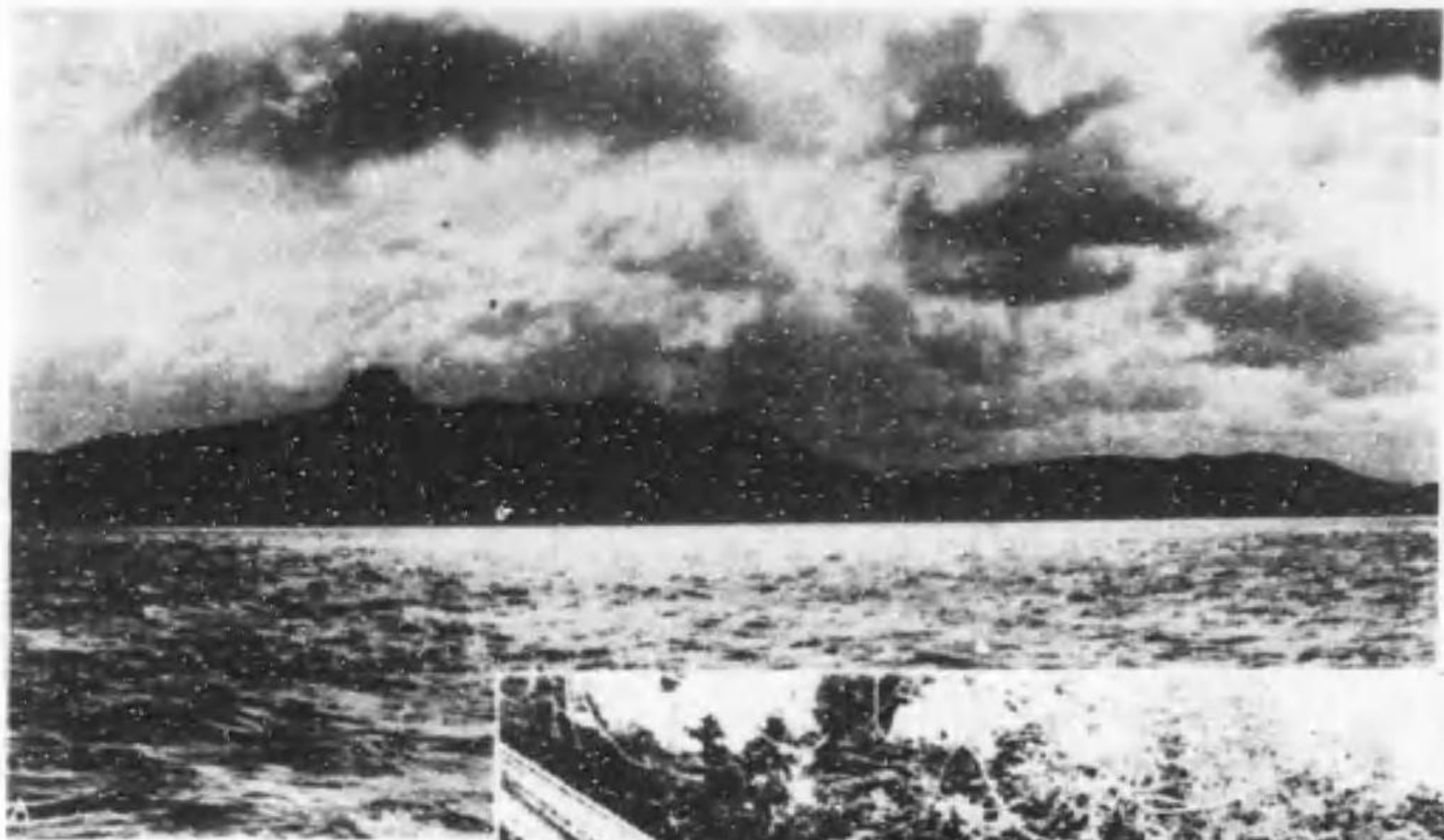
木田郡平禮村の北方に屹立する五采の奇峯五剣山は一名八國山とも稱し、海拔千五百三十七尺、其の山容鋸齒の如く往昔は山頂に五剣を植えたるが如く、雲表に聳えてその名を得たが、その西端の一峰は永祿十一年五月霖雨のため折壊し、また東峰は寶永三年十月の地震のため崩壊した。八栗寺はその中腹にあり。五剣山千手院と云ひ眞言宗京都大覺寺の末寺にして、西國八十八ヶ國の靈場中第八十五番の札所である。

本尊は正観音像(沈杳木像弘法大師作) 脇土愛染明王、不動明王、更に歡喜天(弘法大師作) 其他數作の諸佛を鎮めてゐるが、寺記によると同寺は寶龜年中弘法大師御幼少の折り登山して、土泥を以て三千佛及び十王の像を作りて遊び給ひ、その後再び五剣の峰に攀じて虚空藏開持の法を勤修し、七日を経るに及んで明星來影し三七日に至りて五柄の利劍虚空より降る、その時金剛藏王示現して告げ給はく此山は佛教相感の靈地なり。若し此の嶽に就いて伽藍に建て三寶を弘めなば我常に擁護せんと、大師乃ち中嶽に於て藏王の權扉を開きその五剣を巖岫に埋めて山の鎮護として五剣山と稱した。また大師自ら千手觀音の像を刻み堂宇を建て、之を安置したので、千手院と名づくところ。

る。

而して絶嶺に登つて四方を展望すれば、八ヶ國の境寸許の裡に集る因つて初めは八國寺と號したが、延暦年中大師入唐前此處に來り粟八粒を煮して植え置きたところ歸朝の後八粒の糲粟悉く成育してゐたので、八國寺を改めて八栗寺としたと、同寺の寶物には法華經塔一基地藏尊、蓮糸織三尊彌陀、五大虚空藏、定家卿の八首和歌、弘法大師筆の般若心經等があるが、殊に同寺の歡喜天は延寶五年九月十六日木食以空大僧正の勸請せるもので、世人の信仰篤く賽客踵を接して至る。

交通は電車八栗驛に下車、ケーブルカー連絡自動車にて山麓源氏池畔の驛に至り、山頂まで八栗ケーブルカーの輕快を契すれば樂々たるもの。



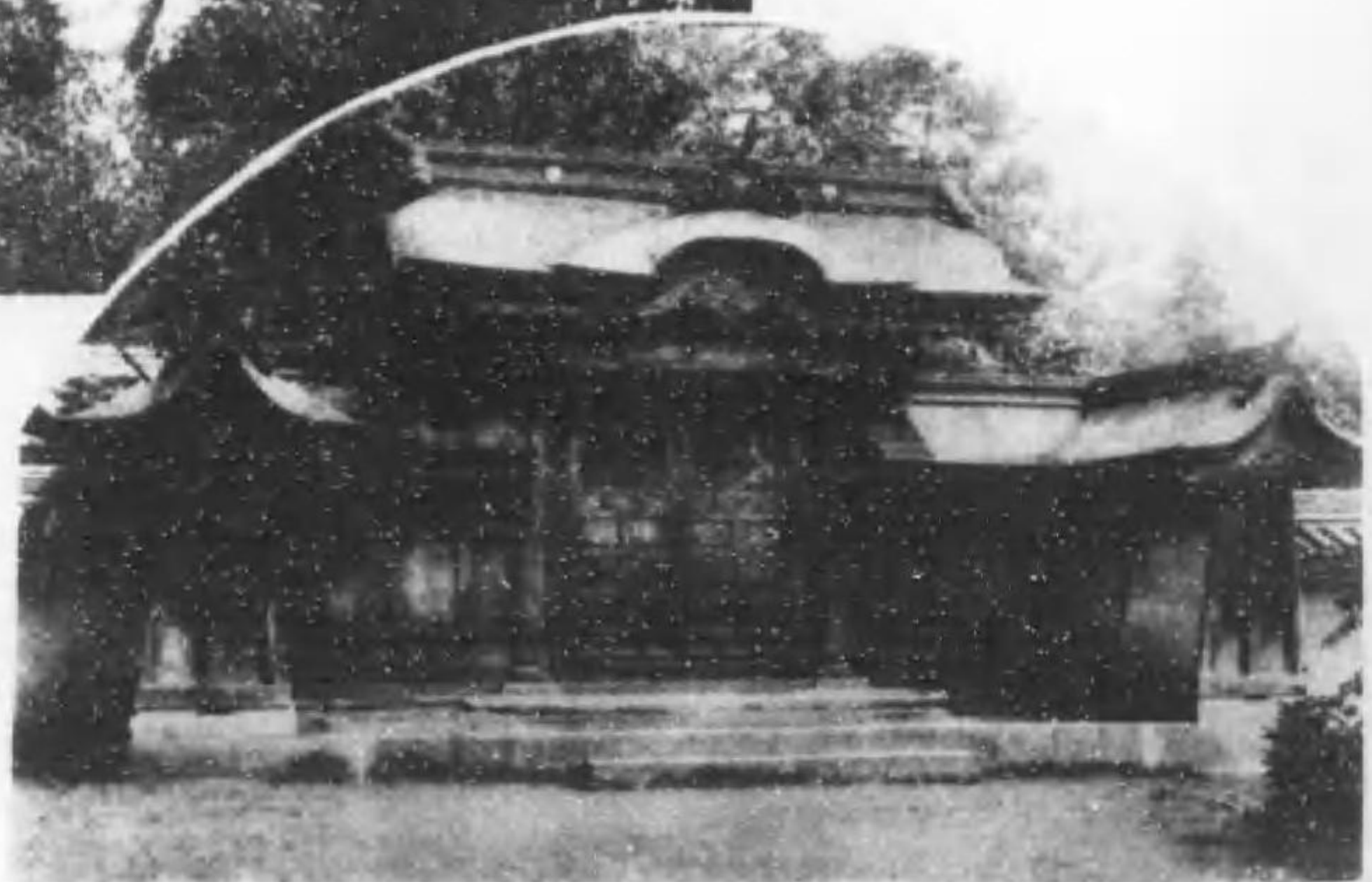
上「五剣山」の遠景



〔堂本寺栗八〕



〔祀の上頂嶽の五〕



〔門成御〕寺栗八

志度町と志度寺

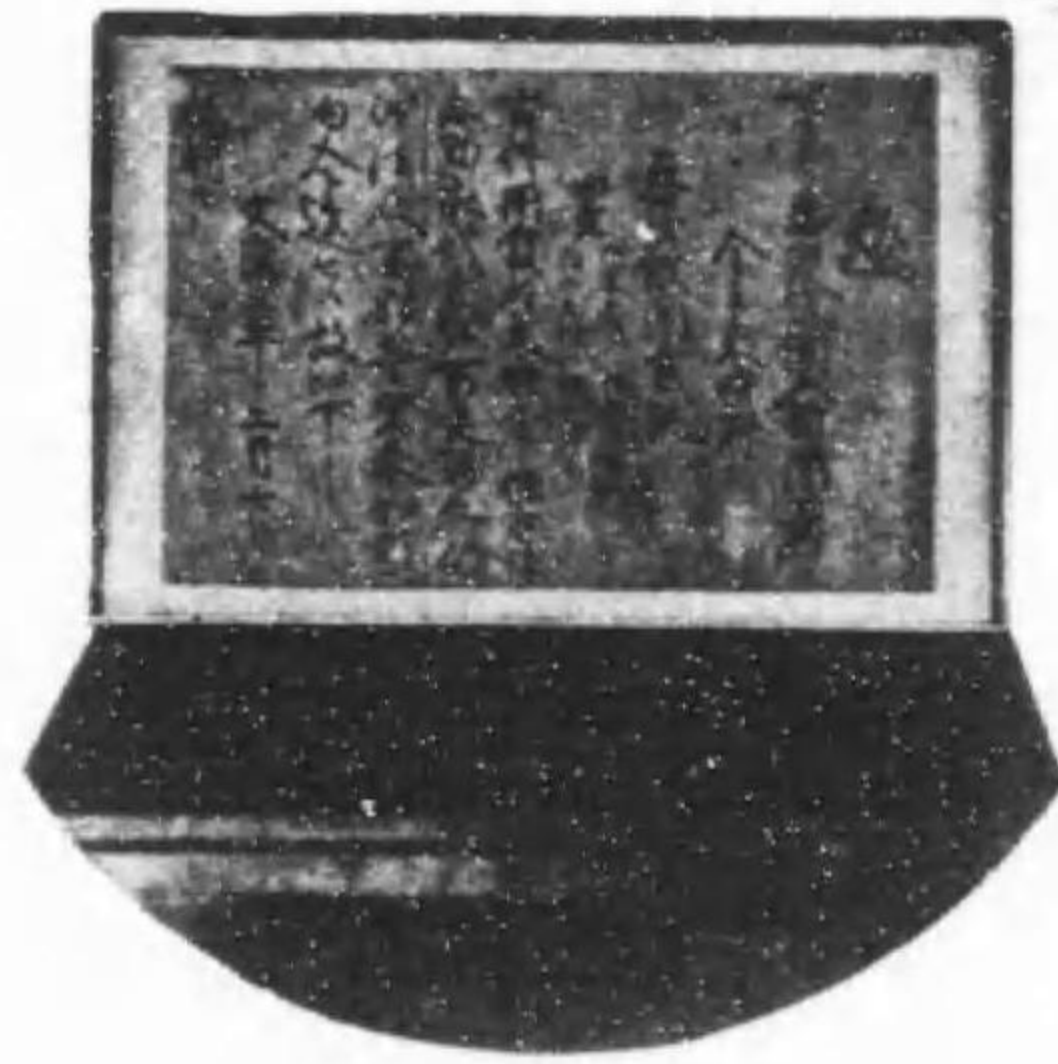
大川郡志度町は東説の名邑として物質集散の地である又四國八十八ヶ所第八十六番の靈場志度寺がある。この古刹は眞言宗京都仁和寺の末寺にして、その本尊の十一面觀世音像(傳弘法大師作)脇士不動明王(傳弘法大師作)及び毘沙門王(傳佛師春日作)は何れも國寶に指定されてゐる。同寺の草創は今を溯る一千四百年の往昔繼體天皇の三十三年此の地の園小尼智法といへる者の建立する所と、志度寺縁起に見えてゐるが、同寺縁起に關する最も南國的ロマンチズムを盛つた傳説は現に同寺境内にその墓塔を殘してゐる謠曲「海士」の母性愛と孝養の物語であらう。

天武天皇の七年淡海公藤原不比等が父鎌足の追福のため南都興福寺金堂の釋迦如來及び伽藍を造營さるゝに際して、唐の高宗の妃たりし淡海公の妹君は父追福のため稀代の寶玉たる「面向不背の玉」「酒濱石」「花原磐」を和朝へ贈り給ふことになつたが、この寶玉を載せた船が志度の浦に差し蒐つた折り、名玉を奪はんと海底の龍神俄に暴風を吹き起したので唐の使者は懼れて「面向不背の玉」を海中に投げ入れ辛うじて難破を逃れて南部に至り、この趣を言上した。淡海公は龍神に奪はれた玉をとり返すべく浦を後にこの浦に下り給ひ、身を窶

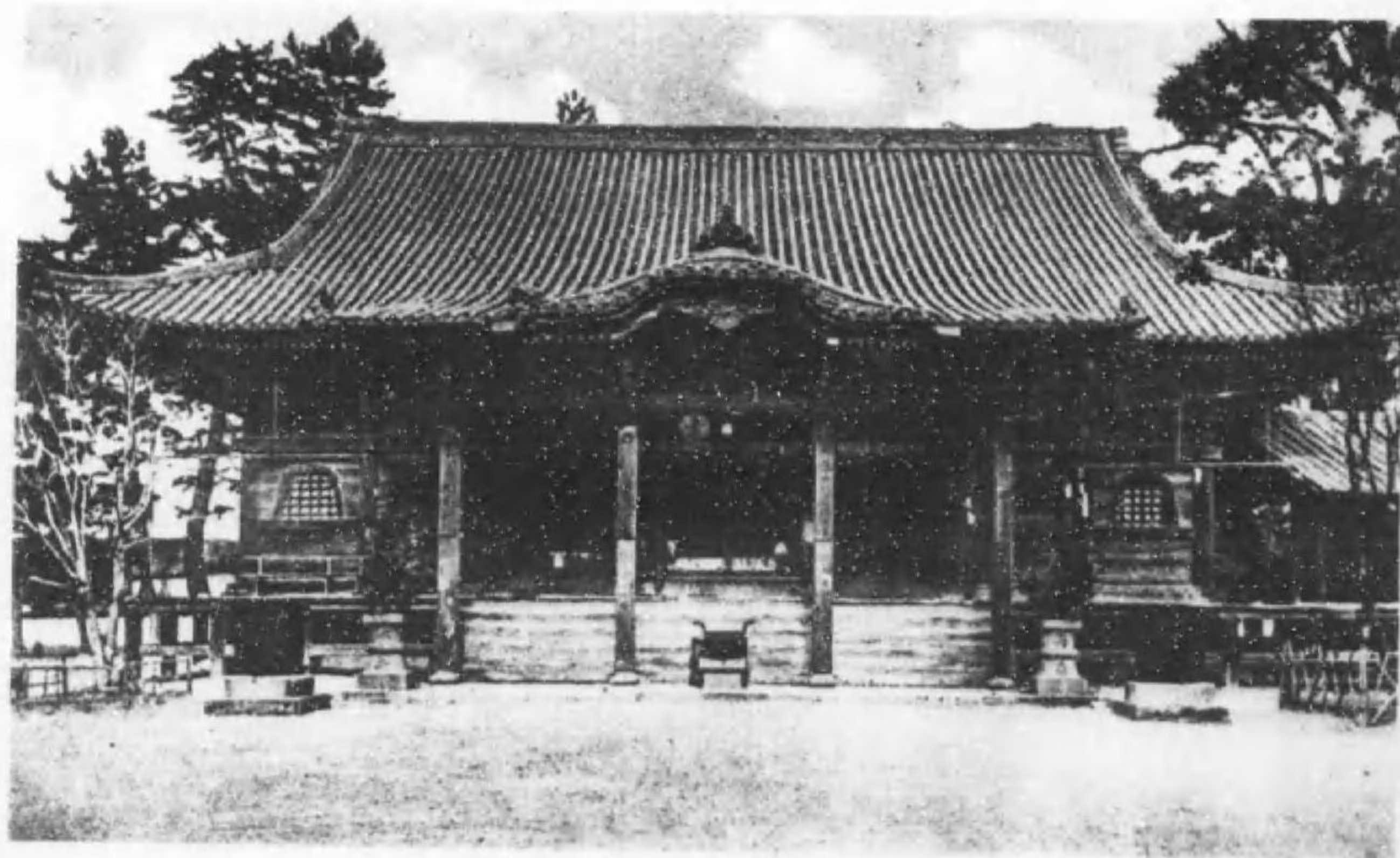
して浦の蟹あまと契りを結び一子を儲けた。當時この浦を房崎と呼びしゆへ後に房崎の大臣と名付けたが、蟹はおのが子を淡海公の世繼ぎに約して海中深く潜つて龍神と闘ひ珠を奪取して、淡海公に捧げたが龍神に傷けられ終に空しくなつた。淡海公は蟹のなきがらを此處に埋めて五間四面の堂を建立し、死度道場と名付け稚子を伴ひ南都に還り、かの玉は末代長怖あるべしとて興福寺の釋迦の眉間に奉納した。その後持統天皇の八年房前大臣十三歳の時行基菩薩と共に、この浦に來り亡き母の追善のため伽藍を修造し、且つ千基の石塔をたて經文を書寫して奉納されしと云ふのがその傳説であるが、寺記によるとその伽藍は天正年間長曾我部元親の兵火にかゝり焼失したのを、慶長十九年十月讃岐國守生駒雅樂頭近垣公の夫人教實院の觀音堂建立あり。寛文十年松平頼重公が水府公菩提のため諸堂を造營し給ふとある。志度寺には寶物とするものに前記の三大國寶と、禪月大師の十一面觀音畫像一幅及び志度寺縁起圖繪六幅等の國寶の外に、弘法大師作の五大尊、惠心僧都の地藏尊、雪村筆の綱敷天神、行基作の辨財天その他數十點の寶物を藏してゐる。また同寺は仇討物語にて人口に膾炙されてゐる田宮坊太郎が幼児出家として預けられてゐた寺として知られてゐる。この由緒の地志度は近時各種産業興り、特に米麥海産物の集散は巨額を示してゐる。



〔墓之女海〕内境寺度志



同寺寶物
「龜山院御繪旨」



〔堂本寺度志〕

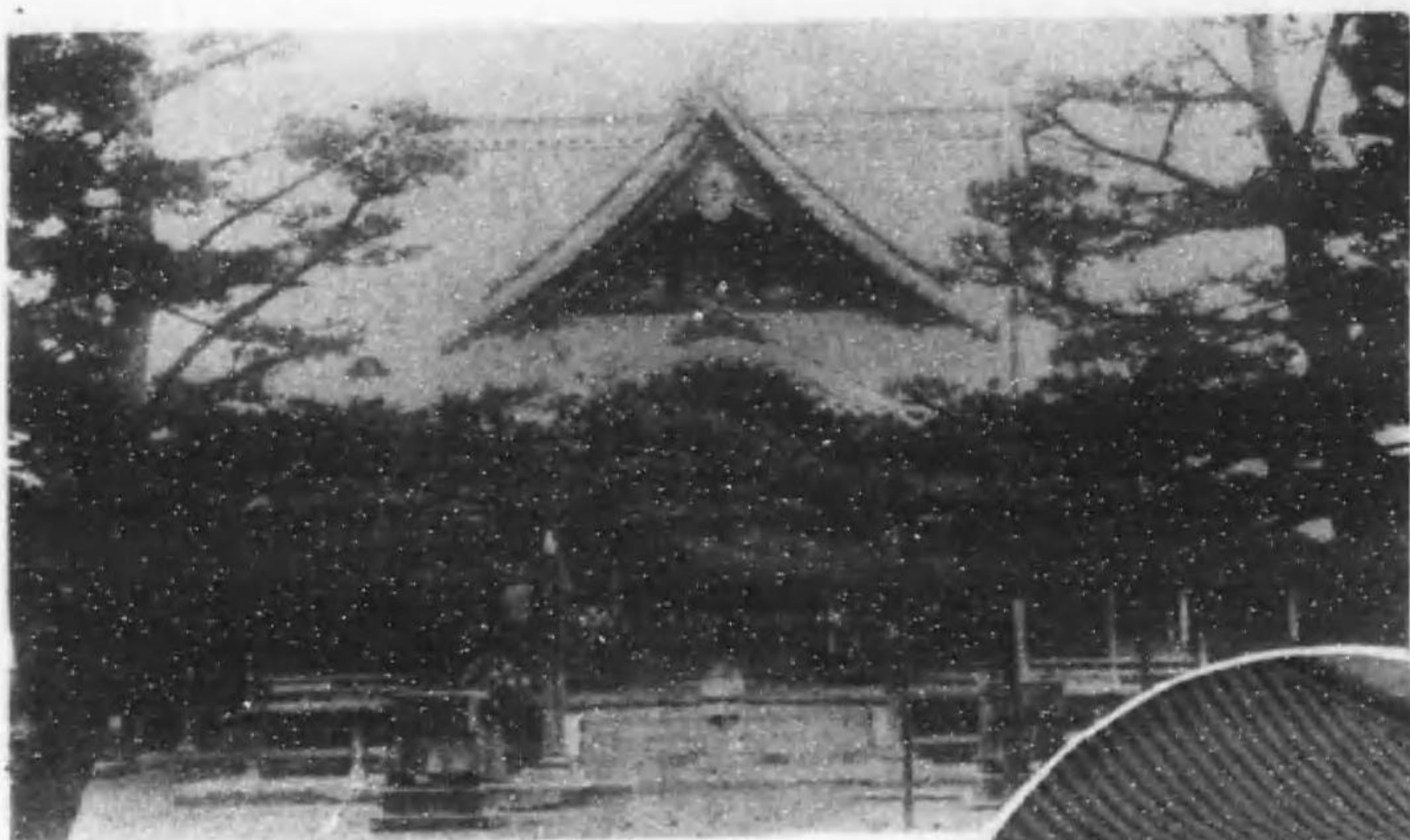
長尾町と長尾寺及龜鶴公園

大川郡長尾町は往古長尾郷と稱し、大正四年十一月十日町制を實施し、以來逐年發展を示して正に東讃交通の要衝をなす然も地の新名勝として龜鶴公園がある。同園は同町及び隣接多和村の産土神郷社宇佐神社の神域及び附近の山林並に八幡池を包含する地域にして、園内には數千本の櫻樹密生して彌生の春ともなれば紅霞全國に變びき、絶好の觀櫻地となるが、この櫻は明治四十年より三ヶ年に亘り同町出身小西和氏の苗樹二千本を寄附移植したものである。爾來龜鶴公園の名を附して同町々費の補助及び有志者の寄附により保護成育に努めて居るが、大正十年龜鶴公園保勝會を組織し町長を會長として、その設備經營の完璧を期した。同公園に就いて更らに特記すべきは園中「中の島」と呼ぶ一町八段餘の地域にして同所は他に類例を見ぬ多種多様の植物が繁茂して宛然植物園をなしてゐる。その植物百二十種、これを類別すれば喬木五十六種、地表草類十二種、從喬木九種、蕨苔類三種、灌木三十一種、着生植物二種、纏繞植物六種である。

斯て同公園は春夏秋を通じて花紅緑を追ふ遊士が東讃の新佳境として逐年世の認識を深めて居る。

なほ同町の古刹天臺宗準別格本山補陀落山觀音院長尾寺は、聖武天

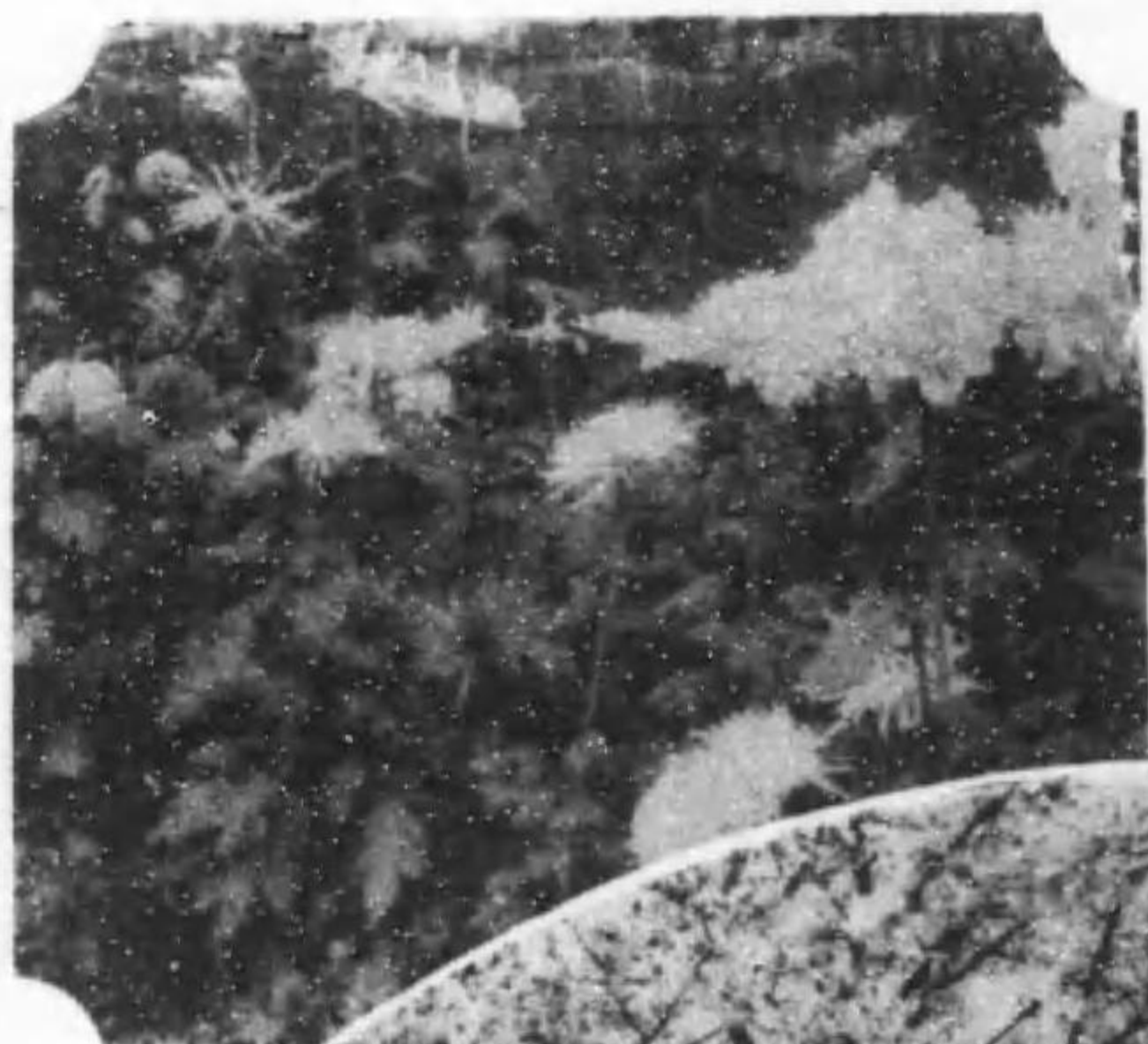
皇の天平十一年行基菩薩の開基にして、四國巡第八十八ヶ所中第八十七番の靈場となつてゐるが、弘法大師年頭に七夜の護摩供養を修し國君安泰五穀豐穰の祈願をされ、賽者に寶牘を授與したこと今に大會賜として傳り、四國最古の福壽行事として残つてゐる。本尊の聖觀音は行基菩薩の御作、智證大師讀岐十七檀林の一にして當國七觀音中隨一として聞えてゐる。淳和天皇の天長二年左大臣冬嗣公奏請國守貞岑安世に命じて堂塔を修造し寺供田を奉納し、龜山天皇の文永七年二月伏見天皇の永仁元年及び同十一年勅命に依つて本尊を開扉したが、爾後二十年毎に之を行ふてゐる。文明年間兵火に遭ひ、堂宇什寶寺記等悉く灰燼に歸したが、慶長年間國守生駒一正堂宇を築造し、松平頼重公境内を擴張、元祿七年更に本堂阿彌陀堂、仁王門を、同十三年御成門等を再建した、同寺中興の住職は秀青と號し當住職は傳燈第四十八世村岡俊嶽師である。



四國八十七番札所「長尾寺金堂」



同「大講堂」



同寺「白藏園の菊花」



東名の亀鶴公園

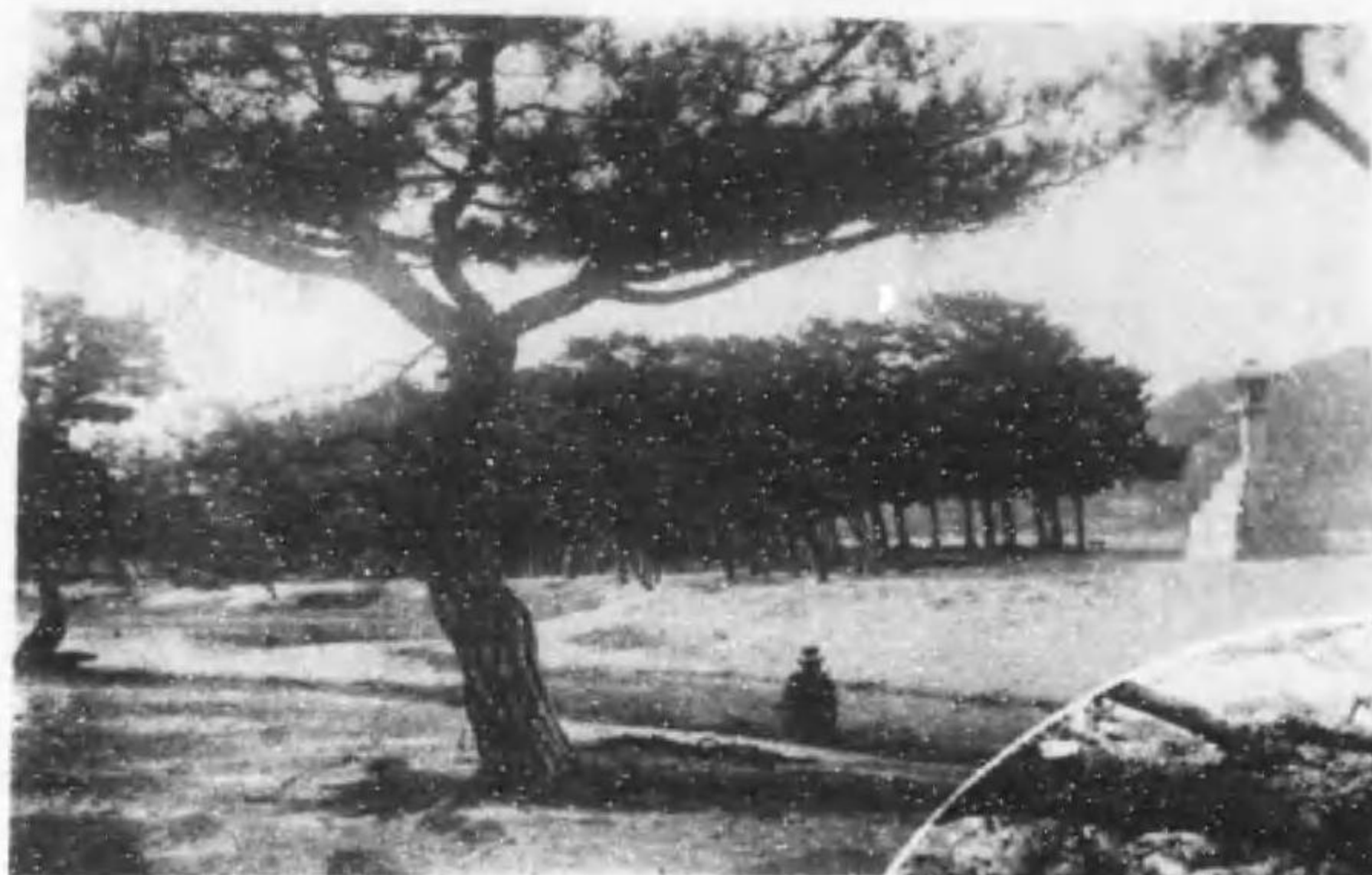
津田町と琴林公園

「鳴門見え須磨見え涼し松の園」——西望すれば小波の指呼に浮ぶは小豆島、東望すれば縹渺たる播磨灘を遙るかにして通ふ千鳥の淡路鳥影ほの見へる此處津田町こそ恵まれの地である。同町は縣下有数の海産の地にして更に近代産業の誇りをも持つ又海濱鶴羽に亘る線一里餘の綠翠瀟る松原こそ颯々たる松箱の天女が奏でる爪音かとその名の出づる琴林公園の景勝である。

臥龍の如く蟠虎の如く幾百年を磯に馴れたる老松奇松、雄姿万容の數千株は白砂に映じて翠綠愈々濃やかに、この雰圍氣に瀟瀟する健康的オゾンを滿喫する人々にとつて、夏は涼しき避暑地となり、海水浴場となり、冬はまた暖き避寒地ともなる。而もこの松原に鎮ります石清水神社は一千二百數十年前承和年間に勧請せる靈神にして、その神城なればにや、清淨森嚴はいや増すの感切にして、この松原往古は「三里の松原」と呼ばれ、津田町より白鳥へ至る路傍に續く松並木に過ぎなかつたが、慶長年間に早魃打ち續き里人灌漑の水に窮し當時讀岐の國守生駒雅樂頭親正公に溜池築造を請願せしに石清水神社の鎮座地がその選に當り附近の社屬十四石をも併せて供進した。その交換地として海岸一帯の地を附與される事になるや、氏子等は協力して此處に

松樹を補植轉栽して密林を造り、その中に石清水神社を遷座した、斯くして星霜移り樹齡年と共に加はり、附近一帯は現在に見る如き壯麗なる一大松原をなしたのである、明治五年地券發行の際譲つて上地官林となつたが、明治三十三年三月舊境内に復し更らに大正四年八月二十四日縣告示により神社境内地一千八百八十坪を除き、四萬六千七百二十三坪を縣有林四反四畝に併せて公園地とし、大正十三年四月八日神社事務所建築用地百五十坪を境内に編入して今日に至つてゐる。

松原の西方背後に聳えてゐる山を雨瀧山と云ふ。その中腹に残る天正年間の豪族安富盛方の居城の趾は同公園を俯瞰する絶望の展望臺をなし、此處に立てば脚下に青黛を限る長汀に磯波白く弧を描いて波上に點描する鷹島、名子島の浮ぶ邊り蟹甲に似たりとて蟹甲浦と呼ぶが静夜この浦の幻想的潮騒松音のうちに波上舟中の人ともなればこそ幽婉詩境を照明する芒光を松原の一角に捕へて、旅人の瞳に映る旅情は一入興趣を加へるこれは大正十三年時の縣知事佐々木秀司氏の盡力により石清水神社の境内より發掘し、修理築造せる一大燈籠である。なほ園内に清麗な料亭がある明りなる座敷に松箱を聞き、海を眺め島を見るその名も羽衣亭と呼び、津田町千歳旅館の經營であるがこの白砂青松の淨境は夏冬避暑避寒の客に賑ひ春秋は遊子の宴席も繁きがある。



【部一の園公林琴】



【松り上根】園公同



【亭衣羽】内園同



【場動運園公】同

白鳥神社と白鳥町

大川郡白鳥本町は手袋織布産業の町として近時の發展は著名である又こゝに祀る白鳥神社は東讀の靈社としてその奇瑞夙に顯はれ日本武尊を奉祠して炳乎國史に輝くその御偉業を偲び奉る森嚴なる神域である。日本武尊は人皇第十一代景行天皇の皇子にして、御年十六の時勅を受けて筑紫に至り熊襲の賊帥川上の鼻帥を誅し給ひしを初め、諸國を鎮撫征定し還啓の途次近江の膳吹山で瘴氣に觸れさせられ、伊勢の熊襲野に至り薙し給うた。

天皇大いに悼惜詔して其の功を録し群臣に命じ、其の地に山陵を造り厚く葬り給うたに神靈白鶴と化し、西に向ひ飛び去つた、群臣大いに驚き開棺したが只衣冠空しく在すのみであつた。

靈鳥は大和河内を経て讀岐國松原里(現在の白鳥町)に留り給うたが、由來松原の里は勝地として青松白砂に映じて東北は渺茫たる播磨灘を望み、遙かに阪神播磨を控へて天然の神境をなしてゐる。

成務天皇此處に神陵を作り仲哀天皇の御宇に壇垣を築き、封戸を寄せられ仁徳天皇の御代に至り初めて神廟を造營し、白鳥宮として齋祀し給ふ、斯くして神威赫灼として輝き中古以來弓矢の神として武家の崇敬するところとなつた、寛文五年松平頼重公讀岐の國守となるや大

いに規模を擴め社殿を修築し、仲哀天皇、神功皇后、應神天皇及び稻依別王、武鼓王並びに吉備武彦、大伴武日、武内宿禰を配祭し、領地若干を神領として寄進し、幕府の朱印地に改め現任の社司猪熊夏樹翁の祖卜部千倉氏を聘して祭官とした。明治維新の際、朱印地は奉還したが、七郷の氏子一般信徒の維持堅固にして社殿を初め境内の壯嚴は昔日に變らず、毎年十月四日より八日に至る大祭の外に五月四日の春祭、七月三十日の夏祭には近郷よりの賽客絡繹として集り、盛觀を呈する。



「白鳥神社」



白鳥松原の名樹「蛇」の松



白鳥ラブンヤイリ「双児島」を望む

引田町と城山公園及安戸池

讃岐の最東位の大川郡引田町は歴史も古き、醤油と漁業の町である。茲に史蹟を載せて眠る城山々上の城跡を中心とする山紫水明の勝景を稱して城山公園と云ふ。同園は大正十二年四月創設せるもの、三方に海を繞らし一帯帯水の彼方に播磨、淡路の島影は浮び、南には渦音高き鳴門を控へ、北に小豆島青黛の如く波上に望み、西は引田町の街衢眼下に展開し、更らに名高き安戸池、二子池の碧水清々と溢れて目趾の間に迫る巽山の秀嶺與次山の鬱林、遠く阿讃の國境連山、夢の如く起伏重疊して、大自然のパノラマはこの高爽なる公園に遊ぶ人悉くを羽化登仙の夢幻境に誘ひ入れる。而も同公園創設に際し恰も久通宮良子女王殿下の縣下御巡遊の擧あり、公園開きの初日に殿下の御名代御派遣の榮を得、これを機として爾來諸施設を以て園内愈々美化明粧され、名士墨客踵を接して來遊し、その眞價は認識さるゝに至つた。

尙近時同町の新名所たる安戸池は、池とは名のみにて實は海灣であつて、古老の言によるとこの地はもと海濱より數丁離れた陸地たりしものが洪水のため一變して海灣と化したと云ふ、周圍一里半嚴冬の候幾萬とも知れる鰯の大魚群集ひ來り、その捕獲壯觀は季節の呼び物と

なつてゐたが。近時鰯の來遊の減少せしを以て一大人工養殖を經營しつゝあり。毎年夏から秋にかけては、尺餘のハマチ數十萬は池中に青鱗を躍らせ、他に求め得ぬ美觀を呈し快感をそよるや切々たるものがある。



[宮 幡 八 田 引]



[島 郡 女] の 園 公 山 城



[池 戸 安] の 望 遠 と [園 公 山 城] 田 引

佛生山町と古利法然寺

佛生山町は香川郡の中央に位し、其産業的生彩にも素麵生糸等盛況にある日下人口四千人東に藤神社を奉祀せる株山、縁樹鬱蒼と繁り甍池、膝池、平池の碧水には遠く阿讃國境の連峰靜かに倒影し、殊に平池は周圍一里十二町治水二年平相國清盛の下命により築造せるもの、池所に櫻樹多く春風至れば爛漫として花吹雪池面を埋め、近時櫻名勝として頗にその名を高くしてゐる。附近にはまた本縣唯一の大競馬場あり。春秋二季のシーズンには大盛觀を呈する、此處に雄山の東麓同町百相に古利法然寺がある。佛生山來迎院と號する淨土宗の一本山にして舊藩主松平家の廟所にても知られる。同寺の縁起は七百餘年前に遡る建永年間淨土宗の開祖法然上人が讃岐に流謫された。當時那珂郡小松庄(現在琴平)に居り一字を建て、阿彌陀如來の像を刻んで安置し、生福寺と稱した。其後同寺は兵亂に依り堂塔坊舎悉く破壊し、僅かに竹庵に彌陀善導圓光の影像を残すのみにして、爾來四百年を経て寛永八年高松藩祖松平頼重公法然上人の舊蹟の失はれん事を悲しみ、また佛生山は古來靈場たるを以て生福寺廢寺の本尊等を此の地に移し、丘陵を開き土木を起して三十三間二十餘宇の堂塔僧坊を造營し、南海屈指の巨刹となつた。將軍家綱公之を嘉して朱印寺領三百

石を贈與し、また長くも東山天皇の延寶三年閏四月御給旨並に常紫衣被着の御宣言を下賜あり。松平家代々の菩提所となつてゐる。

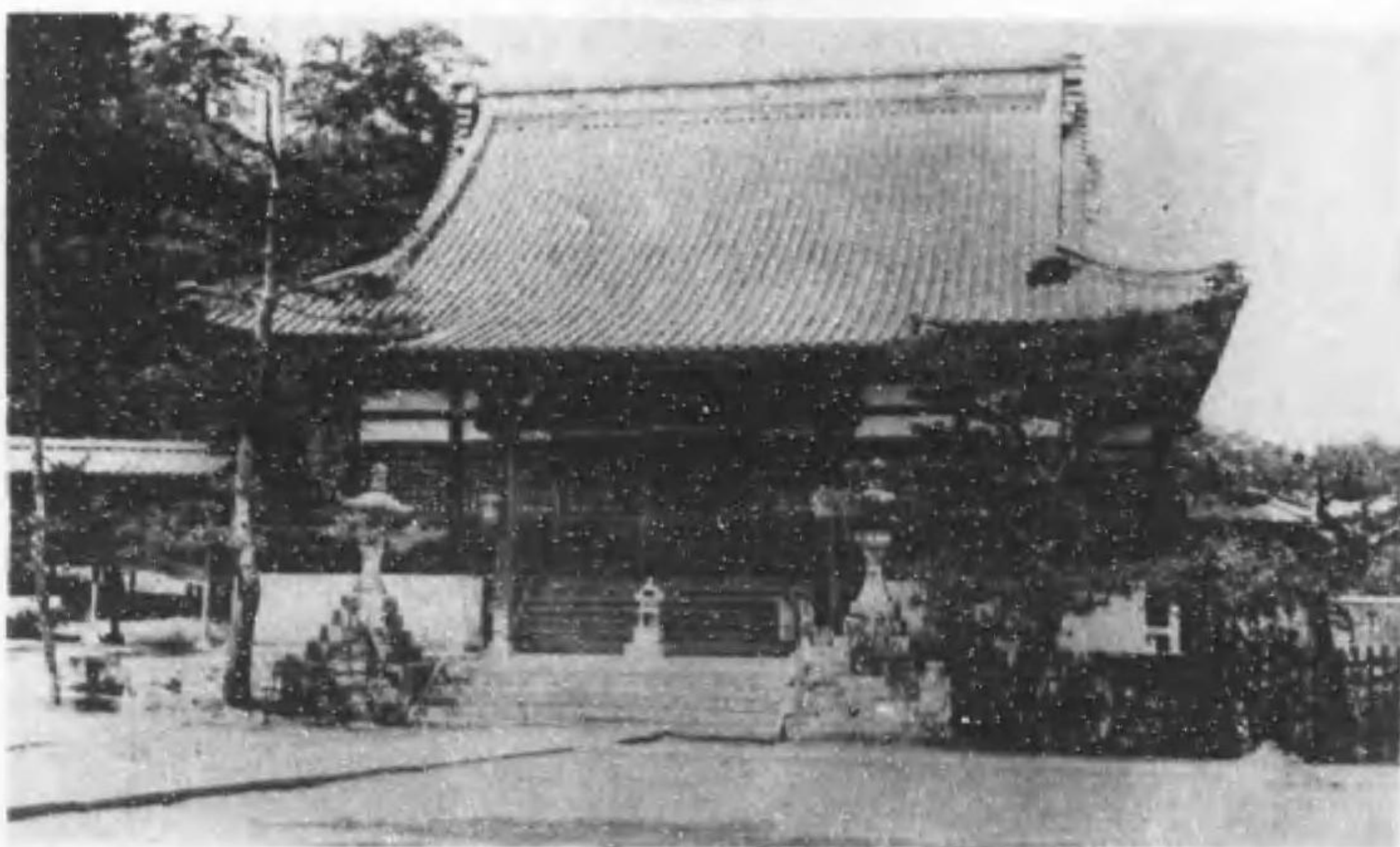
寺内に安置せる釋迦如來の涅槃木像は國內第一の稱もあり、釋尊の臥像長さ一丈餘、文殊、普賢三尊の座像各々四尺、諸大士梵天帝釋二天並びに四天王十六羅漢、長者居士天龍八部善神等空中より摩耶天人阿那律尊者侍女等雲に乗つて天降る像の外、鳥獸五十二類備はり總て木像である。その他同寺には什物多く、殊に大部分を藏する一切大藏經は本邦無比と稱せられてゐる、就中國寶に指定されてゐるものは、紙本着色觀世音功德圖(傳鶴州筆)六曲屏三雙二曲屏一雙、絹本着色十王像(陸信忠筆)一幅、紙本着色源氏初音の卷、紅葉賀の卷(晴川筆)八曲屏一雙等である。



法然寺 [涅槃像]



同寺 圓光大師「打鼓の鉢」



佛生山 法然寺金堂

一の宮田村神社と素婆俱羅社

香川郡一宮村(琴電一宮驛停留所北)に鎮座する國幣中社田村神社は倭迹々日百襲姫命、五十狹芹彦命、猿田彦大神、天隱山命、天五田根命、の五柱の神を祭り、その起源は極めて古く元明天皇の和銅二年社殿を創建すと。往古より田村大社定水大明神又は一宮大明神とも稱し朝野の崇敬淺からず。仁明天皇の嘉祥二年以後屢神階を授けられ、清和天皇の貞觀三年二月には宮社に列せられた。延喜の制名神大社で讃岐國の一宮たりしが、明治四年國幣中社に列せられ、爾來皇室國家の有事の際は勅使の御差遣あり。

大正十一年十一月 攝政宮殿下大演習御統監の爲め行啓あらせらるゝや同月十六日龜井侍從を御差遣になつた。同神社の奥殿の床下には深淵あり、板を以て之を蔽ひ古くより神祕を傳へていま窺ひ知るところを得ないが、往昔は領内に水旱ある時は領主、奉行必ず先づ同神社に祈願をしたと云ふ。同社の建築物は奥殿、本殿、幣殿、拜殿、神饌殿、隨神門、神庫、末社素婆俱羅社、同宇都伎社、同殿島社等が重要なものである。末社中素婆俱羅社は主神として中央に少名毘古那神を祀り、左右に大年神塞神、大水上神、菅原神を配祀し疾病治癒の靈驗妙顯を以て聞え、他府縣よりの祈願奉賽者踵を接してゐる。靈驗奇

瑞の實例は枚擧に遑もなく、最近の一例に左の如きものがある。

香川郡川東村宮本眞一氏は昭和六年の夏より發病し、同年末には肺結核と診定さるゝに至つた、同氏の妻サイ女は醫師の絶望的宣告を受けるや最早神佛の加護によるの外なしと決意し、毎朝一里餘の田舎路を素婆俱羅神社に日參すること一ヶ年に及んだ時に、その至誠神に通じて夫君の重患は次第に強紙を剝ぐが如く全快に赴き、昭和七年の秋夫婦揃うて御禮參りも出來得る程に健康回復し、一家を擧げて神徳を讃へてゐると云ふ。なほ神社境内附近には夫々由緒深き舊蹟があるが、その主なるものは花泉、袂井、休石、天降等である。同神社の例祭は毎年十月八日、初夏祭は五月八日神輿の渡御があるが、最近竣工した御旅所は九百五十二坪の面積を有し、周圍には土壘を築きその上に延長百十一間の石造玉垣を廻らし、西方に花崗石積十二坪の神輿駐籠所を築造してゐる。鳥居は明神型の鐵筋コンクリート造、高さ二十七尺、この外明神型燈籠、祭器具庫等あり制札場は伊勢神宮の古殿舎撤下材を以て造營したものであると。



一宮國幣中社[田村神社]



田村神社の[御旅所]

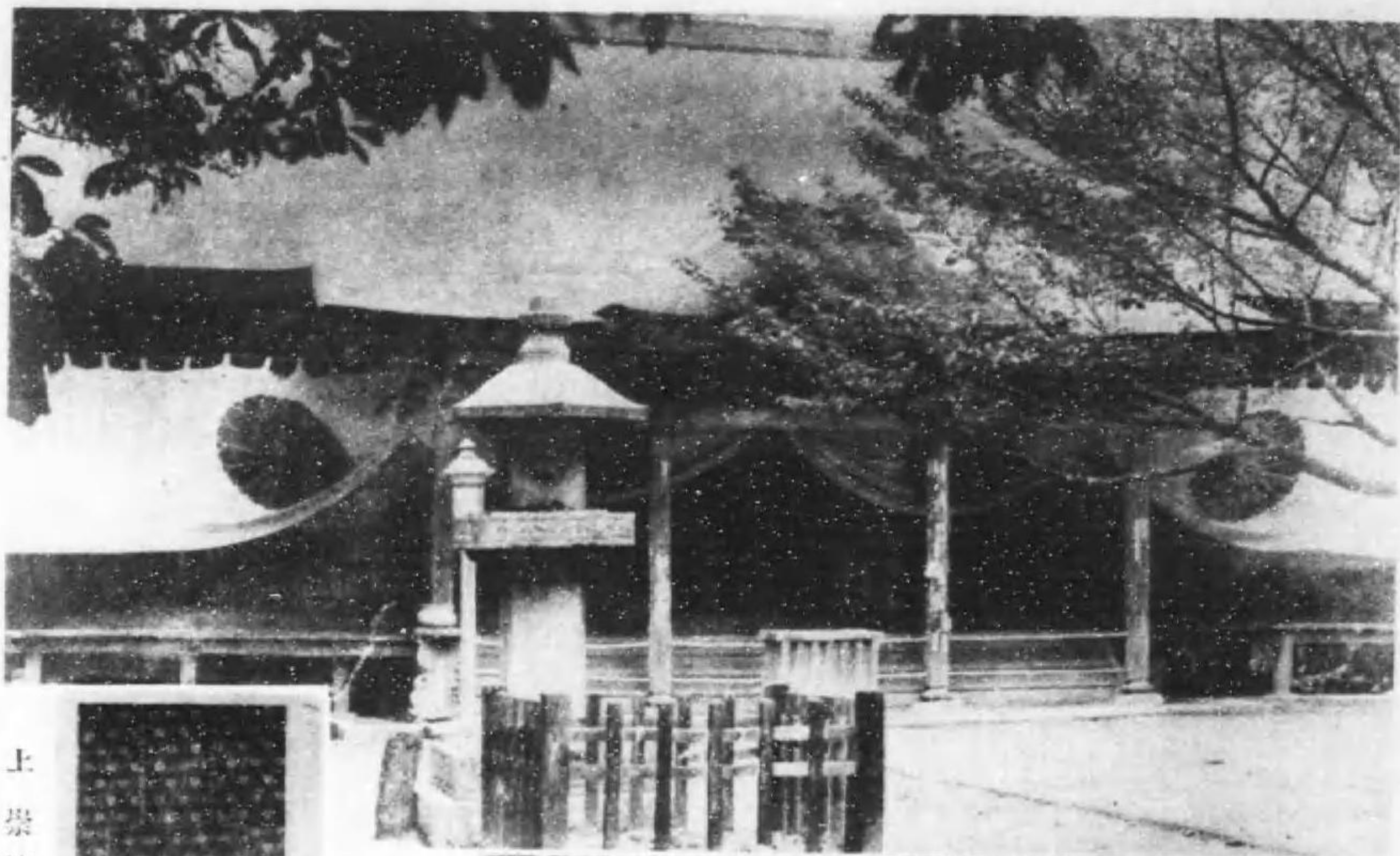
聖跡白峯寺とその由緒

「よしや君昔の玉の床とてもかゝらんのちはなにゝかはせむ」杉木立に籠むる精氣にもその昔の哀史を偲ぶ崇徳天皇の御陵所と四國靈場（よこしま）の聖域を擁する白峯は綾歌郡松山村にあり、豫讃線鴨川驛下車するを最も便利とする。白峯の名は附近の諸嶽の異名たる赤峯、黄峯、青峯、黒峯と共に五色の峯の一つにして此處にも勝地と宗教的氣韻を窺ふことが出来る。蓋し山深くして雪の消えること最も遅きため白峯の名を得たものであらう、白峯寺は綾松山洞林院と號する眞言宗京都仁和寺に屬し四國第八十一番の札所に當り青峯山の根香寺より五十丁の峯嶺まである。寺記に依ると同寺は弘法、智證大師の建立にして、弘法大師は弘仁六年先きに此の峯に寶珠を埋めて阿伽井を掘り給ふた所、寶珠の地漏壺と變じ三方へ落ちる水に増減なき奇瑞を現じた智證大師は唐より歸朝し、初め讚岐國金倉寺に止住してゐたが貞觀二年十月一日子の刻北條郡大椎の沖に光明照り輝き異香國中に薫じ大師怪しみてこの峯に登つて瑞光を見給ふに、山上に岩窟あり瑞光その窟を通じ老翁一人現はれて此山は靈地にして、此窟は慈尊入定の地なりと云ふ、即ち山中巡檢するにまがふ方なき靈場である。此處に於て十體の本尊を造立し四十九院を草創し給ふた、これ白峯寺の縁起であ

る。

白峯御陵は寺の北方にあり、長寛二年八月廿六日山麓木丸殿に於て崇徳天皇崩御遊ばされしに依り茶毘に附し来り、此の山に鎮めまつたもの、御陵の敷地千六百八十一坪、中央に高壇あり石の玉垣をめぐらして風々たる松籟にも保元の悲史を傳へてゐる。即ち境内頼證寺殿は御廟所であつて、幾多の寺寶も收めらる。御陵の北方に三十米に瀑布あり稚兒ヶ瀧といふ、昔讚留靈公當郡福江浦にて悪魚の毒氣に酔ひ給ふた時、天童降臨して藥水を獻じこの瀧に姿を消したといふ傳説ありまた白峯山中より出づる動き石あり、これを打てば鏗々たる鐘の音出で磬石と呼び珍重されてゐる。

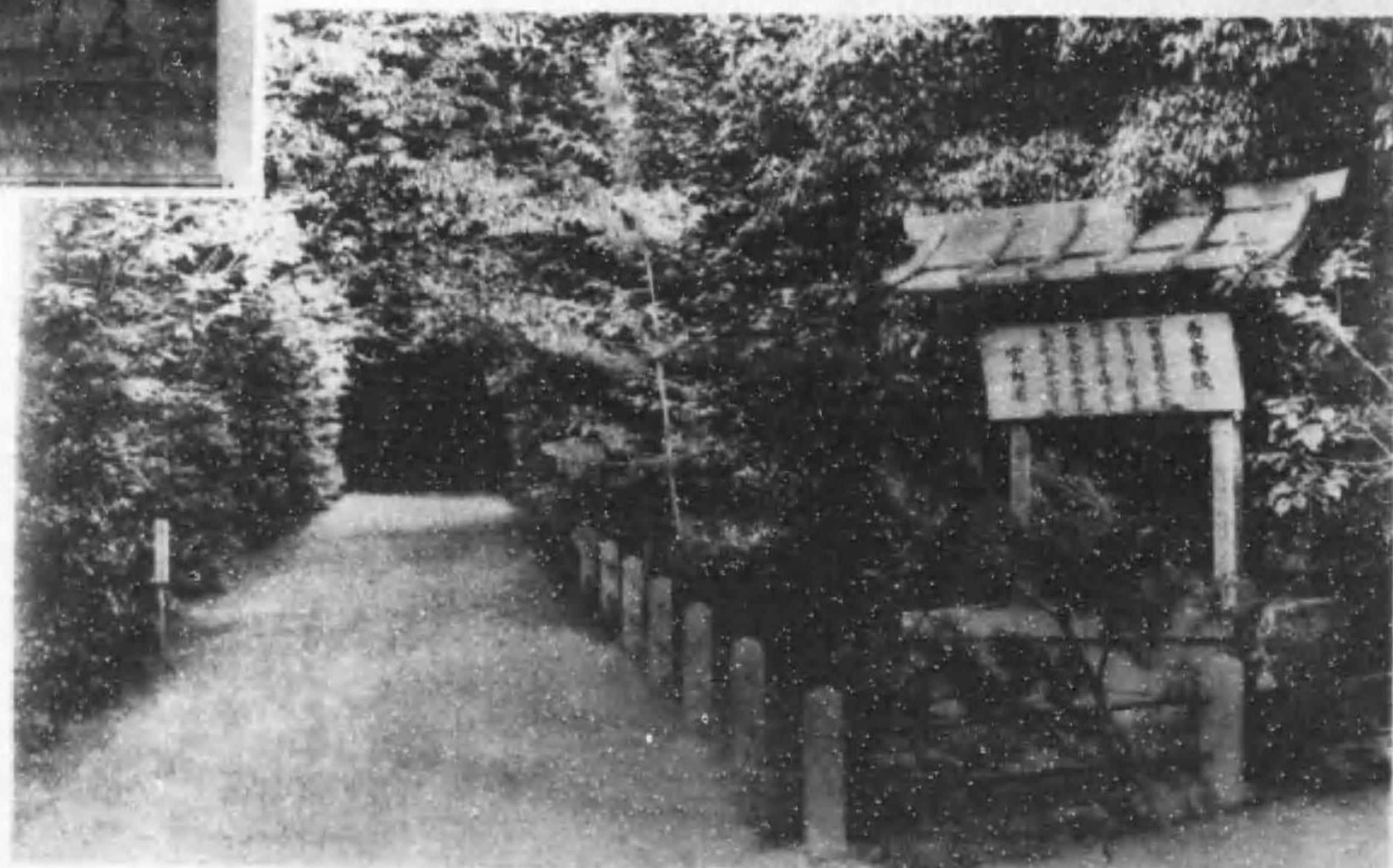
寺の附近には眺望絶佳の勝地隨所（よこしま）にあり、最近村有志は保勝會を組織し遊園地を造つて道士が清遊の地たらしめて居るが、この聖域に一步して森嚴壯重の氣に觸れんか流俗の感こそ深きを覺ゆる。



上 崇徳天皇御廟「頼證寺殿」



中 左右 白峯寺本堂「御宸翰寫」



白 峯 御 陵

瀧宮天満神社

歴史的情緒と水明の景勝を誇る綾歌郡瀧宮は、琴平電鐵沿線又綾南に於ける中心邑であつて特に地の溪谷美と「念佛踊」を以つて知らるゝ瀧宮天満神社は有名である。同所はその昔讃岐の國守菅原道真公に由緒最も深き境域にして、同神社の縁起も菅公の遺徳とこれを追慕する里人の敬仰を傳へて最も床しきものがある。

菅原道真公が讃岐國司に任ぜられたのは、人皇第五十八代光孝天皇の仁和二年正月にして、同四年來任、阿野南條郡（現在の綾歌郡地方）瀧宮の官舎に住み給ふことになつたが、在任五年間の治蹟は著しく顯はれ、教育勸業その他百般に亘る仁政に領民悉く悦服する所となつたが、仁和四年の夏大旱魃至り領民の悲嘆その極に達せる時、公深く之を憂へ附近の城山に登り、一身を捧げて齋戒斷食して天神地祇に祈つた所、天感應して甘雨沛然と三晝夜降り續き、領民は歡喜の餘り手の舞ひ足の踏む所を知らず、公の官舎に至り報恩謝徳の舞踏をしたといふ。これ今にして念佛踊の濫觴である。後に菅公筑紫に於て薨去されるや曾て公の知遇を受けし瀧宮龍燈院綾川寺の住職空澄法師等の首唱にて村上天皇の天曆二年二月菅公御赴任中住み給ひし官舎の跡に一祠を創建し公の御装束並びに尊像を奉安し、公の冥福を祈り、併せ

て國家安康を禱るに至つた。これ瀧宮天満宮の起源である。斯くして時代と共に社殿の修築あり。仁孝天皇の文政五年に改築せる本殿、拜殿、玉垣等を初め諸建築物は讃岐隨一の輪奐の美を誇つたが、明治六年暴民の放火のため烏有に歸し、再建同廿一年一月七日落成したのが現在の社殿である。同社の主要なる寶物は、公の御眞筆、般若心經の一部、青蓮院宮尊親王御筆の天神の尊號、狩野永雲筆菅公祈雨眞影その他數十點である。なほ附近綾川の溪谷美は、讃岐山水美中の特異的觀景をなしてゐる。



瀧宮天満宮所藏の[菅公手文庫]



名勝綾川が誇る巖の上の松



瀧宮天満宮の宮

積極進取の坂出町

由來産鹽の盛地として知られた坂出町は、今や一躍全生産部面の多角化を目ざして「新鮮と活氣」の横溢する縣下第一の生産都市たる面目の下にいと明らかな飛躍の行進を續けてゐる。

同町は綾歌郡の北部に位し北は備讃海峡を隔て、岡山縣兒島郡と對峙し、そこに間在する島嶼は基布の如く殊に雄大其海上風景のなかにも明媚なる瀬居島は金山網の産城として有名である、又西は仙石權兵衛の史蹟聖通寺山を以て宇多津町に相對し、東は横州川を境して金山村に接してゐる。更らに南方約一里にして、讃岐富士の秀嶺を仰ぎ見る然も海岸一帯は鹽田地帯として全國鹽田中の王座を誇るが、この鹽田こそ正に町勢發達の源泉である。而して産業坂出の第一陣形として昭和三年着手したその大港灣施設は、今や大部を完工して水深最干潮時二十二尺内海稀有の良港として惠まるされば、陸上交通陣に由る各種生産物資の集散と共に、幾千噸の巨船は悠々岸壁に留置され、その貨客は北海道、朝鮮、臺灣の遠地に大阪商船の定期船を始め日本郵船、北日本汽船、近海郵船等社船社外船直航の便を劃されて居る。かくて生産意識の愉快なる旋律は奏されつゝ、産業讃岐の心臓部たる要衝を自負して日に月に飛躍々進の記録を續つて居るが地の生産の大

宗たる鹽は附近を算して年産數百萬圓を計上し、この外製粉、製麥、醬油、化學藥品等何れも其の血行は清新發達にして巨額を示し、新産業地の面目にも鞏固なる町勢の根柢は築かれつゝある。

讃つて歴史的同町は、景行天皇の御代日本武尊は南海の惡魚を平げてこの浦に着御遊ばされた、すでにその當時より同地は中國、四國の連絡地港として樞要を使命づけられて居た。降つて慶長年間赤穂の人此地に移住して初めて鹽田を開拓し、次で文政九年引田の豪士久米榮左衛門は藩主の允許を得て身命を賭し大鹽田を開拓し、爰に現實坂出興隆の基礎は工作された、次で明治五年大小里を廢して村となり、同二十一年隣接御供所村と合併し、同二十三年四月坂出町と改稱現在に至つてゐる。

町の附近にはまた幾多の名勝舊蹟あり、その主なるものは鼓岡、白峯、黒岩天満宮、聖通寺山、瀬居島、飯野山等であるが鼓岡は東一里二十町、崇徳天皇の行宮木丸御殿の地、白峯は東二里半にして崇徳天皇の御陵南へ一里十町黒岩天満宮は菅公の舊蹟、聖通寺山は瀬戸内海に面し明媚なる大遊園地にして仙石權兵衛の城趾、掃岩、岩割松、薬師堂等あり、瀬居島は北一里春は鯛網の觀賞地にして夏は青松白砂の名海水浴場ではある。



遠 望 の 讃 岐 富 士



新 興 「 坂 出 町 」 の 全 景



坂 出 港 の 雄 容

丸龜市と龜山公園

西讃丸龜市は人口三萬、讃岐海岸線の中央部に在り、東は土器川を境して綾歌郡に隣接し、西は仲多度郡豊原村、南は同郡龍川村及び南村に接し、北方一帯は海波を隔て岡山縣下津井港に對し、沖に上眞島、下眞島の二小嶼浮び、本土四國連絡の最近距離を保つ要樞であつて、團扇其他の産業は夙に知らる、この地も三百年以前は一小寒村に過ぎなかつたが、慶長年間生駒氏支城を築造してより戸口漸増し、山崎、京極二侯治府を此の地に定めてより一都會を成すに至つた。この城下町の懐古的名園龜山公園は市の南部に自然の要岩をなす丘陵龜山一帯を稱し、その頂上には天主閣蒼空に高き名城蓬萊城がある。又北麓には歩兵第十二聯隊の兵營及び練兵場あり、一度同公園に立つて展望すれば全市街の堯の波濤を越へて、内海の瑠璃盤上に葦布する島光帆影一幅の水彩畫の如く、更らに遠望すれば山陽の連山煙霞のなかに指呼するを得。眸を南に轉ずれば西讃の山川草野絨氈の如く展べられて空を劃する阿讃連峰以北の一大パノラマを脚下に集める景觀は將に丸龜市風景美の王座を爲すものである。

この好展望をなす蓬萊城は大正八年六月初めて城内の一部を開放してより、各種設備を施して龜山公園を稱した。園内には舊藩主京

極朗徹及び土肥大作、村岡宗四郎の勤王を表彰する碑石に市上水道の配水池がある、尙近時は保險會その他の有志により満山櫻樹を栽植しその春日に於ける麗觀を讓へられて居る。

又同市には有名なる孝子田宮坊太郎分骨塔あり。遠近旅客の參詣甚だ多く、又京極侯の臣井上通女の墓もあつて、同女は幼にして聰敏經史に通じ、有智子内親王以來の人なりと謂ふ。揮毫名畫の誇る蕪村寺あり。御供所町には師弟の松とて眞光寺境内に鬱蒼として老虬の蟠屈せるが如き老松、幾多の所以を傳へらる。尙市内にはこの外舊蹟は數へて遑ない。



[碑址所在行] 皇天治明



林 綠 の そ と [園 公 山 龜] 市 龜 丸



[門 正 隊 帶 十 二 第 龜 丸]



丸 龜 市 街 を 望 む 龜 山 公 園 へ

多度津町と桃陵公園

仲多度郡の西北端に位置し、波静かなる筆の海に望む東西十餘町南北十數町の多度津町は古來本土と四國とを結ぶ交通の衝を占め、殊に金毘羅詣りの諸船旅人を吞吐する事にその地名を得たと謂ふ。其昔蹟岐唯一の良港として同町は諸商殷盛を極めて、地力は培はれた同町の西方、多度津山は貞和年間香川刑部大輔景則が堅城を築きしもので、今なほ城山と呼ばれ、桃陵公園もこゝにある。又町の北東海邊に丸龜城主京極若狭守の庶弟高通の陣屋の趾がある。城山の西麓海岸は屏風ヶ浦海岸寺と呼び、弘法大師御誕生、御修行の舊蹟と知られる。而してこれ等勝地の近代的部面に代表する桃陵公園は御大典記念事業として多度津山の展望秀絶の地を選び、十一師團工兵隊の力援開拓してなれる公園にして、その山麓より道路は坦々砥の如きドライヴウェイをなし、園内の歩道緩やかにして雲雀ヶ丘、紅楓峽、觀月臺、觀魚臺、松韻莊、城ヶ崎、臥龍松、祖廟社、望岳頂、南嶺等の秀地は眺望絶佳。また全園に亘つて櫻桃躑躅を植栽し、草花園を配し菖蒲池を擴げ水草を植え、更らに楓樹と萩と梅林を中心に椿を併植して四季と共に千變萬化す蓋しその風情は近代造園術の粹といふべく、斯くして旅情は愈々濃やかなるものがある。園内の廣場に萩をかゝげて立つ

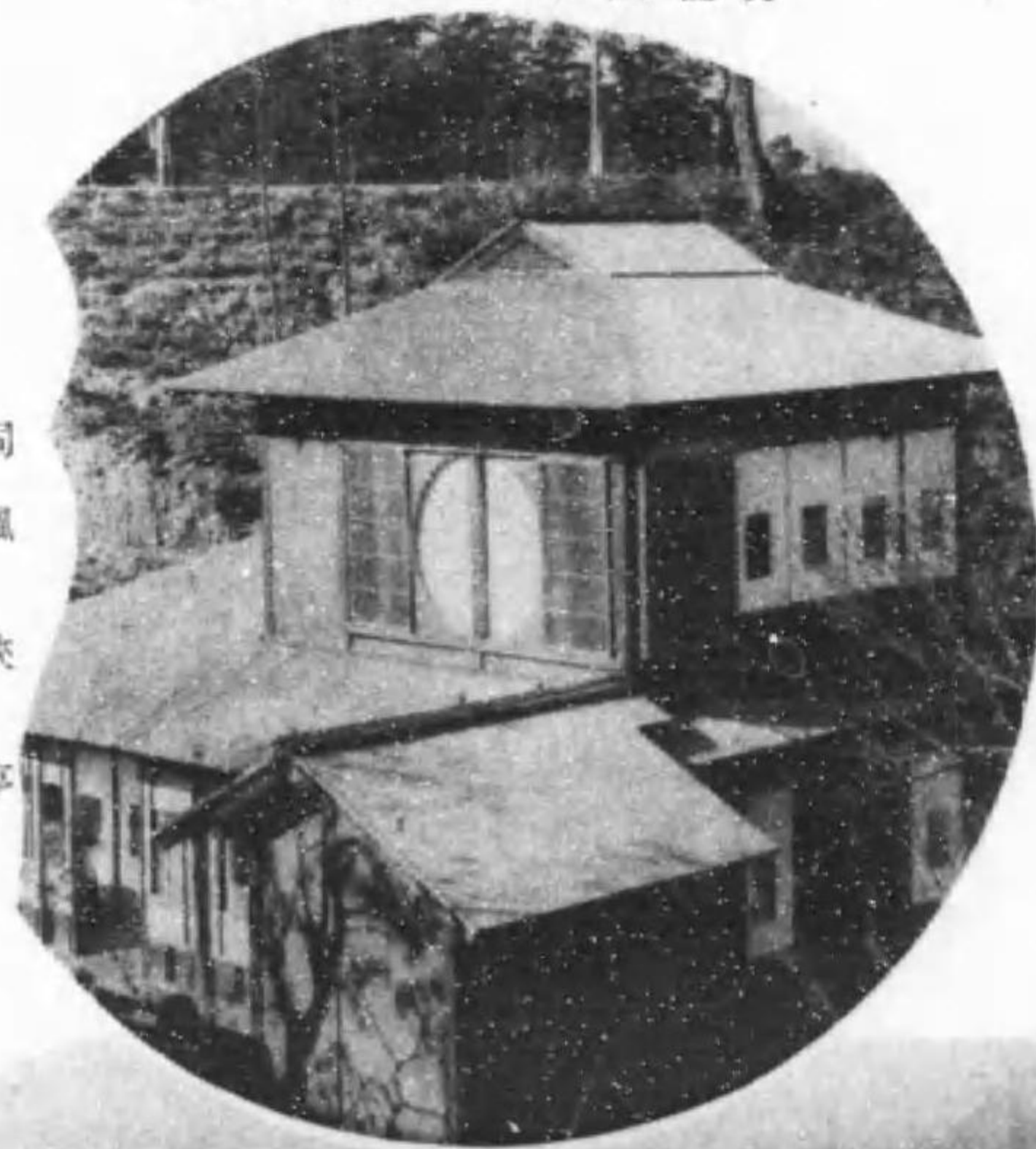
老婆の銅像は國史に輝く「一太郎やーい」是を叫ぶかめ女の雄々しき姿は今も尙將又永遠に祖國を愛の表徴として居然たるものあり、同公園の一偉風こそ爲して居る。



〔園公陵桃〕るれ成粧明



く躍も〔一や郎太一〕園同
像銅の〔女めか田岡〕



同楓峽亭



景全の〔町津度多〕

金藏寺と軍神乃木將軍の遺趾

仲多度郡龍川村大字金藏寺に四國第七十六番の靈城と、軍神乃木將軍の由緒に輝く名刹天臺宗寺門派雞足山金倉寺がある。

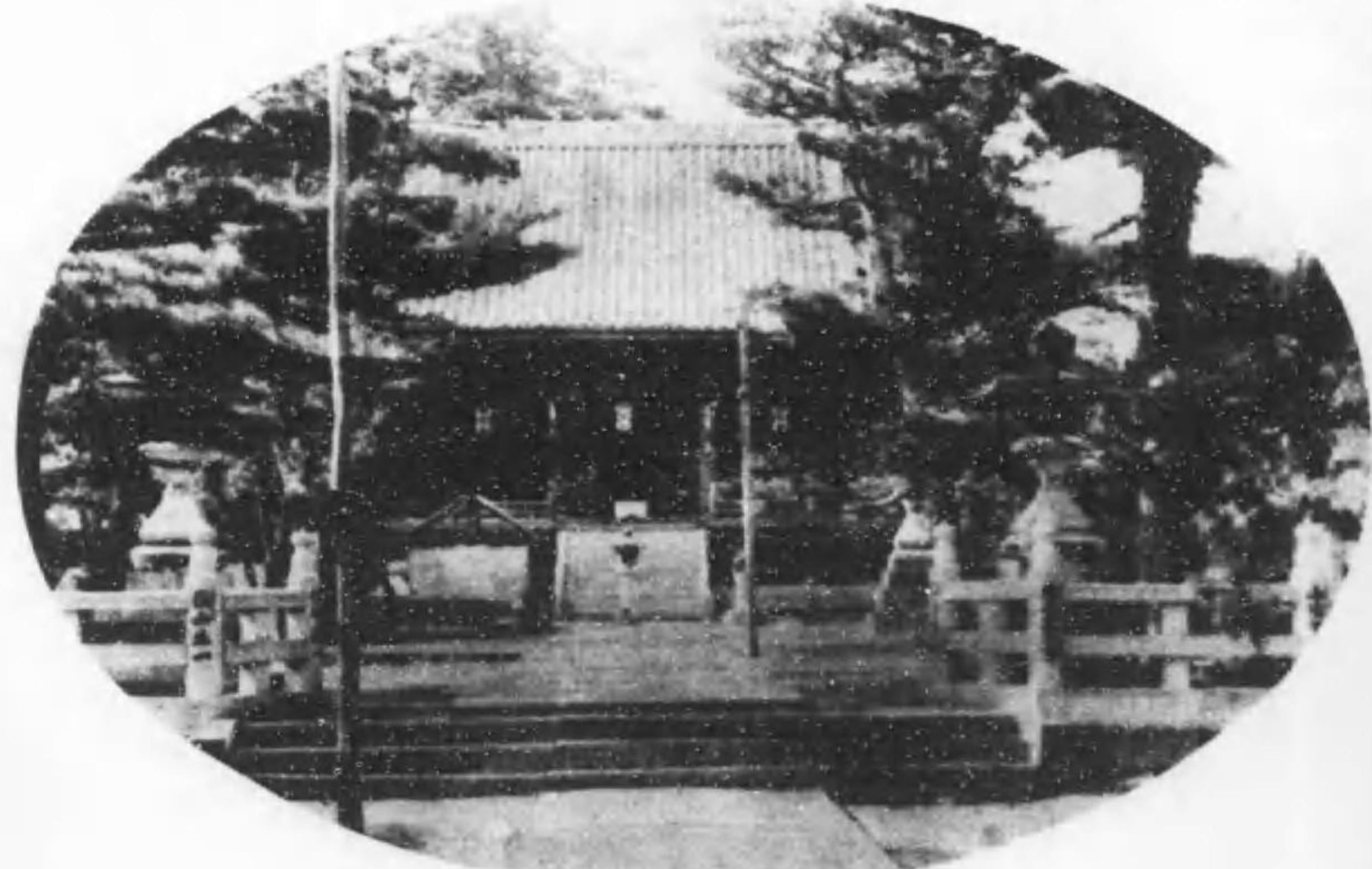
多度津、丸龜の兩藩より一里の西南國道に沿ひ豫讃線金藏寺驛より東一丁、交通の便よく賽客四時絶ゆる時がない。同寺は光仁天皇の寶龜五年和氣道善長者の開基、智證大師の御誕生所として知られてゐる。本尊は藥師如來（智證大師作）で初め道善寺と號したが醍醐天皇の延長六年地名に因んで金倉寺と改め、又寺城の海に近く三方山に面して迦葉尊者の入定し給ひし印度の雞足山の大河に似たりとて、雞足山と號した。當時は境内南北二里、東西一里餘に及び佛閣數十、僧坊百三十二ヶ院の盛觀並ぶものなき大靈場であつたが、建武の争亂の際堂宇減少し、永正、天文以來打ち續く兵亂に堂塔伽藍悉く烏有に歸し、僅かに兵火を免れし本尊重寶を月漏る草庵に安置して、百餘年の星霜を経た。斯くて寛永末年に至り、松平頼重公讃岐の國守となるや自ら大壇主となり、伽藍再興し寺領を寄附して、一郡一ヶ寺の新禱所となし、靈城再び此處に光を得て今日に及んでゐるが、更らに同寺の近代史に特記すべきは、乃木將軍が第十一師團長として善通寺に在任の當時、明治三十一年十月より三十四年五月まで此の寺内に起居され

し事であらう。今に將軍遺愛の品を傳へて、有りし日の軍神を偲ぶよすがとしてゐるが、最近同境内に勇壯なる將軍の銅像愛馬の銅馬の建立成り、賽客をして將軍追慕の情を新らたならしめてゐる。



上 金倉寺境内乃木將軍銅像

中 同將軍居間



四國第七十六番 金倉寺

善通寺町と大本山善通寺

仲多度郡善通寺町は、仲多度の中部に在り人口一萬六千を算し、第十一師團の所在地として知らるゝと共に、町の西方緑樹鬱蒼たる香色の山麓には世を絶塵の靈域たる巨利大本山善通寺がある。四國八十八ヶ所中第七十五番の札所にして、五岳山麓生院と號し弘法大師誕生の靈地として著名である。抑もこの寺は大同二年眞言宗を弘すべき勅許を得た大師が普代の居館を喜捨して、印度八ヶ靈場（八ヶ岳、妙吉祥、普賢、文殊、觀音、地藏、彌勒、阿彌陀）の土砂を請來してこれを敷き唐の青龍寺の輪奐を換し、大同二年工を起し經營七ヶ年を経て弘化四年十八年の堂塔苑を運んで竣工せし、眞言宗最初の伽藍にして、大師の父君善通卿の御名を寺號として善通寺と呼び、寺院の後方に重疊せる火上山、中山、我拜師山、筆山、香色山の五岳を取つて山號した。また同所を屏風浦と呼ぶは往昔この山麓まで海水灣入して、五岳の投影宛然屏風の如き景觀をなしたるに因るものである。

斯くて讃岐の一隅に壯嚴の大寺院成るや、皇室の御敬仰は殊に篤く、歴代の帝より幾度か御繪旨を戴きつゝ、時代は移り堂塔の修理、再建等あり、現在の金堂、常行堂、御影堂等は天文年間より漸次落成した。天保十年五重大堂燒失するや、元治元年再建に着手し、明治十五年に至つて竣工し、今日に及び昭和六年三月大本山に昇格し、これと

同時に初代善通寺派管長として、知徳備の大川郡譽水村譽田寺住職蓮生觀善大僧正衆望を擔つて就任し、由緒も深き大師發祥の靈地に法燈は愈々燦然と輝き増すに至つた。寺内の主なる堂塔林泉には常行堂、五重大塔、大門石の五輪堂二基、金堂、積善功德塔、五所明神祠二殿、二大楠中門祖習院、石橋、仁王門、御影堂、御影の池、茶堂、護摩堂、本坊、靈寶館等にして、靈寶館には弘法大師御作吉祥天一字一佛、法華經、行基菩薩の御作地藏尊の國寶を初め、珍寶什器を納めてゐる。



善通寺「大門と五重塔」



善通寺境内
弘法大師「御産湯井」



大本山善通寺金堂



同「御車寄大玄關」

國幣中社金刀比羅宮

「こんびら船々追手に帆かけてしゆらしゆく」その神徳四海に遍く年々賽客三百万人に達する國幣中社金刀比羅宮は仲多度郡琴平山に鎮座しその麓に人口七千の神都琴平町を育て絡繹織るが如き賽客群のため關西稀有の宏大櫛比せる旅館と土産店を集中してゐる。金刀比羅宮は往昔琴平神社と稱し大物主大神を祀つたのが、後醍醐天皇の御宇寛元元年勅して祭儀を修めしめ給ひ。更に一條天皇詔して社殿を修築し給ふた。また保元の亂の際には崇徳上皇讀岐に遷らせ給ふや深く同神社を尊信され宸翰を納め給ひ親しく御參籠あらせられし等の御縁由も深く、崩御の翌年永萬元年七月御相殿に齋き奉り此處に神威彌益して海内に著れるに至り、歴代の皇室の尊信は幾度か御代參を遣はされ勅願所に或ひは御祈禱仰出された。斯くして星霜移り明治元年七月特に宮號を仰せ出され金刀比羅宮と改稱になり。同四年六月國幣小社に加列、同十八年國幣中社に陞格、今日に及んでゐる。由來同宮は船神として全國の船人の信仰も篤く、その口碑にも彼等が海路途不測の難航に今し逆巻く怒濤は船人共に只一呑みの危機に際し命既に定らんとするその刹那日頃信仰の金比羅大權現を默唱と同時に神威もあらたなり、金色燦然たる御幣は船上に現はれ、その覆滅を防ぎ給ふたと、この所以に船神とは崇め奉る。毎年十月九、十一日の大祭は天下無比にして八少女舞、大和舞の奉奏、奉幣使參向、神輿渡御あり。夜をこめて山中、山麓不夜城と化しその壯麗筆紙に盡し難いものがある。

金倉川を渡り兩側の土産店軒を競うなかを數百千の石段を數へ忘れて大門に至ると數百株の櫻樹に燈籠の蜿蜒長蛇の列をもなす櫻の馬場に至る。宮司琴陵氏の歌に「春風のそよとばかりの音つれも許さぬ程の花の眞盛り」とある如く、春風駘蕩たる頃ともなれば棚引く紅霞は賽客の歸途を忘らしめる殊に同宮には古來珍奇なる種々の寶物を藏しこれが保管の万全を期する爲明治三十八年七月神苑獨闢に寶物館を建設し社寶を陳列一般の縦覽にも供してゐる。此處に保管せる主要寶物は先づ國寶に指定されてゐるものに圓山應舉筆の紙本墨畫瀑布及び山水三十三枚、竹林七賢圖十六枚、紙本墨畫遊唐圖二十四枚、紙本墨畫幅軸圖十七枚、絹本着色辨財天十五童子像一幅がある。その他貝石不動(房州平郡府天神山浦の砂中より出現せしもの記相添)植髮三尊彌陀(中將姫御作)藥師如來(智證大師の作)不動明王木像(弘法大師作)鈴五銚(智證大師御所持)その他画像花畫佛畫等數多の社寶を藏してゐる。

因みに同宮の神職は左の諸氏である。

宮司	琴陵光熙
主祭	久世章業
同主	宮内辰二
同典	井上功太
同	細井丑太



神嚴靈氣も満つる
「金刀比羅宮本堂」



同宮旭社



同境内の「博物館」



同宮御神事場



琴平山の景

仁尾町と平石の景観

同町に至るには豫讃線詫間驛下車、自動車の便あり西讃有数の清遊地とはする。

西讃の一大鹽田境として讃岐産業戦線に飛躍しつゝある三豊郡仁尾町は人口八千餘を有し、近時産業の發達刮目すべきものがある。尙その勝地的視野に於ても、夙にその存在は著名にして就中その代表的勝景たるものは、同町海上二十町の沖合に勃然と浮び出でる奇岩平石の景観であらう。

抑も同町は東南北の三方を秀嶺七寶山脈を以て圍繞し、西方は燧灘の碧浪を受けて山紫水明の天籠に惠まれた境域にして、沖には大島小島の二島綠影を波に沈めて、洋々たる燧灘の一線に布置の妙を點じてゐる。その大島小島の東端に近く宛然波上に浮遊せるが如き扁平なる巨岩こそ平石の奇巖である。

石の大きさは東西九間、南北七間、平面積六十餘坪を有し、岩上裕に數百人を坐せしめて餘りあり、岩裳に戯れる波の囁きを聽きて遙るかに水天の方を眺める時は、海龜に乗りて龍宮に遊びし浦島の如く世塵忽ち洗ひ去られて、神氣颯爽として羽化登仙の境に忘我するであらう。

従つて古來雅客の來遊する者多く、舊藩時代にも諸侯此處に遊び岩上で舞踊を催したることありとて俗に踊石とも呼ばれてゐる。



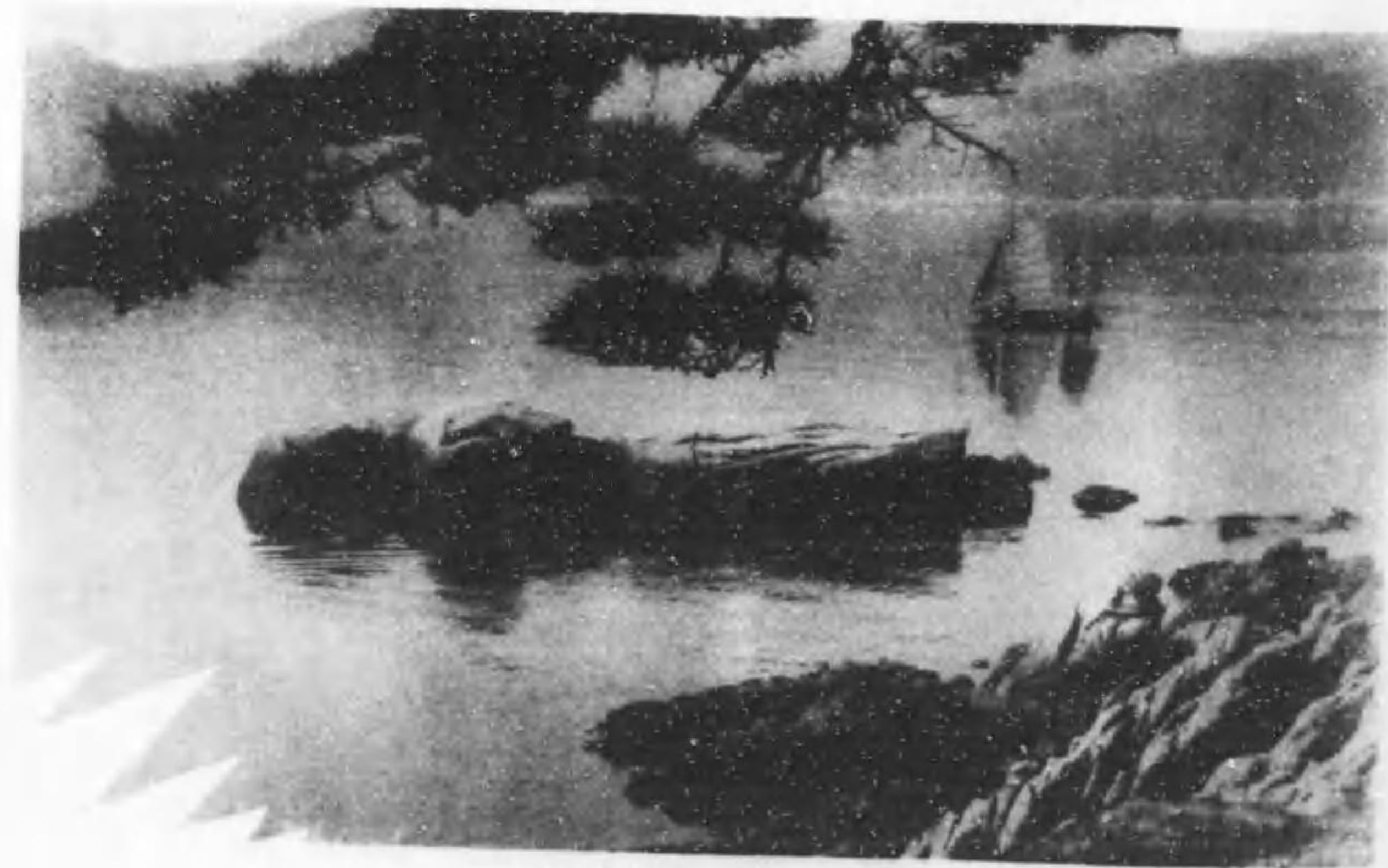
仁尾加茂神社



仁尾狗石



仁尾磯菜嶋天神



仁尾奇勝平石

観音寺町と琴弾公園

西讃の名邑にして近時濠洲たる町勢を以つて躍進を續けて居る、観音寺町は人口一萬七千餘人、戸口三千五百五十餘戸を擁し財田川の下流有明の濱を抱く町内九區と沖の伊吹島より成り、水産、工業品、綿紡、船、煉瓦の産地として有名である。而も同町をして更らに名聲あらしむるは豫讃観音寺驛より北方十五町にして至る勝地琴弾公園で、同園は観音寺町を貫流してゐる財田川を挟みて街衢を望む琴弾山と有明濱の二大景觀を集めてなれる山紫水明を以て明粧せる、周圍約一里の公園である。琴弾山は全山綠翠に包まれ、そこに密生せる約一萬五千本の小松は所謂小傘松として、大正三年天然紀念物に指定された。樹身最高一丈三尺より最低三尺三寸の奇松群である。山頂には琴弾神社鎮座します。社記によると大寶三年秋八月西の方より雲氣騰騰として日月の光を見ざること三日、諸人はをあやしみ海濱を見れば船中に琴を弾する老翁あり、相桐樞化の僧日證といふ者何處の人やと問ふ答へて曰「朕は應神帝なり(中略)其の御船を山の上に挽上げて宮殿を造り琴と船を廟中に納て永く爾現の重跡とし琴彈八幡宮と仰ぎ奉る云々とある。有明濱には浴日館、共樂館、動物舎等を設置し附近には天狗松、象が鼻岩、龍石等の奇岩がある。而も皓々たる白砂上に描き出された寛永通寶の古銭形の奇觀は蓋し南海稀有の眺望と云ふべきであらう。

現町長西山彰氏は岳父の意志を繼ぎ、多年保勝會長として自然公園として審美保全に努力してゐる。

名利観音寺

三豊郡観音寺町の名に負ふ吉利観音寺は四國八十八ヶ所中第六十九番の靈場にして日々の賽客跡を絶たず。靈氣一山に漲るを覺える。同寺は人皇第四十四代元正天皇の養老六年行基菩薩の開基する所、その後平城天皇の大同年中弘法大師四國巡化の途次、同寺に詣らせ給ひ自ら本地佛阿彌陀如來畫像を御染筆あり。また本尊觀世音を彫刻し給ひ、此處に觀音寺を建立し琴彈八幡宮を四國六十八番觀音寺を第六十九番の靈場となし、而も當時の堂塔は東西金堂及び中本堂の制を南郡興福寺の建築にならひ、西金堂には丈六藥師如來及び十二神將中本堂には聖觀世音及び四天王、東金堂には彌勒菩薩を祀り大同二年三月二十一日一山の造營悉く成り、爾來附近一帶の地を觀音寺の邑と稱するに至つた。

斯くて朝野の尊崇を集めつゝ時代は移り、明治維新に至り神佛判然の際琴彈八幡の本地佛を西金堂に遷座して、四國六十八番札所となし一山二個所の靈場を擁することゝなつた。

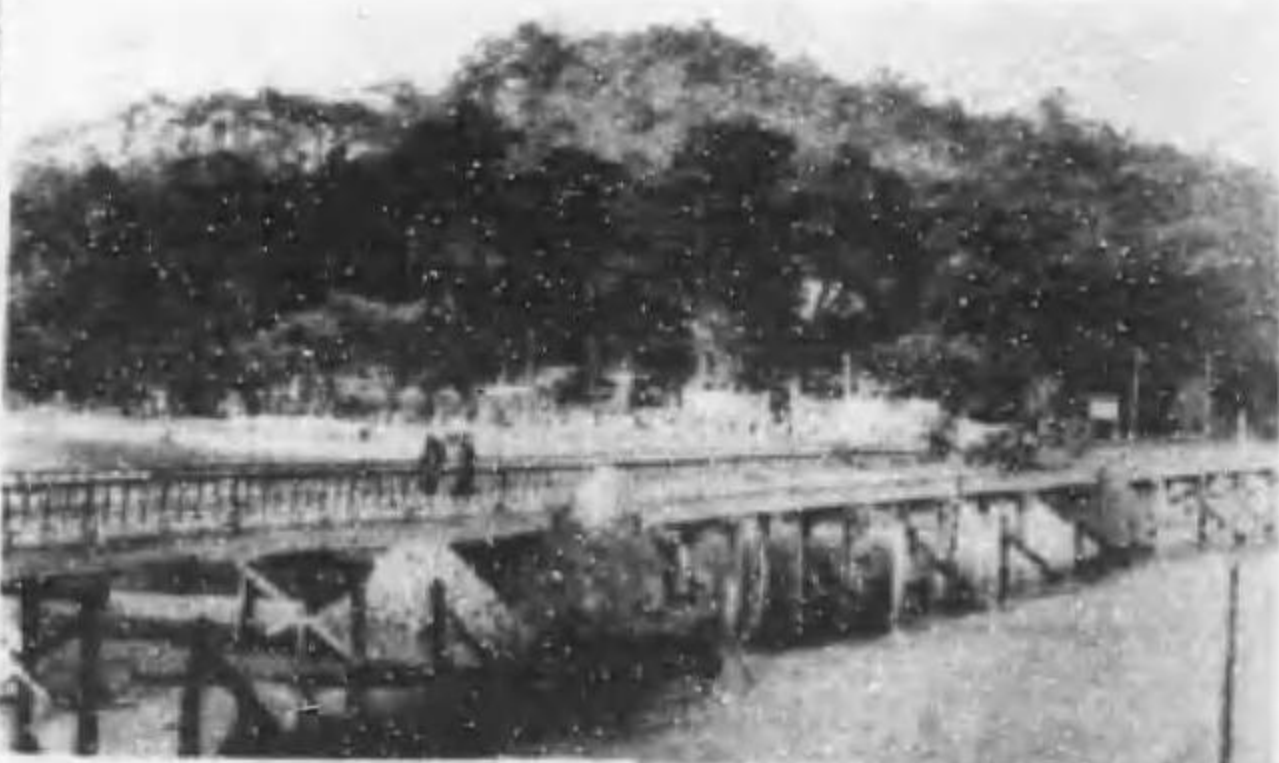
同寺の什物中國寶に指定されてゐるものは琴彈山繪縁起不動尊、杵加羅童子、青多加童子、琴彈八幡本地佛、阿彌陀如來、藥師如來、釋尊涅槃像で、その他數十の珍寶を傳へてゐる。



右 第四十六番 観音寺本堂
左 第六十八番 琴弾本堂



有明濱の上の鏡形「寛永通寶」を望む



琴弾公園と三架橋



観音寺町の全景

小豆島神懸山

内海の浪枕静かに聖島小豆郡草壁町下村の船着に到着すれば、北を一里に天下の奇勝神懸山がある。この明境は東西二里、南北約半里に亘る秀嶺にして古來文人墨客達により鐘掛、釣鐘、浣花溪或ひは寒霞溪の別稱もある。傳ふる所によると應神天皇の二十二年秋九月朔、天皇淡路に狩し轉じて吉備に幸し小豆島に遊び茲に登山し給ひしが、峻險登攀するに難く、乃ち鉤を岩角に懸けて山頂に達し給ひしより鐘掛の名ありと云ふ。全山の地質は花崗岩、其の基礎をなして火山岩これを被覆し、大氣水觸の作用により峰巒奇絶怪巖秀絶松杉雜樹その間を點綴して、清水涓々とその中を縫ふて流るゝあり、一步は一景を呈し表十二景、裏八景の景觀の如きは最も溪山の妙を極めてゐる。而して春花夏緑秋葉冬雪何れも佳なりと雖も、晩秋の錦繡遠眺透明の時を以て最も賞せられてゐる。山腹には神懸山名稱辨の碑あり、明治三十年一月三日山麓の碩學中桐儉吉氏の撰文を刻み、また山嶺四望頂には猿糞の碑あり。安政三年桐石水大橋子朔等の首唱により當時來遊中の俳人可大に囑して蕉翁の名吟「初しぐれ猿も小糞をほしけなり」の句を書せしめて刻んだものである。

山頂の四方指は一名御前ヶ丸と呼ぶ、この島第二の高峰にして海拔

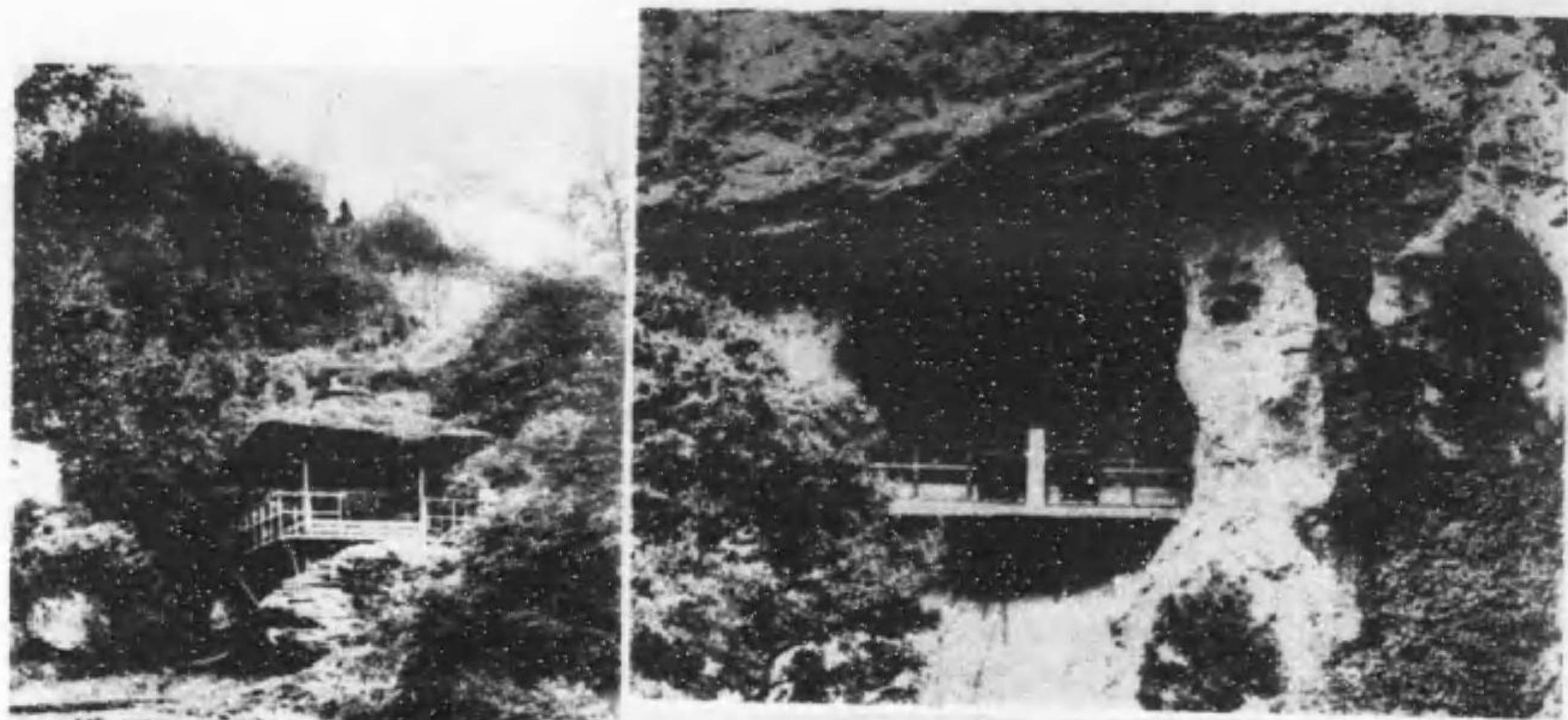
二千五百六十尺、その第一が星ヶ城で海拔二千七百尺兩山ともに神懸を中に挟んだ峰續きて、この星ヶ城は興國元年備前の豪族佐々木信胤居城を築き、諸國の志士を慕つて遙るかに南朝に應じたる古蹟である。その山腹には奇峰清瀨あり大洞窟を以て知られてゐる。

四方指山の絶頂に登れば眺望瀾然と開けて東は淡路島、鳴門の海峡阿讃の連山、中國の諸峰を一眸の中に收観することが出来る。

なほ神懸を中心とする名勝に坂手村の洞雲山、土庄町の餘島、三都村の花濤波、西村のオリーブ園等があり。洞雲山は櫻樹と洞窟と靈城を以て知られ、餘島は曾松白砂の名海水浴場、花濤波は大小二ヶの岩嶼の脚下空洞をなし大は孤城の如く小は獅子に似て、岩巖突兀として奇觀盡ざるを以て知られてゐる。

尙この地邊を擁して瀬戸内海海上公園の重要區域に撰定され、視聽を寬めて居る。

上 右 寒霞溪裏景「大師洞」
左 同 「紅雲亭」



中 「岩葦松」の景裏同
下 「頂望四」の嶺山同



第一類 生産及事業部面

本縣各界の長老鎌田勝太郎氏と事業



噫「近時の坂出」その近代的姿は目廻るしくも新興産業都市

1
發展振を示して洵に雄々しい展覧である、しかもその全容は實に經濟的生産の強靱性を把握して日に月に町勢の根柢を強化し旭昇の繁榮を刻みすゝあるの觀にして、今や坂出は町以

グレイ
ト坂出
市形成
を一途
に躍進
又躍進
眞に潑
刺たる
生彩の

上の町として人口二萬を遙に突破し更に高遠の理想で飛躍の第一階梯たる内海屈指の港灣修築工事も殆んど完成し續いて上水道、臨港道路等凡ゆる社會施設産業施設の完備實現に向つて邁進して居るがこれ蓋し多幸の展覧でなくてはならぬ。

この産業的前進を意識せる同町々勢の下に特筆すべきは町の細胞たる同町一般商人の著しく進取的にして常に活眼大局に着想せる特異である、夙に朝鮮、臺灣、滿洲、北海道等遠隔地との商取引開始殷盛を極め近くは經濟問題として政論高議の焦點をなせる弗買の如き同町一部商人は盛に與り出動せりと、事の理非は暫く措き其尖端的商行爲と潑刺性は等しく同町並に商人の青年心理の俊敏さを想はせ且其面目も躍如たる所であらねばならない。

斯くの如く熱と異彩に富んだ現代坂出町とて今を去る四十

年前は恐らく戸數三百餘戸等の城砦なく野風徒らに寥々たりし一濱村に過ぎなかつた。然るに一面時代の推移に由るとは云へ地方産業開發建設の人爲の偉大さを以てよく今日を顯現して居るがこの近代的發展の裏にも町の大勢を爰に誘致し隆興の基調を創成して内外に異常な貢獻をなせる人こそ即ち鎌田勝太郎氏にして氏に負ふ所大なるを知らなければならぬ。今同町民の全部は同氏を目して新興坂出の父としその人格徳望を讃仰措かざるなきは蓋し當然であり、以下聊か同氏の片影を描き如何に氏が社會人として高貴な觀念の下に國家社會に奉仕貢獻せるか其艱苦の跡を訪ねよう。

若し夫れ鎌田氏の前半世は是を集計して郷黨少壯の感激發奮を促すものであり今往きつゝある後半生は須らく總ての人々に銘すべき人生の理想道を展して居るものとはするであらう。氏は文久二年正月廿日讃岐阿野郡宇坂出の舊家鎌田家に生れ、醬油醸造を業とする温衣の裡に育まれたが、天稟の睿智は年少早くも其片鱗を現はし且長ずるに従つて社會の風潮を逸早く洞察し各般の事象に對して常に人の及ばざる一雙眼を持して居た。即ち明治十九年廿五歳の時私立濟々學館を坂出に建設し、青年子弟の薰陶に當つた。當時氏は讃岐に中等

教育施設なきを痛嘆し獨力創始せし所であつて、その氣魄すでに現代遊事逸樂薄志弱行の徒輩のよく愧死に値する勇奮であらう。

かくて同學館は明治廿六年高松中學創設さるゝまで八ヶ年間本縣教育の中心機關として縣教育史の一頁を燦然と彩り今もなほ鎌田圖書館の南側に建立された記念碑はその輝く遺蹟を語つてゐる所である。

濟々學館を建設して世の認識を高めた青年鎌田氏は明治二十一年愛媛縣より分縣香川縣制の實施さるゝに及び衆望を荷つて本縣第一期縣會議員に選出された次で廿五年第二期當選と同時に議長に要職におされ時に氏は青年三十歳の少壯にしてこの大任を擔はしめらるゝ身の英器こそ以つて窺知するに足るところである。政界に進出した氏は一方事業界にも一大雄飛を馳せ明治二十四年中讃宇多津に鹽田會社を創立鹽田六十餘町歩の新築開墾を企圖した。即ち氏が實業方面進出の第一歩である。

元來坂出は藩政時代久米榮左衛門氏によつて鹽田業は夙に發祥の歴史あり、然るに業績やゝもすれば遅々たるの狀にして、ひそかに慨嘆の氏は率先時流に投じ、會社組織を以て一

意鹽田事業の發達改良を圖つた。爾來氏の經營方法に左配して續々鹽田會社の創設を見、現況の如き盛大を見るに至つた。かくて鹽田事業の成功を見た氏は、廿七年地の産業發達を期すに金融機關の必要かくべからざるを思ひ、有志と語らひ坂出銀行設立を劃し創成するや自ら頭取となつて金融機關の利用展勢に努めつゝ其後間もなく氏は代議士に推され始めて我國中央政界に驥足を伸したのである。又明治廿九年氏は我國事業界經濟界を達觀して紡績業の前途有望なるに炯眼を馳せ讃岐紡績株式會社を設立したが之縣下に於ける紡績業の嚆矢にして目下坂出町に偉容堂々たる倉紡坂出工場はその前身實に氏に倚りて創設された讃岐紡績に介す。この鹽田、紡績の二大事業は氏にとつて千鈞不拔大成の楔子であり實に本縣事業界に於ける晴天の霹靂であつた。かくして氏の事業に對するインスピレーションは人格と共に彌々圓熟を加へ、實業界に歩一步牢固たる地位を築いて行つた。同時に又政治方面にあつても卅年代議士を辭すや直に多額納稅議員として貴族院に席し爾來大正十四年まで二十八年間議員として諤々の高論を立てしは周知である。

就中かの加藤高明内閣第四十九議會に於ける氏の貴族院改

革論は一世の卓説として巖然嶺頂を射すの感あり、この餘韻を間もなく斷然議員を辭し政界を引退した。斯の如く氏はその出所進退に於て常に異風世の意表に出たがその歩行は駿足俊敏を極めた。

なほ氏はこれより先、明治三十七年日露の風雲將に急を告げんとするや、常人の企劃し能はざる遠大の理想を朝鮮に馳せ、縣下有力者を糾合して朝鮮實業株式會社を創立、これも自ら社長に就任し、日韓融合の大旗も雄々しく、海外興業に先鞭長驅した。この一舉こそ邦人にして彼地開拓の最初の斧鉞であり、然も創業當時は幾多の受難累々にして迫害狼藉いたらざるなく、一時は多額の投資と不撓の努力も一抹の妖雲に閉されたのである。

鎌田氏並に關係者一同の意氣は、それ等困難の荊棘をきりひらき、春秋三十年を経た今日では、全羅南道一帶廣袤たる四千餘町歩の耕地に數千名の鮮人を使役して、眞に桃源の地とし米作に従事しつゝあり。この國家的事業については、創立當時總督府に於ても大いに共鳴し、特殊の便宜も與へられたのである。

同社は氏が畢生の大事業にして、今尙老軀を挺して社務を

總攬し、日鮮一體の高貴なる使命を目標に、又他方食糧問題解決にも直接の貢献をしてゐる次第である、斯く對内外に活躍せる氏は、明治四十年南滿洲鐵道株式會社の創立委員に任命されたが、この他氏の關係せし事業に、朝鮮興業、滿洲興業、南洋殖産、日米信託、日英醸造、朝鮮拓殖、東京郊外土地會社、朝鮮鐵道、東洋生命保險等あり、その他著名なる諸會社の新設經營にも參劃し、我が國實業界の俊傑として毅然たる手腕を揮つた。

更に縣下にあつても大正十年本縣唯一の讚岐貯蓄銀行を、又十五年讚岐信託を創設、銀行の合同等、金融と保全機關を統整し、その他四國水力、高松百十四銀行等各種會社に關係する等、本縣經濟界の御者として君臨、今日に及んで居る、又夙に縣下文教方面にも心を碎き、明治卅四年縣教育會長、卅六年には縣育英會理事長に就任、何れも沈滞せる縣下教育界の改革に努めた。

斯の如く氏の卓越せる玲瓏、玉の如き人格と手腕、徳望は棹さす所可ならざるなく、未踏の地に偉大なる効績をか、げ他面其後に來るもの、即ち社會的救濟事業に於ては世に薄倖の子弟教育に多額の資財を投じ、又大正七年坂出町に鎌田共

濟會を設け、十一年圖書館を創設し、文化施設を通じて弘く大衆の智徳啓發に資せる等、眞に氏の一投手、一投足は、地方産業開發は固より、國家的見地に立脚し、以て人類共存共榮の高貴なる精神に最後の殉道を求めて邁進する所は、蓋し現實匡救たるのみならず、人として完成の權化とも謂ふべきであらう。

されば國家は氏を遇するに曩に勳三等に叙し、昭和三年十一月御大典に際しても、社會事業功勞者として藍綬褒章を下賜、其功勞に酬ひた尙氏は先年來より深く佛敎を修行し、東京郊外井の頭公園附近に巨資を投じて般若道場を設立し、敬虔なる宗教的心境に安心立命の本義を體して奉仕に餘を刻みつゝ、精進を持続し、その雅懷徳望、そして事に當つて至誠堅實よく積み、よく散すの信條を持すがこの、光風清月の一大人格は彌が上にも縣民の尊崇敬慕を集め、輝く徳は實業、文教、社會の各方面に燦然たるあり、彩光は後人をして必然肅如として襟を正さしむるありその偉なる青年時代の精力を善用して今日を大成した氏は老境の今日天祐は愈々不滅の生氣を感受して矍鑠壯者を凌ぐが氏の存在こそ正に典型的實業家であり且本縣至寶の人材とはなす。

四國水力電氣と景山會長の功績

現時科學文明を表徴して絶大なる偉力を大衆生活の上に發



景山社長



高橋專務

ある。

この電氣萬能の現代に於て香川縣を中心に四國三縣に涉つて豊富なる電力を提供し、各種産業の開發に多大の貢獻を爲せるはこれ西讃多度津町に本社をもつ四國水力電氣株式會社であらう。

今や同社は本邦屈指の電氣會社として年次の業績を誇つて居るのであるが、その過去半世紀に纏綿たる沿革を追想しては實に隔世の感や深くこゝに會社經營の苦心又察するに餘りある。

そもく四國水力の發祥は三十餘年前に發した、即ち明治三十年西讃の有力者近藤秀太郎外十一氏の發起によつて當時多度津、丸龜、琴平間を貫通せる讚岐鐵道株式會社の沿線この地に電燈點燈を畫し創立された資本金拾貳萬圓西讃の電氣株式會社こそ現時貳千參百餘萬圓の大資本を擁し、縣下第一の事業會社として繁榮を誇る四國水力電氣株式會社の前身である。

からざる偉大なる利器として發達普及の巨歩を運んだもので

而して創業の時には必然苦難の伴ふれ比々皆然る所にし、就中電氣事業の如きは最も受難滋く、道が遠大なる理想のもとに出發せし西讃電氣株式會社もあたら時運に遠くめぐまれず、萎靡不振を極むること三年餘、明治卅三年社名を讃岐電氣株式會社と改稱すると同時に更新の意氣も雄々しく一意社業の進展を劃した。

この混沌たる幾多の迂餘曲折を経緯して辛ふじて明治三十二年二月に待望久しかりし金藏寺發電所の工事は完成を告げ先づ多度津に試燈し、次で丸龜方面に試燈の結果意外の好成績を示し、愈々七月三十日營業第一歩の生聲を擧ぐるに至つたのである。これ實に劃時代的企業として本縣事業史に燦たる一大記録すべき快事たりし事は謂ふまでもない。

この當時は社長増田穰三氏、常務取締役東條正平氏社務を執掌し、發電出力六十キロワット、點燈數四百八十三個、これ今日を誇る四國水力創業當初の實勢であつて、現況に對比して月籠の差こそ餘りに大ではある。然も營業第一期の成績は結局五千六百萬圓の缺損を生じ、社運の前途なほ暗澹たるものあり、其後の經營にも依然曙光を望むに至らず、苦慮の業績を續けつゝ、明治三十七年日露戰役に際會した。

かくて天下の事業界は一齊に活氣を帯び、同社も亦飛躍を

企劃して普通寺、琴平方面までも進出し、點燈も一躍二千餘個に及びしも遺憾ながら業績はこれに比例せず、意外や經常費の膨脹には依然缺損の窮狀を脱し得なかつた。爰に於て同社幹部は英斷にも起死回生を目して明治四十年其資本金拾貳萬圓を參萬六千圓に減資し、同時に社長として當時縣下事業界に令名噴々たる現取締役會長景山甚右衛門を推し、一路魁生の壯圖を邁進したのである。これ景山氏が四水電氣に直接關與の第一歩にして且同社として特記すべき記念時とは爲すであらう。

減資斷行後堅實にして進取的なる景山社長の毅然たる營業方針は、社業漸次隆盛に轉向し更に明敏果敢の商策として資本金參萬六千圓を拾五萬圓に増資した、次で四十一年再び五萬圓を増加して資本金貳拾萬圓となし、同時に發電設備と點燈獎勵に献身的努力を致せばその結果は同年末如實に參千五百餘圓の純益を計示し、創立以來十ヶ年無配當繼續の同社をして爰に始めて配當の喜悅を喫し、一陽來復の明朗に觸手せしめたのである。

斯くて元氣百倍躍進の氣運に向つた同社は當時我國電業界

の趨勢として從來の火力發電から水力發電に轉遷の傾向やあり、これを察知した同社は亦當然水力企業を劃して地域を水

量豊富なる四國の巨川吉野川の上流三繩に選定し、以て出力二千キロワットを計劃下に理想的發電施設を期した。

然し一方工事釐整には巨費を要すべく、故にさきの資本金貳拾萬圓を一躍百貳拾萬圓に増資、更に社名を四國水力電氣株式會社と改稱し、氣宇既に全四國を呑むの概を示した。而て之を機に躍氣勃々たる同社景山社長はその深遠なる發意に四十四年三月本邦電業界の飛將福澤桃介氏を社長に聘して自らと交代し陣容を一新と共に社内に清新の氣を注入した。

かくて大事業三繩發電所建設に着工、難工一年六ヶ月大正元年十月これを完成し、同月十日最初の水力電氣供給を開始の運びに至つた。固より三繩發電所の完成は發展途上の同社をして千鈞の礎石を成築せしは勿論、爰に逸すべからざるは景山氏の偉大なる成案と功績にして、爰には氏が往年代議士在任中既に本縣が工業地帯として自然に恵まれ且將來の工業は必然電力利用の經濟的なるを切に痛感し、秘かに水電事業の發達せる北陸東北地方を視察して業況を詳さに察知するや本事業の有望且緊要なるを自信して上記三繩發電所建設を劃

したのである。

以來順風滿帆一路洋々たる碧海に針路を求めた同社は、社運いよ／＼隆盛を來し、威風堂々四隣を壓するの概を以て大正二年辻町水力電氣の合併を端緒に、同年六月香川水力電氣を買收し、更に大正五年六月高松瓦斯株式會社を合併して瓦斯供給事業を兼營し、越へて大正五年九月には特筆すべき資本金壹百萬圓の東讃電軌株式會社と合併四水第二次躍進の重要機構を整へた、現時同社の經營する四水屋島遊覽電車である、其後同軌道は昭和三年三月時代の要求に鑑み、公園築港間を複線とし同時に新式大型ボギー車を運轉尙屋島グラウンド建設、房前海水浴場開設等文化的設備を整へ、今や遊覽都市高松の重要な交通機關に任じて居る。

この如くして大正六年當時福澤社長は中央電業界の要務繁忙を加へ、爲に同社を辭任するや同年六月景山氏は再び社長に就任、經營の局に當つた。

縣下電業界の先覺者たる景山社長の經營方針は益々同社の聲望を高め、既設の金藏寺、辻町、三繩の總計三千七百キロの電力を以て尙不足を告ぐるに到り直に堀江發電所を建設し又大正九年丸龜瓦斯を合併尙も躍進して大正十三年祖谷川の

上流出合に第二水力發電所設置を劃したが不幸同年十二月景山社長は不慮の眼疾に社長辭任の止むなきに至れば、急遽取締役寒川恒貞氏を後任社長に推輓、既定の出合發電所完成に直進した。

大正十五年同發電所を完成し、同社は日進月歩隆々として恰も無人の曠野を濶歩する如くである、この間西讃電氣高松電燈、大川電燈の各株式會社を合併、その目覚ましき飛躍は駭々乎として今日二千三百餘萬の大資本を擁する豪華燦然たる四水王國を形成するに至つたのである。

去りながら記して茲に至れば何人も現取締役會長景山甚右衛門氏の過去半世紀に亘る終始一貫社業に盡瘁せる讃仰すべき不撓不屈の偉大なる功績、そして實に此豪華は大牛氏の賞嘆すべき獻身的努力に負ふ所なるを知らなければならぬ。

然も氏は獨り電業界に偉功を致せるのみならず、記すべきは四國鐵道運輸の開發に先驅者たるの貢獻である、即ち明治十九年氏は京阪地方の交通文化に接するや直に鐵道企業を計畫した、然るに時は利せずして有志の賛同少なく、正に挫折の危地に立つたが信念に燃ゆる氏は幾多の艱苦を踏破して遂に明治二十二年資本金參拾萬圓の讃岐鐵道株式會社を創立し

丸龜、多度津、琴平間を開通して地方文化に鐵道運輸の新機軸を劃した。

これ即ち四國隨一鐵道交通事業の嚆矢にして、然も創業振はず氣息掩々の苦境を忍びつゝ、二十五年當時の社長三木彌吉氏逝去後遂に推されて社長に就き、氏は銳意社運の進展に努力し、二十七年一割配當の社益を得その後業績漸次盛大を來すに至り、日清戦後には戦勝の景氣を駆つて長驅高松延長を劃し、遂に明治三十年これも完成して資本金壹百五拾萬圓の堂々たる鐵道會社を定礎した。

其後同社は明治三十五年時代の要求により山陽鐵道と合併次で國鐵に買収されたが、現今國鐵四國循環鐵道はその起源實に四十二年前の讃岐鐵道に發せる双葉の香も追憶せざるを得ない、かくて鐵道經營から電氣事業に變轉の氏は更に至難なる電業經營に實踐躬行よく社員を統制し、その人格は濃厚に霸氣を藏し、事業に處する確固不拔の迫力は幾多受難の嶮線を突破して文化の沃野を開拓、社業は進展して搖ぎなき基幹を樹立せしのみか、現時七十七歳の老軀を取締役會長として三度社業の統營に當つては居るが、失明の今日活眼以てひそかに本縣産業の發展を思ひ意氣又壯者を凌ぎ、尙今後十年

間の健在を自ら祈りつゝ、この間氏が縣民への最後の置土産をとほ。蓋し其心事の貴き且雄大なる事よ、世に二眼の人徒らに多しと雖も眞に活眼の士妙きを覺ゆるの時、冷水三斗を感ぜざるものなきや、斯くの如き異色の材たる氏を以て縣下事業界の一大恩人とし信望洪洽たるも亦當然と謂はなければならぬ。

かく縣下事業界の長老を會長に推戴せる多幸なる同社をして前途更に繁榮を想はしむるは現時四水王國を會長と共に双肩に擔ひ、一心同體活躍日向足らざる専務取締役高橋正忠氏の赫然たる存在にして、氏は三豊郡栗井村の出身、丸龜中學東京帝大卒業後遞信省電氣局を振出しに數次郵便局長を歴任その後電氣事業視察のため歐米出張を命ぜられ、歸朝後間もなく電氣局長に勅任、爾來昭和四年七月まで本邦電氣界の總本山電氣局長として敏腕を揮ひ、同年四水の懇望もだし難く官界を轉じて郷里四水専務取締役として樞機に參畫して今日に及んで居る。氏は専務就任以來時代の趨向を洞察し一意業務の刷新を企圖、其信念とする所は會長景山氏と共に電力の大衆化を標識し、且共存共榮の趣旨に則り需要者との關係を一層密接不離ならしむべく全幅の蘊奥を傾注しつゝあり。

今や氏は同社の中樞人物として廣く内外の信望を集め、圓熟にして該博なる經綸手腕を着々實行に移し、獻身不斷の努力を續け社會的獨專事業の本旨完済に邁進しつゝある。

顧みるに創業當時僅々千燈未滿の微々たりし同社が創立三十七年の今日、資本金二千三百餘萬圓、従業員八百餘名、點燈數四十萬二千三百六十一燈、供給電力二萬四千キロワット、高松、觀音寺に出張所を設置し、配電區域も亦二市百九箇町村に及ぶ、名實共本邦屈指の電業會社と成り、尙も一步將來の飛躍と幸運を理想しては、新事業として徳島一字に九千キロワットの第三發電所建設計劃あり。

新居濱に本據を有する住友電氣と合理的電力交換を約し更に西讃瓦斯事業の統一發展として、琴平、普通寺、金藏寺に瓦斯施設をする等、何れも顯然たる業容にして、その内容外観は共に縣下事業界に最大の存在でなければならぬ。

これをして今や同社は資本の九割を縣人に於て所有し、その廣茫且盤石の配電區域は全國稀に見る社務經濟機構の環境を既成し、ひたすら社會大衆の福利増進と地方産業開發の使命に邁進して居る、因に同社現重役は左記の通りである。

取締役會長	景山甚右衛門	取締役	合山房太郎	同	大西虎之介	同	武田謙
専務取締役	高橋正忠	取締役	寒川恒貞	同	鎌田榮	同	鹽田忠左衛門
取締役	福澤駒吉	監査役	鎌田勝太郎	同	風間八左衛門	同	飯田憑

本縣金融界の王城高松百十四銀行

本縣八十萬縣民の金融的動脈の傳統を把握しこれが産業に將亦商工業の重要機關として財務的健全機能を發揮しつゝ、赫々たる業容を誇れるは即ち株式会社高松百十四銀行であらう。

同行の創立は遠く明治初年に發し十一年廢藩後舊藩士松本貫四郎、福家清太郎、鎌田房次、井上三造、片山高義、森崎延造、谷口誠續の諸氏主唱して縣下大衆の福利を目標に同年十一月一日國立銀行條例に則る第百十四銀行と稱し、資本金五萬圓を以て現地丸龜町に創立された。

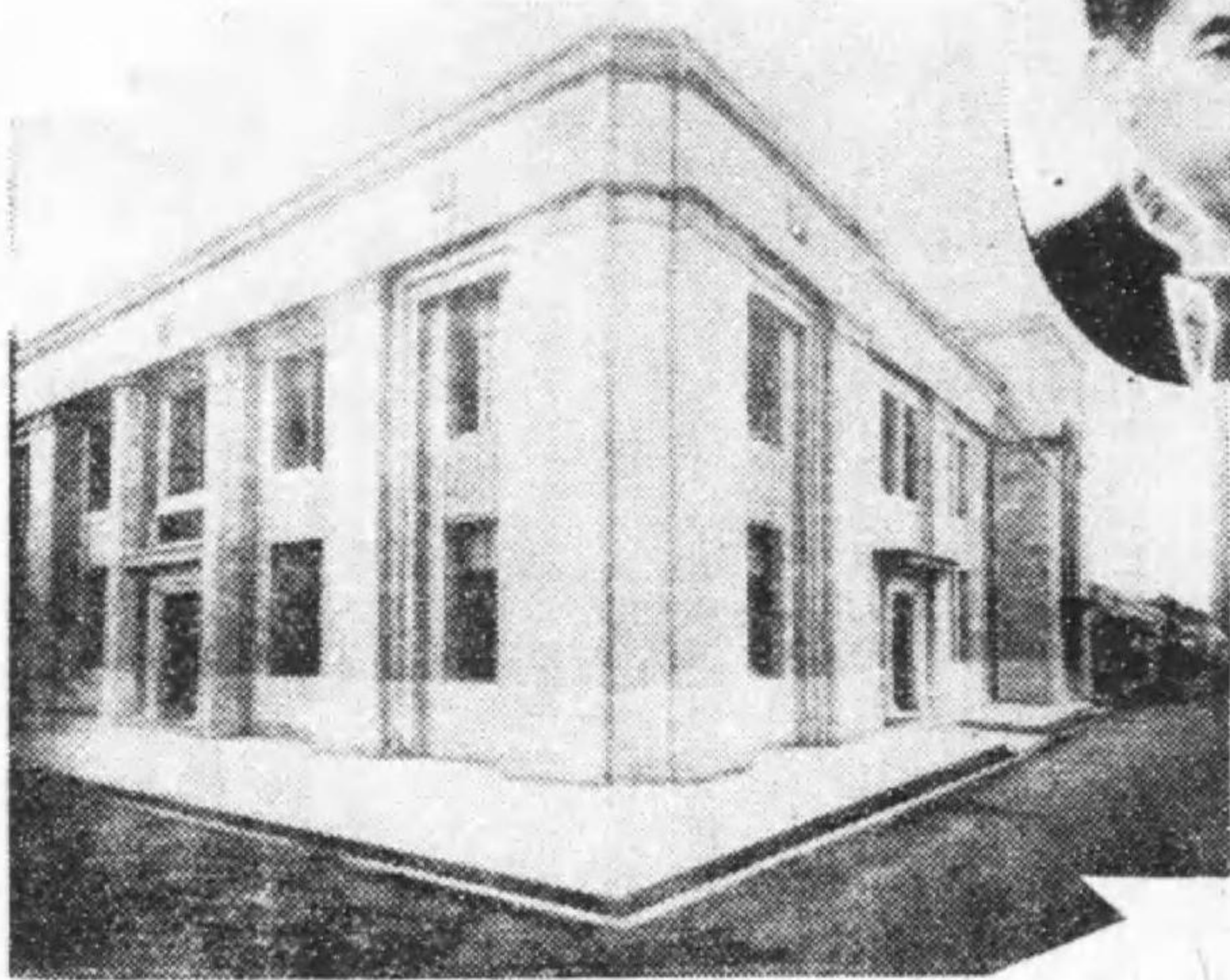
これ同行の濫觴であり、縣下銀行業の始祖である。初代頭取には鎌田房次氏就任、勿論當時には世人未だ金融機關の理解とぼしく、従つて業務遅々たるの状態にして、翌十二年七

月爲替取扱ひを開始するや俄然その妙味は一般民衆をして漸く銀行業に對する興味と信頼を致さしめ預金も漸増を見るに至つた、越えて十三年一月二十三日資本金四萬圓を増加して九萬圓と爲し爰に同所の前途にも一つの光明を確認された。

かくて第二段の躍進を遂げた同行は漸時世運の興隆と共に一般市民の利用益々多きを加へ且明治十六年七月一日には國庫事務取扱ひを命ぜられると同時に、日本銀行代理店を兼營して一躍縣下財界の重要な機關たらしめ、爾來歩一步順調なる發展を辿つた、其後中央諸政漸く整ひ日本全土興國の氣運隆々たる廿二年七月一日には更に六萬圓を増資し、總資本金十五萬圓とし正に同行は旭昇の勢ひにあり。
三十一年十月六日國立銀行條例廢止と共に同行は組織を變

更し、純然たる株式會社として民間金融機關を自負直進し、

かくて更に明治三十三年六月三日十日高松貯蓄銀行を合併して資



本金六十三萬圓とはなつたが、なほ風潮に乗じて大正二年四

月二十六日大川銀行と合併して百十三萬圓、同九年十二月十五日宇多津銀行と合して三百十五萬圓、同十年六月一日高松商業銀行と合して三百五十萬圓、同十一年十二月十七日東讃銀行と合併して三百九十萬圓、越えて十三年三月卅日には縣下金融史上に輝かしきエポックメイキングを印した高松銀行との解體合同を敢行し、資本金一千二百六十二萬圓を擁する名實共に縣下金融界の覇者として偉容を誇るに至つた。
茲に特記すべきは舊高松銀行の業況にして當時百十四銀行は専務取締役に豪の者井上耕作氏あり、高松銀行には現常務取締役宮武、鹽田の俊雄あり、互に斯界の争覇にあつた。
元來同行は維新直後高松糖業大會社にその端を發し、明治二十八年組織を改め資本金二十萬圓の高松銀行として金融界に驥足を伸した、時の頭取郡崎秀太郎氏は當時縣下事業界の逸材にして郡崎發太郎氏の嚴父に當る、氏の堅實なる經營は期せずして信用を高め業績益々發展し、三十七年資本金四十萬圓に増資し更に合併直前には百五十萬圓の資本金を擁する一權威でもあつた。

然し地域を同じふして徒らに對立競争の結果は預金の争奪より惹いて地方産業發展を阻害する大なるを憂へ、爰に兩者

に崇高なる共存共榮の信念に基き果斷解消し百十四銀行として時代的陣容を以つて縣下産業開發商工金融總帥の重大使命遂行に當つた。

即ち現在地方銀行として全國屈指の大銀行に連り不時俗説の波瀾苦曲と不況の痛苦を嘗めつゝ、かつて本縣金融界にさの異常を見せしめざる業容は、これ確に同行の一般大衆的信用の博大と基礎の鞏固を語るものでなければならぬ。されば今同行は資本金一千二百六十二萬圓拂込額三百十五萬五千圓預金總額三千二十九萬一千餘圓、貸出一千九百餘萬圓、常に資金の運用に細心の注意を拂ひ所有々價證券九百五十九萬八千餘圓、現金預け金四百五十五萬三千餘圓を有し、此準備の充實こそ絶大なる信用を博する所以である。

かくの如き縣下金融界の重鎮たる同行をして更に重味を添ふる鉦々たる縣下一流の人材を網羅せる華々しい重役諸氏の列陣である。専務取締役中村新太郎氏は帝大法科出身、さきに井上氏の後を襲ひ就任し、その圓熟の才氣は前に高松市會議長に擧げられ、又高松商工會議所會頭の要位にも坐し縣下商工業發展の爲東奔西走眞に實力の將とは任じる更に之に配する常務取締役宮武恒造、鹽田伊三郎兩氏又舊高松銀行時代

より金融界に馳驅すること永年何れも緻密なる計數的頭腦とそして究めた經驗の徳は獨り同行の主役的存在たるのみならず、縣下金融界の權威者として洽く尊敬と信頼を博してゐる。

この兩氏の外つらなる重役何れも本縣經濟界の主腦を網羅し、人材の壯觀は縣下金融界を支配統制の一大陣容にしてこの先賢が残せる敬すべき遺業高松百十四銀行は更に現任重役の賢明に俟つて將來愈々繁榮し本縣最大の本店銀行たる權威は縣下産業發展のために全機能を發揮し絶大なる幸慶を手向ては居る。尙同行現重役は左の如くである。

専務取締役	中村新太郎
常務取締役	宮武恒造
同	鹽田伊三郎
同	品治隆
同	井戸文四郎
同	今井傳太郎
同	下津揆一
同	大西虎之介
同	北村苟吉
同	都崎發太郎
同	録田勝太郎
同	相談役

高松電軌と北村苟吉氏

現時完成された本縣交通網中の電軌界にあつて歴史と實績而して内容の堅實を誇るは、蓋し高松電氣軌道株式會社であらう。



その雄たる同社が東讃電車たる名稱のもとに過去二十幾年地方産業の開發と交通文化に營々として致せる偉大な貢獻は現實として同軌道全線九哩、

大川、木田の十ヶ町村に見る惠れの發展が爛々これを實證する所である。以下同社の現況滾々として流れ行く順境の由來とそれを發する源泉人爲の周心と努力獻替を明かにして一般事業界に一大實行の要訣たらしめんとする。回顧するに同社の創業は約二十四年前即ち明治四十二年で

あつて、それより先中部木田、大川を連ねて交通機關に恵まれず徒らに廣漠未開の状態にして同地方人士は文明の利器交通機關を希求するの情も切なるものがあつた。當時高松電燈社長北村氏はこの状態を見て大いに遺憾とし、率先電氣軌道を敷設し貨客の運輸を以て多年翹望して熄まぬ同地方を文化的に匡出すべしと秘に研究を續けた。而してこの結果氏は思ふ。同地方産業開發はまづ電軌交通に頼るべきの外なく、然も事緊急なりとし斷然何物かを決意した。即ち熟慮の理想は遂に一步を移し直にその筋に軌道敷設許可を申請すると同時に、先賢諸士(特に秘す)の意見を徴した。豈計らんやローマも一朝に成らず、知名の諸士は多く氏の雄圖を無謀として半ば嘲笑を以つて迎へた。然るに今は胸中期する所あり再考の餘地だに殘さざる氏は、只進むべきのみにして時計の如く分秒を前進にきざした。而して異常な決心と抜くべからざる自信と熱は天なる哉至

難と謂ひし當時の鐵道院總裁仙石貢氏を感動せしめ、遂に許可の指令を受け爰に無謀視された鐵扉は半ば開かれ、一筋の光明は熱血の氏が胸裡に流れた、しかも本計畫を繞る楚歌の裡に援軍萬馬にも値せしは即ち氏が常に畏敬し、且高松市民の尊敬する小田知周氏の友情と鞭撻であつた。

小田氏は人も知るさきの高松名市長として一世に謳はれ、大高松市建設の礎石をきづいた大人にして、同氏の協力を得た北村氏は歩一歩高松電氣軌道株式會社創立に向ひ歩み續けて漸く明治四十二年三月資本金三十萬圓の會社は創立し、同時に小田知周氏は社長に就任し、その後は一意軌道完成に急いだ。

固より工事其他は擧げて電燈社長北村氏がその研究精進を以て全部を督し、ある時は自ら北海道に渡り極めて經濟的に枕木を購入し、又は當時私鐵に稀な四十五ポンドレールを神戸カーネギー支店長の好意によつて破格に供給さる等、なほその運搬の如きは沿線町村青年團員が殆ど奉仕的に懸聲勇ましく曳き運び、又當時線路用地買収に際しても全線一致の協定を以て一件收用法の適用すらなく至極順調圓滿裡に進歩した。

當時その任にありし澁江嘉太郎氏の如き顧みて感慨無量なりと謂ふが如何に氏が最少限度實に全國無類と稱する資本豫算を以て熱よく他を動かし、之を達成せしか苦心の程は思ひ半にある。かくして明治四十五年五月工事は目出度く竣成し地方文化開發の先驅として沿線十ヶ町村民の感激と欽悻裡に同電車の創業第一歩は輝かしく印せられた。元々同社の創業たる共存共榮を目標として社益を外に至誠地方文化と産業開發の崇高なる使命に邁進したれば漸次營業は革まり、社内は充實を加へついに今日の如く比類なき内容の堅實を來したのである。

而して創業二十年後の現時にあつては乗客百萬人貨物又遞増して眞に赫々たる業況を示して居る、前小田社長歿後北村氏は社長に就任、小田榮次氏營業部長として經營しつゝあるが、更に事業の堅實性に着眼して電燈事業を兼營し、沿線町村及隣接部落を開拓して目下一萬五千燈を算してゐる。

之を觀て僅に三十萬圓の資本金を以つてする同社が延長九哩の電軌と、一萬五千の電燈の經營は他を見て後に百萬圓以上の資質營業量たる所にして、爰には創業以來二十年間重役は報酬を求むるなく、従業員又會社と共に榮ゆるの他、いづ

れも薄給に甘んじ、協力する高貴の結晶にして、その眞價は現實同社の配當並に株價に如實示現して居る所である。

これ等素より同社幹部の功績であるが、特に北村氏に至つては建設より成育に全力を注ぎ、人格高潔、手腕識見の高邁此因るところにして、氏が常に新舊思想を究め縣下政界にあつても献替を過らず、又携はる各種事業をも堅實第一主義を信條として經濟の本格を諒知し、當時「會社の株金は株主よりの絶體的借金なればよく之を心して株價の保護成長に努めなければならぬ」と謂ふは銘すべく斯の如き重役幹部あれば同社は景不景に關せず毎期償却に償却を以つて内容を充實し、不況を尻目に一割配當を取行して多數株主に酬ひて居るのである。

されば先年鐵道當局は同社の内容過良なりとて検査を行つ

たとの快よき、ナンセンス物語りだにあつた。北村氏の如き政治と經濟の眞諦を極め將又積極、消極緩急の配劑宜しき士は實に完熟の人としその事業即ち高松電氣軌道株式會社の現勢とその將來の全使命を通じて、尠くとも世の樂天的事業家共に異常のショックと感激を與へ、且氏を以つて本縣政界事業界の偉大なる指導的人材とは謂ふであらふ、因に同社現在重役は左の通りである。

取締役社長	北村 荀 吉
取締役	西本 政次 郎
同	小田 榮次 郎
同	廣瀬 俊太 郎
同	中村 祐吉
同	加藤 謙吉
同	鎌田 連

本縣鹽業界の偉材加藤勘學氏

凡そ事業の經營に當つては其何業を問はず初期創業の受難は所詮免れない所であらう。即ちこの受難こそ事業の成否を

決する試金石であり、之を打開し各々業務に正體眞實を掴み變通自在の妙要を把握するに於て其事業は既に成功の圈内に

入れりと謂ふべく普通成功性なき事業者は多く、この期間に於て敗壞瓦解の緒を萌し收拾すべくもなく遂に挫折して再び起つ能はざる苦境と悲運に逢着するものである。

況や現時の如き峻相と不況に際しては痛切にこの事を感じざる。されば創業の當初に於て周到彫心して事に従ひ、かくて掴み得た貴き自信こそその事業の成功性そのものであり、

且事業的免疫の礎石でもある。



故に世の人事の關する總ての事業は須らく先づ以て

犠牲を支拂ふべきで成功は其處にのみ訪れるであらう、この頗る高遠深長な犠牲の發動する所大にしては國威を宣揚し國勢の進展に資する事は勿論、頽爛の業も既倒に覆すあれば身を以て企劃せる一事が尙よく大衆の福祉に寄與して、偉大なる世益をもたらす等の好事例證は古今の巨人徳士に依つて燦然幾多の實蹟は示されて居るのである。

こゝに本縣の重要産業鹽業界に於て香川郡弦打村加藤鹽田の經營者加藤勘學氏の存在は餘りにも偉大である。その經營する弦打濱三十餘町歩の鹽田中約十町歩は明治二十五年の築造にかゝり、明治十七年頃氏の先代これを着工したが幾多の災害に遭遇して遂に事業中止の所を、明治二十五年頃若き英才の氏が慨然として工事を、進め一部を成し更に囚徒二百名を役使し一氣にこれを完成した。當時氏は佛生山に在り毎朝この區間をテクツては刻苦この難工事を進捗せしめた。

その努力は實に異常であり、完成後鹽業に興味を覺へた氏は更に斯業の研究を積み遂に明治四十年意を決して同鹽田の北側現新濱三十二町餘歩の鹽田築造を劃し、着工三ヶ年にして完成この新舊兩鹽田と其他高松市宮脇濱並に沖松島所有鹽田等を併せて數十町歩の宏大なる鹽田を經營しなほ其後三豊郡に松崎沖鹽田株式會社を創設目下社長としてこれが經營の衝に當る外松田鹽田株式會社も社長として經營に當りつゝあるこの現況は正に本縣鹽業界の靄者たる實勢にあり、現に弦打鹽田のみを以ても年産五六百萬斤十數萬圓を計上する盛況にしてこれが同地一帯に齎す事業的惠澤こそ至大である。

氏は常に一人一業の鐵則を堅く持し一意鹽業の外に視野を

求めず只邁進するのみにして今日を築いた。しかも茲に特筆せざるべからざるは東讃鹽業界に對する絶大の貢獻であり又本縣産業組合界に寄與せる功績であつて、即ち大正四年東讃

鹽業組合長に就任以來、斯業の發達擴充に意を用ひ、殊に最も經濟關係多き石炭の共同購入を主唱し、實施しては多數石炭商人の反對故障を蹴破し、剩つさへ常に數萬金の私資を流用して鹽業者の便宜一般經濟に資し時には自ら宇部炭坑、筑豊炭坑に出張直接商談を試みる等、常に其取引は鹽業者の有利を専念して居る。

大正七年同業組合を改組して東讃鹽業信用購買組合組織と同時に氏は組合長に推され今日に及んで居るが、本來同組合は鹽業者のみの組合として稀な好績を示し、石炭の如きも年

六七千萬斤を主として三菱、三井、貝島、麻生、と取引し絶對的信用を博して安價に仕入れ、組合員に供給しつゝある。

また本縣産業組合聯合會の參與理事に推さるゝや、産業組合法の精神を體してこれが健全なる發達を期し、成果は體てそれが利用階級の更生を意味する事に於て、折角盡瘁して居る。

兎角氏の觸るゝところ總て犠牲的、奉仕的、努力快刀斷麻の果敢を以て有終の美に邁進し爰には俯仰天地に愧ぢぬ高潔さがあり、然してその卓見高毅は恐らく現下斯界の一權威にして且本縣多額納稅者中優位の實力と共に本縣産組聯合會の偉材である、尙叙上の貢獻に對して昭和七年四月二十五日第三十八回全國産業組合大會に産業功勞者として表彰された。

琴平電鐵株式會社と其眞使命

今や瀬戸内海々上國立公園を展望して年々來遊する旅客は

日に月に増加しつゝあるも何分財界未曾有の不況の爲未だ其數必ずしも多からず、一朝景氣恢復の微見へんか蓋し思ひ半

に過ぐるものあらん。

この時此際に處し琴平電鐵が如何に其の本性を發揮するや刮目して待つべきのみ、然らば此最も將來性に富む琴平電鐵

は何人によりて建設せられた乎。

多度津町現四國水力電気株式會社社長景山甚右衛門氏の發起により大正九年免許を得たるも財界の激變に遭ひ、暫時會社の創立を見合せ或ひは不幸暗より暗に流産するに非ずやとさへ案ぜられたるも右景山氏の委囑により一度現事務取締役大西虎之介氏起つて其の創業を引受くるや氏の慧眼必ずや財界の恢復近きに在りとなし、大正十二年末同志現事務取締役細溪宗次郎氏と協力して夙夜匪懈或は出で、有力者を説き資本を集め、或は内に於て緻密複雑なる官廳への事務その他一切を統理しつゝ、遂に大正十三年七月會社設立の創立總會を了し、次で事業經營の許可を得て、大正十三年十二月設立の登記を完了した。

此時年齢僅に三十五歳、白顔の青年なりとは何人か思はんや、既にして會社設立せらるゝや廣く人材を天下に聚め、十四年土地買収を了し、着工十五年十二月二十一日に栗林公園、瀧宮間を開業、越へて昭和二年三月十五日琴平迄全通した。この投下資本三百五十萬圓に垂んとする本事業は、開業するや直に政府は國家的有要なる線路として地方鐵道補助法による補助を支給し、其第一回検査に於て詳細を極めたる内容

調査の上、今日全國の地方鐵道百七十餘社の平均一哩當り建設費二呎六吋にて十六七萬圓、四呎八吋に於て二十四五萬圓を下らざるに、同社が四呎八吋を三呎六吋分にて完了し、而も一點非難すべき失當のものなしと感嘆の聲を洩したが、この一事を以て餘事は類推足れりとする、之れ一に大西氏が渾身の智を絞る勇を鼓し事業に専心されたるは勿論、寛嚴其宜敷を得たる統率振りは社内一致常に春風變々たるものありて何れも其身命を擲つて努力したる賜に外ならざるものと謂はざるを得ない。

次で開通するや、琴電の名聲頗に揚り四國阪急の稱號を志にし、且同社の投じたる勝地紹介の第一石は次第に萬波を轟き、今日勃然として起りつゝある讃岐宣傳は以て風を爲すに至れるは、如何に同社が遊覽讃岐の眞髓を夙に觀破せるか一に大西氏の慧眼の致す所と爲さざるべからざる所である。既にして琴電完成ののち氏は擧げられて屋島ケーブルの社長に推され、四國水力の取締役に任ぜられた、之れ蓋し氏の人格より生じたる世の信任に外ならない。

今や事務大西氏は本縣選出貴族院議員として活躍して居るが、その琴平電鐵は觀光地讃岐の絶體的中樞機關として重要

使命を果しつゝある。尙現在重役は左の通りである。

專務取締役	大西虎之介
常務取締役	細溪宗次郎
取締役	合田房太郎
同	熊田長造
同	川崎舍恒三
同	武田謙
同	中村實

堅實を誇る高松製紙株式會社

本縣工業生産品中輝かしき歴史と且隆々として發展全國的名聲を博せるは實に機械製紙である。廉紙は其製造の沿革手流に始まり、爾來幾多の變遷改良を製造の上に加へられて既に今日では高松市を中心に年産約三百萬圓に上るの驚異的進展ぶりを示してゐる。

此業界にあつて唯一の株式會社組織であり、常に營業の堅實、基礎の鞏固を以つて誇るは高松製紙株式會社であらう。同社は大正六年北村苟吉、井上耕作、鎌田連、高宮喜平次、奥村五郎氏等が機械製紙の好望を見込み發起創立したに始ま

同	武田亮太郎
監査役	今井傳太
同	三輪繁太郎
同	中村新太郎
相談役	景山甚右衛門
同	鎌田勝太郎
同	寒川恒貞

り、同年八月三日資本金十萬圓四分の一拂込を了し、會社創立の手續を完了するや、當時宮脇町に於て古くから手流紙製造に従事しつゝあつた瀬詰忠次郎氏經營工場的一切を譲り受け、更に工場設備の改善を加へ、現在工場の陣形を構へた一方會社の主腦部は斯界に令名高き北村氏を社長に、又配するに理材の士鎌田連氏並に工務精通の瀬詰氏を以て堅實無比の幹部陣營を整へた。

この達觀敏明の陣容こそ創立直後に面した財界の好況、次に來た一般的不況の樂悲兩面を調理して些かの遺憾もなく會

社をして泰山の現況たらしめて居る、その統營機構は實に敬服に値するものがある。

更にこの間四十名の従業員を督して年産二十五萬圓の生産塵紙を大阪方面へ、あるひは全國の商戰に馳驅する取締役營業部長岡田氏の英才手腕も又凡ならざるものである。

斯く順風の裡にその基礎をかためた同社は、もとく一大家族的會社であつて、創立當時株主僅に十九名にして、現在その株數二千株四十圓拂込、二十名の株主には殆んど異動なく、重役又毎期重任々々を以て恪勤精勵を續けて、その成績

も平均八歩配當を繼續しつゝ、餘裕綽々、一方一萬餘圓の積立金を擁すが如き、如何に同社の内容充實せるかは凡そ推知するに足る所である。因に同社現在重役は左の通り

取締役社長	北村 荀 吉
常務取締役	鎌田 連
同	瀬詰 忠次郎
取締役	山内 勝造
取締役營業部長	岡田 辰三郎
監査役	松野 長五郎
同	小田 榮次

上枝貞一氏と其の丸高製紙工場

本縣殊に高松市を中心とする製紙界の進展は正にこれ幾何級數的と謂ひ得るこの活躍圈内にあつて信用と牢固たる礎石を築き、日に寸進尺歩の繁榮を以つて常に業界の先驅者たるは市内松島町丸高製紙所主上枝貞一氏その人で、經營する丸高製紙の三千坪工場の偉觀は正にその全貌を語つて居る。但し氏が今日あるは決して偶然にはあらずとし、其處には

先代貞一氏の苦しみを厭はざる異常の努力と奮闘の結晶こそ今日の成功を招來して居るのである。先代貞一氏と製紙業は極めて因縁深く明治三十年十五歳にして築地町の叔父上枝寅吉氏方に手漉製紙を見習ひ後神戸に出で兄高宮喜平次氏と共に新聞用紙の殘截を利用して機械漉紙の製造販賣を開始して茲に意外の好績を收め其の後明治四十年兄と離れ、自分は中

國四國の一手販賣を引うけて歸高し高宮支店を開業した。かくて刻苦經營の中に時代を觀る俊敏の氏は大正二年機械製紙を開始すべく決意しチツシユマン式連續ドライヤーを整備しこれに着手した。時は大正二年十一月であつて、本縣に於ける機械製紙の始祖である。斯く積極進取の營業方針を以て専ら直進した同氏は時代に魁け人を制し類る順調なる成績を收めた。

爰に於て兄高宮喜平次氏は斯業の更に將來性を想ひ爰に上枝氏と相謀つ



て資本金一萬七千五百圓の高松製紙合資會社を創設した。

然るに大正十年ゴム工場を併設してその試運轉に際し惜くも高宮氏は機械に觸れて不慮の横死を遂げたのである、この變災後上枝氏は遂に會社を解散して同時に全部を引受て同氏の個人經營に移した。現丸高製紙の本流でこそある。

斯くて工場設備の改善を加へると共に能率増進を主眼とする斯界最初の電氣電動機を据付け、超へて十三年更に新式ヤンキー式製紙機一臺を増設したが不幸にも八月三日乾燥機爆發に因り約五萬圓の損害を蒙つた。

この時に當つて氏は再び意を決し直に復舊工事に着手して大正十四年整然たる工場設備を完成し、同時に直徑九尺の第三號機を増設、四年更に最新製紙機一臺増設と共に一臺を豫備として目下三臺を以て晝夜兼行事業に従事し、現在年産額百萬圓に達し斷然斯界の雄として自他共に許すに至つたが、製品天狗塵紙は品質又優秀各地一店主義の合理的販賣方法と相俟つて全國的に名聲を博して居る。

尙同所の特筆すべき勞資の協調で一切の業務を八田、山縣兩氏が擔任し、以下全員百二十名一糸亂れず常に能率の増進成績の向上を圖り、一方工場主上枝氏又現下變態的不況に直

面しては經營の合理化を以て先行し更に費食の無料給與をなし諸規定を定めて慰安と優遇に努め工場を繞る一團は常に春風胎蕩其處には階級を離れた温かい家族的の流露がある。

されば同工場は模範工場と推賞され又陸軍々需動員の指定工場の重責と光榮を擔ふに至つた。

斯くの如く年少より出で幾多の狂亂浪濤の洗禮と厄災に身

栗林製紙所

天下の名園栗林公園の正門近くに構へた産業の衛門は中村友吉氏の經營する栗林製紙工場である。一見その工場の外觀よりしても如何に石橋叩いて渡る堅實主義なるかは察知し得る所であつて、その事業内容の充實は勿論中村氏が大正八年斯業創始以來把握せし堅實の二字、この信條こそよく今日をあらしめては居る。

氏は幼にして父業製紙原料商に従事し、父の歿後これを經營してゐたが、大正八年現工場さきの丸平製紙場の設備一切を買収してこの經營に當つた。

これ氏が製紙界への發足にして、これとても多年製紙原料

を鍛錬し、生産生存の眞理を培つた先代は頭腦の俊敏とその抱擁の雅量に於て今日の基礎を築き、且その所信斷行の勇こそ現實の進展を劃したが惜むらくこの大器に天は齡を假さず昭和八年二月急逝した。

當主は直ちに先代を襲名、この誇るべき生産の陣營父業製紙業を統營して活躍して居るが本年二十六歳の新進である。

に關する體驗を有し且斯業の將來にも興味を感ずればこそであつて、爾來氏一流の努力合理化經營に於て年と共に内容革り基礎は築かれたのである。

今やその生産和紙は關西をはじめ滿鮮、臺灣に好評を博し發展してゐるが、その薄口紙は別に愛媛縣西條に於て生産し共に名聲を轟はれて居る。

氏は昭和八年製紙業を代表して高松商工會議所議員に推されたがそれを以ても氏が高松製紙界に於ける衆望を語ると共に其錚々たる所以である。

高松南部の功人鎌田長八郎氏と其錘

最近高松市南部栗林方面は數年前國鐵栗林驛設置を一轉機に誇るべき各種工業は勃然として興り、遂に高松市の重要工業地帯化するに至つた。

然らば何が同地方の發展の素因か即ち爰に没すべからざる人爲の加減がある。これを希求する地方人士の協力と先覺的發動なかりせば、この發展は望むべきもない。

然して南部地方今日の發展を觀てその



開發に多大な貢獻をなし近來出色の人材

とするに鎌田長八郎氏がある、氏は常に大局に配意し冷靜水の如く地方開發産業の隆興を専念してその地方と共に活る信念は如實栗林の力強き發展に與つて大なる源動をなし、且今日を形成せしめて居るがその灼熱的公共觀念は向ふ所幾多重要問題を解決して現實の進境を示して居るのである、ことにかの栗林驛設置の如き全く氏の中心的活動に由ることは世人周知の事實である、又その事業方面にあつては鑄物鐵工業を本務とし明治三十一年先代長八郎氏の歿後これを繼承統營に當つて居るのであるが、先代長八郎氏は夙に鑄物業を修得その後専ら鑄物火鉢の製造に従事しつゝ、壯年四十歳にして惜しくも早逝し、爰に白面の一少年長八郎氏は齡未だ十七歳決然家業の經營に當つた。

去りとてこの頃の氏は餘りにも若く加ふるに資本少ければ營業も振はず、動もすれば生活そのものにも追れんとするや屢々あつた。然し一事が萬事不撓堪忍の氏は凡ゆる不幸を身に集めつゝ、尙吾と我がを鞭打ちながら日夜玉碎的奮闘を續

ける事十五年、遂に大正三年歐洲戰亂の勃發さるゝや業界頓に活氣を呈し、果然一條の光明を認むるに至つた。

氏はこの時敢然積極方針に轉向、躍進又躍進同時に營業の基礎は日々々と確立されて往く。爾來大戰の餘波と、思はぬ好況に恵まれて隆々朝陽の如き業績を示した、殊に同所の専門製作とする度量衡用各種錘は質の優と器格の正確に於て全國を風靡し、特に朝鮮總督府よりは唯一の指定を受けた。

爾來この堅實なる營業方針は不況と雖も巨歩を續け、一時南洋にも進出し、又夙に滿洲に販路を開拓し、最近頃はその方面への躍進は目醒しいものがある。この如く事業的活風景は氏が青年時代より凡ゆる世の辛酸を體驗し、身を斷つ思ひの中にも數人の長兄として常に舍弟等の心情を思考し、父なき後の父とはなつて溫愛情理よく弟等を統合協力に與へられ

た成果ではあるが、兎角長子とか云ふ者には溫容の徳こそ養ふべきではあらう、のみならず氏が今日その全従業員の福祉のために自家購買組合を組織し、關係者職工に限つて一切の日用品を殆んど原價で供給するとか、其他各種の制度施設を整へ時代の事業家として先驅して居るが、その工場は模範工場として當局の表彰を受けた程である。

斯の如して世の信望を集めた氏は大正十一年擧げられて高松市會議員に推され、又昭和五年商工會議所議員に當選、其後感ずる所あつて之を辭したが昭和六年教育勸語煥發記念日に際しては特に其の社會的功勞を表彰された、昭和八年再度高松商工會議所議員に推され貢献しつゝあるが今日氏は産業と政治の兩面に南部の大立物として偉大な存在を謳はれて居る。

畑尾鑄造所と其の鹽田釜

本縣鑄物製造業界に於いて赫々たる歴史の下に牢固として

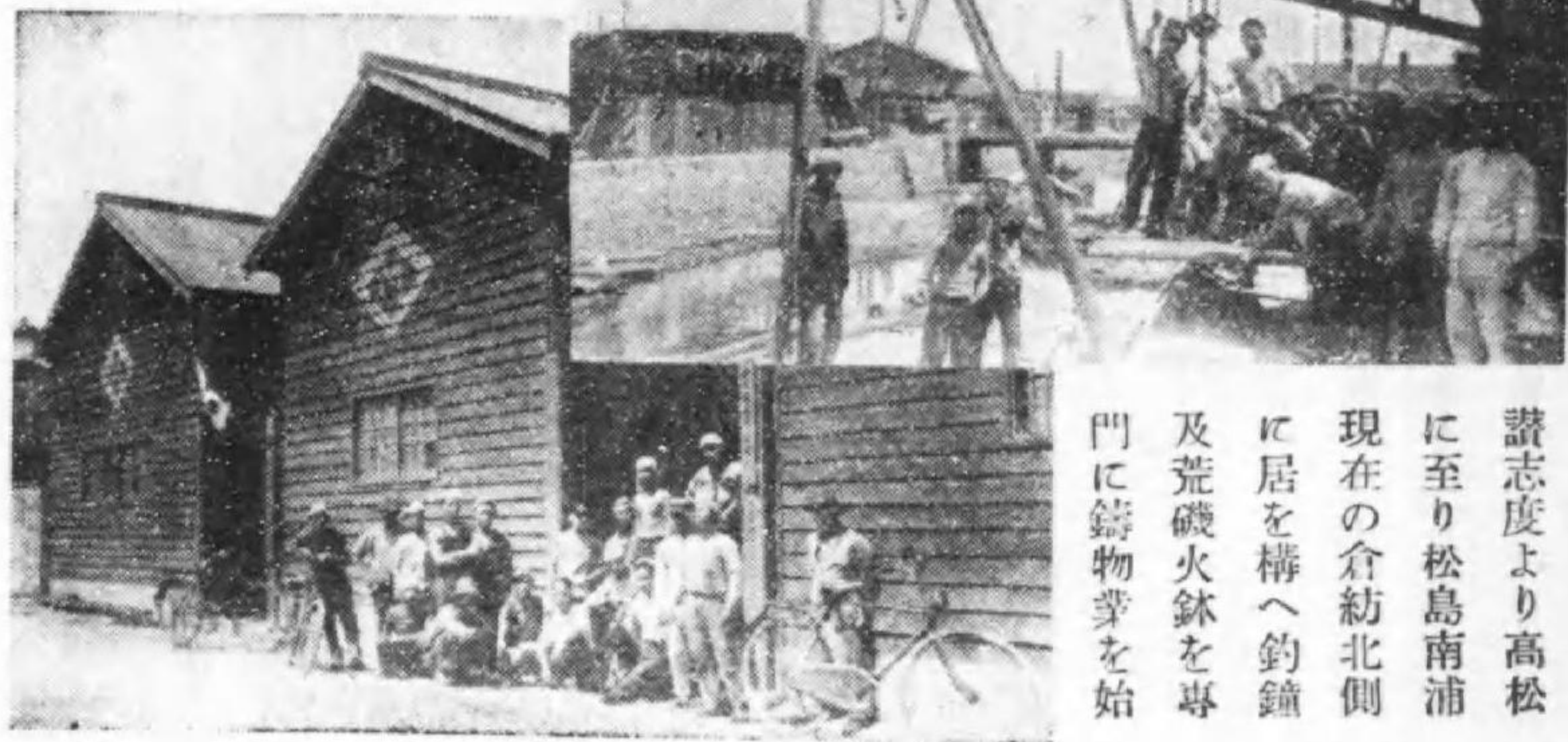
抜くべからざる歩地に安住するはそれ高松市松島町畑尾龍太

氏經營の畑尾鑄造所である。

同所は今を去る明治の始め現在畑尾氏の祖父太三郎氏が東

めた。

其後畑尾太三郎氏歿し市兵衛氏其家業を繼承したが、更に現在の畑尾龍太氏家業を總攬するに至り、昭和三年現工場を落成したのであ



讚志度より高松に至り松島南浦現在の倉紡北側に居を構へ釣鐘及荒磯火鉢を専門に鑄物業を始

る。

氏は性來寡言黙行の士であつて、而も天賦の事業家肌に加へ時勢を観る敏にして、かつて明治四十年頃市内同業者間に於て火鉢の亂賣を以て狼火を削つた、氏は之を遺憾とし自ら製品を轉向すべく鋭意研究の結果遂に目下専門的に製作しつゝ全國鹽田業者の間に好評噴々たる新案特許の鹽田釜を考案したのである。

斯くの如く自己事業に對して絶えず創造眼を以てする熱意と努力に業績は彌が上にも向上進展を呼び確固たる地盤を築くのみにして、今や同所製作の鹽田釜はその特殊性に於て全く他の追隨を許さず、着々未開の進境に獨歩旺に活躍しつゝあり、まきには文字通り開關以來の支那蒙古に輸出を試みた程である。

この如きは國産獎勵の今日實に誇るべき一大快事とし畑尾氏の苦心努力その面目や躍如たる所である。この信念を把持して直往邁進する氏は未だ壯にしてその事業慾は果樹園の如く、未來の成果こそ期待され昭和四年以來選ばれて高松商工會議所議員に當選し、擧げられて工業部々長の要務に就いてゐるが昭和八年度の改選にも高位再選し衆望を蒐めて居る。

金物鑄物の宮本和太郎氏

高松市田町宮本芳太郎氏は早くより鑄物業の將來有望なるに着眼して同業者先代多田丈之助氏等と協力し、斯業の發展に盡瘁した先覺的恩人で、目下は家業を當主和太郎氏に委ねて悠々自適老後を無上の悦樂にひたりつゝある。



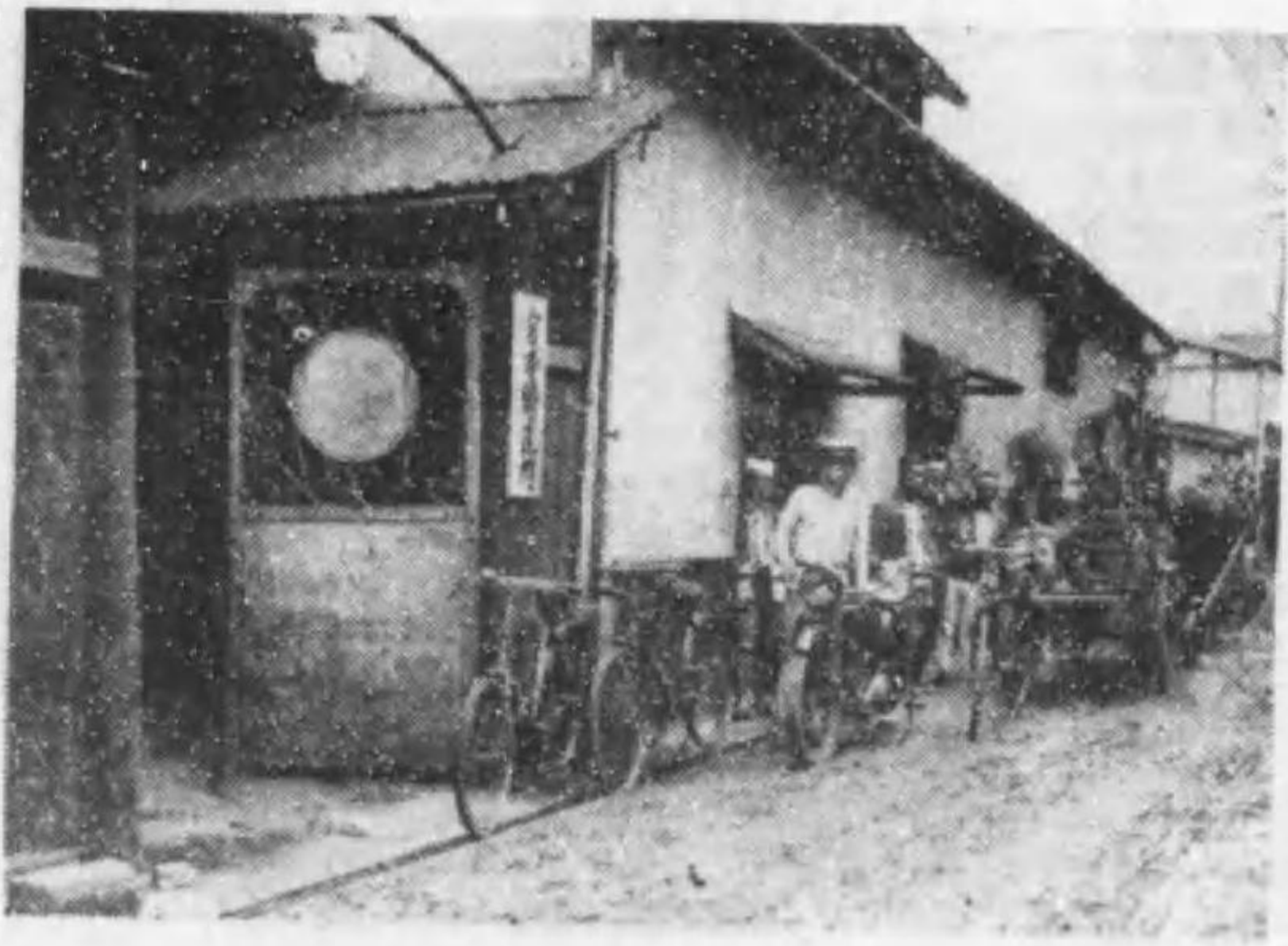
そも宮本芳太郎氏の先代五郎氏は維新前高松藩の鐵砲方で、廢藩置縣後金物商を始め明治十一年芳太郎氏これを繼ぐや新進氣鋭の芳太郎氏は自家に最も關係多き鑄物業を以つて地方産業開發に資すべく多田丈之助氏に助力し、鑄岐火鉢を製作せしめて阪神方面に移出版賣したがこの結果意外の好評を博し先づ第一の成功を収めた。

其後測らずも鑄岐火鉢に數等優秀な東京火鉢は出現し、爲めに鑄岐火鉢は敢なく凌駕壓倒されて如何ともなし難い苦境に直面した、茲に芳太郎氏はこの一大受難を打開すべく決意

し同志と相謀つて遂に明治三十年八月資本金六千圓の鑄岐鑄物會社を組織した。こゝに宮本氏は選ばれて社長となるや、

爾來一意専心競争の重壓下に喘ぐ我が鑄物製品の聲價挽回と販路擴張に鋭意したのである。

この結果幸ひに努力は酬ひられ社運と名聲は漸く進展の歩を進るに至れば明治三十二年更に會社の資本を増加して九千圓としたのであるが、天なるかな不幸にも三十四年不測の火災に見舞はれて社屋となり工場其他一切



を灰燼に歸せしめ致命的打撃を受けた。

同社はさらに一同勇を鼓し三十六年それが再建を完成して捲土重來製造品の改良と販路の擴張に専念したれば社業は順調を辿り歐洲大戰の如き同社製品は遠く支那方面までも輸出するの盛況を呈したが、その後財界變動その他の事情のために昭和二年遂に意義深き同會社は解散となつた。然し爰に知るべきは同社存立中市内鑄物業者に對する業的刺戟にして斯業今日の發展成長の裏に否定し難き貢獻のある事である。

斯かる微妙な斯界にあつて個人宮本氏もあるひは栗林町に

或は藤塚町に工場を建設して専ら機械、農具、家具類の鑄物製作に従事して着々と營業の基礎を確立し、明治四十年には東田町に六百坪の現工場を建設移轉して縣下一般の需要を満たすと共に廣く縣外各地に進出して本縣産業の爲めに氣を吐いて居るが、當主和太郎氏は極めて圓滿、加ふるに時代を察し熟慮斷行の士にして尙商工會議所議員に當選する事數次、更に昭和五年三月高松市會議員に當選して、市政に貢獻し重きをなして居る。

轡見鑄物鐵工所

今や縣下鑄物製造業界に君臨して堂々たる地歩を築けるものに高松市栗林町轡見鑄物鐵工所がある。而して同工場をして、今日あらしめた轡見芳太郎氏の過去に於ける不撓不屈の意力と精進こそ世にも敬して學ぶべき實訓と云ふべきであらう。

その體得體驗の人芳太郎氏は今まさに五十歳の圓熟境を迎

へて事業的才腕精彩の盛時であるが、氏がその鑄物製造業界に一步を踏み入れたのは年齢未だ十五歳の少年であつた。

練磨の家は縁者鎌田長八郎氏經營の鑄物工場で此處に一見習職工として奮闘し先代長八郎氏指導下に熱火烈々たる鍛鍊體驗を重ねたのである。十八歳の時不慮にも作業中溶鑄爐の飛沫を浴びて遂に右眼を失明するに至つた。

この時の如き家族及周囲の人々は断然鑄物をよせと大の反對諫止するのであつたが氏は断乎としてこれしき事に屈して何かあらんと百餘日療養の後、隻眼再び起つて業に就き遂に二十四歳にして獨立、現在の鑄見鑄物鐵工場を創設した。かくて當初は僅かに火鉢、農具類の微々たる製作に止りし

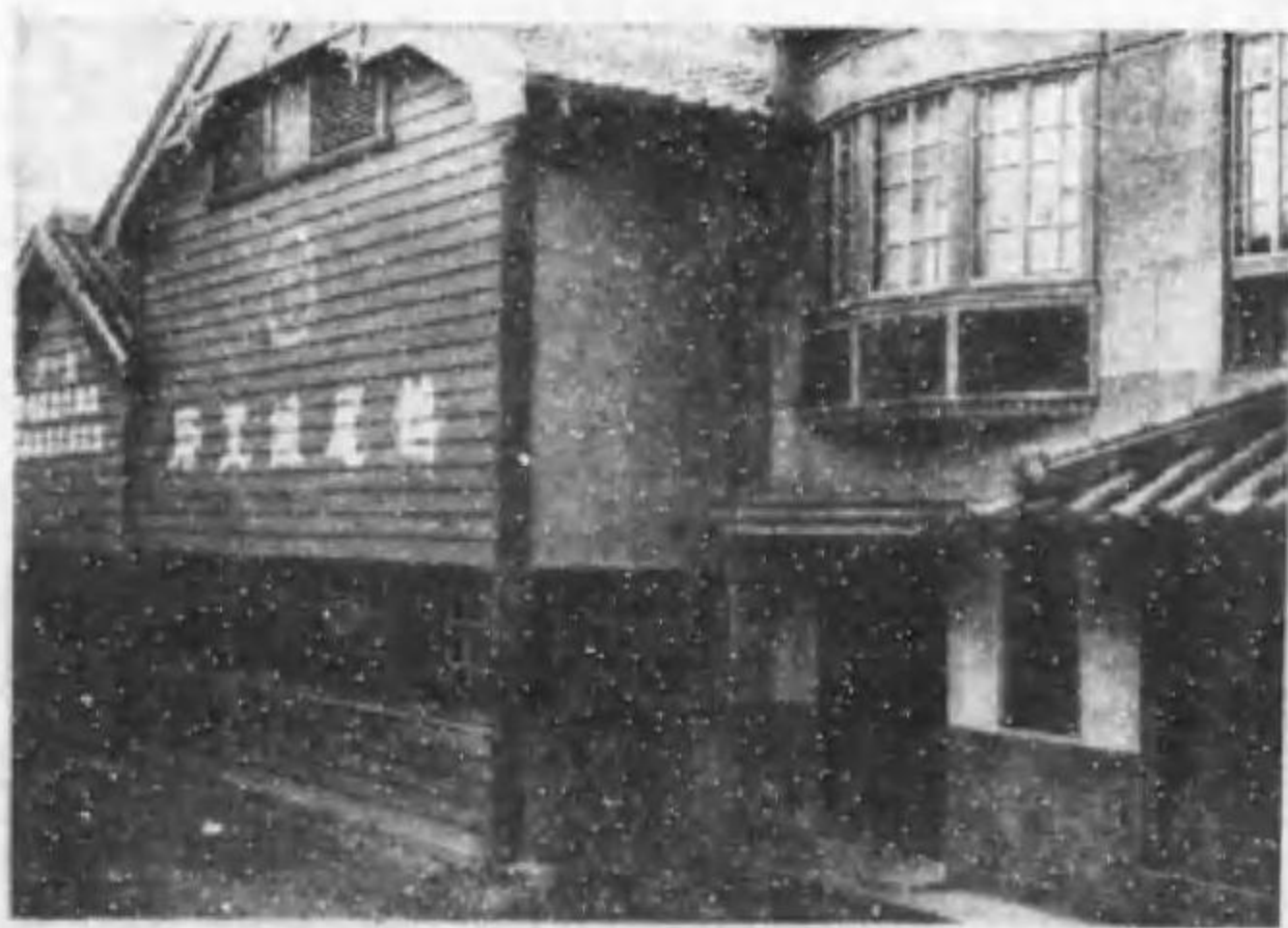
ものを、負けし魂に熱と努力は不斷を以つて發展を劃し縣下鑄物業界に於て牢固たる現在の地位を獲得した。その製品としては農具、器械、製紙用鑄物等その他に亘り異常なる活況を見せつゝ、目下長男武男君以下多數職工と共に更に將來への雄躍を續けて居る。

鶴尾清氏と重油發動機

今や四國の玄關、高松港頭の一角にハンマーの音も勇ましく整然たる威容を放つて不斷の活動を續けてゐる鶴尾清鐵工所の存在は、財界不況の今日業界の一大偉容として認識されてゐる。

元より所主鶴尾清氏が十餘年前、赤手空拳萬難を排して現場を設置創業せし以來、幾多の受難に遭遇し、且洗禮にも他日を期して忍苦よく嶮難を突破したフィルムの如き経路こそ今日他の追従を許さぬ盛況にある所以である。

由來鶴尾一家は高松藩の士族にて清氏祖父利吉郎清重氏は舊藩時代鐵砲鍛冶として仕へ、維新後現在の鹽上町に於て鐵工業に轉職するに至つた。

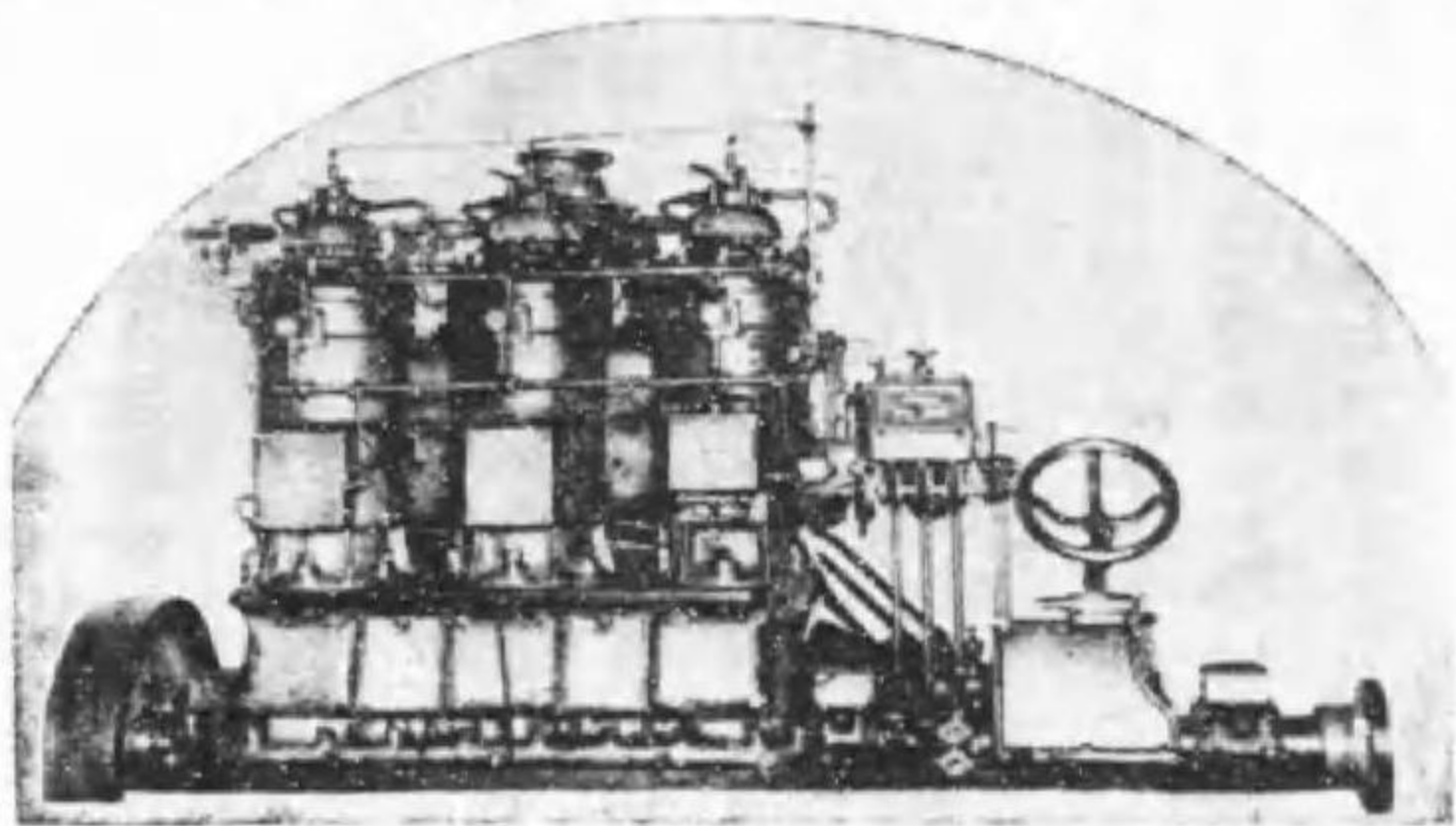


祖父は性來頭腦密にして聰明發明創造に長し夙に明治三年頃苦心考案して電氣船を造り、更に之に改良を加へて蒸氣船を建造、高松神戸間を運航して世の讚辭を博し、或はその當時神戸沖に沈没せし佛國軍艦の拂さげを受けて部分品により自ら船舶機關の研究をなすとか、又世にも珍奇な電信

機の發案公開する等凡そ世人の先鞭に出ざるなき傑士で、當時明珍某と共に高松の二傑と稱したのである。

この天賦多藝多能の英才も世に惜しまれつゝ明治十八年六十三歳にて他界した。

その後鶴尾先代はいよく時代の進運を洞察して明治三十一年始めて石油發動機の製作を試みたが、これ本縣に於ける陸上内燃機關製作の嚆矢であつて更に後年瓦斯發動機の製作にも成功し一躍斯界に勇名を馳せた、かくて四十五年ドイツ式モノロ瓦斯發動機をも製作、また時勢を達觀した同氏は船舶發動機の將來有望なるに着眼し大正九年十月同所の分身として現在の玉藻町鶴尾清鐵工所創設した。



同工場は經營者鶴尾氏が永年本家鶴尾にあつて、先代とも、斯業の研究を積み、確固たる自信と抱負に基いて計畫さ

れた理想的工場であつて、氏が普く經驗發揮の道場でもあつた。

然して炯眼紙背を徹する清氏は創業の受難とそれ以來の反動的經濟界の困難に處しつゝ、一意奉仕的信念のもとに邁進し目下一外交員もなくして優に四國、關西、九州はもとより臺灣、北海道、カムチャツカに至る迄驥足を伸す盛況にある。これとても時代と共に研究改良を唯一の戰術とする新鋭鶴尾鐵工所が製作にかゝる純國産無注水重油發動機の性能優秀にして價格低廉なるが故にして、現今縣下を通じて斯業者多く製品又多しと雖も、およそ大馬力製作品の過半は同所の製作なりと斷じて敢て過言でもない。然して其設備の壯大は五馬力乃至二百馬力發動機製作を完備して日に飛躍の跡も輝きもぬがある。

以上創立日尙淺き同所がこの驚異的進展の歩調を辿れるにも、清氏が祖系を享け密にして常に研究の人なると共に、圓滿なる人格を所有し、情理厚く、主と職工は一體となつて互に尊敬と信頼の念に由る不斷の精進と、尙良妻ヒデ夫人の外交的あるひは事務的内助の功等に諸因して居るのである。

老舗池田屋吳服店

細溪宗次郎氏經營の池田屋吳服店が祖始六代春秋百四十年世の變轉を眺めつゝ獨り一片の汚點なく隆々進展の途を辿れるは以て奇とする所であらう。蓋し爰には人の求めて難き貴重な何物かを發見されなければならぬ。



二軒に限られてゐた。かくて吳服店として發足した、同店は家紋のいけた印を俗化して屋號池田屋と稱し、徐々に發展を劃した。

次で世は移り人も更つて五代宗一氏が家業に就くに至れば賢母の譽れも高く且つ男勝りの女丈夫春女は、氏を督して家業の發展に力を注いだ。

十年前、享保の頃鼻祖細溪太四郎氏が藩主の許可を得て南新町に吳服店を開業したに初まり、當時は主として絹物の販賣をなし外に鹽屋町に某綿物店とこの

この賢母に驚陶された宗一氏は商機を見る敏にして、且老練忠實なる番頭清兵衛と協力して一意店業の發展に努めたれば、同店の信用と取引の殷盛は年と共に加はり顧客は文字通り門前市を爲す商況を見、殊に新正月の初賣と舊正せいもん拂ひ、夏物見切り大賣出し等年中行事の如きは鶏鳴三時にして顧客店頭に雲集し、笹切、落切れ等を奪ひ買ふ實に文字通りの繁盛を示したのである。

時は明治二十二年頃にして宗一氏隆運の初潮ではあるが、斯の如くして當時に於ても年賣上げ三萬圓を越へ、高松一の吳服店として令名を志にした。

かくて氏は自業の他面高松商工界發展のためには農工銀行糖業會社等有力なる金融、並に産業機關を創意し更に奉公の美事は年々多額の私財を公共團體に寄贈して惜しまず。而も名利を追はず榮譽を求めず恬淡高潔その人格は一世の名望を擔はしめたこの社會的榮譽を完了した氏は七十九歳の徳と齡を以て惜くも昭和六年七月五日逝去した。

現店主は六代目であつて、氏は同家中興の英器宗一氏の直嗣、明治四十五年帝大法科出身、本年四十七歳温厚な紳商にして大正十三年以來市會議員に當選を續け現に市政に盡す傍ら商工會議所會頭として商工界にも盡瘁し、なほ琴電、讃岐貯蓄、鹽之江電鐵等縣下事業會社の重役として活躍しつゝあり今や氏は高松政界實業界に於ける巨頭として嚴然たる存在

を謳はれその池田屋吳服店經營には炯眼よく時代を洞察してさきに洋服部を新設、縫職をして東京關根洋服部に習得せしめ裁縫の妙を以つて誇るが、店舗は最近鐵筋二百餘坪の堂々たる洋風に改築し新進の銳氣は輝く歴史と時代色を調和して愈々祖業の外多角的に活躍令名を馳せて居る。

洋品店「クリヤ」

高松市あまた洋品雜貨店中群鷄の一鶴として確かな店であ



を認識されるのであるが現店主安田美代造氏が小資以て今日の老容を致せる過去五十幾年その管ならざる峻路を蹴破し彼

岸に到達の今にして思へば感慨切なるものがある。氏は明治九年舊藩士勇三郎の長男として生れ、明治十年頃より現住南新町に雜貨小賣業を営み帽子、マツチ、石油、ランプ、手拭、シャツ、股引等片々微々たる田舎雜貨店の營業であつた。

氏は女丈夫として智に長けた母フデ女の訓育を受、長じて店業にたづさはるや先づ炯眼と太ッ腹、異數の商人として同業者に一驚を喫せしめしは明治三十八年日露戰役の時、當時第十一師團御用達として乾坤一擲戰用シャツ四萬枚を請負

つた一事である。これを機として氏は更に洋雜貨の前途有望に着目し、茲に實弟勇記氏と協力大々的に店業の發展を策した時に氏は二十八歳、爾來孜々營々夜に日を繼ぐたゆまざる努力と鋭意店業の發展を期した活動は數年ならずして確乎不動「クリヤ」の名聲を獲得した。

然して大正十二年現在の堂々たる店舗を新築、斷然近代的商策に則る流行の尖端を歩み、所謂明るくして這入り易き確な店の定評を以つて始終一貫顧客に十二分の信頼と満足と與

へ、徒らに廉價の美名に狗肉を賣る舊商業方策を排撃して専ら堅實なる發展を期した。この眞摯なる氏の誠實はそれを反映して今日高松一流の洋品店として内外の偉容を誇るに至つたのである。

加ふるに温厚の天資は信望を集めて現に多額納稅者高松實業界の重鎮としてさきに商工會議所議員たる事二十數年、繁忙の身を介せず目下副會頭に推され高松商工業の發展に捧げつゝある努力は又大いに多とする所であらう。

高松冷蔵製氷株式會社

高松市内町高松冷蔵製氷株式會社は資本金三十萬圓、拂込二十二萬圓を擁し大正十一年の創立にして、目下食料品その他冷蔵並に一日約七千貫の製氷を高松市及其附近に供給して生活文化に掉し多大の貢獻をなしつつある。

凡そ夏期に於ける食料品の貯藏調節ほど至難を語るものはない。殊に鮮魚、鶏卵、果實、野菜、牛肉、クズシ、菓子等總て腐敗性の食品は冷蔵する事に於て完全な調節の目的を達

し、而して一般文化生活者の需要を満たし得るのであつて近時生活の向上に基くこの種施設の絶體的必要は農林當局の極力本事業を奨勵助成に努むるを見て明かである。

同社の冷蔵装置は創立當時農林省の指導と嚴重なる検査を経た最新設備にして、約三十坪の冷蔵室は盛夏常に二十五度内外の低温に調節され實に理想的裝置を整へ、加ふるに技術の熟練、料金の低廉、又取扱ひ丁寧等は委託物に損傷を來た

さしめず、かくて時代の要求する大衆的冷蔵機關の重要使命は完全にはたされて居る。

さればさきの苦心に今は酬ひられて、水産農産加工食料品其他の委託冷蔵は絶へず庫中に充満の盛況を呈して居る。

現事務取締役中村新一郎氏は會社創設を發起し設立以來經營に當りその宜しきを得て社業日に進展しついで昭和四年十一月日東製氷高松工場を買収し事業は愈々盛擴を築いた。

固より創業當時の苦心經驗は想像だに許さぬものあり、未だ一般は冷蔵の如き理解尠くこの難面を打開に不撓不屈の重役従業員の功績は實に大なるものであるが今や同社は昇天の如き勢ひを以て本縣冷蔵製氷界の王座に鎮座し事業内容愈々

堅實にして株主配當の如きも年一割を持続しつゝ、尙且餘裕綽々たる業績を示せる事は之ひとり同社のために慶すべく賀すべき業程と謂はなければならぬ。尙現在重役は左の諸氏である。

専務取締役	中村新一郎
取締役	久米房藏
同	木村淳
同	枝松胖
同	千葉久太郎
同	大西愛三郎
同	鎌田連
同	宮村通三

日本勸業銀行高松支店

本縣金融機構中一般普通銀行業者近來の傾向ともするアンチ不動産融資主産の中にひとりその獨特の機構機能發揮し

て、不動産大歡迎特別低利融通の大旗をかざし大正十一年以來驚異すべき活動を以つて、本縣産業上に記録的貢獻をなせ

るは日本勸業銀行高松支店である。

こゝに同行の存在が、全國的特別使命の特殊銀行たる所に一般金融機關のそれとは別様の存在ではあるが、國家的機關の同行の機能をなほよく理解せずして、金融上の苦惱を語る

ものがある。

洵に迂遠の極みとは謂ふ。同支店は去る大正十一年二月二十日、當時營業中であつた株式會社讚岐農工銀行を合併勸銀高松支店の名の下に進出の一步を發した。爾來滿十一ヶ年このかた本縣產業史上に燦然たる貢獻を綴りつゝ、行務の進展又驚異的數字を示し特にその不動産金融と各種公共事業の助成融資は縣民の齊く感激すべき協力寄與にして、爰に同支店業績の一斑として數字は次の如く流れるのである。

舊農引續當時の貸附在高	
不動産抵當貸附	六五七口
公共事業無抵當貸附	一〇一口
計	七五八口
合併十一ヶ年間に於て貸出せる總高	
不動産抵當貸附	二、九八七口
公共事業無抵當貸附	五〇四口
計	三、四九一口
同期間内に償還を受けたる總高	
不動産抵當貸附	一、五八〇口
公共事業無抵當貸附	二三五口
計	三、七〇八口

(單位千圓)

計

昭和八年一月末貸附現在高	一、八一五口	一〇、二七三口
不動産抵當貸附	二、〇六四口	四、二五八口
公共事業無抵當貸附	三七〇口	五、六一七口
計	二、四三四口	九、八七五口

右によつて觀れば同店では過去十一ヶ年間に於いて千八百五萬四千圓の貸出を扱ひ、其の反面に償還を受けた高も亦千二百十七萬三千圓に及び、現在一千萬圓近くの貸附を保有してゐる。

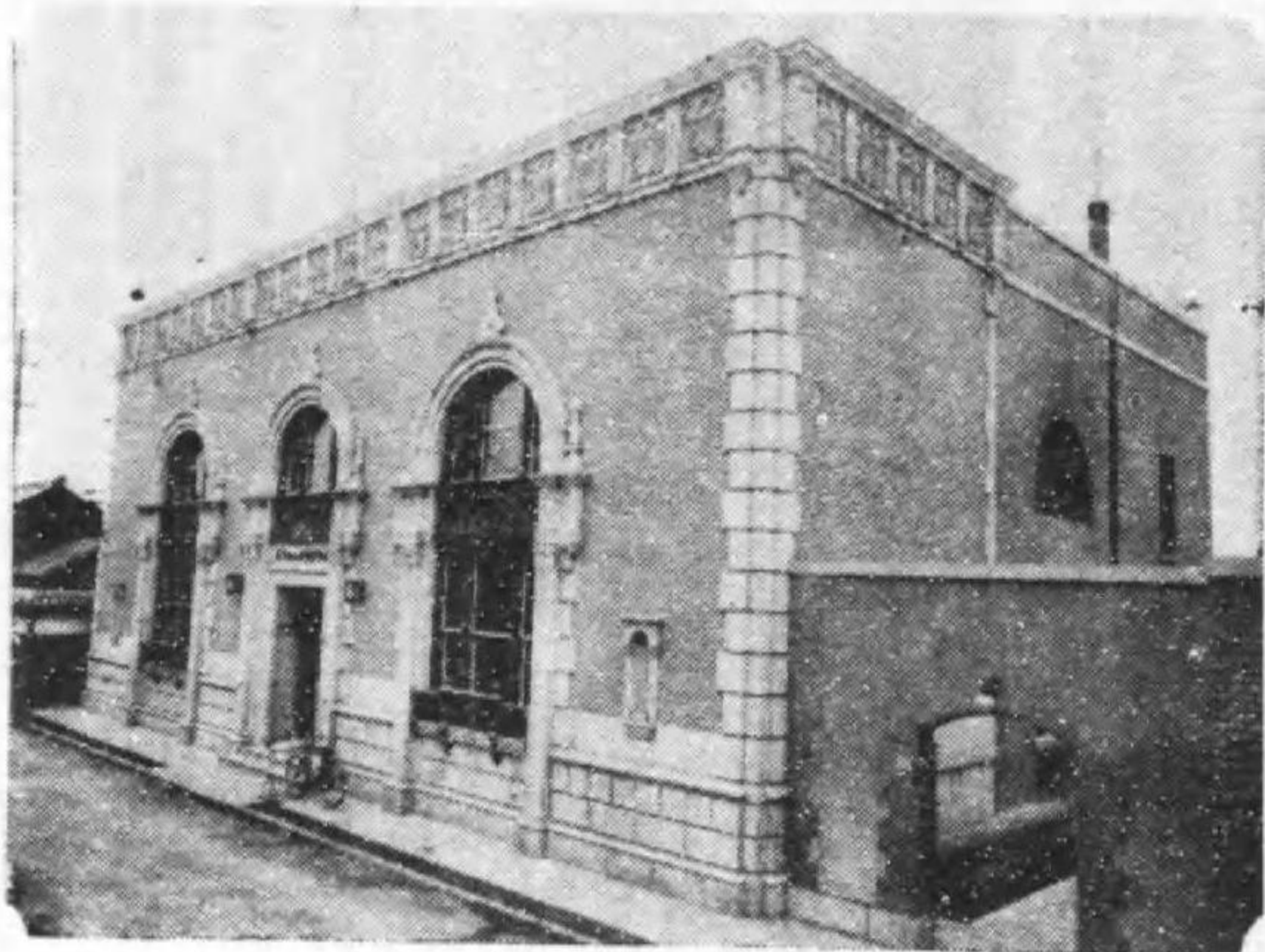
若し之を開店當時の僅々二百九萬四千圓に比較するときは驚くべし五倍に當る躍進にして、其今日までに縣下に放出された貸附高も實に千八百五萬四千圓の多き上なるが、此金融機能の發利さは縣下一般業者に教示する所大なるのみならず其放出金利の如きも遙かに低位にあり、仍つて各利用者の負擔を軽減し産業上至大な貢獻も窺知されるのである。

現下の諸情勢からしても低利長期資金の供給は各方面共時匡の一法として重要視すべきで、此時に於て之を使命とする同支店の飛躍こそ特筆に値するであらう。

同行の長期資金は例の勸業債券に據り而して既往十一ヶ年

に縣下から吸收せし債券應募額は四百廿五萬三千圓にして、此吸收資金と放出額千八百五萬四千圓に對比する時、其投入された資金の恩恵は餘りにも大なる事に驚かざるを得ない。

如斯同店は縣下の爲異常の活躍を續け渡邊前支店長の如きは自ら縣下各町村を行脚し實踐的效果を收め得たが、現任横山支店長も亦前者に譲らぬ努力家であつて、嘗て濱



松や鶴岡の前任地を開拓して來た經驗と手腕を以て七年三月中旬着任以來まづ第一に何でも顧客本位に寄りつきよい店に

しなくてはならぬと言ふ親切主義を行員一同に鼓吹し、貸附其他諸般の事務に就ても迅速主義に實行して面目を一新した更に第二には同氏年來の主張として郷に入れば郷に従への信條から其の任地に入れば逸早く事情に精通する必要があるべきを理察して、石渡主事と協力し短期間内に縣下の産業状況から金融状態をすつくり吾物にして、爰に基いて進展方策を講ずる等全く吾意を得たものである。

夫れに據ると現在縣下に於ける不動産抵當の負債高は四千三百萬圓もあるに拘はらず、勸銀の取扱ひ高は未だ僅に其の一割にしか當らず、又一面縣下の田地總反別三萬九千四百町歩に對して精々三分一厘より抵當に取得して居ない。

更に畑地に至りては一萬千四百町歩に對し、其取得率僅に九厘にしか當らずとの事であつて、爰に於て目下の地方農村の重大問題たる負債整理、あるひは産業資金にしても勸銀の低利資金利用は一私見を離れた實際問題として、確に現下農村經濟の救済法たるべきは自明の理で、幸に銀行當局の意又茲にありとせば同支店の存在は縣下農村に至大な幸福なる影響を齎らすべきものとはなつて居るのである。

尙同店の地方に於る組織及陣容は左の如くである。

地方監理官内務部長 鹿野 三郎
地方顧問 牧 伴五郎

支店長 横山 敬輔
主 事 石渡忠四郎

中國銀行高松支店

本據を岡山に置く中國銀行はさきに大原孫三郎氏を頭取とせる第一合同と、土居通氏の山陽銀行を合併に由り、昭和五年十二月二十一日成立された中國金融界屈指の大銀行である。



而もその絶大の信用は資本金千五百萬圓、預金總額一億一千萬圓の巨額を擁し今や獨り山陽一圓を勢圖とするに止まらず、廣島、兵庫、香川、其他隣縣各地の主要地に支店を設置して旭日昇天の隆々たる業容を誇るつて居るのである。

然して高松に驥足を伸ばした同行は高松市目貫の丸龜町に堂々白堊の一美觀たる高松支店をはじめ縣下二十餘ヶ所に支

店、出張所を設置し躍進も又目覺しき進境を辿つて居るが、今やその預金高一千五百萬圓、貸出六百萬圓を示し縣下金融界の双璧として嚴然たる金融地盤を築いてゐる。

殊に現支店長守分十氏は昭和三年姫路支店長から舊合同銀行支店長として赴任した同行の生粹の少壯銀行家にして、鋭敏眞摯なる事務家には大原頭取の信任特に厚く、現同行支店長中最もその將來を囑望されてゐる逸材である。

氏は中國銀行に改稱されると同時に第一次高松支店長を受任し、且四國支店出張所總監督たるの要務を擔へるを見て氏の總身を窺知し得べきであらう。斯の如き氏を支店長とする同行高松支店の營業方針には又異とする所多く、曰く從來何れの銀行業者も専ら預金重視に流れ單に預金の數字にのみ汲々として居た。

ところが氏はこれを銀行本來の眞使命にあらずと爲し、且時代は正に斯くの如き不親切なる利差專念を許さざるの趨勢を看取して進んで時代の要求する方式、即ち金融業者は常に商工業者と密接なる關係を保持しその内容を熟知し、資金を扱ふ善良なる顧問であり、時には共存共榮の立場に於て指導をもなし以て地方産業の開發に金融業者としての當然の使命を果すと云ふ高貴な對蹠的精神を以て營業標識と爲して居る而して亦曰く一般業者は慣習として自己の營業内容を極力秘

すの弊あり。氏はこの弊風を打破、以て商工業者の健全なる提携を圖るは最大の急務なりとして鋭意努力して居るが、この時代的營業方針は近時市内商工業者をして共鳴せしむるに至り、その實績はよく全國支店銀行稀に見る好績にして本縣金融界に於て異色の寵兒となし光彩陸離たるものがある。
斯く進む氏は他方對内的行員に對しても寛嚴よろしく人格陶冶を第一として修養に努めしむる等は、實に銀行業の重大性を知る用意として極めて周到と謂ふべきである。

讃岐信託株式會社

さきに大正十四年我國に初めて信託業法の制定さるゝや、乾天雨露に會するが如くこれが經營會社設立の聲は翕然として起り續々實現を見たのである。これ實に我國經濟史上記録的事實にして且潑刺たる時代の曙光であつた。

固よりこの信託業務が現金は勿論一般證券、不動産、保險金の保管、諸取立等本業と附帶を通じて個人並に法人の財産物に對する一切の擁護保全を生命とする所に異常の歡迎を博

したのである。

斯の如く時流に投じた我信託業は以來加速度を以て發達し既に今日では我國經濟界に確乎たる分野を築いた、然もその組織取扱ひ内容に至つては極めて進歩的にして、敢て諸外國にも遜色を見ない完備と健全なる發展である。かくてこゝに激成された信託業も一は法律の地域的制限保護の恩恵に因る事勿論にて、又該事業の堅實性も蓋し茲に存するのである。

讃岐信託株式会社もこの恵まれた環境に育まれ、今日の盛大を來したのであるが、同社は、大正十五年二月本縣財界の大御所鎌田勝太郎氏以下有力者の提唱により資本金二百萬圓拂ひ込五十萬圓を以て創設された。この如く財資保全を觀念して生れた同社は、以來金銭、有價證券、保險、不動産等の受託を主に附帶業務としては家賃、債權の取立て及び家屋の保管等機微にわたつて誠實熱誠の營業を續けてゐるが故に、創業日尙淺きに拘はらず目下受託者千數百名、金額約三百萬圓に上り毎期相當の受託増加率を示してゐる盛況である。

而も同社幹部は常に自社の合理經營を以て同信託利用者の利益を助長せんとする一般方針は、それが本來の使命に忠なりと謂ふべきである、かくて同社の創立功勞者鎌田氏は昭和四年社長を退くや、かふるに高松財界の長老北村荀吉氏が就任したが、同社の現實陣容を一瞥しても縣下隨一の信託會社として自己財産の安全地帯たる信頼は寄するに足る事を肯定される所である。

殊に支配人原田豊氏は嘗て二十數年間縣下金融界の王座百十四銀行に職し、計數と金融道を了得せば信託財産の運用利殖管理には妙諦を極め不振の今日と雖も相當の成績を納め、社礎を強化しつゝあるは又祝福すべきであらう。目下同社の重役は左の諸氏である。

社長	北村 荀吉
取締役	宮武 恒造
同	武田 謙
同	入谷 哲平
同	佐藤 員善
同	中村 新太郎
取締役支配人	大西 禎夫
支配人	原田 豊
監査役	鹽田 忠左衛門
同	都崎 發太郎
同	鎌田 連
同	鎌田 勝太郎
相談役	鎌田 勝太郎

讃岐貯蓄銀行

高松に本據を置く讃岐貯蓄銀行は、さきに銀行條例の改正に基き貯金と預金の分別を以て普通銀行は商業資金事業資金を取扱ひ、貯蓄銀行とは人をして節儉も積るの貯蓄心を養ひ更に零碎の資を以て不知不識に集積し子女の養育、修學資金あるひは結婚、企業、養老祝壽等の資金、所謂感ぜざる少資を以て感ずるある大資を造るの賢明なる用意を慫慂した意義深き庶民的の金融機關とした。

爾來絶大なる信用の下に異常の發達を來し、遂に現時の如く普通銀行の壘の摩すの觀を呈するに至つたのである。

株式會社讃岐貯蓄銀行が創立當時、即ち貯蓄法規の改正直後恰も地方金融視察のため來縣せる時の黒田大藏省銀行局長が當時の知事佐竹義文氏と談話中たまく貯蓄銀行の須要缺ぐべからざる所以を力説し、且銀行設立を勸説するところがあつた。

同知事亦それを痛感して縣下財界の權威者鎌田勝太郎、井上耕作、中村新太郎の三氏と鼎座談合の結果、遂に縣下金融界に一新機軸を劃する資本金百萬圓、讃岐貯蓄銀行の創立を見るに至つた。

時は大正十年まもなく現南新町に堂々店舗を新築、縣下貯

蓄機關隨一の本店銀行として縣民多數の福利を主眼に不斷の努力を爲し、多數庶民階級の要望に相呼應し逐年隆盛に赴きつゝあるが、今日預金總額六百萬圓縣下各地に散在せる出張所代理店總計三十ヶ所、其内容堅實にして且信用は縣下各地の公共團體並に産業組合等庶民階級唯一の利用機關として機能發揮しつゝある。同行の營業一般としては、

▲定期積金 ▲普通貯金 据置貯金 ▲中小工業資金融通

等にして、特に貯金全般に亘る所得税並に資本利子税免除の特典あり、尙創立當時の趣旨に鑑み一變動常なき株式放資の如きは嚴禁し、安全第一主義をもつて一般預金者の利益を顧念し現下經濟界の不況に際會しても尙易々貯蓄銀行としての特異的機能は謳はれて居る。

しかし關係各重役は何れも縣下財界の錚々を網羅せるは同行の偉容を更に巨大ならしめると共に、一般的信用の博大を語るものである。

現在重役は左の通り。

取締役	鹽田 伊三郎
同	武田 亮太郎
同	鎌田 晃

同	細 溪 宗 次 郎
同	武 田 謙
同	都 崎 發 太 郎
支配人	龜 友 廣 吉

監 査 役	鎌 田 虎 太 郎
同	香 川 金 三 郎
同	洲 崎 準 一
相 談 役	鎌 田 勝 太 郎

不動貯金銀行高松支店

不動の大精神と確固不拔のニコ／＼主義をモットーとして業競熾烈なる縣下金融界に介入し独自の境地を開拓しつゝある株式会社不動貯金銀行高松支店は本縣支店銀行中その歴史古く既に二十餘箇年の長日月を経てゐる。従つてその信用と一般的認識は敢て地方銀行と異るなく日進月歩よく縣下貯蓄界に毅然たる業容を誇つて居る。

固より同支店今日隆盛は謂ふまでもなく同本店の不動的存在に因る所にして抑々不動銀行はその創立すでに一般各銀行と趣きを異にし獨特の彩色あり明治三十三年現頭取牧野元次郎氏が獨力僅々二萬五千圓の小資を以て敢然銀行業を企劃したこれ同行の濫觴である。

以來幾多の變遷を経つゝ大黒神をマスコットに一人一業ニコ／＼主義を高唱し相互扶助共存共榮を旗幟に異常なる奮闘努力を續けた。かくて恰も燎原の火の如く何ものも焼き盡さざれば熄まざる氏の信念は大正十年遂に驚くべし一億圓を突破し次で同十五年二億圓に達するや豪放不羈の牧野氏は更に一步を進めて五年五億圓計劃を樹立發表し、業界をして驚異啞然たらしめた。

これ古語の曰く「精神一到何事不成らざらん」。牧野氏の熱誠と努力は滿五ヶ年の昭和六年爰に完全なる成果を納めた。即ち創業卅周年の今日預金總額五億一千十三萬七千圓、資本金又八百萬圓の巨額を抱擁し、支店を設置すること東は北海

ら西は鹿兒島に至る七十四ヶ所、東京芝大門に堂々たる輪奐の美を誇つて本邦金融貯蓄界の大銀行として君臨するに至つたのである。

この搖ぎなき本店を背景に立つ高松支店が異大なる信用と隆盛を誇りつゝある所以も又察知される。

然て本店の偉業が一朝一夕の事にあらざる如く同支店も亦幾多の苦心をなめてゐる即ち高松の地に營業を開始したのは明治四十三年日露戰後世は文物燦然の和平時代であつた。かくて市内通町に代理店として發足した同支店は本店のニコニ

コ主義に則り只管業務發展に努むること四年餘、本店の隆盛と共に代理店亦預金激増大正三年願望爰に達成されて支店に昇格し同時に本據を市内樞要の地兵庫町に移し新に支店長として藤浦猶藏氏本店より來任、大々的に發展を劃した。

當時藤浦氏は文字通り不眠不休の活動を續け同支店今日の基を築きかくて逐年躍進を續けて昭和七年現支店長北田哲郎氏本店より着任氏は更に一大飛躍を期しつゝ、現在四百萬圓の預金高を有しこゝに縣下金融界に獨歩の地位を確保活躍してゐるのである。

岡山合同貯蓄銀行高松支店

高松市片原町に店舗を構へた岡山合同貯蓄銀行高松支店は夙に本縣金融界に於ける異色の存在を爲して居る。同行は明治廿八年岡山市に創立され大正十一年二月高松支店を設置した。凡そ銀行を語るにはその資本と預金額の多寡を以て率するを常とする。

然らば同行は如何にと云へば資本金百六十二萬圓内拂込資

本即ち純資金は僅に五十七萬三千圓これを以て預金總額は二千七百五十餘萬圓、この人員約十五萬人その利益金半期に七萬餘圓とは如何に資本少にして預金の多額又預金額に比して利益の寡少この一事となほ所有證券國債其他投資の瓶別常に機宜を得、又所有土地、家屋、什器の評價積立金等その何れを見ても比類なき内容の堅實と謂はざるを得ない。故なる哉

同行に連なる重役は何れも中國財界の雄にして貯蓄銀行業務の本質と業者の無限最大の責務を自覺し且其努力砕心の程を現實雄辯に具現して居るものである。

而して同行の利益配當は創業以來かつて年五朱を出でず只管内容の充實を意とし所有財産の評価を低め償却に意をそ、げば株價はこれに反比例して漸騰を示して居る。斯の如きは實に零碎なる預金を蒐集する貯蓄銀行本來の使命に誠實なるのみならず、専ら預金の安全に意を注げる其營業方針こそ世の不用意なる銀行業者をして顔色なからしむるの高額にして

同行の面目も躍如たるものでなければならぬ。

この本店に支配された高松支店も亦貯蓄銀行の眞使命に基き本縣商工業者の發展に資すべく創設され貯金收蒐の外貯蓄銀行法による堅實なる貸出しをも懇切に扱つて居るがかくて同支店はその堅實性を認識されてか一人の集金員を置くのみの外多く窓口預金にして尙百六十有餘萬圓を算し、逐日業績の進展を示し毎期の支店勘定の如き極めて好成績にあるとは支店長笹光氏が本店の方針を嚴守して合理的經營の賜であらう。

愛國貯金銀行高松支店

庶民大衆の安寧慶福を助長せんとする趣旨から全く特異的立場に頼り創設された株式會社愛國貯金銀行が高松の地に支店を創設されたのは大正元年にして、今を去ること實に二十年前であつた。尤も當時は南新町の一角に恰も滄海の一粟の如く微々たる一代理店として百十四、不動、安田等の銀行に伍し「奢侈は亡國、貯金は愛國」をモットーに庶民階級に潜

入してひたすら同行の認識獲得にこれ努めた。

當時代理店長は元香川郡長近藤縮往氏にして、今日縣下に於て百餘萬圓の巨額に達する預金を占むるに至つたことも一に以て後圖を策した同氏の周到なる營業手腕に因る所大なりと言ひ得べく、所謂霜を履みて堅氷に至る萌芽時代の遠大な營業方針をこに今日の基礎は胚胎し業容を燦然たらしめて

居るのである。

元來同行は大阪に本店を有し、創業實に明治卅一年の古豪にして、支店並に代理店を關西主要の地に設置し社會奉仕國利民福を主眼として、共存共榮の趣旨に則る時代の營業方針は漸次社會民衆の信用を博し逐年業績振盛を極め現在總預金高僅に二千五百萬圓を遙か超過し全國一流銀行の中心に在り更に貯蓄銀行別にして正に十二位の上位にあるは如何に同行が堅實にして全國的貯蓄銀行なるかを認識せざるを得ない。

高松支店素より以上の營業方針を踏襲して堅實を金科玉條に群雄割據の縣下金融界に着々歩地を築き絶大なる信用を博

した、大正九年四月支店に昇格、同時に渡瀬繁榮氏が支店長に就任し、昭和三年小森鐵市氏と更迭する八年間専ら業務の發展に努めその間現在の如く堂々たる支店を建築外容を整へ同時に内容亦發展して、預金高百萬圓を突破するに至つた。現支店長富岡豊喜氏は昭和七年五月小森氏に代つて來任したが多年本店にあつて敏腕の令名あり亦前任者の遺鉢を継ぎ全社員を督して行務の發展に奮勵努力しつゝあつて、今や同行は縣下金融界の雄として牢固拔くべからざる存在を示し最近の業容は益々盛況を加へ他面地方の産業開發には低利の融通をなして一般農商工業の發展に貢献しつゝある。

香川第一無盡株式會社

縣下東京の庶民金融機關として高松市今井戸筋に据然たる香川第一無盡株式會社は大衆的要望に應じて、大正十五年十二月創立を見てより僅々六年餘この短日月にも拘はらず、閏年隆盛に赴き現契約高二百五十萬圓を突破し、一般本格的金融業者をして瞠若たらしめるの業況は誠に偉なる哉と言はざ

るを得ない。これ同社の信用と不斷の努力によるべきは勿論、他面縣民多數の理解透徹に基く所である。

而て爰に同社の事業を説くに當り一應我が國に於ける無盡創始の概念を摘記する。元來無盡なる語は我國古來から自存使用された金融機關上の言語にして、所謂頼母子講用會なる

語は等しくこの無盡の一亞流たるに過ぎぬ。

惟ふに明治より大正の初期に涉つてこの種用會並に講會が恰も雨後の筍の如く簇々發生し、その傳播繁衍は遂に所謂用會屋或は講會ブローカーの徒輩を跳梁跋扈せしめ一般無辜の加入者をして憎むべき欺瞞的詐術に涕泣せしむるのみならず更に純美なる日本古來の庶民金融機關を惡辣にも邪道に導く結果を招來するに至つた。

かくて幾歳か彼一部の不道德者によつて冒瀆されつゝあつた庶民の金融機關は俄然大正十四年無盡法の制定公布に倚つて恰も惡鬼雲霧を散ずる如く法の偉力は嚴正であつた。それと共に無盡の妙味は競ふて合法的組織内容を具へた會社を信賴委托の風潮を瀰醸するに至つたのである。

かくて同事業は駭々乎として發展獨特の妙味を發揮して遂に今日の如く庶民唯一の金融機關として全國總契約高十數億圓の巨額を誇り國民をして強く明るき生活に誘導せしめつゝあるのである。

香川第一無盡會社も亦叙上の由因に依り現專務堀川忠文常務大崎繁次郎其他重役諸氏提唱の下に大正十五年資本金十萬圓を以て設立され、以來會社本來の趣旨により敢然時代の要

求に合致せる營業方針を以て銳意縣下幾十萬の庶民階級に無盡利用の得失を力説普及に努めた。

然るに創業當時の同社は四圍の無理解と愚な惡宣傳を流布されたが好惡何ぞ正義の前に敵するを得ん。創立僅か六ヶ年餘の今日二百五十萬圓の契約高を計示するに至つた。

この現實證明こそ同社の社會的認識と堅實性を雄辯に物語つて居るが加ふるに專務堀川忠文氏は軍人出身清廉にして崇高なるその人格と而も武辯稀に見る經濟的手腕を有する老練の士にして、斯の如き社會的事業に携はる誠に適材適所と言ふべく、氏の存在は蓋し同社の威信を一段重からしむるものと稱しても敢て過言でない。

なほ氏に配する百戰練磨の大崎繁次郎氏あり。今や同社は縣下最大の無盡會社として一般庶民並に中小商工業者無二の金融機關として發展しては居る。尙重役は左の通り。

- | | |
|-------|--------|
| 專務取締役 | 堀川 忠文 |
| 常務取締役 | 大崎 繁次郎 |
| 取締役 | 堀川 忠一郎 |
| 常任監査役 | 日下 晋吉 |
| 監査役 | 松原 利章 |
| 同 | 多田 丈之助 |

三越 高松支店

天下の強豪三越が奇縁にして昭和六年三月一日華々しく高松の中心街に於て盛大に開幕さるゝや潮の如く寄せ打つ大衆は文字の通り無慮幾萬の日は暫し續いたのである。

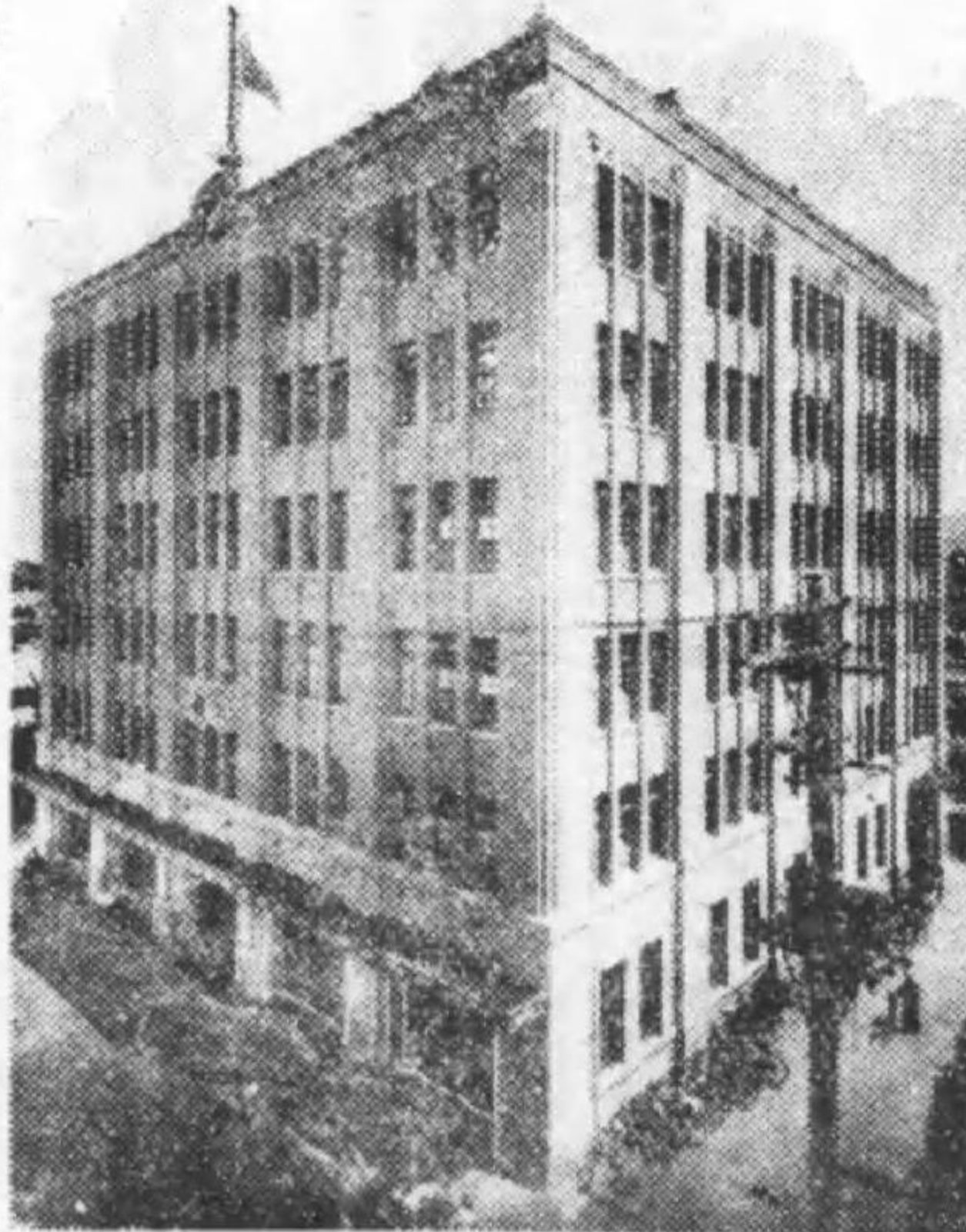
その後の今日と雖も相當の盛況を見せて居るが、三越のこの盛觀を眺めて將來の高松商工業のために敢へて數歩をあゆめば抑も時代文明を表徴し精華を擔つて出現した三越は時代がデパート三越を存在せしめてゐるのである。

かくて三越支店は慣習の一部高松商人の頭上に三越を通じて進化の鐵槌を下せる事も否定し難き事實である。

即ち移り行く時勢に盲目の者ありとせば、それは自らの求むる當然の悲哀でなければならぬ。爰に觀じて三越の出現は尠らく四國の玄關高松の將來に與へた明朗なる曉鐘であり、且偉大な生氣でもあらう。

而して斯く解する以て許さるゝなれば三越の出現は近き將來轉禍爲福の悦を招來せざるべからざるものなりと期待せざるを得ない。何となれば時代は既にこの矜持と發奮を促すや

切なるものありければである。夫れ高松商人としては三越を認識粗上に上し常に敵を抱擁の雅量を持つ所にその進展性あ



りと云つて敢て憚らないが過言であるまい。爰に高松三越の商則と獨特性を再認こそ必要であらう、三越は最近資本金三千萬圓に増資し、名實共に我國百貨店の王座に鎮座して本店の外數ヶ所に營業所を持ち、驚異的繁榮を誇つてゐる。

この時高松支店の第一次支店長たる三浦勉三氏はかつて大阪支店に十数年勤続し、才氣縦横の敏腕家であつて、氏は三越支店の使命と本領に就いて次の如く語つて居る。

「私共の店は常に消費者と生産者の中間にあつて最も單便に商品の配給をさせて戴く事を使命とし、如何にすれば御客様に良品を廉價に然も便利と満足を願へるであらうかとばかり苦心を拂つて居ります。只私共商人は一途に商品をお渡して代金を頂戴すれば我事成れり終れりと考へればそれは商業道徳に反したものと考へて居ります。

故に私共と店を生活させて下さる最も尊敬する御客様に對して飽くまでも誠意を披瀝して居ます殊に皆様が商品を買はれ實用に供されて、最後の快感と満足される事を以て私共の

本懐とするのでありましてそれを信條とし理想として全従業員は精進して居ます」

以上の如く敬服すべき信條を以て三浦支店長以下數百名の店員は一意精進して居る。而して同店が常に品物を賣る以外更に本縣産業上に特殊の貢献を爲して居る事は全國の同本支店を通じて本縣特産品を紹介販賣せる事である。

現に足袋、麥稈帽子、手袋、漆器、下駄、日傘等特産品はその重なるもので更に三浦支店長の希望としては自今如何なる生産品と雖も時代向商品の資質を具備せるものはどしどし取扱ふと謂ふに至つて三越高松支店の出現と存在は高松八萬市民に對して餘韻も床しき一大刺戟を與へると同時に本縣産業界に明朗な一揆をかしたものであらう。

本縣産保多織と岩部幾太郎氏

本縣織布機業界に特産品として歴史も輝くものは保多織である、而して其の保多織は元祿年間に發し爾來幾多の研究考案を加へられて現時の織柄に到達大衆的認識を獲得して居る

のである。

目下讃岐保多織の一權威として雄名を馳せて居る高松市丸龜町岩部幾太郎氏はその先代恒次郎氏以來該織布普及のため

に一意貫重な努力を捧げ且老舗である殊に恒次郎氏の如きは明治二十三年頃この特産保多織の不振にして正に絶根の危機に至らんとするやこれを遺憾として斯業を創始し發奮よく新

機軸を作り遂に今日の盛況を馴致せしめた。



現に縣下を通じて製織されつゝある緋廣巾敷布中形染衣地、紋着尺物ハシカチーフ等は多く此の

研究に基く製織に係るがこれ等は何れも地質堅牢にして輕快優美夏季に好適を謳はれ普及愛用されて居る、當主幾太郎氏は夙に先代の壯志を繼いで斯業を經營するや本縣一般機業界の幼稚なるに鑑み、大正八年率先香川縣織物同業組合を設立

し又香川縣保多織研究会を組織して一つは縣下機業界の振興を期すると共に歴史も古き保多織の新生命を開招に當つた。かくて研究の結果遂に從來の、保多織の外に一異趣の絹綿混織物を創造しこれを讃岐紬と命名し、秋冬季の適品として大衆化したがこの時代的紬は一躍世に好評を博し目下各種保多織と共に、讃岐製織界の寵兒として、全国的に品價を謳はれて居るこゝには岩部氏の、本縣製織産業界發達のためにする挺身的活躍努力があり氏の熱誠は近時縣下斯界の動向に反映してその特産保多織及紬に對し一般的、認識尺度を大いに高め居る事は、斯界のため、其前途祝福すべきであると共に岩部氏の功績又没すべからざるものであらう。

尙氏は自業の外多年商工會議所議員其他公的方面にも不斷の貢献をなし高松商工界の一偉材である。

下津燐寸株式會社

高松市の樞要地二番丁に於て一千餘坪を劃し一大工場城廓の下に古色歴史を語る燐寸製造工場こそ縣下斯界に悠然獨歩

し繁榮を誇る下津燐寸株式會社である。同社は濫觴を高松燐蟻社に發しその名は世人に膾炙たるものがある。

今や同社の羽翼は全國津々浦々に擴大強化して、驚異的發展を續ける所以にもその濫觴に於ける高貴な社會的使命を確守するところにある。

蜂蟻社は明治十二年時の治政變遷後藩主松平伯が創設し、明治十九年に至つて先代下津永行氏それを譲り受け以來下津製燧所と改稱經營し來つた。その後四十二年先代下津氏歿後現授一氏之を繼承して勇躍今日の發展を遂げて居る、氏は當時雨後の筍の如く簇々たる縣下各地の業者と協調或は合併して縣下斯業の健全なる發展を劃し、更に世の進運と業界の趨

高松合同運送株式會社

現下高松市が四國の關門として本州四國を連結するに國鐵連絡船及自動貨車航送等船車の便を以てするは近來交通文化發達の賜にして、これが本縣産業に肅す恩惠は又實に絶大である。然して今やこの國鐵を通じて發着する貨物は一ヶ年十萬噸を超へ、更に地の利は將來の發展に伴ひ一層遞増の趨勢にある事は明らかである。

爰にこの莫大なる貨物を鐵道當局の指定によつて一手に引受け送達の任に當るは歴史も古き高松合同運送株式會社である。

同社は現在資本金十萬圓の株式會社にして、昭和二年鐵道當局の一驛一店主義に基きさきの内國通運、國際運送明治運送等の各運送業者が一丸合同し一店主義の指定を受けて現勢

の發展を來したのである。内國通運はもと安藤貞雄氏の經營にあり、五十餘年前山陽鐵道開設以來の古き運送業者として貢獻に、全國的にも斯界の元老とされ居た。

以來幾多の變遷の後大正十二年貞雄氏の歿後氏の女婿現取締役藤澤宣尋氏が擔任經營して居たのである。又國際運送は久保潤次氏の經營に屬し明治四十年頃氏が憲兵を辭して後斯業に従事して居た。

更に明治運送店は田所萬藏氏の經營にて三者は鐵道省公認運送店として互に鐵道を中心に運送に角逐したものである。斯くしてこの競争裡にあつた業者も當局の主義に基き合併して同社を創立運賃及手数料は公定料金を決定して業界を堅實ならしめると同時に、産業上にも貢獻しつゝあるのである。かくて本格的に創立された高松合同運送株式會社は其後本

縣陸運の要務に前記三者は各々得意の義務を分擔し更に粟林支店を設置して鐵道貨物及一般貨物運輸の大任を盡して居る。就中久保潤次氏は大鐵豫設線指定運送店組合長及同社粟林支店長として斯界に重きを爲し且その該博なる經驗と濃厚はさきは市會議員商工會議所議員として貢獻し藤澤氏又敏腕人心の機微に通ずる經營家として、今日同社營業の第一線に奮闘しさらに田所氏は別に自動車部を擔任し西は琴平東は引田に至る貨物混載定期道線を掌握し各々専念邁進して居る。尙同社重役は左の諸氏である。

取締役	久保潤次
同	藤澤宣尋
同	田所萬藏
同	安藤市次
同	佐藤市次
同	佐藤市次

加藤海運株式會社

49
凡て商工業の發達は交通文化に負ふ所が多い、而して交通文化の精華があらゆる事業遂行上に無限の活力を添へ且つ發

展の基根を爲すが、故にその絶對なる恩惠に與る多き地方の産業は自然發達成長を招來するのである。

爰に高松を中心とし西日本一帯の海上運輸界の寵兒として活躍を続け発展して居るに加藤海運株式会社がある。今を去る約五十年前ではあるが、同社常務加藤常太郎氏の祖父加藤彌太郎氏は東濱町に回漕業を創始し以來堅實に海運業を續けて居た次いで明治四十五年長子先代常太郎氏營業を繼承するに及び早くも氏は瀬戸内海沿岸海運の將來を著目してその理想を實行に移した。即ち加藤海運商會として發動機船に依る組織的貨物運輸を開始したのである。

天なる哉時は此の剛健なる氏に恵む所多く事業は次第に伸展し加藤海運商會の名は瀬戸内海々運界の雄として旭日昇天の勢を示した。その後支店を神戸に又大阪、宇野、尾ノ道等西日本樞要の地に設置し、大々の運輸網を布陣して運輸船は自船備船を合せて百數十隻、一萬噸を出でんとする赫々たる盛況を呈するに至つた。

同社はこれよりさき昭和四年氏が飛躍の姿勢としてその事業を資本金五十萬圓の加藤海運株式会社とし貿易の地神戸に本社をおき令弟豊市氏業務を統理し大阪支店には三弟忠義氏を配置氏は高松にあつて自ら統督劃策し優に高松總輸出入貨物の約七割を運輸司るの外四國中國九州の各港貨物輸送に就

いて居た。

然してこの間先代常太郎氏は海運事業の以外に目もくれず又深く自他を誡め唯一途に、精進して居たが其處には更に遠大なる理想の秘めしを推知されるが何ぞやこの海運界の驍將加藤氏は昭和五年七月其業未だ氏に俟つ所多きにもかゝらず僅に十數時間の二豎を得て卒去した。

當時高松實業界の人々は巨人加藤氏とその海運界に盡せる功蹟と偉業に對し深悼の情切々たりしものがあつたがこれ氏が生前の全貌を語るものにして、而も嘗て高松商工議員にえらばれる事三回、後二回とも信望を擔つて副會頭の要位に推され直接高松商工界に盡瘁しつゝあつたのである。

かくて暗夜に炬火を絶つに似た加藤海運は父を失つた悲報にも次の組織は疾くに構ぜられて居た即ち長子文氏の實務的修練のそれにして氏は今や父を襲名して常太郎と號し現社長加藤豊市氏と共に殆ど家族的會社は精神的連鎖も緊密に本縣海運界は勿論西日本運輸界に貢献しつゝある。尙同社の幹部は左の如くである。

社長 加藤 豊市
常務取締役 加藤 常太郎

取締役 加藤 忠義
監査役 入谷 豊

同 濱口 本藏

株式會社讚岐工藝社

高松を中心とする瀬戸内海々上國立公園は時代の要求自然の命として近く實現すべきも、此大自然の豪壯神秘的風景美は實に我讚岐に恵まれた天資であるが。此天下に冠絶し誇る景勝にいま産業的拍車ともなすに相應はしき名産讚岐彫拔漆器のある事は又誇るに足る、就中株式會社讚岐工藝社は近時業界にあつて異色の發展をなし、専ら彫拔漆器並に和洋家具を製作し自ら清新の天地に聲名を馳せてゐる。

同社は大正十三年資本金十萬圓を以て現重役諸氏の發起創立と同時に現五番丁の適地約五百坪をトシ工場を整へ業向を一般業者未踏の洋家具製作に定め打てば響けよの精進を續けた、されば努力は京都共進會に出品して時の攝政宮御買上げの光榮に浴して一躍全国的に賞讃の的となり、家具界を風靡したのである。

然るに其後一般財界の不況の重壓に世の産業戦線はおしなべて萎靡不振を極めた勿論同社もこの痛苦に沈淪しつゝ一意これが打開に苦心の末逸早く經營の合理化新製品の考案等所謂漆器家具界の尖端を歩み活路を求めた。固よりこの期こそ同社の歴史を彩る一大受難時であり、經營の苦心は又慘憺たるものであつた。

斯の如き犠牲と貴き試練を経た同社は年と共に漸く基礎安定し不況の言葉に聊か免疫性を感じるに到達せるはこれ洵に同社のために祝福すべき事である、殊に同社の特に強味とする會社の構成には、社長に熊田長造氏、専務の牧伴五郎氏其他重役諸氏あり何れも縣下一流の錚々たる有力者を網羅し一瞥對外的信用を標識される所である。

されば目下主として生産する洋風椅子、テーブル、コビー

益その他一般彫抜き製品は阪神、名古屋の大デパート三越、大丸、松阪屋、高島屋、岡山天満屋の如き一流商店に取り引され、その如何に美術的商品價值の高雅なるかは多く辭を要しない所であつて、更に全國博覽會、展覽會等に於ても常に優秀なる好績を示して居るが、これを要して同社の現實隆々たる存在は正に勝地高松發展に拍車をうち他面由來ある讃岐美術工藝に一大彩光と強化を點するものと言ふべきであらう因に同社現在重役は左の如くである。

取締役社長	熊田長造
専務取締役	牧伴五郎
取締役	細溪宗次郎
同	大西虎之介
同	武田謙
監査役	中村新太郎
同	千葉久太郎

岡内製薬所と千金丹

世に健康か黄金か健康に優る黄金なしとは謂ふが極めて名妙な言葉である即ち一健康の獲得のために文明人の多くは不斷これを念慮し闘争を續けて居るこゝに、古くから高松の名物として健康のために貢献し讃岐は金比羅宮と共に同じく人口に膾炙たるものに靈藥岡内の千金丹がある。

この千金丹の名の下に縣下藥業界の重鎮合資會社岡内勸弘堂は今日の隆盛を齎したがこの間には幾多の苦難と努力の歴史が綴綿と秘められてゐる。明治、大正、昭和に亘る春秋四十年の長年月は妙藥千金丹の聲價をして遂に牢固として拔くべからざる古今獨歩の地を固めしむるに至つたのである。

抑も岡内勸弘堂が現在の如く縣下藥業界の雄として高松市南新町に堂々たる店舗の威容を誇る、そこには岡内喜三氏が卓越した商才と敏明を以て粉骨碎身店業の發展に努力が宿して居る。

氏は明治二十四年民間に於ける製藥事業が將來必要にして有望なるを想起し、清涼劑千金丹を創製したがその千金丹は一般に意外の好評を博し賞讃の的となつた。其後明治二十九年村雲尼公が本縣御來遊の砌り測らずも船酔ひを感ぜられ、この時岡内謹製の千金丹を御試用遊ばされて即刻御快癒しその驚くべき靈藥千金丹の偉効を激賞直ちに感謝狀を賜つた。

この感謝狀に喜三氏を始め岡内一門は感激し爾來一層の努力を製藥調劑の上に用ひて向上發展を期した。

かくて千金丹の名聲はいよ／＼四海に轟き明治三十七八年日露戰役勃發するや氏はこの風雲に乗じ一大飛躍をなし、越へて大正七年には組織を資本金十五萬圓の合資會社岡内勸弘堂と改め斷然縣下藥業界の王者として君臨するに至つた。

喜三氏の業を繼いだ現店主徳次郎氏又千葉藥學專門學校出

身の新智識を以て時勢の進展に伴ふ經營方針に則して四時店務の刷新を圖り今や内地は勿論遠く臺灣、朝鮮、支那、南洋、印度に及び殊に創設四十年來の販賣地區たる三重、岐阜以東關東奥羽の如き毎年四百名内外の行商員を派し呼ばず叫ばずして巨額の賣上げ高を示してゐるが、この如きはその藥的信用の一斑を窺知し得る所であつて、同所は千金丹の外「延命一心丸」をも製造しこの兩藥は同店獨特の責任藥にして就中「心丸」の如きは各種高貴藥配合調製の妙藥にして特に、中曇、急性吐瀉病、痢病、婦人脫血、産前産後病、驚風其他小兒諸病熱病などに特效あり。製藥調劑に當つては多年經驗をつめる天弘調劑主任以外全員沐浴齋戒して自己を清め神佛に禮拜して手を下すとのことである。この如くして調製する靈藥千金丹は洋藥萬能の現代にも時代を超越した不朽の名聲を誇つてゐる。

本縣輪界の元老井筒長太郎氏

今や交通文化の發達は驚くべき勢ひを以て光の如く、又時間と距離を短縮し以て人爲の偉大さを示しつつある。この裡

に單易と利便に由つて殆んど全部的普及を見たものに自轉車がある。

今や自轉車は誇る國産の名に於て易々樂々都鄙を通じて日
常缺ぐべからざる單易交通武器とはなつた。

本縣に於てこの自轉車が始めて乗用されたのは明治三十年
頃であつた。然るに今日では十餘萬臺をも數へて居る。この
縣下輪界にあつて先覺者功勞者とする人は市内南新町井筒長
太郎氏である。

氏は明治三十年頃一外人乗用の自轉車を一見し文明の利器
の偉大さに驚き直に意を決して之が販賣普及を着意した。し
かし當時は未だ縣下を通じて自轉車其物を知る人として數ふる
の程度に過ぎず、故に氏が創業に當つても酷く冷笑嘲罵をあ
びせるあり、一方需要者また尠く自轉車と謂へば轉ぶものな
りとの先入主には施すべもなき状態であつたが、三十四年
郵便局に始めて一臺納入し手とり足とり四十名に操作を教へ
た。この情勢にして營業又遅々たる勿論、斯て事業は缺損に
つぐ缺損の中にも氏は不撓不屈唯自己の信する目標將來の發
展を期して猛進した。

この頃氏が販賣の自轉車は米國製のクリブランド及デイト
ン號及ピアス等何れも百圓以上の高級車であつた。その後安
價にして外觀よく更に乗易き英國式ラーチの販賣に轉じ、次

で日露の戦端開かるゝや需要は頓に激増し營業又漸く殷盛を
極めて、爰に從來の健闘は漸くにして酬はれ、井筒のラーチ
かラーチの井筒か自轉車の優秀と共に井筒氏の名聲は斯界に
跳躍を續け此順調な業況に、氏は過去の苦境を精算して將來
への基礎は築かれたが其後歐洲戦亂に自轉車界は輸入全く杜
絶し同氏の店業にも好まざる影響を招いた。

この時岡本製ノーツ號市場に現はるや氏は先んじて國産
愛用の先驅に起ち大いに活躍し、此のノーツ號の輕快堅牢
は漸次舶來自轉車を内地市場より驅逐するにいたつた。

かくて昭和五年一月、氏は感ずる所あり竿頭一步を進めて
斯界の先進地愛知縣龜崎港に尾州自轉車工場を設置經營し、
メートル號、ミット號の兩車を製作しつゝあるが、その兩車
共堅牢にして優美而も價格低廉すでに關西以西に名聲を轟は
れて居る。

この如く井筒氏はよく時代を明察し、これが臨機應變の妙
を得て今日の繁盛を來したのであるが、特に氏の奉ずる世の
景氣不況に拘はらず内經費を節約し、常に價格以上の價値あ
る品物を顧客に提供する實踐的薄利多賣の貴重な信念は本縣
斯界に功人の面目と信用を以て日に發展の歩を進めて居る。

証券問屋堀池直義商店



さきに小作爭議に累されあるひは借家爭議に手をやいた都
鄙の有産階級は米價奔落、金問題等さまざまの社會現象經濟
現象に一つは煩を避けんがため、二には一時的貨殖の便法

と自己の財産擁護にその所有
する土地、家屋その他不動産
は擧げて換金し、あるひは有
價證券に又は銀行預金等に轉
向して利用された。如實現在
の如く經濟機構の變遷と發達
よりすれば、寧ろ煩多き土地、家屋にその所有する財産の全
部を托するは蓋し萬全の策にあざるや明かであらう。

故に少くとも自己の財産の利殖と保全に一部乃至大部を輕
妙なる有價證券に投下運用する事は極めて賢明なる方策かも
知れない。

斯る見地から一般有價證券は完全に普遍大衆化されたが、
今本縣にもこの經濟的趨勢に乗つて證券の流入は莫大なる數

量に上つて居る様である。然るに爰に思ふべきはこの貴重
なる有價證券の取扱ひに一點の疑義と危險を感じなければなら
ない。第一微妙なる經濟界の波動に關心を持つ事であり、更
に又これが直接賣買を托すべき株式店の選擇であつて、この
間苟くも輕々の誣りある時はその害實に測り知るべからざる
ものがある。

目下高松市を中心として縣下株界に雄飛し、一誠以て斯業
に邁進大衆の信頼を博せる人に堀池直義氏がある。氏の業に
も嶮坦あり、その祖先堀池半助直實氏は嘗て松平藩の家老と
して謹直の士そして直義氏は明治八年高松に生れ、十一歳の
時故あつて綾歌郡松山村の豪農渡邊氏方に起居したが、兩米
刻苦同家の爲に計り其温厚にして至誠は痛く渡邊氏を感動せ
しめた。

かくて四十一歳同家を辭するまで春秋三十年人生の殆んど
を同家に捧げたのである。言葉こそ三十年であれ誰かこの長
年月を一日の如く勉め盡し得るものぞ。常人の爲す能はざ

るや遠しと謂ふべく、四十一歳ふと感ずる所あり郷里高松に
 歸省した時は大正五年である。
 不惑の氏もこゝに環境を急變しては顧みて逡巡せざるを得
 なかつた。即ち舊來に愛着を感じ、又末踏の野邊には不安だ
 にあつた。然し最早思案すべくもなく深思世の大勢を洞察し
 て將來有價證券業の特に有望にして、且現實高松に斯業渺々
 たるを思つて決然外磨屋町二五番地に株式現物業堀池商店を
 開業したのである。

然し當時にあつては株式に對する世人の理解未だ幼稚なる
 のみならず、投資と投機を混淆し、甚だしきに至つては故意
 に譏諷、中傷、牽強附會の惡説を流布する等、早くも思はざ
 る困難に遭遇した。蓋し信ずる所あり、ひと度壯志を立てん
 か世評の如き何んぞ、超然として唯々堅實なる株式投資の普
 及と世人の啓蒙に精進した。

かくて大正八年世界大戰後好況の萌しを見るや一般人士の
 有價證券に對する認識漸く動き、それかあらぬか市内某有力
 者數氏主唱の下に資本金十五萬圓の證券賣買高松商事株式會
 社の創立を見た。同時に懇望あり氏は營業一切を纏めて會社
 に合流し支配人として入社した。

然るに大正九年財界の大變動はまだ設立日尙淺き同社に最
 大の打撃を與へ、遂に社業挫折の止むなきに至つた。こゝに
 於て氏は大阪市北濱株式仲買軒氏を中心に同好の士と再び證
 券業の確立に腐心したが、如何にせん事意に滿たず。よく曰
 ふ「好事魔多しとか」この諺の如く氏は心中感慨切なるもの
 あり。沈思熟慮遂に數年前の堀池にかへり雄々しくも七轉八
 起の決意を秘めて、外磨屋町にふた度證券現物業を開店し
 た。

これぞ今縣下株式界に雄飛躍進しつゝある同店の本流であ
 つて、以來受難波瀾の曲折を経験した堀池氏の證券業は漸次
 進展、遂に今日の大をなしたのである。この間長子利夫氏は
 學窓を出て直に大阪一流株式店に店員として斯業を呼吸し、
 經驗をつむや歸店して父子相共に同業にいそしみ目下主とし
 て活動して居るが、氏は其事業に熱と着實の眞劍を以て經營
 しつゝあり。堀池氏の人格と徳望、更に利夫氏の信條とする
 客の利益、即ち店の利益至誠一貫絶へず證券所有者の善良な
 る顧問を自負し、今日の如く世界經濟の變調に際し又現下我
 國經濟界の一大危機等、あらゆる經濟的不幸の虛實纏綿たる
 に際して同店は獨特の調査研究により顧客の注意を喚起し、

し、その歸趨の見解に信頼の念をあつめて悠々濶歩する所

はよく縣下斯界の一異彩をなして居る。

躍進する鎌田氏の錘印醬油

高松醬油醸造界にあつて錘印醬油の名の下に近來躍進の歩
 も目醒しきは、高松市栗林町
 鎌田次太郎氏のオモリ印醬油
 であらう。この經營者は鎌田
 長八郎氏の四弟次太郎氏であ
 つて、大正四年に創始し、本
 業に着手する以前は令兄長八
 郎氏の鑄物製造業に従事して
 ゐた。

然るに多數兄弟の中にあつ
 て、その一人位は祖業と別個
 の方向に進むも亦一興として
 兄弟合議の上企劃されたのであるが、大正四年現在の場所



醸造場を新設以來令兄長八郎氏等の協力を得て、一意新事業
 に邁進しつゝ、その進展は、實に瞻目的なものであつた。

特に次太郎氏は品質本位小賣本位の經營方針を以て臨んだ
 事に因つて品質の優良は凡ゆる宣傳を超越した日本醸造協會
 近畿支部品評會その他各種の機會に輝く表彰を受けて萬丈の
 氣を吐いて居る。

創立日未だ淺くしてこの地歩を占めてはその商勢逐年に擴
 充強化さるゝ事は寧ろ當然にして、従つて醸造規模の増設と
 なり今や五百坪に餘る木の香も新しき醸造工場は飛躍の一途
 を辿るのみにして、令兄の鑄物製造場の發展と共にその華や
 かなるべき將來性も刮目されて居る。

矢野ワイエムゴム工業所

近時都市の態勢は概ね商工業に倏つと論ぜらるる勿論多くの事實は鮮にこれを語つて居る、近くは坂出の躍進又今治市の跳躍振等何れも各々工業生産に於て潑刺味を見せて居る思へば天利薄倖の高松に於て工業都市の強靱性を副へんとすればこれを何れに求め且つ拓かんとするか。その尊き疑問のそして重大なる謎は正しくこゝにあらう。

しかし道は自ら人これを拓き天蓋不盡の寶庫も又人に依つて開かれるのである。唯それは理想の實踐化と熟慮斷行を以てのみ解決されるであらう。爰にその目標の下に直往邁進し高松産業の名に於て氣を吐き雄々しき飛躍を續けて居る世にも隠れた産業として市内花園町ワイエムゴム工業所があるが、まだ、創立日向淺きにかゝわらずよく本縣ゴム工業界の寵兒を以て自らを開拓精進して居るのである。

同所は鹽上町矢野稔氏専ら重心となつて經營し特に奇異とすべきは勞資協調自治的經營組織をなす事で、縣下事業界にその例少く極めて興味ある經營法であらう。故に其處には自

ら勇躍と平和の氣韻が現れ、上下一致常にうるはしき共同意識が更生して居る。

したがつて主として生産する源平宛轉其他年四萬ペイヤの各種自轉車タイヤは品質他を壓し雄名を馳せて居るが、矢野氏は木田郡林村出身であつて、現に鹽上町に於て自轉車營業所を有つて活躍して居る。

昭和五年氏はその營業と密接不離のゴム工業に着眼この經營を決意して地を現工場に定め二月起工六月完成を見て、直に操業した。殊に人材を擁し設備の完全は小なりと雖も稀に見る工場として自ら誇る所であつて。同工場ではゴム類一切の製作修繕をなし就中ゴム臼齒の如き縣下農事組合の試験成績に於て賞讃を博して居る。

斯く同所の製品は何れも優秀にして輪界の一存在をなすが之矢野氏の人格の反映とそして、共に榮へ共に樂しむ高貴な信念の結晶である。

今輪界に誇る加賀リムもそは加賀山中に發祥し今日の大

をなした如くやがてワイエム工場生産のタイヤも勝地高松

の全幅を擔ひ一層の進展を見せるであらう。

安藤宇太郎氏と養鶏飼料



嚮に急迫する一般農村疲弊の自家對策として各種の施策は強調されたが、就中縣下の副業養鶏は最も有効適切なる自匡の手段として決河の如く普及發達し、今や一般農家は養鶏を以て農業經營上進歩と合理とを併有する基本化すに至つた。

即ち其産卵と自家肥料の兩生産は優に從來の單農計算を覆し更に一步商業的工業的見地に研究飼育する時其利潤は測知し難き妙味あり、若しこれが汎實踐化の所には悲痛なる農村の自力更生とか、又は自匡だの、言葉を單に必要以外の辭となすに難くない。然して凡そ世の人事は總て研究が課せられ向上と進歩はこれに伴つて局面は打開されてゆくものである。

固より養鶏と雖も研究と努力なき所には與へられる筈もない。近時驚異的進展を見て居る本縣養鶏界にも漫然着手の飼者は常なき卵價の高低飼料の騰落に一撃二蹙し生鶏の瓶別飼料の良否、鑑別等常に不覺を往復して遂に全損する實例は數へて追ない程である。

これ等は何れも研究と努力の不足に基因して來る當然の歸決にして、斯く觀じて現代農業經營と副業養鶏は絶つべからざる自助關係を發見するが將來益々斯業の健全なる發達は之を期待せざるを得ない。爰に養鶏飼料製造家高松市鹽上町安藤宇太郎氏は農業と副業養鶏而して飼料の重要關係に於て自ら養鶏の機微を究め其營業以外一般農家にそれを指導教示し、副業養鶏の發達に多大な貢獻を爲しつゝある。

同氏は豫て我國に輸入する鶏卵の巨額と更に養鶏の副業的價值及び將來この普及を必定として決然養鶏飼料製造に着目

した。時は大正十五年三月にして其後氏の豫想は見事に適中し、縣下の養鶏熱は高調躍進して遂に現況の如く殆ど縣下農家の全部に普及するに至つた。

この間氏は飼料の研究製造に苦心し又自己飼料の販賣は養鶏の實際からとてこれをモットーに一理一註を究め自ら一般農家の指導に當る等その努力はとても常人の及ばざるものがあつた。同時に氏が創意せる丸A印混合飼料は養鶏飼料として各主精分量の配合適宜使用して經濟、與へて單易等眞に理

想的飼料として一般斯家の認識を得縣下は勿論四國、中國養鶏家組合に異常の發展聲價を博したのである。
今日丸A印飼料が斯界に獨歩の發展こそ氏が其の事業經營にも不斷農村大衆の利益を意識する崇高なる信念と誠實に結ばれた成果にして、且本縣養鶏が近々五六ヶ年にして約百十萬羽の急激なる發達を醸し農村更生に資しつゝある、その一面には安藤宇太郎氏の如き眞摯な努力家の啓示的功績も數へらるゝであらう。

証券業の小磯定一氏

世界的不況の深化に破壊された世の産業陣營再建に今や農村救済中小工業者融資等……政治的應急對策が破局に直面した社會的要求として凄壯にも叫び續けられたが、この上更に對外的重大關係を加へて爲政者も非常時國難に善處すべく眞に必死の努力を須ひて居る。昭和七年來對内的不況の緩和に資すべくインフレーション政策を實施し物價高と金融の緩和鎮靜を考案されたのである。

而してこの非常時的變態的更生政策實施の途上にあつて殊に世の景氣のパロメーターたる株式證券の如き、その歸趨は興味深々たるのみならず、又逆堵すべからざるものあるは關心すべきであらう。
こゝに於て高松市古馬場町高松證券株式會社常務取締役小磯定一氏は縣下斯界の俊雄として馳驅し波瀾萬丈の中に証券業者たる氏の貴き體驗と信念は注目し値する。即ち曰く

- 一、業者は絶対に自己思惑をなさざる事
- 二、一攫千金の夢を見ざる事
- 三、支拂金は午前受取金は午後
- 四、業者は絶対手數料本位の事
- 五、業者は特に自己の素行を慎む事



其の他氏の信條とする一切は何れも首肯するに足るものにして、要は第一項目己思惑警戒に歸して居る。

凡そ人は神ならぬ身の一

度思惑を建て、利を見れば結構ではあるが、それと反對に損せる時は、挽回策に苦慮、焦燥は又當ならぬ。これ投機と投資との岐るゝ所であつて、氏の營業方針の手數料本位の堅實は、こゝを指して居る。此氏を語るに十五歳の時、小學校教員の資格を取り、更に師範を経て教鞭に就き、轉じて大正三年三月二十七歳の折、郷里志度町の老舗米穀肥料砂糖商小磯屋商店を再興した。次いで國鐵志度驛の開設と共に丸點運送店を兼營、苦節十年にして異常の成功を収めた。

この間あるひは町會議員、商工會長、農事振興會名譽顧問電話組合長等に推され殊に身を商工會長の職にして尙且自ら荷車を挽き運送貨物の集散に従事する等粉骨碎身の努力は今尙愉快なる記憶だとは云ふ、

其の後運送店は知人に譲り、又從來の營業たる肥料、米穀砂糖商も廢して、有價證券取扱ひを開始した。然るに經驗乏しく初期に取引先の選擇を誤つたと、かの財界變動に際合して思はざる不覺をとり、忽ちにしてさきの資財を滅盡せしめた。

こゝに至つて氏は敢然として居を高松市に移し西瓦町二五番地に於て證券取扱ひ業を延長し昭和四年四月には有力者と共に資本金五萬圓の高松證券株式會社を創設し、市内馬場町に會社營業所を置いて堅實をモットーに努力精進しつゝあるが混沌たる現實證券界に小磯氏の如きは確に明るき存在の一人であらう。

オフセット印刷と光榮社

凡て現代は宣傳の時代と謂ひ兵は神速を尊ぶとか、若し戦法を先じて宣傳に求むる時戦は既に一步有利の展開をなす即ち國家の外交戦に見ても、時に正しき條理の下にも尙且巧妙なる宣傳を以て大局を眩惑し一時は心氣をも奪ふが蓋し不法にも宣傳の價値を認めざるを得ない事實である。

況やこの耽々たる劇しい社會生活戰場にあつて正しき宣傳の偉力こそ眞に驚異すべきあるは正に當然にして凡ゆる考案と工夫をこめた。經濟商戦に於ける宣傳の妙はよく他を制し凱歌を奏して居るこれ宣傳の時代なりとする所以である。

爰に時代の戰術印刷宣傳の任務を天職として社會大衆の良友を自負し宣傳の第一戦を馳驅しつゝあるに石版印刷業合資會社光榮社代表者山本庄司氏がある氏は幼にして既に宣傳の將來に着目高松印刷界の元祖松本讀高堂に見習ひ、更に十七歳にして壯志京阪廣島の各方面一流石版工場に身を投じて只管實地の苦闘を重ねた。

斯て數年修練の後胸に自信を得て歸高した氏は友人某々と

語らひ獨立自營の清美堂印刷所を經營した時は明治二十九年である。而して當時は極めて幼稚なる手引印刷にして、これに當つた同志三人は只その清き前途を祝して細々と立つ煙の下にも侵し難き且功成らざれば斷じて止まない。堅忍不拔の情が躍動して居て殊に山本氏の如き熾んなものであつた。

かくて努力は日に目にも見え數字にも流れ期待した成績を示したが、大正六年突如資本金二十五萬圓の日本印刷株式會社が創立され、爰に於て山本氏等經營の印刷所は恰も蠅螂の斧にも似たる皮肉な對照を描き遂に四圍の事情と懇望もだし難く山本氏及同志は發展の途上にある自己の印刷所を解散して日本印刷の傘下に入社した。

爾來株式會社日本印刷所の工場主任として獨得の才幹を振つて居た。氏は大正十年同社の基礎確實なるを認めて自ら退社し再び心氣を一洗年來の宿志石版印刷を開業した。

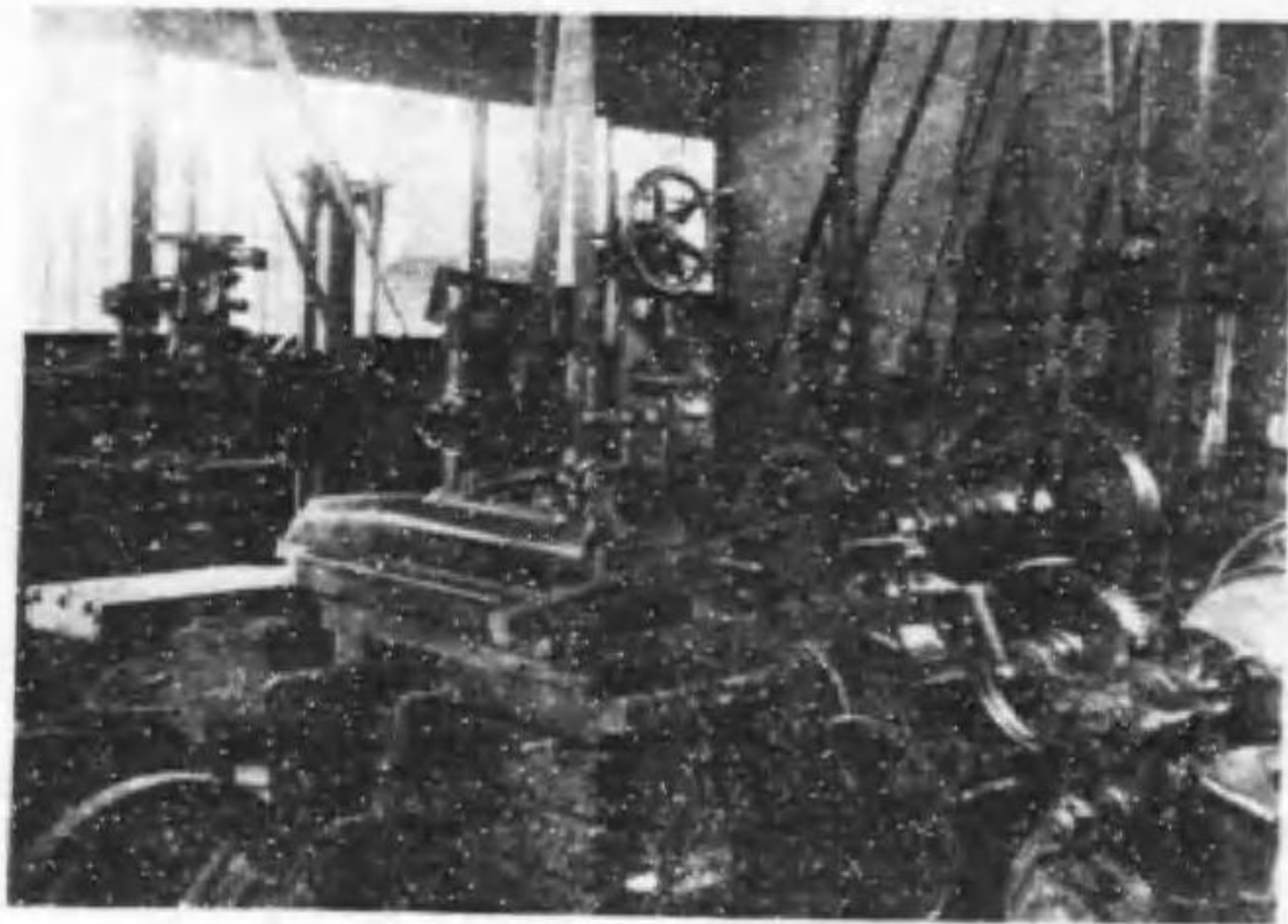
現光榮社は即ち山本氏等が七思八考新興の意氣にはぐまれた印刷所であるが以來氏は今日まで吾に印刷を措いて他に天

職なしの信念を以つて精進奮闘し殊にその自轉車外交は有名にして愛媛、徳島の如き三四十里に上る商用も長驅物ともせず東奔西走して遂に現況の發展を爲した。目下同社の誇る輪轉式ロータリーオフセット印刷機は四國隨一の最新超速度機

にして多色宣傳ポスター、レツテル、株券、小切手等の高級印刷は名實共に四國に冠たる聲價を具有し經濟戰士の役徳を買つて居る。

身を職工に起した池田芳太郎氏

およそ人の成功と否とは裏表僅に一線を異にするのみである。世に思ふべきは夕べに星を戴き朝戸出霜を踏む汝々營々としてつめる産も子となり孫の世となれば或る者は財を蕩盡して今や昔日の俸を止めず只徒らに幻滅の悲哀を啣つはこれ現代社會の過酷激甚な生活争闘裡に散見する痛ましく



も敗殘の光景である。又之に反し身を一介の匹夫より起し發奮精勵遂に名を爲し立志傳中の人として後世にうたはるることゝに於て前後は月鼈の差をこそ生むのであるが、爰に至るや結局其人各々の思慮と行進目標の懸隔たるを知らねばならぬ。

今高松市鹽上町池田鐵工所主芳太郎氏こそ立志の途上にあり氏がつむ星霜の半世経路こそ正に忍苦と精勵これにつゞられた貴き感激の秘帳である。

氏は幼にして生まれず十五歳の時より鐵工業を志しこれが修練に刻苦し經驗の月日は流れて最早氏に獨立自營の確信を與へられた。

大正四年意を決して現在の鹽上町にさゝやかな鐵工業をはじめた當時氏は營業資本僅に三十圓に過ぎず。この少資を以て工場を設け經營に當たれば總ての不如意は推して知るべく、しかも事業は初期の不振を加へて氏は只々強健な身體そのものを不滅の資として健闘を續けるのみであつた。

かくて大正七年努力は何時まで空しからず時運は繞つて歐州大戰後の好景氣來の初潮に際會せば、氏は時こそ到れとその全手足を延ばして活躍しめた。これ氏にとつて最初に訪

れた發展の恵まれであり、よくも時勢に對應した氏は鐵工所として漸次安固たる基礎を築き、めぐる世の盛衰を晏然として業界に飛躍して居るが目下同所は農用發動機並に一般機械の製作修繕を業務とし就中最も誇りとするヤシマ輕油發動機は構造簡單にして精巧堅牢シリンド及びピストンは最新式グランダ―仕上の優秀機である。なほ馬力の強大と燃料の寡少その經濟的特有性は斷然斯界を壓し、その人と製品は共に世に稀な光彩を放つて居るのである。

獨創の英才石岡宇三郎氏

現代の文化は科學の應用と發達をもつて人が人を制するの現實を致して居る。これ正に人間生活の優を競ふ現代科學文明自然の趨勢でなくてはならぬ。爰に於て發明とか考案が國家的にも如何に重要性を持ち且人類生活に於ける絶對的武器なる事を明證するものである。

しかして人間には誰にも驚くべき能力が生れながら備はり更に後天的各人の研究努力を以てする時は發明創造の如き敢

て難事ではない。これ即ち人智の偉大である。

こゝに好恰の例證として市内栗林町石岡宇三郎氏は自轉車荷受台を苦心考案しその銳利にして貴重な武器を鑄して斯界に雄飛今や俊雄の譽れを誦はれて居る一人である。石岡氏は廣島縣福山市に生れ十四歳の折早くも父に死別、高等小學卒業後實弟正義氏と共に大阪に出で自轉車商石岡賢一商店に入り、兄は自轉車の製造弟は販賣方面と夫々奮ならぬ忍從苦闘

の精進を續ける事七年、二十歳の時此處を退き岡山縣笠岡町江波自轉車店に雇はれた。その後高松支店設置に當つては氏は店員として高松に來たのである。

かくて間もなく同支店は廢止の運命に遭遇したが、こゝに爛眼の氏は決然江波商店と關係を絶ち高松の地に止まり直に獨立自營の計を立て遂に大正六年藤塚町にさゝやかな自轉車販賣修繕業を開業した。

その後元來製造家出身なる同氏は傍ら荷受台の製造をはじめ細々營業を續ける中に歐州戰後の好況は訪れ此時店を栗林小學校前に移轉して、業務の一大發展を畫した。今しも時運に努力を正調し然も人の和を加へた石岡氏の事業は見る／＼進展製品は他品を凌駕して抜くべからざる素地を築いた。

更に氏は大正十二年工場を擴張して現地に移轉工場機構を

整へ大量生産の陣容を以つて目下兄弟二氏は協力し親切をモットーに日夜研鑽製作する莫大な荷受台は縣下は勿論四國、中國九州に石岡式の名も高く驚異的躍進を續けて居る。これもとより氏が若年よりあらゆる修業を積み且人生行路の苦難をなめしその至誠に酬ひられたのであるが、現に氏が製作品中自轉車荷受台各種スタンド、サイドカー、リヤカー、半ケース等にわたつて七種類の新案特許其他サイドカー及びリヤカーの車軸受等八件の秀逸なる特權を授領せるは洵に心強く奮闘家の面目である。

氏は尙年尙不感當に人に接して誠實内職工と共に勞苦を實踐しその事業に對する不辭の熱意は勢ひ生氣濺刺にして、加るに舍弟正義氏の具眼と共に前途は更に洋々たるものありその後における濶歩こそ傍人の興をそゝる所である

誘蛾燈と倉本氏の苦心

本縣昭和六年度の米作減收に驚いた縣當局は、その對策として郡農會、村農會と共力し今後誘蛾燈の利用に由つて虫害

の防除を期して居る。固より油斷を大敵として此種被害の根絶を期するは一般農家の當然の義務である。而してこの被害

に對して絶大なる偉力を一揮した誘蛾燈、殊に高松市松島町四國農具商會考案の夫は誘蛾の上に殆ど全縣農村の賞讃を博したのである。

尤も四國農具の該誘蛾燈は製作者庫本茂一郎氏の貴き農村觀念による結晶として各部に種々考案をめぐらし、その特別裝置に於て燈火は強風に耐へ光力又強く燃油の消費過少等幾多の特殊性を具備すれば、本縣農會の認定推獎を受け昭和七年度の驅除盛期には疾風の如き急需利用を見た、その製作供給も瞬時にして八萬個に達すると謂ふ盛況であつた。

斯の如く害蟲根絶を心頭に活躍せる庫本氏は本來農村大衆を相手の糶摺機、製繩機等各種農具の製作に従事し常に農村の福利増進を念する所、遂に今回の如き簡單優秀なる誘蛾燈を創案したのである。

本器が他品の絶對追隨を許さざるのみか、氏は其他に既に

高松製燧所の躍進

近時高松事業界の一壯調として驚異に値する飛躍進展を遂

專賣特許新案等十六種の特權を所有し、之れ等は何れも氏が十八歳の頃小豆島草壁を出でしより名古屋及三重縣に於ける幾多の經驗と研究努力の賜にして、大正八年高松に現營業を開始せし以來その熱心と天賦の才はさきに昭和四年縣令に依る麥重量検査の施行さるゝやその計量器を完成し、今又効果適切な誘蛾燈を考案する等、洵に縣下農村に對して特記すべき貢獻にして、更に縣下農機組合の創設を以て斯界の向上發展を劃し、又率先町内自治組合の結成を唱へ創立するや選ばれて副長を勤むる等、その爲す所營業の私事は勿論自治公事に就ても常に時代的觀察を以て世を裨益しつゝあるが實に稀な奉仕的戰士である。

然も尙氏の人情味を知るに失業者、免囚等自己工場に多く使役し救済保護利導に當るその心情温かき發露こそ情意を併せて世の感激をそゝるものである。

げつゝあるに高松製燧所がある。即ち同所は市の東部御坊川

の河畔に工場を置き田丸喜助氏の經營に係るが、同氏並にその工場の全貌を通じて現代非常と混迷の一般經濟界に毅然たる何ものかを明示するものでなければならぬ。即ちこの難面に處して用意とこの意氣だに満ち充つ時には不況の辭敢て恐るゝに足らずとは爲すべく、唯多くの憾むらくは平常の用意足らざるにある。

現今非常時と謂ふ時代語を以て諷する非常時に製燧事業を以てこれを克服前進しつゝある田丸喜助氏この人こそ、八歳の時よりマツチ工場の職工として現下津製燧の前進近藤製燧所に這入つたのである。



固より小學一年を然も優等で修業、直に身を爰に投じた氏は以來その身の不遇を啣ちつゝ唯馬車馬の如く如何なる時と雖も無休一途精勤し其傍ら夜間苦學を續け以て其欠を補つて居た。かくて苦學を積む事十七ヶ年、此自己修養と而して工場に於ては主は替れど氏の精勤は亂れない精勤振りには何人も心賞して居たのである。

かくて下津製燧が、大同燧寸と提携する迄、實に卅餘年を勤續し、此間官廳の表彰を受くる屢々、昭和三年自己が恩愛を感じる下津製燧が、外人會社瑞典系統に係屬するに及んで、これを遺憾とした氏は遂に自己多年の經驗と、力行の貯蓄を資本に擲起し、昭和四年現在の高松製燧所を創始した。

この時にあつても所用の機械は殆ど資本の摩手に封ぜられ内地に施すすべもなければ、さては朝鮮大邱に於て調達した程で、この苦心又慘憺たるものあり、かくて漸くにして工場設備を整ふや、氏が永年の經驗暗々裡の研究を繕き、自己理想の燧寸製造と合理的經營等用意は着々として實行に移せば孤々たる社外高松製燧所製品も今や四國、中國、九州に意外の好評を博して業運正に旭昇の如くである。

これ全く田丸氏の貴とき戦法至誠力行動儉を一途に邁進するその信念に因るものであつて、多難なる世況に獨り毅然たる存在を許される所以もこゝにある。

馬場岩太郎氏と漆器具

本縣特産品中美術工藝品たる彫漆器は其の實用的價值と嶄新なる意匠施工に於て夙に全國的の聲價を博して居る。殊に近時一般の生活様式も頗に文化的傾向を來し、彫漆器類はその堅牢に於て益々普及の狀勢にあるが、名勝地讃岐の特産品としては最も相應しき産品である。

爰に高松市田町馬場岩太郎氏の製作に係る漆器具はその玉藻塗の名に於て近時内外に目覺しき發展を遂げ、高松漆器具界の代表的歩地を築きつゝある。

特にその漆器具は塗法に獨特の妙あり、氏の面目と器具の生命は固より茲にあるが、今や其の生産する漆器は高島屋、阪急百貨店、三越、大丸、十合百貨店等主として關西、中國九州一流漆器問屋の高段に陳列販賣されるれつゝあるがこれの製作品の眞價を雄辯に語る所であらう。

氏がこの特殊技術を以て斯界に誇り得るにも身をこゝに投じて以來約三十五年間、その苦心と研究の收穫なりとせば名工の修練又容易ならざるものがある。即ち氏が恵まれざる家

庭に生れ十一歳にして兵庫町栗田藤太郎の下に入り、旗幟塗を初歩とし次いで師と共に第十一師團兵舎の建築塗工に従事する事三ヶ年、其後塗法を修得した馬場氏は高松工務學校の製作品塗工に勤務中丸龜に入營し、歸郷後再び塗工として各所に雇はれて居たが、大正五年五月遂に龜井町に獨立漆器店を開業した。以來一層各種塗法の研究に専心し漸く氏獨特の妙を極め得たのである。

其後大正十一年十一月現在田町に營業の擴張を圖つて移轉漸く多年の奮闘努力は今日盛況を見るに至つた。その製作材料とする和松は安原村の自家材料製作所から、又南洋材其他は大阪より仕入れて居る。

然も氏が成功の今日と雖も常に多數職工に伍し分秒を惜しみつ立ち働く所、更に又町自治等に對する幾多の篤行はかつて市長より感謝狀を授かる等、洵に推賞すべき時代の人と謂ふべきであらう。

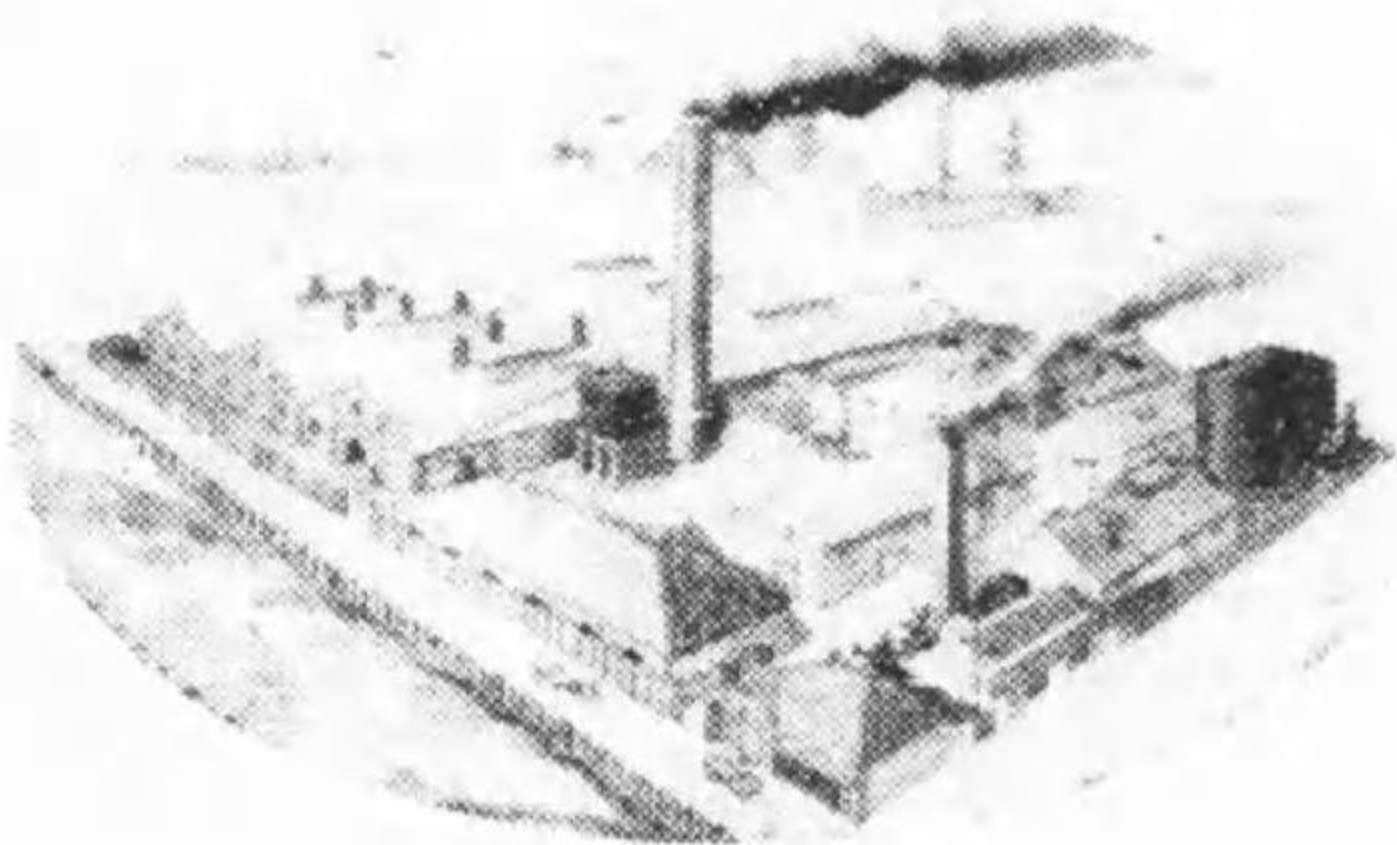
乾卵商店高松工場の苦汁工業

本縣に於ける純正工業生産品中、凡そ原料の自給自足にして製品又化學工業用若しくは藥用として重要用途を有つものは即ち炭酸マグネシウムである。

高松港頭を遙か左手に宏大千五百坪の工場には日夜間斷なき振動を響かせる、これ大阪に本店を有する株式會社乾卵商店の高松工場である。

同工場は華城實業界の雄乾卵兵衛氏の主宰する資本金各百萬圓の株式會社乾卵店及び乾卵食品株式會社の専屬工場であつて、明治

三十五年頃同氏が、縣下に生産する豊富なる苦汁の精製を着



目し、其後綾歌郡松山村に於て事業を創めたが大正九年現工場竣成と共に移轉して今日に至つた。

目下同工場は大坂高工出身新進の工場長福島誠氏以下數十名の従業員と近代的工場設備に由つて炭酸マグネシウム並に滋強飲料パービスの大量生産をなしその成績頗る良く、炭酸マグネシウムは概ねゴム原料並に藥用に供され、又パービスは滋強飲料として實に美味滋養精力の源泉とも云ふべき貴重成分を含有し當代の如く生活の繁劇に於てはいやが上に過度の精力消耗を餘儀なくされ、これ等大衆の精神的、肉體的疲勞、倦怠乃至は神經衰弱的病症に用ひて驚異的効驗を示す恰好の飲料であつて、これ等類廢的病因をなす體内有毒素に對しパービスは所謂乳酸菌の作用に因つて腸内防腐と腸自家中毒を完全に豫防するの卓効あり。その賣れ行き又逐年超増しつゝあるに徴してもその効果は明かである。

なほ工場主任福島氏は高松工場經營の意義として高松を中心とする香川縣は工場經營に極めて好適の地區となし、殊に

交通發達の今日では原料を移入加工して更に阪神方面に送致するも尙且剩餘利益ありと、同商店のパービス製造も即ちこ

の都合であると謂ふが、本縣事業界のためには大に了承すべき言葉ではあらう。

本縣養蠶界と片倉製絲の存在

我國輸出貿易の首位として斷然海外に氣を吐いて居る生絲に關する限り片倉製絲紡績株式會社は國家産業の上から云つても正に決定的な存在であらう。

片倉製絲紡績株式會社は資本金七千五百萬圓を擁し本社を東京に全國津々六十有餘ヶ所に工場を有し、その釜數三萬釜に及ぶ本邦製絲界の一大勢力であつて殊に、社長片倉兼太郎、副社長今井伍介兩氏は共に我國財界の雄として今更筆を要しない。

この外同社は傍系又は姉妹會社頗る多く。就中片倉生命、片倉火災、片倉米穀肥料の三社は同社關係者従業員並に關係養蠶家の安定と福利を主眼に設立された姉妹機關にして、如何に同社の經營構層が合理的進取的なるかを立證して居る。由來同社の營業方針は生糸が我國産業の要位にあり、且輸出

貿易の大宗たる重要性に鑑み、常に海外需要の動向を査察してこれが順應に努め特に品質の優良と規格の統一に心血を注いで居る。

されば西日本一帯の同社工場にはさきに六百萬圓の巨資を投じ御法川式設備を施せるが如きその一斑であつて、同社製絲が常に他絲を壓して優位にあり、その社業の良好もこゝに因るのである。

又同社が堅く把持する奉仕觀念は我が輸出生糸の世界的現勢が決して將來の晏如を許さぬ現況を關心して居るのであつて。故に夙にこれが根本對策として先づ我蠶業の合理化を主張し地方養蠶家と製絲家の提携を圖り、かくて品質優良を以て外品と戦ふ、而て優良の生糸は桑園の改良に桑葉は施肥の良否にとの信念に於て適切なる指導誘掖に努めて居る。

この大所高所の遠觀は纏て逼迫せる地方農村に多大な活力を與へ、更に國産生糸及び同社の名聲を高めた市尾楠上町同社四國出張所も勿論如上の方針によつて縣下一圓に羽翼を張つて居るが、同所は大正五年香川郡佛生山町に初めて縣下集繭場として設置された、後高松市に移り、同三年楠上町の現地に移轉した尙現所長井上保氏は岡山縣の出身にて未だ三十七歳新進氣鋭、この人こそ蠶業に依つて本縣農村の不振を開と併せて片倉製絲發展の重大使命を兩肩にかけて悠々闊歩して居るのである。

されば同氏赴任以來縣下養蠶の合理化を大呼し、直に片倉製絲特約組合を創設し、又は原蠶種組合を作つて優良蠶種の

配付と統一を策し、或は專屬養蠶教師十五名を縣下各地に派遣して親しく教導更に桑園の改良その他の場合は特に助成金の交附或は低資を融通するなど全く到れり盡せりの指導振りはよく縣下養蠶家の理解する所となり、すでに縣下を通じて七十三組合を創設し、二千三百名の組合員を抱擁して、着々緊密なる關係を築きつゝ優良組合には夫々表彰をなす等同出張所の縣下養蠶業發達のためにする先驅的歩みは必然自己營業にも頗る効果的であつて、かくて養蠶家も製絲家も双方共存共榮の歩調を以て、勤勞の利益追及とは少くとも時代の推移と要求を正解する輝かしき賀すべき商策と謂はなければならぬ。

平井實氏と慰安事業

高松市事業界に近來出色の人材としては平井興業株式會社の平井實氏がある。氏は今や高松市を中心に遠く鹽之江方面にも其事業的驥足を伸し天晴れ時代人物として名聲を轟はれてゐるが、其經營する歡樂の殿堂玉藻座、玉藻温泉並に琴電

瓦町食堂、鹽之江温泉旅館更に玉藻ホテル等偉大なる諸事業を通じて、これが縦横無盡の機略巨腕は只驚異と敬服の外はない。この偉大なる現況の裏にも氏の青年時代よりして一流の爛眼と刻苦があり、これぞ今日輝く同氏の面目にして且本

縣事業史の一項を彩る意義深き事實である。

氏は明治十八年木田郡田中村に生れ長じて粟島航海學校に入學したが、眼疾に依り中途廢學、その後早くも勃々たる企業意識は朗かにも躍動して居た。

即ち十九歳の折阿讃國境に於て人夫三百人を使役する山代を請負つたがしかしこれにはさすがの氏も生れて始めての思



はざる苦盃を嘗めた。かくて猫額大の一寒村に踏踏するを快しとせず高松に來り棧橋通りの知人佐々木炭店に徒食する中、當時西新通町に高島嘉兵衛門と云ふ易

者が出張の事を聞き、佐々木氏に金五十錢也を借りて運命の鑑定を乞ふた。

然るに料金は二圓乃至十圓にしてこれに驚いた平井氏はしばし書生と押問答を續けて居たが、その中高島氏は氏の熱心を感じし遂に所持の金五十錢也で鑑定を爲すべく協定は成立し鑑定の結果曰く「今は困窮を極めつゝあるもやがて西北位より福德あり、更に將來の運勢は驚くべき」との事であつた。

氏はこれを開き半信半疑の裡にもいさゝか會心の笑を齎し

直に八栗聖天に參詣して自己の現實打開の祈りを捧げたのである。不思議にも數日の後當時高松鹽務局長末松氏より鹽收納倉庫増築の必要から平井實所地の買入方の申込があつた

此時氏は茫然として何とした戸惑かとも思はれたが、熟慮すればさきに某請負入札に際して當時の慣行とする「だんご」金を地所で貰ひこれを某所に入質せし記憶あり既に期間を經過し流質とのみ思ひ居たものなるに、此吉報は確かにさきの曠易の途中であり與へられた福徳として欣喜した。

その後玉藻座を買収し經營に當たつたが大阪北區の大火に際して彼地に於て一大飛躍を試みるべく又あはよくば一攫千金をも夢想して勿々氏は上阪したのである。

この無謀にひとしき僥倖の夢には天これに與せざるは勿論にして何ものをも與へられずして孤影悄然歸國した歸れば玉藻座は比較的盛運を持續せるを見た、氏はこの玉藻座こそ我に與へられたる幸なりと痛く感ずる所あり。

以來蹶起これが經營に當り時代に先驅して逸早くキネマ常設館となし更に昭和三年九月同族を中心に平井興業株式會社を組織、又は玉藻温泉を建設して本格的躍進を續け、次で鹽

之江温泉鐵道開通と同時に温泉旅館花屋及虹の瀧別館を建設し、讃岐の寶塚として阿讃の仙境開拓に努め、又琴平電鐵地下食堂を經營し、宛がら蛟龍の昇天隆々たる事業的發展を劃したのである。

而して昭和五年十一月三日不幸玉藻温泉は不慮の災厄に際會して全館烏有に歸したが、豪腹そのもの、氏は敢て落膽の色なく直に再興を劃して現温泉を新築、引つゞき舊村井樓跡をして巨萬の資を投じ宏大なる玉藻ホテルを建築經營して遊

覽地高松に一大美觀を添へたがこの事業的手腕の量大は實にばかり知るべからざるものとも世人を驚倒せしめた。

而して氏の本事業に對する信念は近時の生活は各階級を通じて極めて複雑煩化し都會生活は勿論農村生活に於ても精神的所勞多く、これに對し安直なる娛樂慰安施設の必要は生産事業と共に近代生活上缺ぐべからざる機關なりとし、氏はこの要求する大衆慰安娛樂機關それを經營し、これを通じて一片の社會奉仕を致さんとするとは蓋し條理の言である。

讃岐日傘と上春商店

本縣の特産品として有名な存在をなす讃岐日傘は其業史を維新前に發し爾來重要特産品として要位に躍進して居る。而して目下高松斯界の合資會社上春商店は斯界の雄たるものである、同店は大正十三年資本金一萬圓を以て、合資會社を組織以來眼覺しき進展を續けてゐるが、其創始者にしてよく今日の業礎を確立した先代岩吉氏の功績は特筆に値する、同氏は明治初年すでに、傘製造業の將來性を洞察して知人に其製

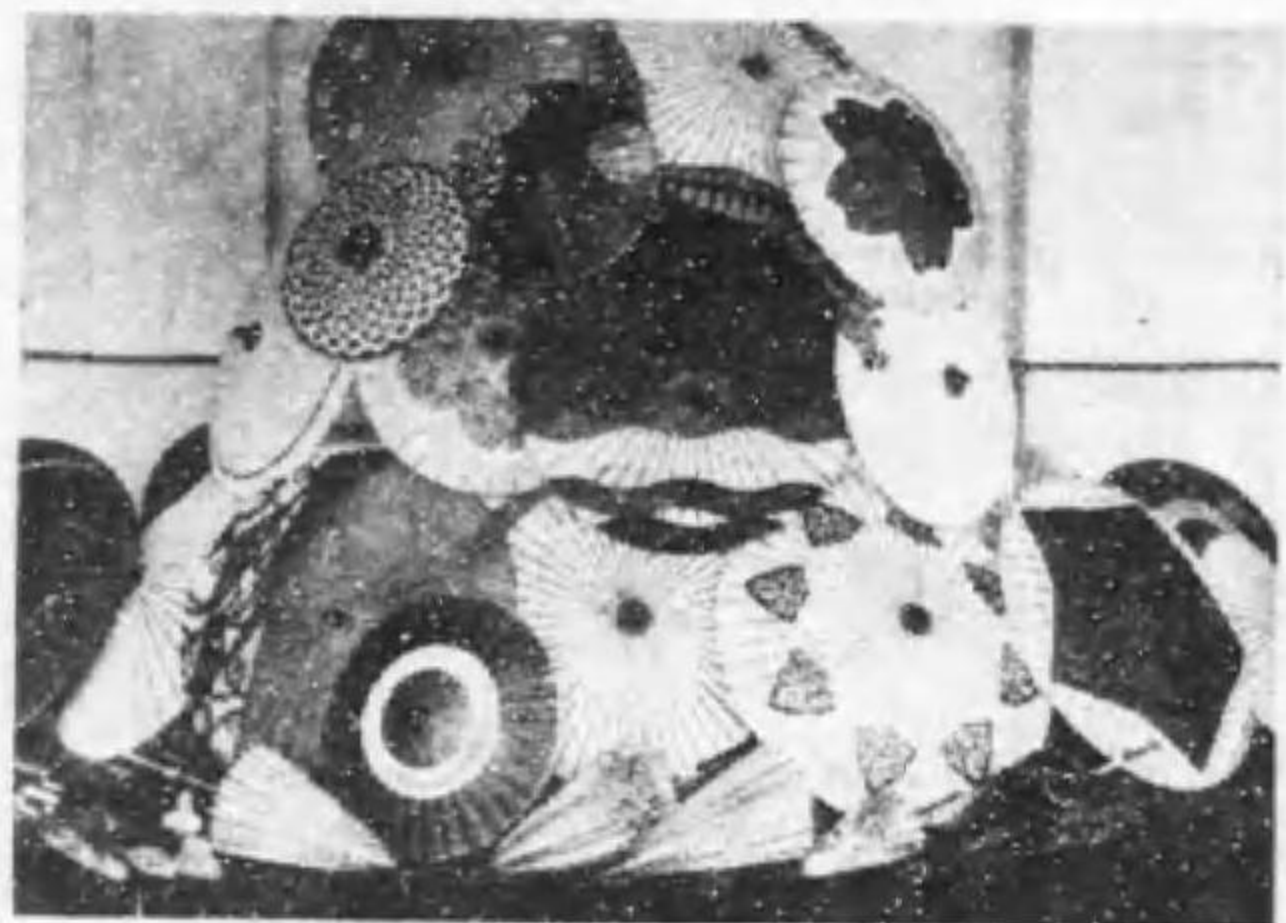
造を勸説すると同時に自らは傘商人として、縣下の販路を開拓した。

斯る中に製造業者は次第に増加し、生産も遞増すれば此處に於て同氏はその製品を取纏めて試みに阪神中國地方に販賣せしに意外の好評を博せばこれを契機に製造家は更らに激増を見たのである。

而てその當時の製品は多く地傘のみに限られて居たが、上

春氏は明治三十年偶々上阪の際某問屋に於て優雅なる岐阜日傘を見出し、その一本を購入して直ちに模倣製作を試みた。これ即ち本縣日傘の發祥ではあらう。斯くて、明治三十三年初めて貿易品として海外躍進の機運に到達した、上春氏は阪神商人と提携して、大量輸出に邁進し、次で大正七八年頃には年産額三百萬本、金額二百萬圓に達するの盛況を示した、斯くの如く本縣日傘の漸く確乎たる地歩獲得を思ふ頃その功勞者上春氏は卒然他界したのである。

其後同店は次男上春次郎氏を中心に一族を以て合資會社を組織した。當時二十五歳の上春次郎氏は嚴父急逝の後を繼いで



岡坂政五郎氏と醬油事業

四國靈場八栗寺の麓に西は屋島の秀嶺をかざし北は壇の浦の翠波を望む牟禮村に蟠居して床しくも百三十餘年の久しきに亘つてその歴史と牢固たる商勢を誇るものは蓋し岡坂醬油店である。



同店は人も知る縣下醬油醸造界にあつて堅實と製品の優良を以つて名聲を博し儼然たる存在を示してゐるのである。爰に輝く同店の業績を緋かにか、時は寛政二年の頃岡坂醬油の鼻祖岡坂昌勝氏は八栗聖天の信者として尊崇の念殊に厚く、敬虔なる歸依禮讃者の一人であつた。

而してある夜の事は聖天様の靈夢を感じ山麓の靈水を以て醬油を醸造せば人を利し世を益する事多しと、爰に大なる感激を覺へた氏は、蹶起して同年二月一日現地牟禮に微々たる一棟の倉庫を建築し始めて醬油醸造業を營んだ。これ現香川縣本土第一の盛大を誇る同店の發祥である。

果せるかな聖天の靈驗あらたかにして漸次需要を増し、遂

でその業に奮闘を續けつゝ不幸、時運に恵まれずして思はざる諸方面の困難に遭遇したが先代の篤行と業界への貢獻に問屋側の同情は集まり、且氏の不拔の健闘に漸く業運の挽回を見初めれば、新進の氏は百尺竿頭一步を進めて直輸出を開始し更に好轉を作したのである。

かくて最近には同氏の令弟上春喜儀氏が最高學府を卒へて兄弟協力斯業に専進し現に、高松の木工場以外に佛生山方面に五名の監部を置き製造業者の延人員三千人を數へ、木田郡麻治村に於ても三百人の職工を使用し産額又市内の總産額百三十萬本四十萬圓中の八割を占め、一方製品の如きも日進月歩し現在にては婦人用としてみさゝ日傘、麗人日傘と呼ぶ新なる日傘又小供用としてスポーツ傘等を考案し活躍して居るが、その大量生産の販路を阪神、京都、中國、九州をはじめ海外では米、英、支那、印度、南洋方面に求め一大飛躍を續けて居る。

日岡坂醬油の眞價は認められた。随つて店業は年と共に駈々として發展の一途を辿るのみ、其後始祖昌勝氏の業を繼いだ先代政五郎氏もよく父祖の店是を恪守して次いで現政五郎氏の代とはなつたのである。

當主政五郎氏は明治十六年佛生山町の舊家別所家に生れ、長じて岡坂家に入り高松中學卒業後日露戰役に従軍戰功によつて従七位勳六等歩兵中尉に任ぜられ、凱旋後専ら祖業に従事して居る。

しかし當時は未だ諸般に封建臭味を残し、これを遺憾とした氏は早くも將來の發展を畫し、先づ自ら小豆島縣立工業試験場に身を投じ同場にあつて日夜醸造の要義並に原料精選に至るまで學理に實驗を併せ研究し、或は又自家の杜氏を從へて著名なる醬油の産地を巡歴視察する等、この努力は遂に氏をして獨特の醸造法を體得せしめ確乎たる自信を恃ましたのである。

かくて氏の生産醬油並に其新商策は一躍世人の認識を高め昇天の如き店運を示した。その製品の資質を語る各地博覽會共進會等には毎次優賞を獲得して、誇らしい行進を續けつゝ、目下醸造の約一萬石は販路を大阪高松の中心支店の外百五十

餘の販賣網と、更に海外では浦鹽、シカゴ、パリ等にも進出はれて居る。

この驚異的發展躍進は氏の熱と努力が致せる盛況であるが才幹は周囲の信望を宛めて東證醬油同業組合長、商工會長の名譽職に推されて居る。

屋島登山鐵道株式會社

瀬戸内海々上國立公園の中心景として、又遠くは源平千戈の地たる屋島のこの雄大なる自然美に更に畫龍點睛を彩るものは屋島登山鐵道株式會社であらう。峻阪も輕快燕の如く攀攀するケーブルカーはこれは颯爽たるものである。もと／＼同社は大正十四年蓮井藤吉、瀨尾等、小西龜吉、大石大、矢野丑乙、米田實の所謂政界往來の巨頭連に依り提唱企劃されしもので、其後競願者續出し纏々幾多の曲折を経て大正十五年遂に前記蓮井氏等の出願に對し索道施設の認可指令が到り爰に同社成立の基礎が確然と固めらるゝに至つたのである。然し當時四國におけるケーブルカーの施設たるや嘗に晴天

尙氏が公共事業に對する理解貢獻は多大であつて、夫かあらぬか閩郷の人士は昭和四年一月その徳を欣慕して頌德碑を建立し千歳不朽の榮譽を刻した。誠に近來の社會的快事として特筆大書すべきではあらう。

霹靂たるのみならず、一面事業の性質上、經營の將來に對し一片悲觀的危惧を抱くもの又可成多く、且つ雜多なる故障累加して會社組織は徒らに遷延を重ねつゝあつた。

この時縣下財界の長老景山甚右衛門氏がこれに關與する事となつてすべては順潮に進捗し、昭和二年資本金六十五萬圓の屋島登山鐵道株式會社は成立し、同時に社長景山熊造氏、常務取締役には蓮井藤吉氏就任した。かくて蓮井氏は専ら業務を總攬して工事完成に當り用地の買収、線路の施設、山上道路の新設等竣成に意を注げば工事は着々進捗し、輝かしき完成の日も目睫に迫つたその昭和三年八月突如として社長景

山熊造氏の憑弔を受け、同社としては不測の受難に逢着したのである。

因つて直ちに關係者は協議の結果新に現社長大西虎之介氏を迎へて工を急いだ。この結果起工以來二年後の昭和四年四月二十一日、こゝに劃時代的誇るべき登山鐵道は目出度竣成した。この總工費約四十萬圓、拂込金三十三萬圓にして



てケーブルカーは瑞西ギーゼラインベルン會社製の最新且安全優秀なる車輛を以て險阻胸を衝く峻路も僅に五分を要せず

して屋島南嶺驛に達する。

かくて營業開始以來社業は逐日盛大に赴き、創立當初の危惧不安は完全こゝに一掃され、近縣ケーブル事業中稀に見る好成绩を示現して居る。

斯の如くして陽春三月から五月を所謂遊覽客最盛期間とし瀬戸内海の絶景と名所舊蹟に粉黛された天下の勝地屋島の快適極まりなきケーブルカーは、天下大衆の慰安に奉仕して居る。尙同社重役は左の通り。

社長	大西虎之介
常務取締役	蓮井藤吉
取締役	武田智章
同	鹽田
同	合田謙吉
同	景山卯吉
同	寒川恒貞
同	中村新太郎
同	細溪宗次郎
同	鎌田憲夫
同	武田亮太郎
同	景山甚右衛門
同	相談役
同	鎌田勝太郎

木太鹽田株式會社

東讃木田平野を縦走する春日川尻左岸四水遊電車の車窓を射る廣漠三十數町歩、恰も碁目の如く整然たる沼井臺、その周圍を彩る釜屋瓦の色調をして中に立ち働く濱人の甲斐々々しき姿は實に雄々しき限りである。



白旗に出でて赤旗に退く
全く、軍隊的壯重の就業振り、これは東讃製鹽界に覇を稱ふる木太鹽田株式會社の經營の製鹽田である。

同社は明治四十五年資本金十三萬圓を以て創立し、大正五年増資現在二十六萬圓である同鹽田は、かつて某々等有志の築造にかゝり事業機構の完成せざる頃同社がこれを譲り受け經營に當つたのである。

爾來幾多の研究改良を製鹽上に用ひ、目下二等鹽を生産し採鹹面積三十一町其他を合せて三十五町歩餘を所有して異數の業績を續け今日に至つて居る。

只々天候をのみ頼りに寒喧に苦悶しつゝ驚くべき年産額を示せる同社は最近世の思潮に鑑み、所有鹽田を自營化と共に經營方法を革め、同鹽田を繞る勞資關係も心強き協調裡に共同の福祉を築きつゝあるが、之を合理化時代とは謂へ床しき事である。

即ち同鹽田の經營當務者取締役石橋兵造氏は恪勤以て、よくその大事業を處理して居るが、氏は昭和二年感ずる所あり鹽田の小作制度を廢し、自作經營を發意してこれを決行するや先づ従業者の待遇改善に因つて能率増進と製鹽の向上を圖つた。

斯て彼等に所定の日給を支給する外、會社の純益中から三割を割き其の中一割を各自の勞金に應じ全員平等に分配し、又一割を勤怠に率し、更に五歩を特別賞與に、殘部五歩は各自の積立金に分配し、各自の積立金に對しては相當の利息を附す等専ら共同就業意識の作興に努め、共存共榮の理道を明示して進んだ。

なみは同社の現在重役は左の通りである。

取締役	阿河吉之助
同	石橋兵造
同	龜井喜代次
同	織田一
監査役	中村新太郎
同	石橋太平

されば一同は期せずして躍心圓滿なる相互關係を確知して百七十餘名の従業者は各々懸命の精進を續けてゐる。又會社は年次の業績を株主總會に報告と同時に従業者一同にもこれを示し、共に良績の喜びをわかつて居る、故に毎時高率配當を續けながら斯の如く事業資本家と、これが絶對有機的能動の活動分子が律然として理解各々共同事業の觀念のもとにその使命に向つて邁進しつゝある所は世にも稀なる經營組織にして、世の一般事業家に對する一大好示とも謂へはよう。ち

屋島鹽田株式會社

東讃屋島の秀嶺を西に卸して屋島卸しか吹く濱風をそよと受けとかく鹽田小唄も高々に、これは近時東讃鹽の名聲を代表する屋島製鹽株式會社經營の鹽田であつて、川を挟み木太鹽田と共に東讃に於ける今を盛りの若き二大鹽田である。

同鹽田はかつて明治四十一年頃同社大株主半田卯太郎氏の岳父善兵衛氏等が苦心構築し、後大正四年資本金十萬圓株主僅に十名の株式組織に改めたものである。

現に採鹹面積十六町七反歩、總面積十七町餘反を擁し鹽質の優良の優良を以て誇りとする。殊に同社は經營の煩瑣を避けて鹽田全部を九名の小作者に卸付け、更に其下に八十餘名の就業者あり、會社は唯製鹽上の指導監督の簡易經營に止まる。然してその受耕者は概ね創立當時より今日まで永續の人多く會社と受耕當事者との關係は極めて和やかに就業して居る。

尙設備の完整は至れり盡せりにして、かつて率先遠心分離機を据付け、又電力直結の神藤式排水ポンプの如き如何なる濠雨にも驚くべき排水能力を發揮し、製鹽上の支障を尠からしめて居る。

斯の如くして生産鹽は最優一等製鹽の指定を受け、更に二等鹽を合し年産約四百萬斤を生産して、確固不動の社礎と營業成績の堅實を誇つて居るのである。

會社の當務經營は支配人金崎幸七氏之を處理し、殆ど他を

要せず。世に類例少き單易會社である。尙従業員には追賞の規定を設け經營の立場を明かにして居ることも會社當事者の賢明と内容の充實を語る所にして、且本縣製鹽界の錚々たる面目であらう。尙重役は左の諸氏である、

- 取締役 津島吉之助
- 同 村上惣助
- 同 津島太郎
- 監査役 大野英一

富田製藥株式會社屋島工場

我國に於ける苦汁工業の確立者として、徳島縣板野郡瀬戸町富田久三郎氏の如き斯界にとつては實に偉大なる貢獻者であらう。即ち氏は明治十年頃逸早くその郷里靜岡縣に於て同業を創始した。

これ我國斯業の嚆矢であるが其當時も原料たる苦汁は遠く讃岐より供給して居たのであつて、事の餘りに不便なるに因つて明治二十三年頃徳島に來り工場を新設した。其後更に大

正九年神戸鈴木商店が新設經營中の現屋島工場を買收して直に原料の自給自足たる好適の地本縣に於て活動を開始したのである。

次いで大正十一年綾歌郡林田村に於て大阪の實業家藤澤氏と共同の藤富苦汁所を經營したが、同工場は昭和六年藤澤氏にその全部を譲渡し、隨つて現在の屋島工場は富田氏の讃岐に於ける本據にして、硫酸マグネシウム、一日一萬疋、加

性ソーダ四百疋、この副産として一ヶ年製鹽十五萬疋を生産して居る。而してこれ等製品は多く人絹製造用として滋賀縣東京、九州及一部は支那にも輸出して居る。

斯の如く苦汁は其用途極めて廣汎なる重要化學原料であるが、我國製鹽業の本場にこの再製化學工業の發展せる事は洵

に意を強ふし、この發達の契機を作れる本工場主富田氏の貢獻こそ偉大なる着創と謂はなければならぬ。

氏はこれ等産業上の功勞に因つてさきに紺綬章を下賜された、が目下同工場は支配人松島久太郎氏が同工場の創始以來支配經營の衝に當りつゝ、其成績見るべきものがある。

川島町鈴木醬油醸造場

本縣醸造界の雄として名を縣外に強く印象し、偉大なる進展の歩地を刻んで居る木



田郡川島町鈴木醬油醸造場、菱茂印醬油の名は、餘りにも明るき存在である。現時斯界は競走日に激化し品質價格及サービスに最善を致し、各々自

己商品に對する大衆的完全認識を獲得すべく苦心と努力を集めて居る。

この尖鋭化した業界に界彩を放つ鈴木商店、その經營者鈴木茂内氏は明治二十二年創業以來粒々乎として業に就き且勵み、今や本縣醬油醸造界一方の雄として一ヶ年三千餘石の醸造高を示すの盛況にある。かて、最近の商勢はその名聲と共に販路擴張し、一千五百坪になん／＼とする醸造場もあたら狭少を感ずるとは如何に同店が飛躍發展の趨勢にあるかを窺知される。

而も醸造工程に於ては電動機を主幹として近代醸造用機を完備し、品質の向上は勿論、一方能率増進を以て殆ど理想的醸造工場たるに愧ぢない設備を整へて居る。

されば生産の醤油は各地品評會に出品し何時も優位を占て居る、特に最近京都醤油商組合主催品評會にも一等賞を受けまた六年十一月醸造協會近畿支部主催の品評會に於ては優等賞を受領する等其の商品の聲價を知るべきであらう。

この特筆すべき名聲下にあつて然も氏の業的信念には何人も敬服せざる能はざるものがある。即ち狭少な縣下の角逐を快とせず率先縣外に活路を歩め、さきに明治三十八年大阪支店を同四十一年神戸支店を設置し、異常な進展を示すの外、

四國、中國は固より東京に販路を拓き尙最近臺灣、北海道にも進出しつゝある。

その進取的意氣と商業は一般商家も一應吟味すべき要事に値するが、この事業意識を以て邁進する同店は、目下營業の一线には早稻田に新智識を修めた新進氣鋭の茂君専らこれに當つて活躍して居る。

又鈴木氏は他面川島町會議員として自治に盡瘁し、其の人格徳望は同町の元老として信望を蒐めて居る。

山田氏と源氏正宗

東讃有數の名刹にして尊き靈威の輝く八栗寺その抱擁下に繁榮を誇れる山田酒造場、「源氏正宗」は夙に縣外諸酒を斷然凌駕して名實共に斯界の寵兒と謳はれて居る。

同店の創業は遠く明治初年に發し、當時高松藩士たりし先代山田徳三郎氏が廢藩と同時に決然牟禮村に斯業を創始した爾來約三十年間刻苦精進の後、明治四十三年現主榎太郎氏が父業を繼承した新進氣鋭の氏は直に時代の推移を察して營業

を革め事業の發展に努力し就中釀法の研究には特に細心酒質の向上を期したのである。

さればその釀酒は全國酒釀品評會、近畿酒醬油品評會、四國酒品評會、縣下酒類品評會等、凡ゆる機會に於て常に優賞を受け聲價揚れば需要又期せずして高まり、業況は展開された。

殊に山田氏の機を見る敏なるは冬期原料米の手當であつて

此當用の巧者はよく業者をして嘖然たらしむるあり、俊敏商才は嘆賞の外なく次で大正十五年氏は其酒造場一切と住宅を新築し面目をあらためた。

今や同店は過去に於て築かれた基礎の上に傳統的商策を把

握邁進して居るのであるが、この恵まれた順境を往つゝ同氏は常に郷關の信望を蒐めて、縣下酒造組合評議員、村會議員信用組合理事、八栗寺總代等を勤めよく自己を外に地方的にも献身して居る。

鹽業家大高恒次氏の發奮

かつて本縣産業史上の一項に燦として輝く特産讃岐の三白として膾炙雄名を誇つた鹽、砂糖、綿も近代文化の發達經濟組織の變遷等あらゆる進歩急進に今は只僅にその片影鹽のみの情景にある。その産業形態の急激たる新陳代謝のなかに歴史と共に光輝を刻む製鹽事業こそ米、麥と共に本縣に恵まれた水陸生産の双壁である。

就中縣下水産製鹽は專賣法實施以來愈々進歩發達し、地利の好適と相俟つて堅實無比の業績を示して居るが木田郡牟禮村古高松大高恒次氏は、身を一鹽田耕作者より起し、前後約五十ヶ年間これに専心努力し遂に巨萬の富を築きよく縣下製鹽界の異彩として謳はれて居る。

同氏の目下經營に屬する牟禮久通濱鹽田は明治十一年頃揚氏經營鹽田を譲受けたものであるが、當時は專賣前とて産鹽は概ね大阪方面に販賣し、地方需要は僅に年末のみに限られて居た。茲に於て氏は自己製鹽の聲價を高むべく種々苦慮したが、取引の確實と云ふ事で遂にその大高鹽は一躍名を天下に謳はれると同時に、讃岐鹽の一般的輝かしき名風を作したのである。

即ち氏の製鹽は明治二十年以來各博覽會、水産會等に際して何時も賞牌賞状を受けたこの名聲下に氏は愈々發奮し專賣實施後二百臺の鹽田を買収して自己本來の輝く希望と理想を達成した。更に氏がその事業に對する研究努力眞摯味には改

良壺セメント臺の如き疾くに着創し、常に品質の向上を期して恒心よく恒産の眞理を如實に體現して居るのである。

目下全國十州鹽田幹事並に東讃鹽田理事牟禮鹽業組合長の要務に携るの外、村會議員として村自治にも盡して居るが氏

の如きは世にも稀な立志成功の人とは謂ふべく。尙大正九年帝國水難救濟會に盡瘁の故を以て特に大阪商船會社より終世の優遇を受けて居る。

本縣蠶糸業と山田惠一氏

さきに大正六年を黎明期に突如として勃興の機運を萌した本縣蠶糸業は日ならず歐洲大戰景氣に因つて最短期間に驚くべき發達を來したが、この間斯業をして爰に誘致せし、そこには幾多の血と汗貴重な努力と最大の犠牲が點綿するのである。即ち故人山田惠一氏が献身の努力の賜にして、従つて本縣斯界の人々が氏を目して本縣製糸業の父と呼ぶこともここに由るのである。

凡そ世に獨創の貴きを知る如く前人未踏の地を開拓する事又難しとする。蓋し自らを信する不拔の信念の下に主一撓ゆまず倦まず致々として精進する時は局面の打開必ずしも難事にあらずや山田氏の遺業と一大功績も即ちこの貴き實訓に外

ならない。

山田氏は木田郡前田村の豪農にして殊に農事に多大の關心を持ち永年木田郡農會長に推されて居た。その天稟の果斷豪毅は大正六年頃當時縣下養蠶業勃々として興隆し、之が生繭の徒らに縣外に移出するの極めて拙なるを痛嘆して、製糸業の必要にして有利なるを思察遂に決然獨力を以て製糸工場設立に着手した。

かくて氏は自ら製糸に關する一切を斯界の先進地に就て究め又人を派してこれを習得せしめなどして、漸く六年六月百八釜の工場を整備し、農村子女二百餘名を收容操業した。この山田氏の苦心果敢な壯舉に對して當時縣當局も地方産業開發

上絶大なる讃辭を以て迎へ、特に技師を工場に派遣する等、よくその偉大なる劃期的大事業の發展に助成したのである。

されば内外呼應して山田氏の事業は惠まれた順境に好績を示して一躍名聲を謳はれ、この間氏の異常な躍進を眺めて無謀な莫運者流も輩出したのであつた。これと前後して氏は縣農會長に選ばれ尙大正十五年貴族院多額納稅議員にも選出されて身は業界政界に比倫なき活躍をしつゝあつたが其後襲ひ來た財界の變動に氏は善處を期して獨得の手腕を發揮しつゝあつたが、惜しむらく昭和五年世を擧げて殺人的不況に沈倫し巨器に俟つ處多きに不拘五十七歳を一期に輝く春秋を残して十二月十三日氏は遽然と他界した。實に氏の卒去は本縣蠶

糸界並に事業界の一大損失のみならず國家的損失として惜みても餘ある事であつた。

而して巨人山田惠一氏逝去後も既に事業的基礎を確立せる山田製絲場は依然縣下製絲界の中樞として、令弟堅三氏これを繼承發展して居る。

尙氏の永眠に際して畏き邊りでは生前絲界の功勞に對し特に正六位を追賜され、又大日本蠶絲會に於ても紅綬功績章を贈つてその功勞と名譽を表彰した。これ死して尙且餘光と云ひ氏及其一門にとつて無類の光榮のみならず、本縣製絲界の歴史を飾る燦たる輝きでもあつた。

製絲業植村裕吉氏

さきに本縣産業戦線に新興の意氣も物凄く然も原料の自給自足を唯一最大の強味として跳躍的展開を爲したものに機械製絲事業がある。

この製絲業は歐洲大戰を楔機に時を笑顔と縣下各地に雨後

の筈の如く簇出し一時釜數一千釜を數ふるの盛況を見たのであつたが、其後所謂反動的財界不況の波動は温袍育ちの縣下製絲業に一瞥もくれず。又自ら抗すべくもなくして無慘にも

昔日の佛は槿花一朝の夢と化し去つたのであつた。

今にして當時の本縣製絲界の慘風に想到する時はあたら感
愴切なるを覺えざるを得ない。もとよりこれ人の世の轉變事
業の盛衰興亡は多く馳逐の外にあり然も縣下製絲界のそれは
恐らく發展途上に於ける尊き試練にして、その間不堅實なる
溫源に激成された泡沫分子は遂に自然淘汰の運命に屈したと
謂ふの外ないのである。

只其多難なる試練を見事打開して自家生存の鐵則を完全に
把握した現實の優者こそ眞に誇るべき本縣製絲界の事業的名
聲を享受し得るものでなくてはならぬ。

而して本縣製絲界の現況は概ね木田郡を中心として居るが
同郡川添村植村裕吉氏は現下本縣製絲界の雄として將來を囑
目されて居る一人である。

植村氏その人は木田郡前田村に生れ大正五年二十一歳の時
父に死別し、當時多額の負債と幼き弟妹九人の養育をも背負
へば、爰に意を決して居村山田恵一氏方に奉公し、辛うじて
一家を支へ尙その將來の責任の重大を思ふ時氏は切々として
眞に迫るを覺ゆるのであつた。

聽て吾に返つて一意主家のために一木一石分秒をも惜しみ
精勤拔きんづれば主人の信認は固より一般村人もその善行を

激賞した。かくて歲月と共に氏は主人經營の製絲事業に興味
を感じ且自ら期するあり。こゝに修練山田氏に仕へる事十ヶ
年の後遂に大正十四年五月二十九歳にして山田方を固辭し、
當時休業中の川添製絲工場(十四釜)を借り受け、以て操業經
營に當つたのである。

即ち現に本縣製絲界の新人として斯界に萬丈の氣を吐く植
村製糸こそこゝに端を發し、以來血と肉を唯一無二の資本に
空手空拳敢然として嶮難浪濤の斯界に活躍した。此時の氏は
只其の有する貴き經驗にながす汗と油、努力を一途に直往邁
進あるのみにして、殊に繭の買入時に當つては深夜自ら荷車
をかつて搬入運送費を節約し、又内にあつては多くの弟妹を
督し製絲に心を碎き絲の販賣亦然りにして斯く文字通り涙ぐ
ましき奮闘精進を續けた。

されば天日の高樓を照す如く業況は進展を萌し爰に氏は内
心雀躍の狀にして、更に發奮を續けて昭和二年九月該工場の
買収と一大擴張を劃し遂に六十釜工場を完成した。此躍進を
遂けては年額二萬數千斤十數萬圓を生産し一躍縣下屈指の製
絲家として盛名を轟はるゝに至つた。

これを觀じて縣下製絲家の多くは操業の困難を啣ち或は屍

體累々たるその中に獨り植村裕吉氏のみが旭昇の勢ひを以て

凡ゆる難苦の鐵扉を蹴つて燦然たる陽光に恵まれ、且營業の
基礎は遂次堅實を加へ又製絲の優秀を誇つて居るがそこには
氏が把持する大儲より小儲百姓すると思つてといふ聊かも投
機性を含まざる堅實無比のそれと製品よりは現金人より多く
働く。この信條の無言の權威にして洵に到れり盡せりと謂ふ
べく、然も十人の兄弟は一致協力黨々として各々共同の目的
に向つて渾身の偉力を發揮すれば、繁榮は期せずして現實に
植村製絲工場を訪れ問屋は勿論内外の信用愈々高まり、名實
共に本縣製絲界の名聲を双肩に擔つて斯界の向上發達に偉大

なる貢獻を爲して居る。

更に氏は最近一般財界並に絹絲界不況を眺め且人造絹絲進
出の對策として昭和四年絹織部を併設し、自己生産生絲を原
料として羽二重生地其他各種紗物友禪物に至るまで製織染色
し絶對保證付として絶大なる好評を博し賞用されつゝある
が、尙將來自己生産生絲全部の前記製織化を理想ともするが
如何に其商策の進取的なるか全く驚異の外なく尙昭和七年十
月には萬金を投じて最新操糸機小岩井式を裝備し施設の完備
と共に一層の躍進を期したのである。

牟禮山田製絲工場

本縣製絲業の中心地木田郡に於ける斯界の新進花形として
飛躍發展の一人たるは即ち牟禮製絲場の山田愛助氏であら
う。氏は植村裕吉氏と縁戚にあり。且軌も同じく山田恵一氏
麾下の駿足であつて、其の最近の努力發展は本縣製絲業界に
一脈の颯爽たる英姿成功の巨燈を點じてゐる。

その現況を想見して今は亡き地下の舊主山田氏も亦聊か感
快を喫し且徳孤ならずでもあるが、同時に兩氏にしては舊主
の靈及び恩顧に酬ゆる最大至上の獻香こそである。

山田愛助氏の牟禮製絲所は昭和四年三月五十釜を設備して
創業した。之よりさき氏は大正六年十八歳の時前田村山田恵

一氏方に奉公に入り、間もなく製絲技術研究のため愛媛縣に赴き此處に於て大に修練をかさね、歸郷山田氏のもとにあつて其經營製絲工場の中堅として誠心内外商務にあたり忠實なる輔翼に任じて居た。

かくて昭和四年山田方に仕へる事十ヶ年、自己本來の理想と使命に向つて進むべく決意し、且老父家族等の切なる協力に斷然として山田方を辭し、現工場地五百坪をトして獨立自營製絲事業を創始した。

時恰も縣下製絲界を風靡する陰慘な氣は一般の不況と共に可成深刻であつたが、その中に身を挺ししかも巨萬の資を投ずる事に於て世間は一大無謀の舉と酷評するだにあつた。然し世に暗愚多く彼に無智と怯懦は常に追従するが、この間嚴然として侵すべからざる牢固たる氏の前進意識と、更に拍車を打つ先輩植村氏の激勵は彼等に一顧もくれず爾來兩者は唇齒輔車の關係を以て各々機宜を制し着々實績を擧げ、快然凱

歌を奏しつゝあるがこれ蓋し異數の進展にして、且本縣事業界に沈黙の長鞭でなくてはならぬ。

按ずるに何が氏を今日あらしめたか、即ち山田惠一氏に仕る十年の刻苦と事業的修練の健全なる良果にして現下農村極度の不況に直面して、これが救済の一助たる好恰の機業を起し郷村子女七十餘名を收容共存共榮能率増進をモットーに勇往邁進すれば、従業員一同又何れもこれを徳とし感謝しつゝ、従事して居る。

而して目下創業日尙淺きになほ年産額十萬圓に上る盛況の其處には、氏が營業方針として投機を排し堅實第一主義を信奉するにあり隨て養蠶家及生絲問屋の信用も高く、業況の安全を招來してゐるのである。

尙昭和七年九月新設備として小岩井式多條操糸機械を設備し、能率と品質の向上を期した。

平井町植松酒造場

東讃平井町産業界の重鎮として銘酒「實美人」の醸造元木田郡平井町植松酒造場の名聲はその歴史と業礎の上に赫々たるものがある。

同酒造場は明治四十一年の創業であるが、最初約三百石の試験的造石に果然その良質は旋風的好評絶讃となり。此處に意を強くせる同氏は、爾



來研究を重ねつゝ、總意を經營に注げば、大正五年には造石量一千石に達する、盛況を見るに至つた。而して販路も獨り縣内に止まらず、縣外にも進出し、斯界に萬丈の氣を吐いた。

然るに大正九年の財界變動に際會して事志と違ひ、以來聊が營業を縮少するに至つたが、しかしその潛勢力は依然牢固たるものにして多年の商業的地盤は確保されてゐる。

當主庄太郎氏は年齢五十八歳、現に同町々會議員、信用組合理事或ひは商工會議員として信望あり。長男順一氏の盛年の氣魄精力を合せた現實、同酒場の前途は刮目されてゐる。

酒業間島仁平氏と商業方針

近時東讃櫻の新名勝として大川郡長尾町龜鶴公園は春爛漫の清遊に好恰の地として一躍世に謳はれてゐる。尙この地の佛刹として長尾寺あり更に同町産業部門に於ける森屋の清酒登門が刻む古銘間島酒釀場の赫々たる歴史と現實は實に同町産業の誇として燦たるものであらう。

その輝く歴史も祖代三百數十年をかぞへ、就中現仁平氏の祖父仁兵衛氏以來の發展は驚異すべき躍進振りにして、殊に先代仁平氏はかつて同地の名町長として令名を馳せ、今尙町衆の思慕斷ち難きある事も氏の偉大な餘韻であらう。

斯て名實共に東讃屈指の酒造場として築かれた間島酒造場

を繼いだ當主仁平氏は又濃厚なる人格者にして現に大川郡酒造組合長、或ひは又町會議員として衆望を蒐めてゐる。特に同氏が公私世に處する信條として總ての場合人に一步を譲り決して争はない事である。一時勝を譲つて名を得せしめる事必ずしも自己の敗退を意味せず。却て争ふ努力よりか争はざる努力の効



果の大なるを自信して居る。この信念のうるはしきそして貴き道徳律を把握する氏の人格と修養こそ床しき限であるが、酒業に於ても夙に自己實力の運用に一切危険と無理をなさず、細心周到なる經營振りはこれ即ち東讃斯界の重鎮たる氏の自重堅實なる商策でもある。随つて吟醸酒登門は酒質と人格を合せての古豪不動の業況を誇る雄名であつて、即ち間島酒造にゆるされた獨特の輝きであらう。

酒造家 玉木傳治郎氏

近時東讃酒釀界に於ける麒麟とも謂ふ長尾町玉木酒造場の飛躍進展は又素晴らしい。その吟醸龜鶴正宗は恰も地の名勝龜鶴公園と共に日に大衆の認識を深めて隆々たるものである。同店は傳治郎氏が明治二十年頃十八歳にしてその生家造田村玉木酒造場の長尾方面販賣を擔任せしに發した父の末子た

る氏は生來商才に長け、商況日に見るべきものあり。爰に於て何ものかを自信した氏は數年後自己讓造を決意して獨力前記酒造に着手した。



時は二十七歳にして爰に最も難中の難たる販賣の秘訣も既に會得し居れば最初の酒釀三百石は殆んど小賣にのみ充當するの盛況を示した。其後龜鶴公園の生るゝやその名に因んで龜鶴正宗と銘し、地の龜鶴名勝は銘酒龜鶴に通じて逐日人口に膾炙烟揚し龜鶴の酒名は東讃斯界を風靡すると共に事業の根幹は培養されたのである。

氏はこの順潮を眺め更に意を醸造設備の完備に傾け時代の様式による酒質の向上を期せば釀酒は毎期各品評會に最優の入賞を續けて、世の好酒家を狂喜せしめた。

斯の如く龜鶴正宗の發展は畢竟玉木傳治郎氏の酒業一念身

命を賭した熱誠と其商業秘訣買ふ時果斷賣る時靜慮を總てに援用の結果にして、特に業に従事する一同は常にその行ひを自ら誠め使用人の如き、今尙一切夜間外出を禁じて各々薫化修養につとめしむる等、あらゆる努力は今日の發展の主因をなして居るのである。

現にその釀酒は高松支店の外大阪、岡山、徳島等縣内外に飛躍し酒質を謳はれて居るが、目下主とし酒業に當れる長子俊雄氏は新進の業者として早くも近代的營業戰術を理了して聲價の轟く父業を一層の進展に日夜精進して居る。

さきに世に埋もれし名花とは云ひし東讃長尾龜鶴の櫻も今や時の盛時に際會してこの觀賞價値は愈々燎郎として大衆の認識を極めつゝあるが、此處の事業界に咲く龜鶴醬油も又地の一事業華でなければならぬ。

即ち龜鶴醬油は地の名望醫庵原謙立氏より岐るゝ正謙氏が

長尾の龜鶴醬油

大正六年の創業にして當時二十五歳の氏は、自ら父醫を外に産業の一線を志し斯業を創始した以來全く無經驗の氏は幾多業界の波瀾に採まれ



つ常に自奮自助して、初志に邁進し遂に業況の安定と今日の発展を遂げた。

この龜鶴公園の櫻花に因む品質本位の龜鶴醤油の名聲こそ

名醫に育生まれし氏が努力の名華にして、誇るべきである尙氏は東讃斯界の評議員とし又町會議員として活躍、同町事業界の新人逸材としてその前途春秋の多幸こそ想はれて居る。

青年醸造家小倉九平氏

東讃志度町に於ける醤油醸造家小倉九平氏の如き同地の青年事業家として近時鋭角的躍進の商況を見せつゝあるが、同家は先に金物並に質商より轉じて既に四代の醸造歴史を有する同町の舊家にして昭和六年先 九平氏歿後若き當主は父名を襲ひ以來店業に従事し一意邁進發展を劃した。殊にその有する信用聲價の地阪神は不拔の堅壘にして、其醸造「ヒシモト」醤油の品質盛名は、これを謳はれて日々幸ある進境を示

しつゝあるが、今や青年二十五歳の九平氏は、時代の要求する、事業人材としてその傳統的商才鋭氣を奮つて祖業に精進しつゝあるこそ實に雄壯の限りである。



玉木酒醸造場と金龍の香

中考の史實をしかも彩る多き東讃玉浦即ち現時の志度町こ

そ史跡由緒の地である。識る人ぞ多きこの由緒の地に又近代

名華の一輪は何んと相應しくも床しき事であらう。

こゝに左記玉浦に因んで銘酒玉浦「金龍」を醸造する玉木酒造場こそこの辭を以て謳はしめて居るのである。

同酒造場は明治廿四年始祖玉木九郎平氏が造田村より來つて酒釀を創めたが、以來恵まれの水質とその實直を相俟つて漸次東讃斯界に頭を擡げ、更に不撓の刻苦は愈々確乎たる基礎を築いたのである。

然るに大正十二年九郎平氏が

最愛の、嗣柱光明氏は少壯二十八歳を一期に卒去した。この一事は尠くも同家にとつて陽光一時に絶へ暗面愁傷の切なるものにして、就中老年の父九郎平氏が痛心は無常を覺へ。遂に其九月氏もまた長子の後を尋ねて長逝した。



この重なる一家の悲惨悵歎すべき不幸の洗禮が裡にも逝ける光明氏の妻艶子女は一子良明母小安女と共に父業酒釀經營を決意し進んで萬難に當つた。即ち同女は當時二十餘歳青春の色未だ失せざるに、しかも身を一家の犠牲として酒釀の一线に立つたのであるがこれ我が大和婦人の傳統として誇る精神美の發現でなければならぬ。

かくて内外商交渉の各般に於ては些の間然なく又眞に男勝りの信念は母と共に柔よく剛を制し、他面飽迄女性を失せざる態容舉止を以つて多くの倉人を總べ主従合體一意酒業に精進しつゝあるが、今や既に十年を経過し、現に吟釀する玉浦金龍玉の花等その聲價は誇るべきあり業運は舊を凌いで隆々たるものこそ是同酒舖の偉大なる面目である、目下同女はその一子良明君の成年を心に待つてこれが専一無上の幸慶として精進しつゝあるが貞婦艶子女こそ近代女性の鑑にして又犯すべからざる尊嚴を合せた敬すべき女事業家とは謂ふべきであらう。

玉浦製糸工場

本縣製絲界の二龍兒の一つと稱せらるゝ志度玉浦製絲工場こそ同町濱田岩吉氏經營の模範工場である。昭和七年三月我國重要物産統制の見地に農林省は、先づ全國製絲界の實情に就て嚴密なる點檢調査を下した。

この結果本縣に於ても經營内容の整然完備し然も生産糸質の優秀を舉げて農林省の推賞レベルを衝くもの東西二工場を抽出表彰があつた。

その誇るべき一工場こそ即ち濱田氏の玉浦工場である、爰に輝く折紙附の同工場は昭和二年頃藤森某の企畫に成つたが同工場は四圍の事情のため昭和四年濱田氏が經營する事にな

つた。當時麥稈を業とした氏は之を決意するや全幅の心力を須ひてこれに當り、斯くて裝備する三十釜の全能を運轉には先づ技術優秀の職工を配し同時に買入れる、爾は嚴密して特に糸質の向上を圖れば、實績は豫期の如くに進展し漸次事業基礎は築かれたのである。

之偏に氏が最初の發足極めて賢明なりしと終始一貫堅實を一途に刻苦の賜にして、然も其後數年に亘る一般斯界死苦の慘風にも同工場は一日も休むなく獨り超然不動の操業を繼續し異常の信用聲價を培つて居るのである。

堅實を誇る讚岐酒造株式會社

大川郡津田町の長汀曲浦を彩る青松白砂を以つて名もゆかしき琴林公園松原は傳ふるところ六百餘年前、植栽されたも

のだと云はれるが、霜雪に屈せぬ節操を綠翠に見せて讚岐海岸美の王座を占め。さきに國立公園の選定委員達によつて海

岸美中全國隨一とまで折紙を附せられたのは事實である。この名邑津田町に千年の榮を競ふ銘酒「琴の露」の讚岐酒造株式會社がある。

同社は大正七年六月の創立資本金五萬圓を擁して日進月歩その進展には驚異的記録を作つてゐる。その販賣網は大川木田兩郡を中心に縣外阪神方面へも若干の進出を見てゐるが同社について更に特筆大書すべきは創立以來今日まで常に一割の高率配當を續け、其上、更に積立金二萬數千圓を有する堅實無比の業態であらう。



不況の嵐吹荒ぶなかに琴林の巨松にも似て泰然自若恐らく中東讚隨一の社業なりとする、この營業狀態の蔭に燦然と輝くものは同社取締役社長津川善七氏の功績である。

同氏は齡四十歳に至るまで二十餘年間軍隊生活を爲し、大正六年退役するや従兄津川是氏が明治元年に創立した同町の酒造場の再興として會社に關係するや時恰も未曾有の好況時

代の潮に乗つて、着々と發展を遂げ、軍人出身者中に稀なる業界の成功者として萬丈の氣を吐いた。即ちその軍隊生活中に於いて經濟に對する絶えざる關心の賜は事ここゝに到らしめたが全く世の異例であらう。

而て其營業方針にも利益金の三分の一を配當に充て、残る三分の二を以て社の内容充實に努めるといつた飽まで石橋叩いて通るの堅實をモットーとして酒造量なども「賣れるだけに無謀なる増石を慫慂する者はあつても、氏はこれに一切耳を藉さず株主から事業を預つて經營してゐる以上は自分の事業として如何なる不況時代來るとも株主に不快を及ぼす如き種を蒔いてはならぬとの信念から堅實更に堅實を以て進み遂に現在の常緑樹的繁榮をもたらして居るのである。

従つて氏の感化は常に従業員使用人に反映し其處に醸し出される銘酒の聲價と共に同社の存在は愈々補強されて往くのみである。因に同社重役は左の通り。

- | | |
|-------|-------|
| 取締役社長 | 津川善七 |
| 取締役 | 大眉強 |
| 同 | 大眉勇 |
| 監査役 | 石井與一郎 |

津田の銘酒琴の譽

東讃の景勝琴林公園の白砂青松と共に輝く大川郡津田町の醸造界の巨星に清酒「琴の譽」の醸造元兼原酒造場がある。

播磨灘の碧浪寄せ打つところ
琴する如く松林にも傳ふ又杜氏
たちの謳歌する酒神パツカスの
歌聲も朗かに流れ響いて今や高
松以東大川、木田兩郡を中心に
その進出活躍振りは眼覺しきも
のがある。

當主木村茂氏は徳島市に生れ
善通寺工兵隊に兵營生活を送つた後、木村家に入嗣したが、



氏は生家徳島市屈指の兼原酒造場に於て育まれ。その若き日の酒造の體驗を遂に自らの双腕によつてためさんの時節到來した即ち同町に於て休業中の某酒造場を借り受け決然創業して以爾來不斷の精進を続け遂に大正五年其頃附近にあつた寺井屋と稱する老舗酒造場の土地建物器具一切を買ひ取つて、愈々兼原酒造場の本格的活躍を起した。

かくて逐年その品質の向上と販路擴張に示された木村氏の敏腕は益々冴えて圓熟、こゝに四十六歳その濃厚篤實なる人格と相俟つて斯界の信望いよ／＼厚く琴林公園の名に因む琴の譽の名聲は高揚して居る。

栗生充武氏と其の醤油

東讃醸造界の新人にして物々たる覇氣に燃ゆる廿九歳の青

年事業家、大川郡津田町栗生醤油醸造場主栗生充武氏の奮闘

は津田の濱邊に躍る磯浪の如く
琴林の松原に奏でる松籟の如く、
清新また潑刺たるものがある。

同醤油醸造場は當主充武氏より
四代前の祖藤三郎氏が同町の
名家栗生家を分家創業して以來
老舗の名は次第に高く、爾來幾
十星霜、同店の堅實なる經營方
針は歴代主の才腕によつて益々磐石のごとき業礎を固めた生



產品の販路の如きも千鳥鳴く淡路島の彼方、阪神方面の市場にまで進出して讃岐醤油のため萬丈の氣を吐いたが、先代友次郎氏は可惜四十五歳の才幹に春秋を殘して他界した。

後に當時僅五歳の當主充武氏あり事業は叔父に當る鎌田伊三郎氏の助成により營業を續けてゐたが、充武氏漸く長じて大川中學を卒業するや、一意専心父業に没入し堅忍不拔の努力健闘を續けて居る。

今や栗生醤油の呼び聲は名邑津田町の誇りとして東讃醸造界に未來を期待されてゐるのである。

藤目七郎氏の製絲とバス

近時東讃事業界の奇才として其腕を製糸業並に自動車運輸に奮ひ着々實績を擧げて居る俊材に松尾村藤目七郎氏がある
今や氏の兩事業は天の試練不況の壓力に耐へて輝きの光明を
迪つて居るのである。

固より氏がこの進境に到達の途半には幾多の難路曲折も嘗

ならぬものあり。特に何人にも強記すべき出發の善意が発見されるのである。

氏は明治五年同郡鴨部村下庄に生れ物心以來村で猫車や大八車に汗を流して家計を樹てねばならなかつた。この臥薪嘗膽の裡に後年の奇才は二十二歳の時明敏にも養蠶業の將來に

着目しまづその飼育研究に着手した。

次いで明治三十年には一廉の養蠶教師となつたが、その後縣下蠶業は漸時發達を來しければ、春秋の産繭も驚くべき數字を示すに至つた。



然るに爰に不合理とするは一般農家の經濟智識の幼稚に基く即ち生産を知つて販賣を知らない事である。折角不眠不休生産した繭そのものもあたから縣外不正仲買の跋扈に委し全く知らぬが佛の暴利、彼等の跳梁に若き藤目氏は痛奮し

遂に本縣最初の繭問屋を開業してこの横暴なる縣外仲買人を牽制すると同時に、縣下養蠶家の利益に起つた。爾來氏の献身的努力と熱誠は本縣養蠶家の衆望を擔ひ、信用益々高く大正八年に至つて同地方有志は努力の人藤目氏を中心に大川製絲株式會社組織の議起り遂にこれを實現した。現に同氏が専務として、經營の一線に立ち活躍せる會社であるが同社は目下最新式改良釜七十八其他合せて百釜を操行し左記重役を運ねて縣下有力製絲工場に數へられて居る。

又現在高松電軌と連衝して長尾引田間の交通運輸の衝に當れる大正自動車商會も氏の經營にして、是又幾多の苦杯を喫しつゝ大正十年以來區間唯一の交通文化として献身社會的使命を全ふして居るのである。

更に引田徳島間の阿讃自動車、之もその經營に屬して居るが斯る産業と交通の兩事業に健闘貢獻しつゝある氏は、他面自村松尾村會議員として自治に盡し、殊に村百年の大計として自ら金四百圓を同村部落に、金一百圓を村教育費に供寄しこれを村大衆に金融して然も元利を百年間据置き其の蓄積に由つて全村の福祉増進を企劃するし、又は率先國防費を獻納し、之が本縣最初の軍用金取扱ひであつたと。

此如く氏の社會觀念の高貴さはあれと謂ひ、是と謂ひ實に衆人の意表に出でざるなく、世の經士として嘆賞すべき行者にして、隨つて氏を繞る各事業の展望も洋々たるものあり過般氏の産業的努力を多とした地方有志關係者は其頌徳碑を建立した程であるが、これ氏が努力の面目を永遠の表徴である尙大川製絲の現重役は左の通り。

社長 池田 熊吉
専務取締役 藤目 七郎

取締役 池田 善平
同 松下 文助
同 三木 徳次郎

監査役 瀧田 三郎
同 阪東 幸三
同 多田 岩

帝國製藥株式會社

凡そ現代醫學の眞使命が人類の生命保全乃至肉體改造を所謂生存活動の組織整調にありとて、今やその理想は愈々精緻を究め、全く驚異の異域に進展しつゝある。これ全人類に齎す偉大なる文化の福祉でなければならぬ。



この醫學の驚く發達進歩と共に併進して齊しく國民保健の上に重要な貢獻を爲せるは家庭用藥にして本縣三本松町はこの文化的家庭用藥製造の町として夙に著名を擧はれて居る。

而して同町所産の各種家庭藥は夙に一般大衆が愛用して顯

著なる效率を示し、直接醫療に途遠き人々の保健に至大な貢獻をなしつゝある。この地の藥業は大正七年を一期に勃々とし起つたが、これより先同地の赤澤忠太郎氏一家はかつてその祖先以來七代三百年に亘る有名な藥種商であつた。

明治十九年忠太郎氏は其祖業を繼承するや、早くも醫事に惠まれざる寒村僻地大衆の保健に資すべく、家庭藥製造を著意し、苦心研究の結果これを創始した。以來赤澤製藥所の名に於て各地に行商人を派して販賣せしめしに、事は意外の歡迎を受け年と共に發展した。これを見た氏は一層の責任を感じ更に研究をかさねて眞に文化的家庭即効藥たる名聲を獲得に努力した。

かくて大正七年東讚の鉦々佐野新平氏等有志は赤澤製藥事

業の將來、極めて有望なると又斯業を以つて地方産業化せしめんとする趣旨より、氏および其事業を中心に資本金百萬圓の帝國製藥株式會社を組織し、時代の要求する多量生産機構を整へて出發した。茲に同社は永年の研究経験の士赤澤忠太郎氏を専務に更に不斷の研究を加へてその特製藥千金丹、神靈丸、小兒丸等特撰賣藥五十方劑對症製劑百方劑等各種を調製全國津々に發賣した。

ことにその和漢洋の配劑は眞に遺憾なき家庭急救藥として誇るべき藥効を示し、且地の特殊産業として大いに氣を吐いて居るが、赤澤氏は社業による大衆の保健に直接間接の寄與貢獻をなしつつ、なほ地の商工會長とし現に東洋紡績工場設

置に當つては有志と共に五ヶ年の努力を傾け遂に實現せしめ又港灣施設等同町發展の全面に盡瘁する等地の先覺的人材として讃仰を蒐めて居る。ちなみに帝國製藥株式會社の現重役は左の通り。

社長	佐野新平
専務取締役	赤澤忠太郎
取締役	赤澤恒三郎
同	廣瀬岩太郎
監査役	國方潤吾
同	赤澤正寛

日本製藥株式會社

世界大戰を一機として一大躍進を遂げた我國內産業中本縣の特殊産業たる東嶺三本松の製藥事業の如きも又特筆すべき急角の發展を示した、すなはち同町は讃岐の誇る藥の町として全國的認識下にその生産家庭用藥は國民保健の重要性に於

て時日と費用を省く簡便治病劑として大衆保健の安全線確保に寄與して居る。

然も同事業が始ど縣外移出にして一ヶ年の賣上高約百萬圓にも達せんとする現況は、同産業の重要性を如實に語るもの

であらう。

而して最近この地に於て異常の實績を挙げつゝある日本製藥株式會社は大正六年資本金十五萬圓を以て成立するや、時代の要求する家庭用藥製造に腐心し遂に同社の獨創二十八組湯、千金丹、クリンチン等各種家庭藥を創成し主として關東方面を中心に都鄙を通じて一般に發賣



を試みたが、その著しき效驗は遂に全國的發展ともなり。今日では海外にも鵬翼を伸す盛況を呈するに至つた。

藥中特にクリンチンの如き同社の獨得製劑にして、皮膚刺戟藥、誘動藥、鎮痛藥、消炎藥を適合せるアルコール製劑なれば、神經痛、頭痛、リウマチス、疝氣、耳痛等總て疼痛局所の鎮靜に驚くべき藥效を發揮し、又肝油劑の如き何れも時代文化の精進歩の華を刻んだ眞に大衆保健の好資たる重責に愧るなき貴重な家庭用藥である、故なるかな同社は目下の不況にも極めて堅實なる誇るべき業績を示して發展して居る。

大日本帝國青年團藥院

現下非常時の國民的叫びとして自力更生は絶叫されて居るが、これに對して果して大衆は頹蘭を既例に覆へし昭和維新を創造し得るや、世に謂ふは易く行ふに難しと、即ちこの時局に課せられた國民的大事業の成否は國家細胞の各自がこの難局を處するに決然舊來の不軌不條理の一切を精算し、時代的合理的統營を爲すか爲さざるに因つて決せらるゝ問題であ

らう。

目下叫ばれる自力更生も少しく世道に明るき人々にとつては何等の奇異をも感じないのみならず、何時の世にも當然の處世策ではあらねばならぬ。

即ち刻一刻進化の世には時を問はず、その全有機層を動員して怠りなく合理化し統營すべきを本來要求されて居るから

である。

こゝに我三本松製薬界にあつて率先その人爲機構を時代化し發展して刻下自力更生の世に以て範示とも謂ふべきものがある。これ同町の大日本帝國青年團藥院にして、その概況は次の如くである。

同院はさきに三共製薬所として山田友吉氏これを經營し、専ら各種家庭用藥を製造販賣しつゝあつたが、昭和五年三月山田氏は現代社會生活並に個人生活の動向を察して、その製造になる各種用藥を全國市町村青年團又は在郷軍人、消防組

東洋製薬株式会社

世に人生最大の幸福は健康なりとす、即ち人の一切の恣意愉悅もこゝに依存する故にこのところ健康は人の運命を綜合支配する一種の道德であらう。

又健康を烙印するに於て或ひは現實共同社會への大なる奉仕とも謂ふべく、かく意識する健康即ち保健に就ては近時其文化的意欲及び現代醫學の權威に於て、愈々防護の實績を數

婦人會等公共團體に依りて一般家庭に供給し、然も給付する一定の手數料はこれを各團體の基本金として蓄積又は公共事業資金に充當すべく實施したが、斯の如きは販賣の時代合理化と稱すべきであつて、のみならずその製薬は常に文化の尖端に進展し保健と衛生に不斷の研究を以つて家庭の急用藥として信用を博し好績を收めて居るが、この共存共榮に發足した山田氏の藥院とその商策こそ非常を叫ぶるゝの現時に於て意義多き着創ではある。

へられつゝあるが尙開拓の余地長鞭馬腹に及ばざる感あり。殊に這般畏くも我が皇室には巨額の内帑を以て全國細民階級の醫療施設を助成されしこそ實にこの間の消息を念慮の尊き御聖旨に外ならない。

固より保健が單に個人の生存活動を意義する外、更に國家の生存にも相關する重要事に於て粗視すべからざるや勿論に

して、近時の如く總ての生活機構は煩雜に彌が上にも心身の過勞を來し、時に保健の注意も及ばざる事あり。特に健康の克服には充分の用意を必要とする所以である。

この時に於いて本縣に誇る藥の町三本松の製薬業は一般醫療界の進歩が恰も無限の曠野を往く如く、同地製薬業の行程も又これに追従あるひは先驅し、科學的意圖に邁進して、大衆保健に多大なる貢獻を爲しつゝあるは大いに意を強ふる次第である。

爰に同地東洋製薬株式会社はその雄にして、かつて明治三十六年以來現常務港愛象氏が個人經營の愛生堂藥房を大正八年資本金二十萬圓の株式組織に改組、一層の整備を加へて經

營せる所である。隨つて港氏の久しき經驗技術並にこれに近代藥劑科學應用の各種責任製薬は急用家庭藥用として、全國的に發展盛名を博して居る。

就中同社の專賣秘藥大効丸、正露丸、長壽圓、大和櫻等は此の藥効眞に驚くべきあり。この外百餘種の製薬は殆ど萬病肉體の末梢的異狀にも夫々特異の治癒消炎を作用し、然も尙藥價の低廉と即施治病の輕妙さに家庭急用藥たる眞面目を發揮されて居る。目下同社の幹部は左の諸氏である。

社長 池田善平 常務取締役 河野傳助
常務取締役 港愛象 監査役 河井久吉

三本松の四ツ目酒造會社

東讃藥の町として世に誇る三本松町に地の銘酒「男達」を誇る四ツ目酒造合名會社がある。同社は元津田屋と稱し嘉永二年以來歴史ある酒釀を明治三十一年地の有志によつて改稱經營し、更に現經營者中野多吉、中條單三、堤順造、大山ツタ

の四名が譲り受け今日の發展を策した。

就中中野多吉氏は爾來同會社を代表し釀造と販賣に専心



して恵まれし氣候と水質にそれ不斷の活動を和してその銘酒「男達」逐年の發展とはなつた。

殊に又酒質を語る各品評會における男達の聲價は常に誇るべきであつて、これ中野氏の異常努力の力によるものである。

白鳥本町の江戸屋醤油

東讃白鳥本町に於ける江戸屋醤油の名聲は又赫々たるものである。現經營者橋本安平氏は徳島の人で橋本家に入嗣以來その醤油醸造に専念し良品の小賣専門を以て益々江戸屋の名を高めて居る。又町會議員として地方自治にも盡して居る、江戸屋醤油の祖始は今より三代前の安平氏にして、即ち明治初年である。



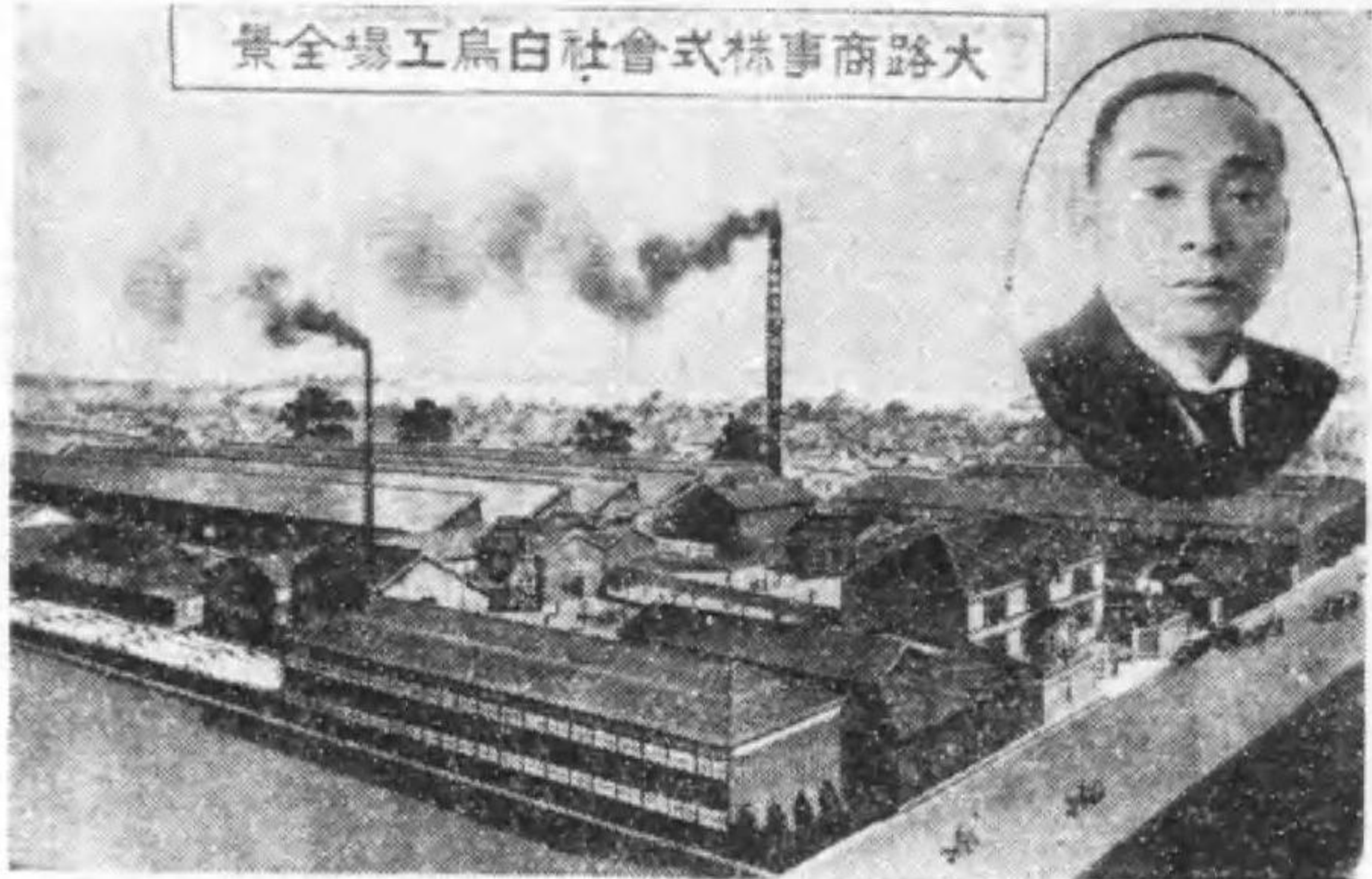
營み、時の千石船を大阪、兵庫に運航し、或ひは遠く關東、江戸にも及んだ。而して船積の多くは地の海産物であり、又は引田醤油であつたが茲に於て安平氏はふと醤油の醸造を想ひ廻船業の傍らこれを創始したのである。以來世の經驗を積み質實の氏は醸造と海運に由つて資産を築き築けば築く程頭を垂れて世の信望を蒐め、遂に今日の大を爲すに至つた。

安平氏歿後先代安兵衛氏は廻船業を廢して醸造を一手に經營し、更に當主安平氏に至るが江戸屋醤油こそは地に嚴たる存在として不動の業容を謳はれて居る。

當時安平氏は祖代の廻船業を

大路辰造氏と其白鳥工場

本縣出身にして縣外に独自の覇業を完成し成功を謳はるゝ人に大阪東區北久太郎町四丁目大路商事株式會社を經營する同社長大路辰造氏がある。氏は大川郡白鳥本町に生れ明治二十五年十四歳にして上阪、以來立志切々として己を築き、遂に今日の偉業を建設一般郷黨の人心に生ける誇りと輝く示唆を以て讃仰を蒐めて居る。



殊に氏が縣外大阪に確固たる商業的經濟的地盤を築くや、更に本縣産業に寄與すべく生地東讃白鳥に巨費の事業を設定し經營しつゝある如き、これ同氏が眞實躍如たるものにして大路商事白鳥工場のそれである。氏が郷里の小學校を卒業したのは明治廿五年で、當時恵まれざる家庭に生れた氏はその年の風尙寒き三月職を求めて上阪した。

途中帆船に數日の苦しみを喫して半死半生漸く大阪川口に着いたが、初旅の疲れを休む暇もなく直に口を尋ね歩き漸く大阪東區御堂筋米谷履物問屋に丁稚として這入つた。

以來夜となく晝となく花緒の商それに従事し、殆ど人一倍の勞務勉勵を續けた。何が氏にこの辛勞と刻苦を積ませたか固より彼には郷里を離れるその時早くも一廉の大商人にならでは故郷に歸らないと謂ふ幼ながらの理想と希望は燃へて居た。

されば育ちの純朴さの中に性來の志操剛健は自ら群鷄の一鶴として年と共に店主に認められ、囀目の拍軍は遂に在店八

ケ年にして履物問屋業の經營を自信するに至つた。斯て二十歳の時鋭敏の氏は主人に獨立自營の素志を陳べ惜しまれつとも前途の爲めに米谷の店を離れ爰に斷然として履物店を開いた時は明治三十三年であつた。

爾來凡ゆる困難痛苦に自らを陶冶しつゝ過去の體驗を實踐に移し、理想に向つて精進を続け、遂に今日氏は我國履物界の俊雄として斯界に君臨し、更にゴムベルト帆布其他生産事業を經營又各種會社に關係して大阪財界に勢威を振つて居るのである。

その白鳥工場こそ帆布製造工場にして、年額五十萬圓を生

白鳥町竹内義太郎氏と醬油業

東讃白鳥町此地に有名なる白鳥神社は古來弓矢の神として國史に威武を綴らせ給ふ日本武尊を奉祠する。

然も其の清淨なる神域の一帯の松原をして一連渺茫たる播磨灘の浪濤も此處では靜に白砂と戯れて居る。

この風光淨地こそ正に自然の神境にして勝地讃岐の東部名

産し、ハタツバメ印帆布の名聲も大阪、東京、九州に赫々たるものにして、同工場はさきに花緒原料ベツチンコルーテンを製織しつゝあつたが、這般帆布製織に轉向されたもので現に職工百四十名を使用し、氏の近親新進の山地長八氏工場長として堅實經營に當つてゐる、如上大路氏の如き實に本縣出身の誇るべき經濟人としてその燦々たる過去及び現實こそ空虚な理想と淺薄なる欲求にのみ燃へて實踐の勇伴はざる多くの現代青年には極めて高貴な實訓を提示して居るものである。

勝ではある。更に此由緒ある白鳥町の近代産業にも各種機業と醸造業あり何れも生氣溢刺、特記に値するが殊に地の商工有志竹内義太郎氏は醬油旭酢を醸造し令名を馳せて居る。その醬油は文政十二年以來の歴史を有し先代勝三郎氏の創業にして十五歳の折綾歌郡飯野村横田家より同家に入家した



義太郎氏は明治三十五年家業の一切を繼承したが、以後其熱と努力は當時百石前後の造石商況を日に月に發展せしめ、今日東讃有数の醬油醸造家として阪神地は固より高松、徳島に支店を置き岡山、廣島等諸地方に聲價を博して居る。氏の事業經營に巧にして、手腕の卓越せるはこれを以つて證するに足るが、尙その偉材たるは町會議員として約三十年

佐野新平氏と其の井筒屋醬油

東讃事業界の巨人として引田町佐野新平氏の存在は偉大であらう。

その直營する井筒屋醬油は歴史を元祿に發し、以來同地一帶引田醬油の名聲を擔つて江戸積とは稱し、遠く關東地方に移出して一躍引田醬油の聲價を轟はれた程である。今も引田には幾多の錚々たる醸造家あり引田醬油の面目は

の長きを勤め、又信用組合長、商工會長等多大なる貢獻を爲し、又近時白鳥神社名勝と松原を中心に百燈會を組織し、その企にも氏は町民各自に一日煙草二本の節約を強ひ、その事に由つて神社境内に煌々たる電燈を點じ得べしと力説遂に實現せしめた。又白鳥海水浴場が今日の發展も一つに氏の努力による所であつて、此の如く自治と産業の兩面に竹内氏の人格識見は誠はれ最近名譽町長に推されし等氏の面目を語つて餘りある所である。

燦然として輝くものがある。佐野氏が祖業醬油醸造業に就いたのは明治三十年頃で以來誇る傳統の聲價を把持し更に營業の積極化を圖つて大阪、徳島等に支店を設置する等異常の活躍を續



けた。

その後發展と共に東讃に各種の事業を起して地方産業の振興に資し、更に又縣會議員として二回當選し町會議員としても前後四十年の長期に亘つて盡瘁して居る。

これ等産業と町治に對する綴られた貢獻は洵に至大であつて、先年實業功勞者として觀菊御宴に召されし事あり。あるひは四國大演習の際には單獨賜謁を仰せつかる等幾多の光榮はこれ氏が過去の公私功績を語るものであつて感激に値する。

醤油地引田の雄山本醸造場

東讃引田町は西に高松東に徳島の兩市を控へ殊に引田灣を擁する海上交通の地利にあり又國鐵高德線の開通以來地の産業は逐年異數の發展を見つゝある。

就中其醤油醸造はあまりにも著名にして品質を以て誇る引田醤油のそれである。

山本醸造場は同町の錚々たる業者であつて、同店は元油屋

目下氏は各種事業に關係を有するが就中その直營井筒屋醤油は千年の祖業として精進しつゝあり。特に同醤油の特異として誇るべきは獨得の風味にして。その醸法に於ても諸味を必ず二年乃至三年間貯藏し完熟後に非ざれば倉出しなない此傳統を嚴守する事にその最上一番生揚醤油は品質の特性を顯はれて居るのである。

斯の如く引田醤油は何れも品質を以つて古銘を刻んで居るが就中佐野氏の井筒屋醤油の如き時代を超越した確なる存在である。



と號し明治初年三世祖の定次郎氏は同町某醤油醸造場を買収し之に轉業して銳意從事した。以來斯業に精進逐年増殖しつゝ四國は勿論阪神を販路に店業の發展を期し、次いで先代の世とは

なつたがこの時代に於ては恰かも歐洲大戰の活況に際會し、氏の進取的商業と相俟つて躍進又躍進山本醸造場の基礎は確固とし築かれたのである。

然るに天英明に命を藉さず氏は昭和三年若き身を卒然として他界した。かくて氏の長男現定次郎氏は未だ若く爰に於て先代定次郎氏の令弟既に分家の山本綾助氏は本家の不幸見る

に忍びず且盛大なる醸造業を援護の意味に於て目下本家事業の進展に協力しつゝあるが、青年事業家たる定次郎氏は叔父綾助氏の指導下に醸造の經營研究を刻苦しつゝある。

斯く綾助氏の宗家を顧念するは世にも美しき心情の發露にして、氏は現に名譽町長、町商工會長として衆望を擔ふを併せてその巨器逸材を思はしめる。

引田を彩る岡田醤油合資會社

東讃引田醤油の大衆的印象は實に抜くべからざるものがある。凡そ世人の腦裏に刻む印象とは善にして感激に發し惡にして嫌焉憎惡に歸するであらう。

然して引田醤油の印象こそは三百餘年の古き生産歴史と及びこれを彩る品質の誇るべ



き民衆的印象ではある。

近時一般醬油界は多事を思はせつゝあるは事實にして、即ち近代科學の發達はその醸造界にも普遍して或は早造り法又は化學的醬油のと幾手法を以て動々濫醸の傾きあり。隨つて必然業界の平靜は破らるゝの結果となれるが、しかし乍らこの近代社會現象は何れの部面にも現はれ吾劣らじと大衆の我田引水的感觉獲得に専念するの情勢にして、この間引田醤油は依然本來の生命たる品質の牙城を死守し堅持する所に即ち引田醤油たる面目がある爰に近時引田醤油の氣を吐くものに

同町岡田醤油合資会社があるが二百年の輝く歴史と品質で賣る親みも深き池田屋醤油の夫れである。

池田屋醤油の當主は岡田忠次郎氏にして、氏は高松池田屋當主の令弟、かつて帝大農科を卒へその新智識を久しく本縣農林行政に携り昭和五年官を辭して以來専ら祖業醤油醸造に精進しつゝあるが、氏が本業經營には先に最高の學究を遂げ尙且不斷實地の研究を以つて臨んで居る。

それかあらぬか大正十年店を合資に改組以來一切の設備醸

造方を一新し眞に新時代商品としての面目を整へて大衆の味覺に上し、四國は固より中國、阪神各地の發展聲價は雄々しきものがある。

これ時代の人岡田氏がその醤油醸造を近代化學に溺れず、從として自然の釀化風味を一義とし更に利に趨らず事業の永遠性を至念するの良果にして、常に清新なる意氣を以てする研究活動は商品の上に示現されて、爰に至るのである。

野網氏と新名所安戸の養魚

本縣の東端引田町は由來内海有數の漁場にして然も醤油醸造あり其引田醤油の名に於て夙に天下に聲價を博して居る。

而して近時々代事業の展開は更に同町に生色を織る事多大である。就中茲に近代の營利事業とし、將又一日清遊の快速をかねた地の新名所安戸池の養魚事業こそ全國白眉の壯業にして恰も瀬戸内海國立公園に無類の興を添ふるに足るものではある。

安戸に傳説あり、往古清少納言こゝに漂着し安堵されしに轉訛して安戸とは稱すが、安戸池畔の山上には今も清少納言を祭祀しあり。由緒の程も察せらる。

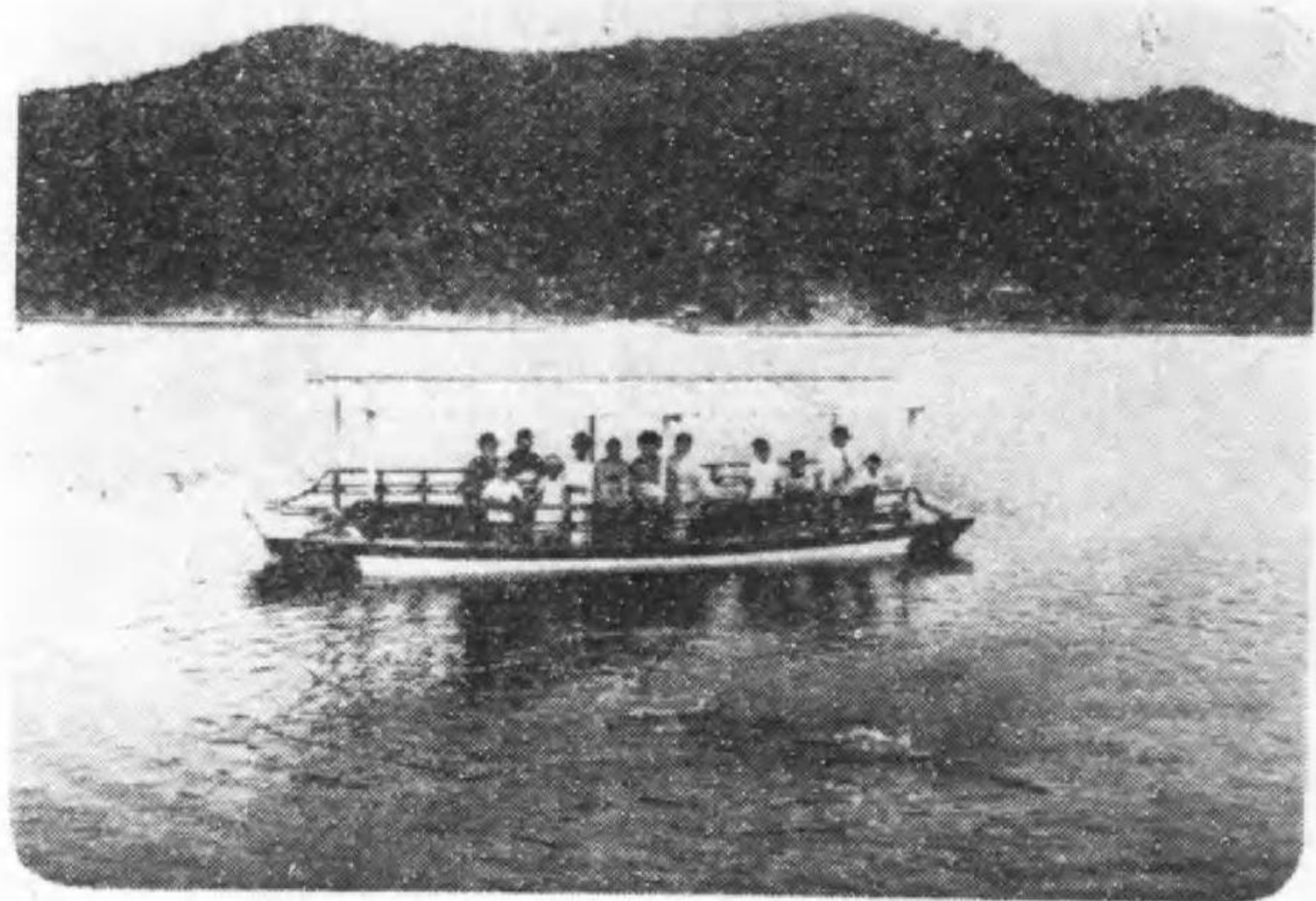
城山公園の名勝を擁した同養魚池は鹹水自然の池湖にして面積二十町歩、四時紺碧を湛へ水温かなればかつて鱸の名所として冬季魚族の集遊を待つて地の漁人の幸とした。然るに近年同池に蝟集する魚群漸減を呈し搦て、一般濫獲に因る漁

獲の不振は引田漁人の至大な痛苦とはした。

爰に於て地の有力漁業家野網佐吉氏はこの一般的傾向を靜思し遂に天恵の

池湖安戸池を利用して漁族の養殖供給を爲すと同時に地の一部漁人救済を企劃したがこれ即ち我國隨一の鹹水養魚地として今日成功を見つゝある所である。

抑も野網氏の養魚着創は昭和二年である。性來靜慮斷行の氏は當時漁業組合の管理下に試験的養殖の結果成績極めて良好を見て斷然その



行使權を買収し、更に十數萬圓を投じて養魚と風致の設備を完整した。

かくて鯛、ハマチ、ボラ、チヌ等放流し速成養殖を始めたが、就中ハマチの成績見るべきあり。以來毎年一二寸の稚魚十數萬を三重縣地方より移入し五、六月に放流すれば此ハマチは適當の飼料に因つて百餘日を経過する八月頃には僅に一尺に成育し、逐次一般市場に供給が出来る。

その生鱗躍る豐滿のハマチは安戸のハマチとして赫々たる名聲を誦はれ、殊に荒天不漁に際して新鮮そのもの、濃刺味は獨りこの人工養殖生魚のみに俟つべきなれば、この點同事業の特殊使命と確固永遠性は保證されて居る。

野網氏はこの社會的重要使命に愈々自奮して更にその設備を備へ魚族百萬放流を期するのみならず、遊覽施設を整備し以て大衆の遊樂池たらしめんと計劃しつゝあり。斯の如き露蘆的野網氏の本事業然も經營極めて困難なる養殖事業にこの成功は固より氏の不撓邁進努力と犠牲にあるが、這般農林省は此壯業に一萬圓の補助あり。氏は之を養魚飼料貯藏庫建設に用ひて、矢野式アンモニヤ冷藏庫の近代設備は整へられたが、一個人に政府補助の如き全く異例とする所であつて、使

命の重且大を洞察される。
氏は此外丸サ醤油を醸造し阪神地方に聲價を博して居るが
自治方面にも現に町會議員として活動して居る。この安戸池

の利用養魚は事業と遊覽を兼ねた前途多望の近來的事業にし
て同町將來の寶庫にも値するものであらう。

自力更生の先陣大川ロープ組合

刻下の所謂非常時に際會して國民的自奮自力更生は強調さ
れて居る。即ち自力更生とは
理論でもなければ議論でもな
く唯各々が刻下の世相國情を
靜觀して今一步各自の充實を
要求する事で、これ以外に何
ものもない筈である。故に議
論や理論によつて自力更生は
達成されない。

只その全智全能を自己の生
産と生活の全領野に移植し、
實用化する事夫に依てのみ國家も個人も此非常状態を打開克



服して遂には更生の明朗に觸れ得るのだ。

こゝに農村自力更生の方便として大川郡相生村の副業たる
ロープ生産はその實績見るべきものあり。時しも農村更生の
好例として特記に値する。同村のロープ産業は歴史も古く明治
初年に發し同村字坂元三谷キヤなる者地の漁人より依頼され
てなひ始めたがこれを魚引繩と云つたのである。

以來きはめて強靱なる所から漁業者の使用は漸次増加し同
村農家の健全なる副業とはなつた。

其後又小豆島醬油業者の樽繩として使用々途をも加へ更に
深海漁業用網として使用さるゝに及んで、この大小ロープ販
賣を専業とする者だに續出し、生産又一躍倍加の盛況を呈す
るに至つた。

勿論當時業繩にはオナイ大目繩アラテ荷造繩等あつて原料
薬は各農家に持ち賣行は益々盛んとなればこの副業ロープ製
造は相生を中心として、間もなく全大川郡に普及した。こゝ
に於て大正七年同村當業者等相謀り讚岐ロープ株式會社を創
設し生産の奨励と販路の擴張に努めたが、其後昭和三年該會
社を解散産業組合法に準據して、大川ロープ販賣利用組合は
創設された。

同組合は斯業の統制と農村副業生産販賣機關として組合員
七百七十九名、六萬餘圓を出資し組合長經營に當る以下理事
監事は献身的に活動を續けた。

殊にロープ製作に必要な雨天共同作業場を始め、事務所
倉庫等完備尙繩運送用機船等諸機構も整然たるものにして
全村一致の精進はこの不況時にあつても年産七萬五千餘圓を
計上し、近畿、四國、九州を主に發展聲價を博してゐる。

尙この副業ロープによつて収入の大部は加工賃金として各
自の収入に歸し、副業農村の安直を喫して自力更生を地で往
くこの景況は近代の明朗なる農村風景ではある。尙現在役員
は左の諸氏である。

組 合 長	永 峰 孝 象
專 務 理 事	田 村 國 一
理 事	丸 山 綱 次 郎
	長 町 房 榮
	中 原 幹 平
	大 畑 晋 一
	河 井 政 左 衛 門
	三 谷 幾 太 郎
	桑 島 兵 次
	大 島 儀 七
	荒 井 雪 藏
	松 村 武 左 衛 門
監 事	山 上 貞 三
	矢 野 貞 之 丞
	中 山 琴 象
	岩 佐 保
	中 村 協 次

香南の文化と讚岐電気株式會社

嚮きに山靈の地となした香川郡南部山岳地方も近時頃に時代の色調を加へて、潑刺たる生彩に面目を施しつゝあるが、爰に香南安原村に本社を置く讚岐電気株式會社の如きは本郡稀に見る事業會社で誇るべき業態にある。

同社は大正九年五月同地素封家上原勇太氏外數名の有力者によつて香南一帯の電燈文化を畫し、大正十一年四月資本金二十萬圓を以て創立したのである。

最初は香東川支流西谷川の流れを利用して水力發電し以て燈用に供すべく計畫の下に創立せしも、其後受電計畫に變更して現に四國水力、高松電軌兩者の給電を得て鹽の江、安原川東、淺野、由佐、池西、川岡、木田郡三ヶ村を區域として約七千燈、三千三百戸に點燈して居るが、創業當時の九百燈に比較して隔世の感こそある。

殊に同社營業開始前會社の發起人にして社長上原勇太氏の死亡後現重役經營の衝に當るや以來一意香南地方の開発と社業の發展擴充を期した。

目下同社の株主は僅に十六名、毎期一割配當をなし社礎の堅實は本郡中に比類なき業態で、殊に社長北村苟吉氏は謂ふまでもなく本縣電燈電氣界の先覺者であり又權威者でもある爰に氏が同社の總攬に當るや其信する堅實主義を以て移り變る時勢に對應し、更に能ふ限り需要家側の便益を考慮し以て文化的貢獻に努めた。

殊に世の文化に粗疏たる遠隔地方の事にして點燈の普及遅々加ふるに電柱電線費徒らに多く、假りに市街地の電柱線費は一燈當り三厘程度なるに比し、郡部は四錢以上の負擔に當るが如き經營の苦慮をこそ偲ばれる。然るに同社は此苦間役員は一切無報酬更に同社の北部需要地の點燈工事修繕等は同じく氏の主宰する高松電軌會社に於て便宜扱はしめ、斯て一意同社礎の確立に邁進の結果、遂に今日の安固を築いたが、次で同社の賢明は昭和六年時代を明察して率先その電燈料金値下げを敢行したのである。

此英斷こそ平日の備へ完璧なる同會社の周到に於てのみ爲

し得る事であつて、この赫々たる業容と意義ある同社の存在は慥かに本郡を通じての一種特異の光彩でなければならぬ尙現在重役は左の通り。

取締役社長	北村 苟吉
取締役	井戸文四郎
同	鎌野 藤太
同	上原 準一
監査役	安田美代造

鹽江鐵道株式會社

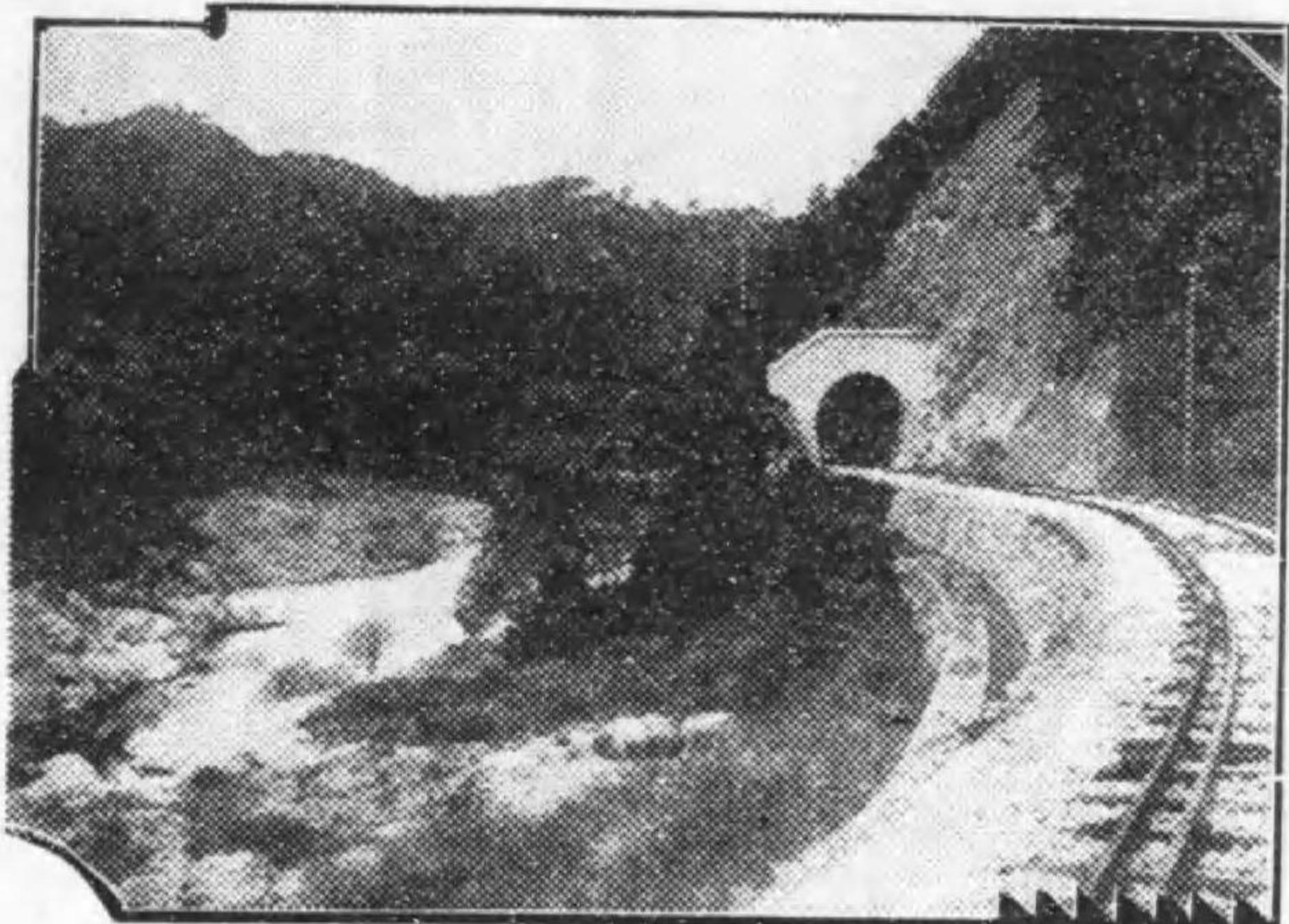
現時讚岐の遊覽舞臺に交通文化のスターとして躍る琴平電鐵は讚岐名勝の中央部をスマートな快速力で以て快走し、其至れり盡すサーピスと共に來遊客の寵兒を蒐むる觀を呈して居るが、更に同社は他面其重要使命たる沿線地方開發に寄與せる外その姉妹會社にして且培養線たる鹽鐵に連絡して、遊覽共同線を張つて居るその鹽の江溫泉鐵道株式會社は、香南阿讚の要所鹽の江の自然郷開發と文化に惠まれざる一帯の更生に顯然を畫期すべく使命に、資本金七十五萬圓を以て昭和三年現社長大西虎之介氏等の提唱に因り創立した最新式ガソリン鐵道である。

會社創立後直ちに工事に着手し、昭和四年十一月、建設工事完成と、もに琴電佛生山驛に接續乗換て仙境鹽の江に至る延長十哩一分にガソリン軌道を運行營業を開始した殊に沿線には幾多の古蹟、名勝を數へその南進と共に香東川の清流は隨所に紺然たる深淵を貯へ轉在する奇巖怪石碎かる、奔流の飛沫等は一見心氣の爽快を覺ゆる。

更に岩崎驛以南連々直下の山脚を縫ひ進めば愈々香南の大幽邃境鹽の江である。その間車上約四十分降車せばこの地こそ四期山溪の美を誇る幽勝の佳境にして、四季とりんぐの雅趣を轉換し、春は奥野千本櫻、ワラビ狩、初夏は新緑ホタ

ル狩、殊に避暑は海拔一千尺、涼味浸々として我に返り、又鮎釣も一興である。

更に秋に至れば連山一面紅葉して高雅は實に友禪そのまゝ松茸狩菊人形のそれと共に一層興趣を加ふ、冬の温泉籠りも又格別であつて、是をして同社は本縣不二の仙境を繞りつ創業以來萬難を排して拮据經營一意地方文化の開發に貢献しつゝあるが、同鐵道開通以來縣下各名勝地とその選を異にする雅致な



山紫溪谷の美に温泉情緒を添へたモグン鹽の江は、よく都人の無聊を一氣に癒し心境の蘇生には好適の自然境と諷はれ此處に杖をひく者愈々多き現況は同社にとつて最大の面目にして、目下同社は創業日尙淺きにも意を諸般の整備に須ひ其貴き使命遂行には向上發展の理想を共にする琴平電鐵株式會社と連鎖も堅く力強き歩程を邁進して居るのである。因に同社重役は左の通りである。

取締役社長	大西虎之介
取締役	津森之治
同	入谷哲平
同	細溪宗次郎
同	武田謙
同	鹽田正太郎
監査役	中村新太郎
同	中村實
同	合田健吉
同	景山甚右衛門
相談役	鎌田勝太郎

本縣製紙界の新人岡保市氏

高松市鷺田村の縣道に沿つて敷地約千五百坪の壯大なる近代的工場が悠然と構へて居るこの工場こそ近來騒々として斯界に頭角を擡げた丸岡製紙工場である。

同工場の經營者は岡保市氏年齢未だ三十七歳新進氣鋭の青年製紙家として其前途大いに囑目されて居る。氏は父安吉氏と共に去る大正四年手漉塵紙の製造を開始し、以來斯業の研究を重ね大正十五年手漉塵紙の非時代的なるを悟るや直に機械製紙に着手し、更に雄心勃勃たる同氏は時代の進運に呼應して昭和四年斷然巨資を投じて從來の工場に一大改造を施し最新式ヤンキー大型製紙機を二臺据付け、大量生産の工場設備を完成した。

目下同工場は保市氏の外八十餘名晝夜兼行作業に従事し阪神を販路に年産六十萬圓の塵紙を生産して一躍斯界の花形と

は謳はれるが、然も同所塵紙は品質優良實用的にして一般に好評を博して居る。

殊に昭和三年高松産業博覽會及昭和四年朝鮮博覽會等に出品して各感謝状を受領し、その良質を證明された。斯の如く丸岡製紙の業績は新興隆々たる中に保市氏はつねに粗服を纏ひ多數職工に伍し自ら營業工務兩部を統理し、尙特に同所の強みとする所は安市氏は長兄であつて、以下五名の弟は克く和衷協力長兄を扶けて、一意専心その事業の發展を期せる事である。

その共同的奮闘努力は期せずして従業員一同に極めて善き感觸を與へつゝそれが業況の上に示現し歩一步新しき輝かしき天地に歩を運んで居る

愛染藤太氏と其の事業

香川郡の北部に位置する香北町は近時其自治的經營施設に一新機軸が劃されつゝある事は、町の爲めに大いに祝福したい。およそ地方自治の發展は即ち民衆意志の協力に俟つ所で



其徒らに當事者の經營能力にのみ萬事寄頼して拱手鷹揚なる時は自治の發展は愚か恐らく非時代的の議を免れないのである。

のみならず斯くては自治の本義にそむき、時代文明の恩澤にも觸手し難き迂遠を胎す事にもなる。爰に香西町は今や町として大いに青年心理を振起し、和衷協同更生の意氣物凄く教育地帯の轉更、港灣修築、遊園地造化等々時代的要求の各般に於て完成を急ぎ、更に轉じて産業方面にもよく舊套を訂正して時代化の機運に向ひつゝあることは蓋し注目し値する

所である。

然して此近代的发展姿勢の裡には何地も同じく、先覺的人材の指導的努力と活躍を見るのであるが、もし同町に於て非役にこれを求むれば、それは素封家愛染藤太氏だと謂ふ。そこには氏が過去及現在同町の爲に致せる奉仕的努力に對して信頼の念を集めて居るからであらう。

茲に愛染藤太氏の事業部面に就て描録するに明治二十八年頃當時四國隨一の鐵道交通機關たる讚岐鐵道株式會社が高松に延長企劃されし折、これを耳にした愛染藤太氏の嚴父富三郎氏は同志と共に香西將來の發展について深く考慮し、逸早く該鐵道線の香西通過を希望して直に會社に運動を開始すると同時に極力地の有志の奮起を促したが、如何にせん會社は終始好意的態度を保持し拘らず、地元は寸眼尺盲の固陋にして遂に此愛染氏等の努力は空しく茲に好機を逸し去つたのである。

間もなく該線開通後暗愚どもの狂奔の見たが後悔先に立た

ず。徒らに死兒の歳を數へ千歳の恨事とはなつた。斯くて地方將來のために斷腸の思ひを秘しつゝあつた氏は別途にその頃縣下鹽業の漸く佳境に入り愈々有望なるを得れば驟然鹽田築造を企圖し、遂に三十一年これを完成操業した。

即ち同町唯一の橋本鹽田のそれであつて、爾來幾多の災厄に見舞はれつゝ苦心これを打開し、現に採鹹十六町、當主これを經營して二等鹽を生産年額五萬圓を算する盛況である。

殊に現藤太氏は聰明なる父と共に製鹽創業以來精進し又明治三十六年以降今日まで同町議員として自治香西町の進展を專念しつゝ常に啓蒙的努力は最近同町の面目一新にも偉大な

原動力を爲して居る。又最近産業方面では青果市場を創設し、香川郡北部農村大衆の福祉の上に特異の機能を輝して居る。即ち香西青物市場にして野菜は午前果物は午後に賣買し野菜は附近より量の如何を論ぜず、市場に出し得る便利あり。果物は本縣青果の本場として年中各種の果實を取引し其多くは阪神、中國、九州に移出して居る。

かくて同市場は開設以來極めて好成绩にして、殆んど氏の出資のみにて經營して居る如くであるが、斯の如く何れの方面にも率先考案實施せるは既往先代の佳話と共にこれを併せて氏を同町の指導的人材とする所であらう。

香西酒造株式會社

香西町に於ける唯一の株式會社として資本金七萬五千圓の全額拂込を擁し營業の堅實を以て誇り、且信條とする香西酒造株式會社は大正八年香西の有志等に依つて創立したが、其後間もなく急轉直下の測らざる財界變動と以來の不況に豫期以上の苦杯を喫しながら、關係者一同の苦心と努力はよく其

難局に處し、社礎愈々鞏固を加へつゝある現況にある。

由來釀造技術の傳統を以て又多數杜氏の出身地として冬季釀造期に於ける倉人の稼高も優に數萬圓に上ると謂ふは同町である。この釀造の本場たる地にかつて見るべき釀造場なくこれを遺憾とせし地方有志に依つて創設されたこれ即ち同社